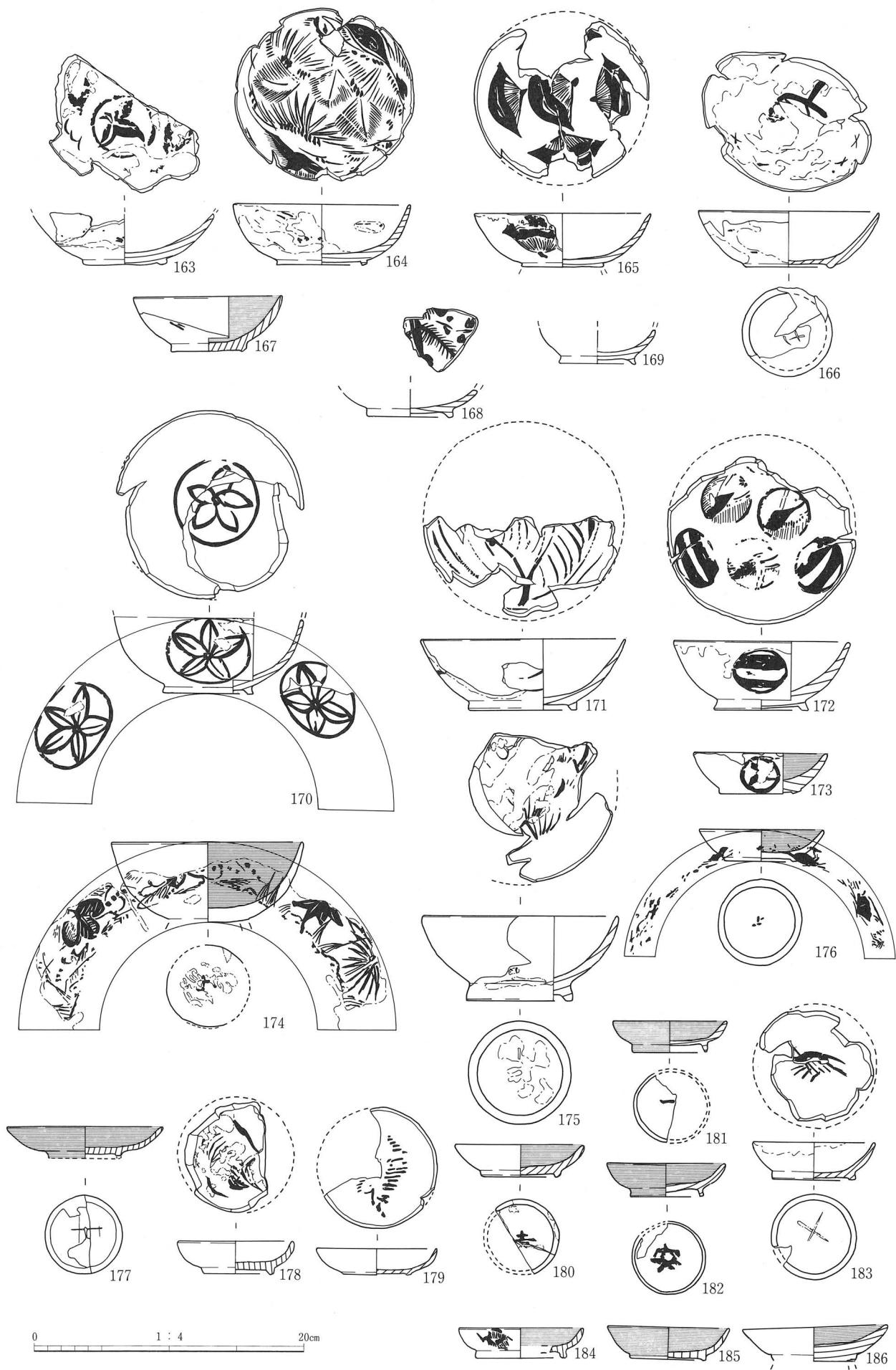
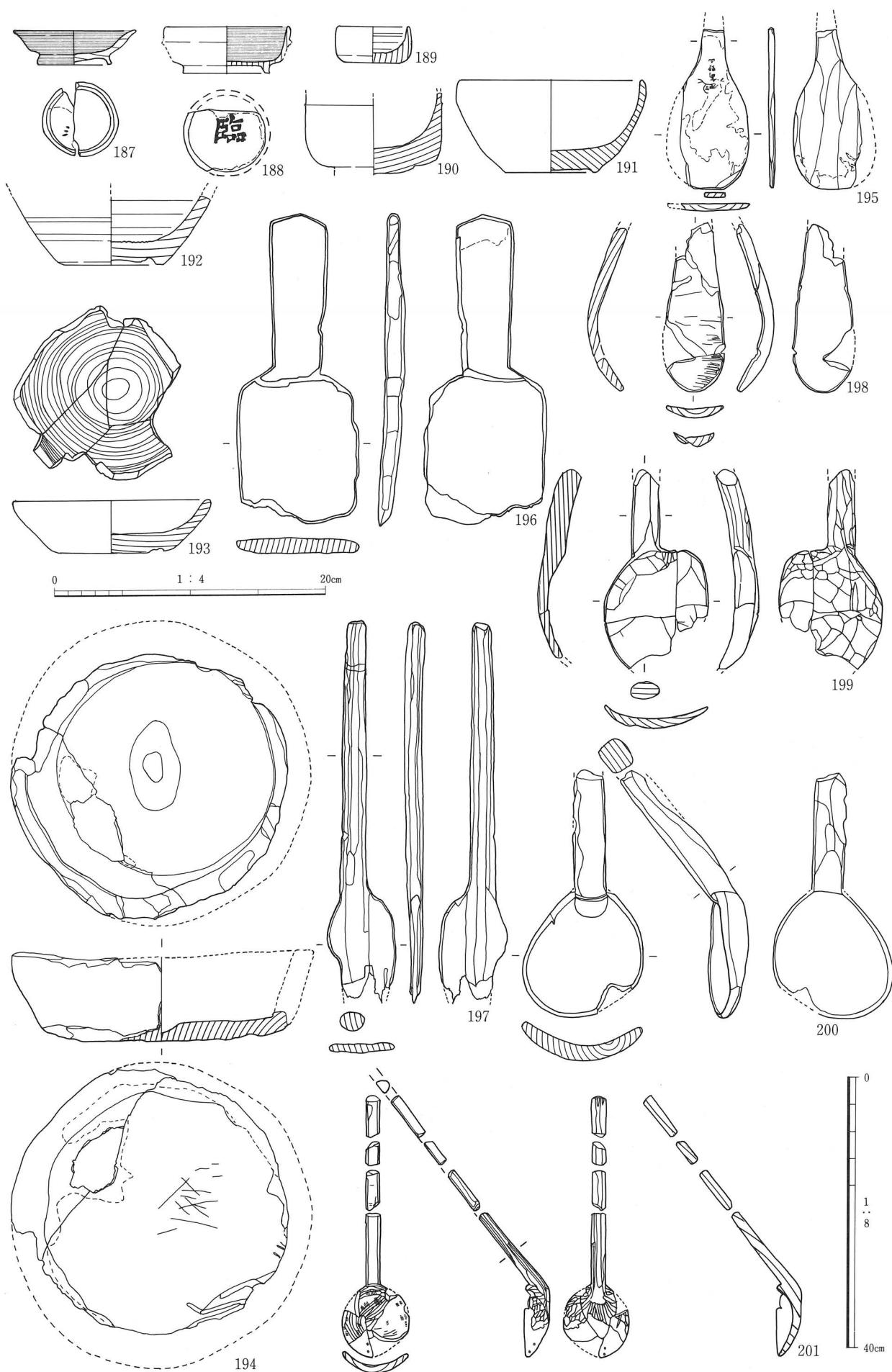


第190図 木製品16 [容器－漆器椀] (1/4)



第191図 木製品17 (容器-漆器椀) (1/4)



第192図 木製品18 [容器・食事具] (187~193・195・196・198~200 1/4, 194・197・201 1/8)

剝物匙 (198~201) 身の上面が受け皿風になる形態である。柄は斜め上方に向く。198は身と柄が一体となるもので内面は左右に細かい加工痕がみられる。柄は欠損する。199は身柄とともに先端は欠損する。身は柄との境から一段深く剝かれている。200は黒色漆塗りで身が楕円形を呈する。木取りは根の方向に身、先端方向に柄を取る。201は身の先端付近に小孔が2つみられる。身と柄の境は幅1cm前後の加工痕と櫛状工具痕がみられる。

擂粉木 (202) 上端はくびれ、焼けている。

箸 (204~252) 先端が欠損するものを除いて、両端を細く削り出す両口箸である。長いもので24cm、短いもので20cm足らずである。ここでは井戸、土坑から出土しており、量的に目立つ遺構はS E 4658と供養土坑S K4483である。これは祭祀に用いられたと考えられる。断面形で2種類に分類できる。

A類 (204~223) やや幅広で偏平、断面は方形を呈するものである。

B類 (224~252) 断面が楕円またはそれに近いものである。

5. 遊 戲 具 (第194図)

遊戯具には羽子板 (253) がある。表面に赤色漆の痕跡がみられる。表面は上下方向の加工痕がみられる。

6. 雜 具 (第194図、図版123)

茶筅 (254) タケを用いている。穂先の末端は内に曲げている。

柄 (255・256) 255は両端は半円状に加工される。両端と中央の3ヶ所に幅1.5cmの溝が彫られる上端には竹釘が打たれ、下方には刃部の装着痕と目釘孔がある。これは供養関連土坑S K4483から卒都婆、13~14世紀の中世土師器と共に伴している。256は5mm前後の間隔で上下方向に加工した後、漆を塗っている。刃部を装入していたと思われる孔が約7.5cmの長さまで認められる。

自在鉤 (257) 木材の芯部分と、それにはほぼ垂直となる方向から芯に向かって順に孔が穿たれる。カーブを描く部分の側面は焼けている。

籠 (258・259) 同一個体と思われる。258は現存23本の薄皮状の纖維を単位とし、8の字のような輪をつくっている。取手と考えられる。259は隙間がなく、3本超え3本潜りで網代系統の編み方である。図中の黒く塗った部分を中心として対称に編まれる。

7. 祭 祀 具 (第195図、図版124・125)

舟形 (264) 264は直方体の芯持ち材で両端は荒く削られる。中央の割り抜かれた部分は焼けたためか黒くなっている。底は平らである。

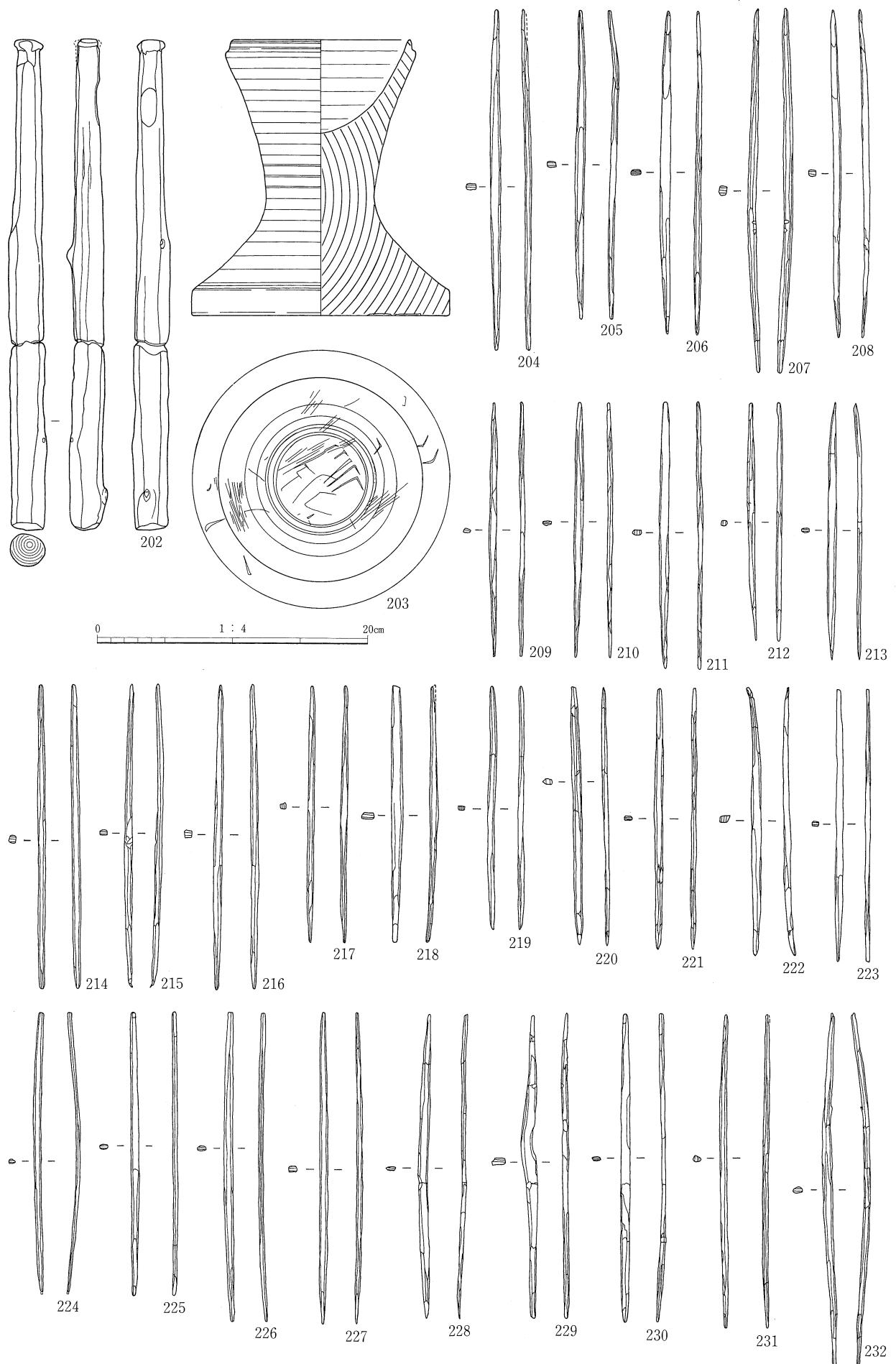
刀子形 (265) 265は刀身と柄の間に段をつけるものである。

卒都婆 (260) 柱目取りした長方形の材の両端を尖らせたものである。両面に梵字が書かれている。文字が書かれる方向はそれぞれの面で上下異なる(判読については、第IV章第4節を参照)。これは供養関連の土坑4483から出土している。

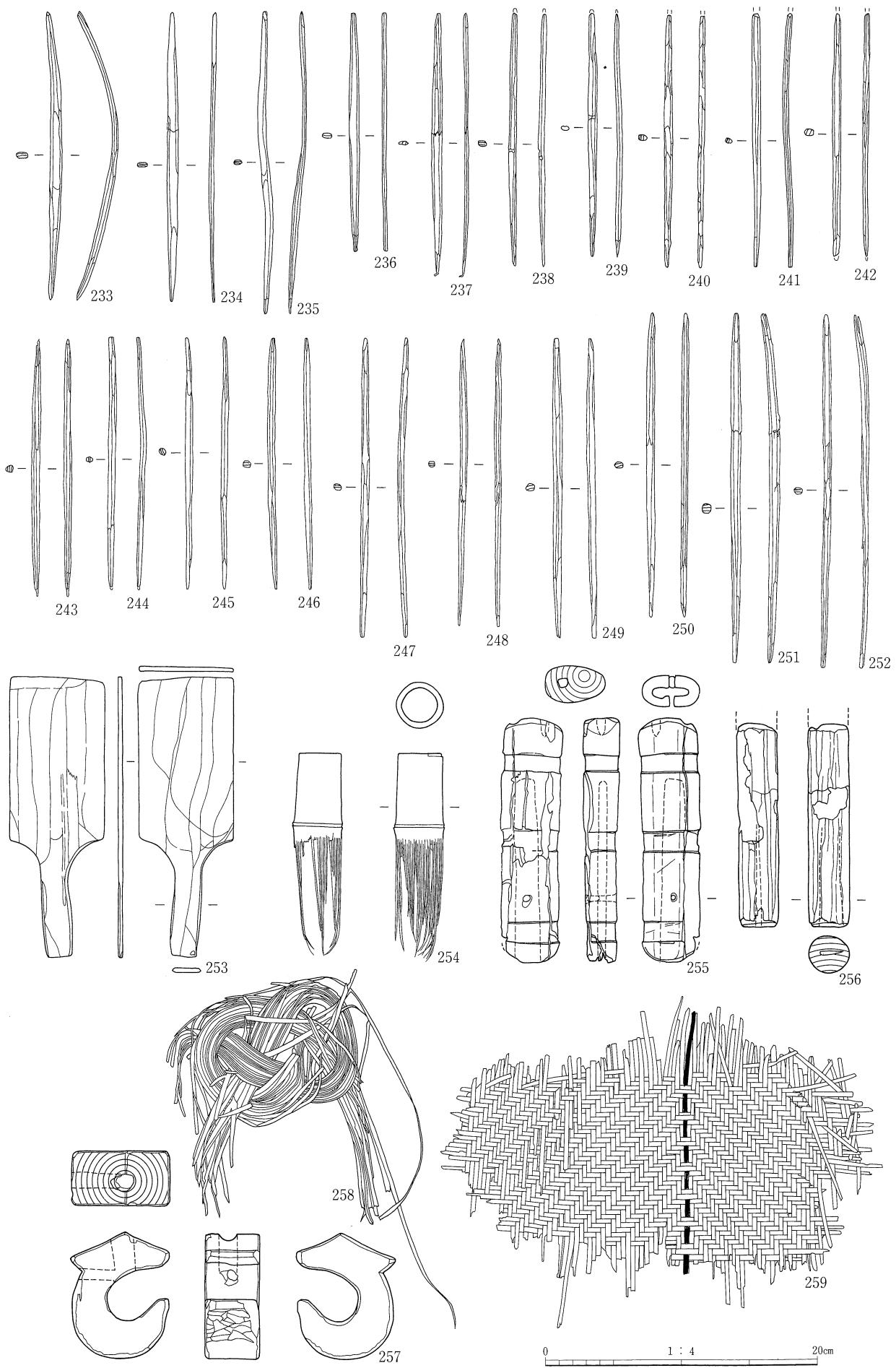
8. 木 簡 (第195図、図版123・124)

261・262は短冊形の一方を左右に切り込んだものである。261は切り込み間の中央に小さな孔が穿たれる。片面左端に縦に3つの山を連ねた線刻がみられる。かすかに墨痕が認められる。262も両面に墨書きがみられるが判読できない。共に柱目取りである。263は短冊形である。一方の左右を切り込み、孔が穿たれる。樹種はすべて針葉樹である。

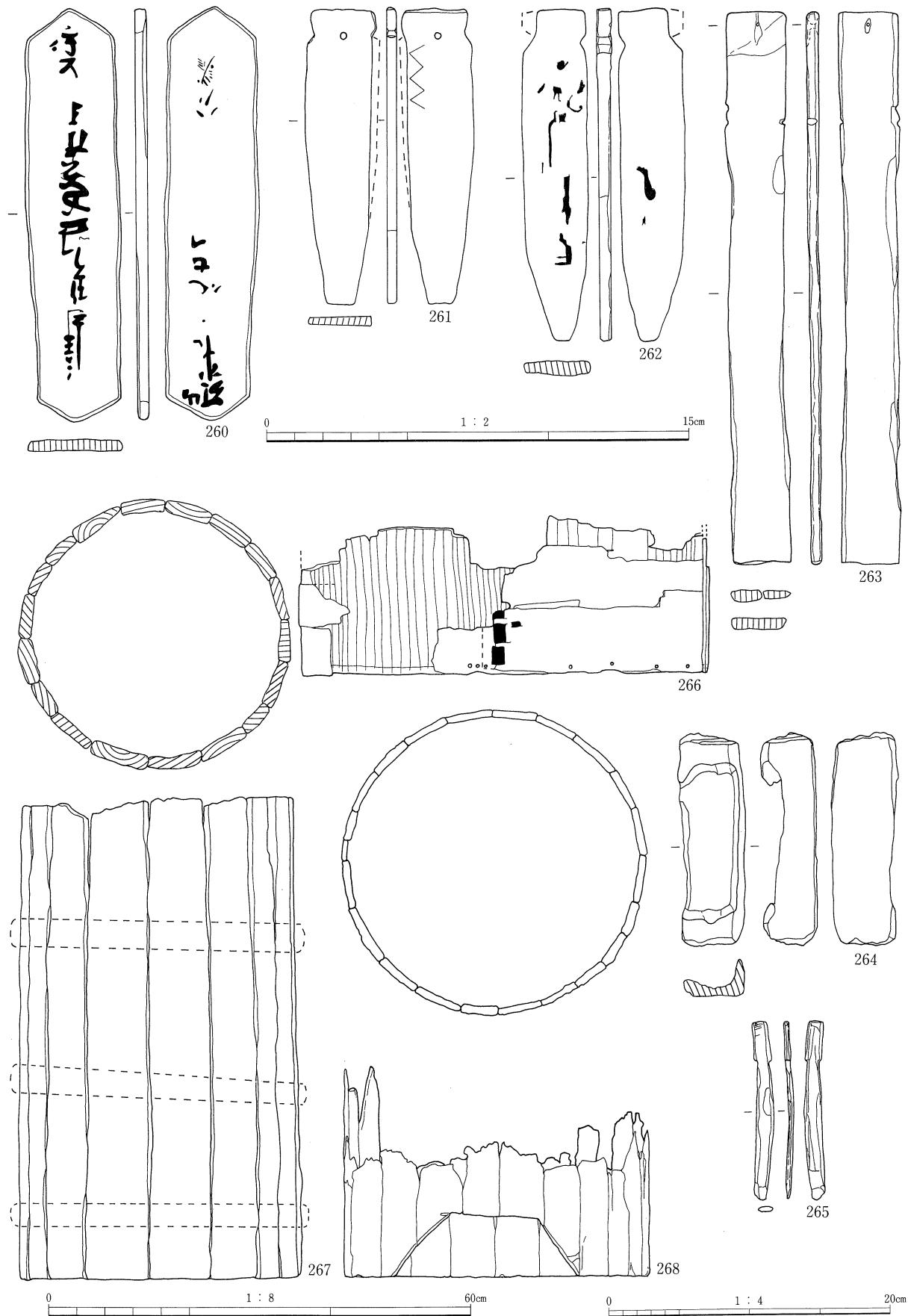
9. 井 戸 枠 (第195・196図)



第193図 木製品19 [容器-食事具] (1/4)



第194図 木製品20 [食事具・遊戯具・雑具] (1/4)



第195図 木製品21 [祭祀・木簡・井戸枠] (260~263 1/2, 264・265 1/4, 267・268 1/8)

266から269は井戸枠である。266は井戸の上部に据えられた曲物で、一段のみ残る。内外面ともに漆塗りで、内面に平行ケビキがみられる。底板と結合するための木釘孔がみられるため、容器からの転用と考えられる。

267・268は桶を井戸側としたものである。267は18枚の側板を竹のタガで上・中・下3ヶ所を留めるものである。タガは上段のみ4本、他は3本一束である。底板との結合痕がみられないため、転用とは考えがたい。268は22枚の側板を組み合わせており、上部は欠損する。側板5枚分の下端は台形状に切られ、空洞になっている。269はS E 5974から出土した。先端が薄く、両端に溝をもつ芯持ち材を方形に組み合わせて石積みの基礎としたものである。267～269は近世のものと思われる。

10. 柱・杭 (第196～198図、図版124～126)

柱 (270～294・296～299) すべて芯持ち材であり、287・298を除いて上方は欠損する。側面下方に方形の抉りまたは孔がみられるものがあり、木材運搬時に縄を掛けたと推測される。断面形には、A：面取りして円形を呈するもの、B：隅丸方形を呈するものがある。底面のつくりは、I：側面から削り込んで先端を尖らすもの、II：一方のまたは両側面から削り込み平坦面があるもの、III：底面が側面に対してほぼ垂直になるものがみられる。

A I類 (271・273・276・278・279・284・285・288・290・296・297) 271は側面の中央部分に方形の抉りがみられる。273は表面が炭化する。284は底の平坦面は芯に向かって削られる。285は底面に鑿痕が顕著である。296は径の外周を彫り込み、くびれている。

A II類 (272・275・281・283・289・293) 下方に縄をかけて運搬したと考えられる方形孔のあるものがみられる。外面から2孔が穿たれるが芯方向に向かって貫通する。281は1ヶ所に、283は2ヶ所にみられる。孔がない面には、コの字状の鑿痕がある。293の底面は芯に向かって削られる。

A III類 (270・277・280・282・291) 282は下方に方形の抉りがみられる。270・277・291の底面は芯に向かって、280は芯から放射方向に削られる。

B I類 (294) 294は断面が隅丸方形で、下方を削りだしている。

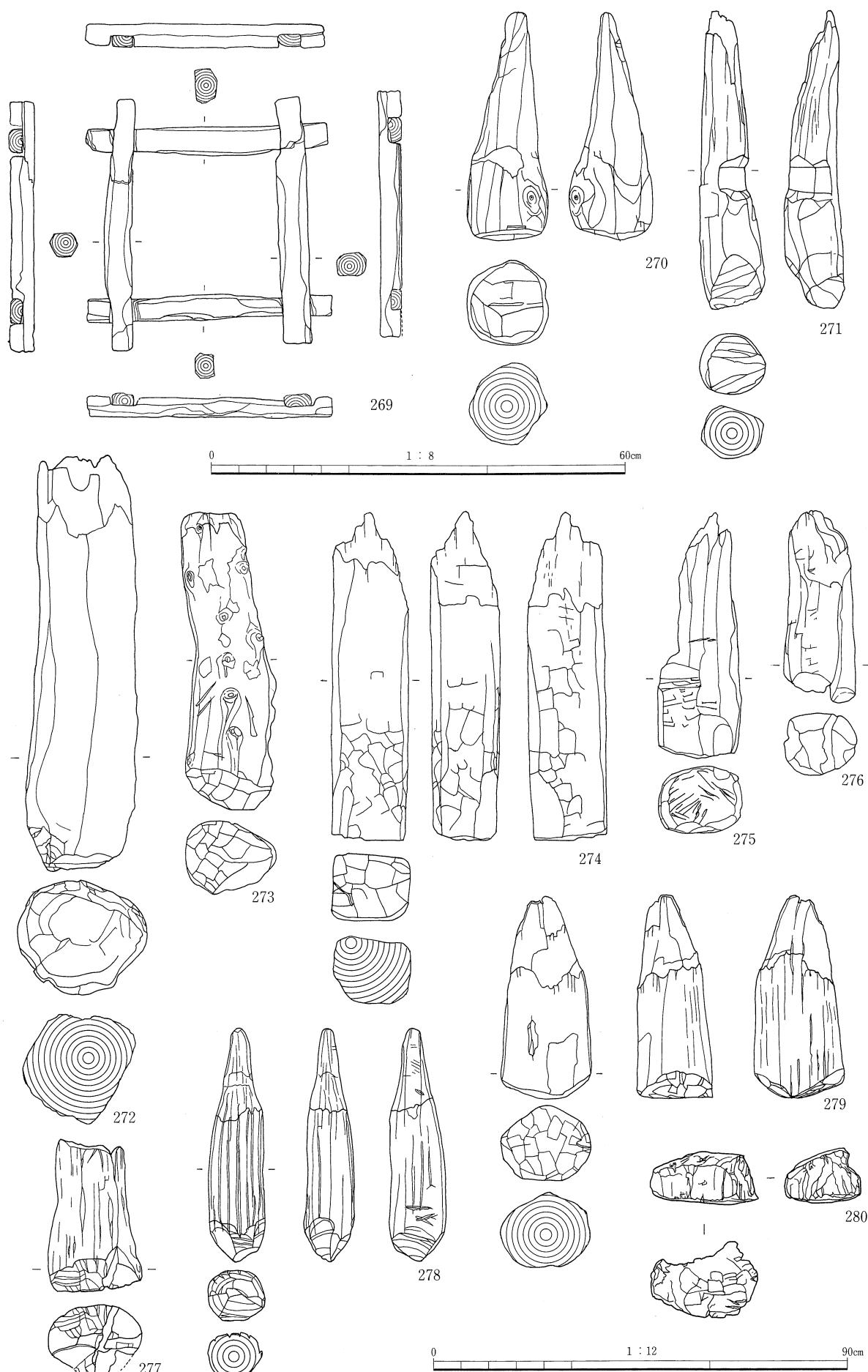
B III類 (274・286・287・298・299) 274は下半全体に鑿痕がみられる。287は長さ552cmを測り、当遺跡出土で最長である。一端は枝分かれするため細く曲がる。これはS D 1441から出土しているが、溝に伴うというより後世に埋められたものと思われる。299は方形のほぞ孔が5つみられる。

292は前述の分類には属さないものである。断面が円形を呈し、底面中央が抉り込まれ両端にはぞのような突出部ができている。

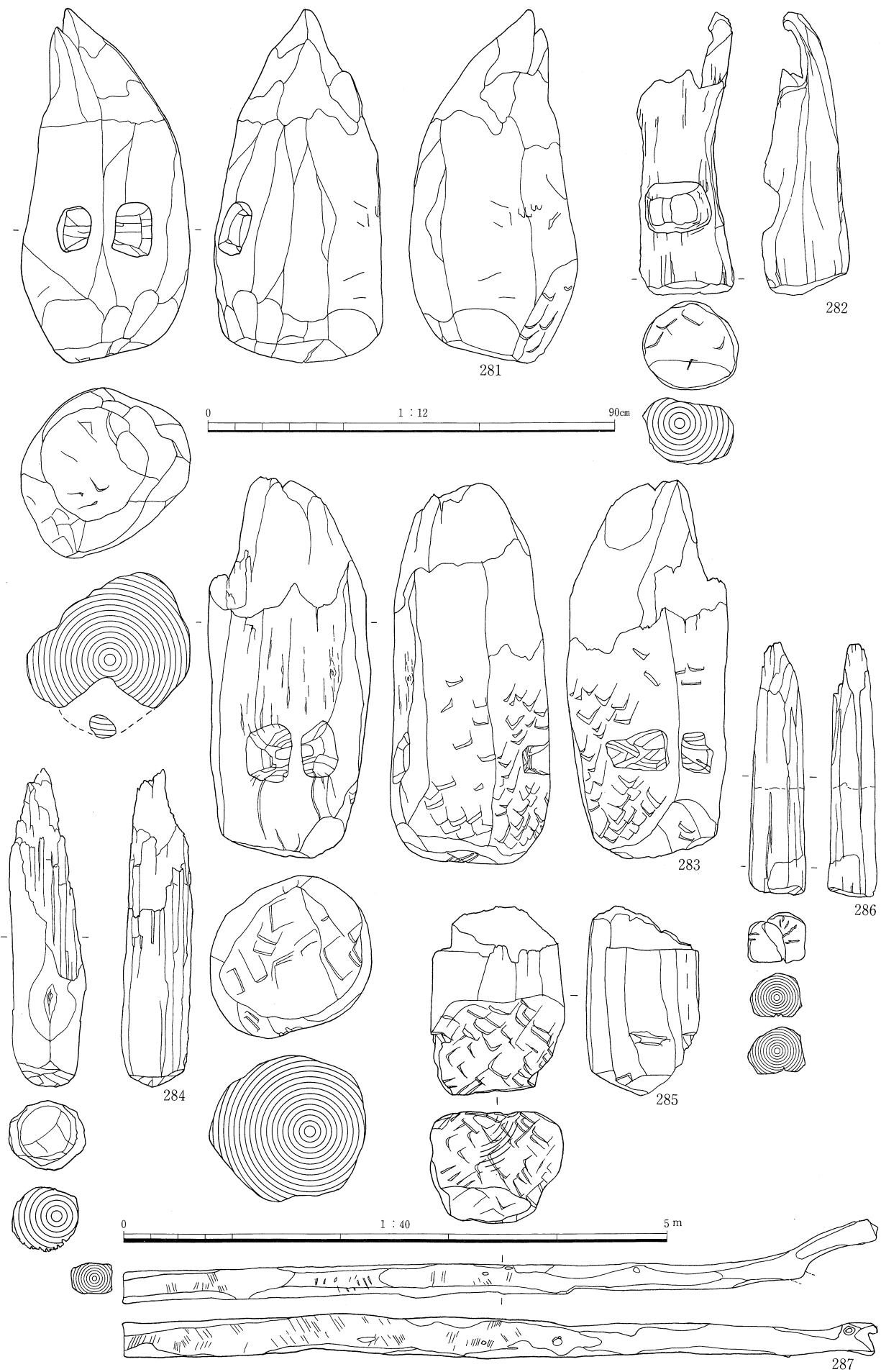
杭 (295) 断面は八角形を呈する。先端は細かく削られ尖っている。

11. 加工木 (第199～201図、図版127～130)

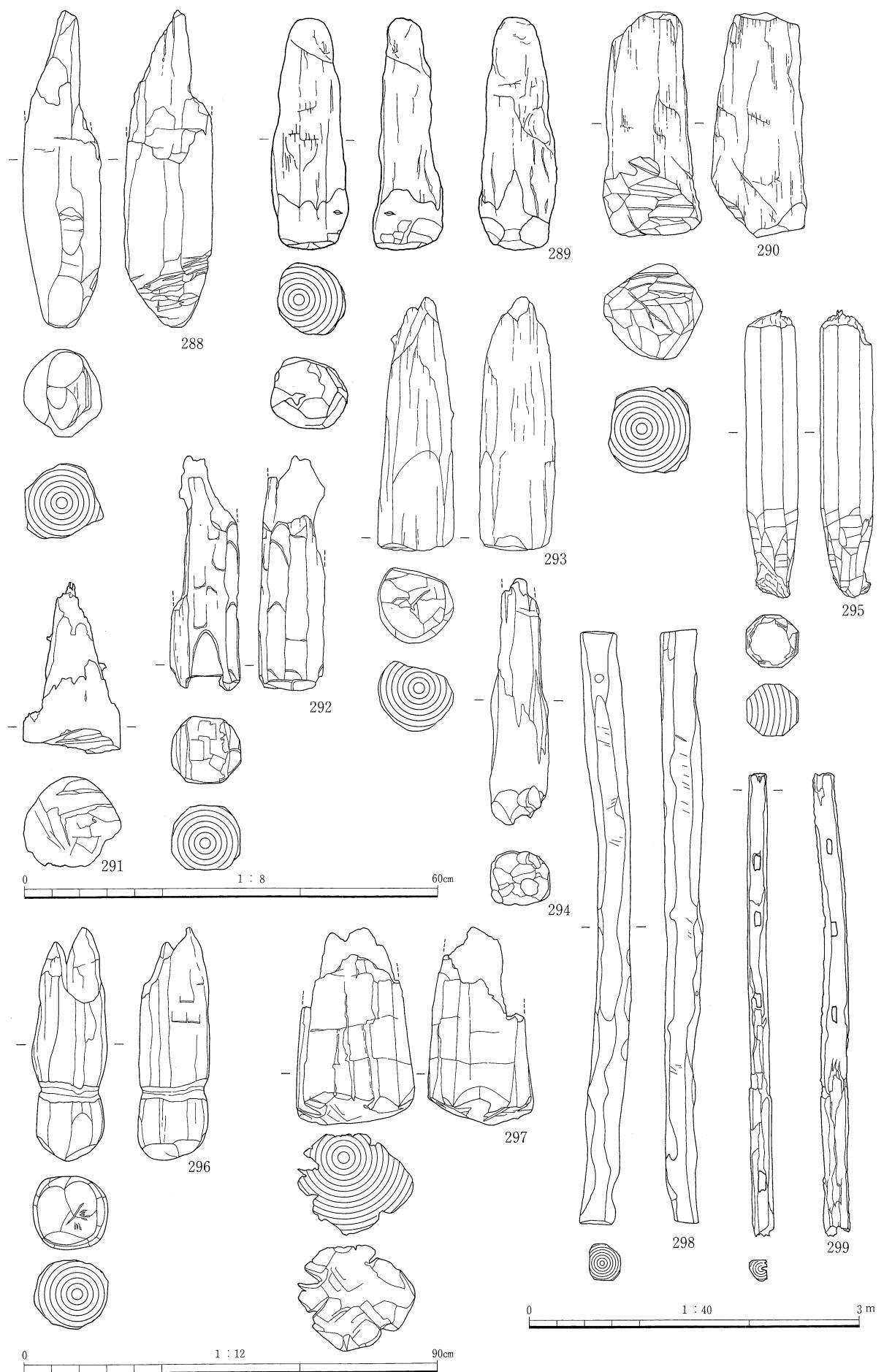
製品の一部としての出土であるため種類は確定できない。そのため便宜的に板状、棒状、特殊形といった形で呼称する。ここでは加工が複雑なものを取り上げた。300～305・308～310・327は板状に加工されたものである。300は表面が黒変し、綴り皮があるため別材と結合されていたと思われる。また線状痕が多いことから、まな板に転用されたのか。301は長方形の短辺の一端を左右から抉り、中央を突出させて残す。羽子板か。302は厚みのある方形の一端に段をつけて先端まで細くする。303は漆が塗られ、線状痕が多くみられる。側面に木釘がみられることから別材と結合されていたと思われる。304は短辺の一方の2隅を丸く削る。端から約2cmに孔が穿たれる。もう一方の先端は尖り、焼けている。中央には鑿痕がある。305は方形の一端を尖らせたものである。表面に漆ではないが、黒色のものが付着する。308は板材に円形孔を穿ったものである。付札として用いたものか。



第196図 木製品22 [井戸柱・柱] (269~271 1/8, 272~280 1/12)



第197図 木製品23〔柱〕(281~286 1/12, 287 1/40)



第198図 木製品24 [柱・杭] (288~295 1/8, 296・297 1/12, 298・299 1/40)

309は漆塗りで、方形のほぞ孔を持つ。両端は欠損するが一端には円形孔があると思われる。327は両端に2つ小孔が穿たれる。これは木釘孔と思われ、別材と結合されていたと考えられる。

312・313は棒状である。313は断面が方形で一方の先端が先細りするもので柄杓の柄の可能性がある。

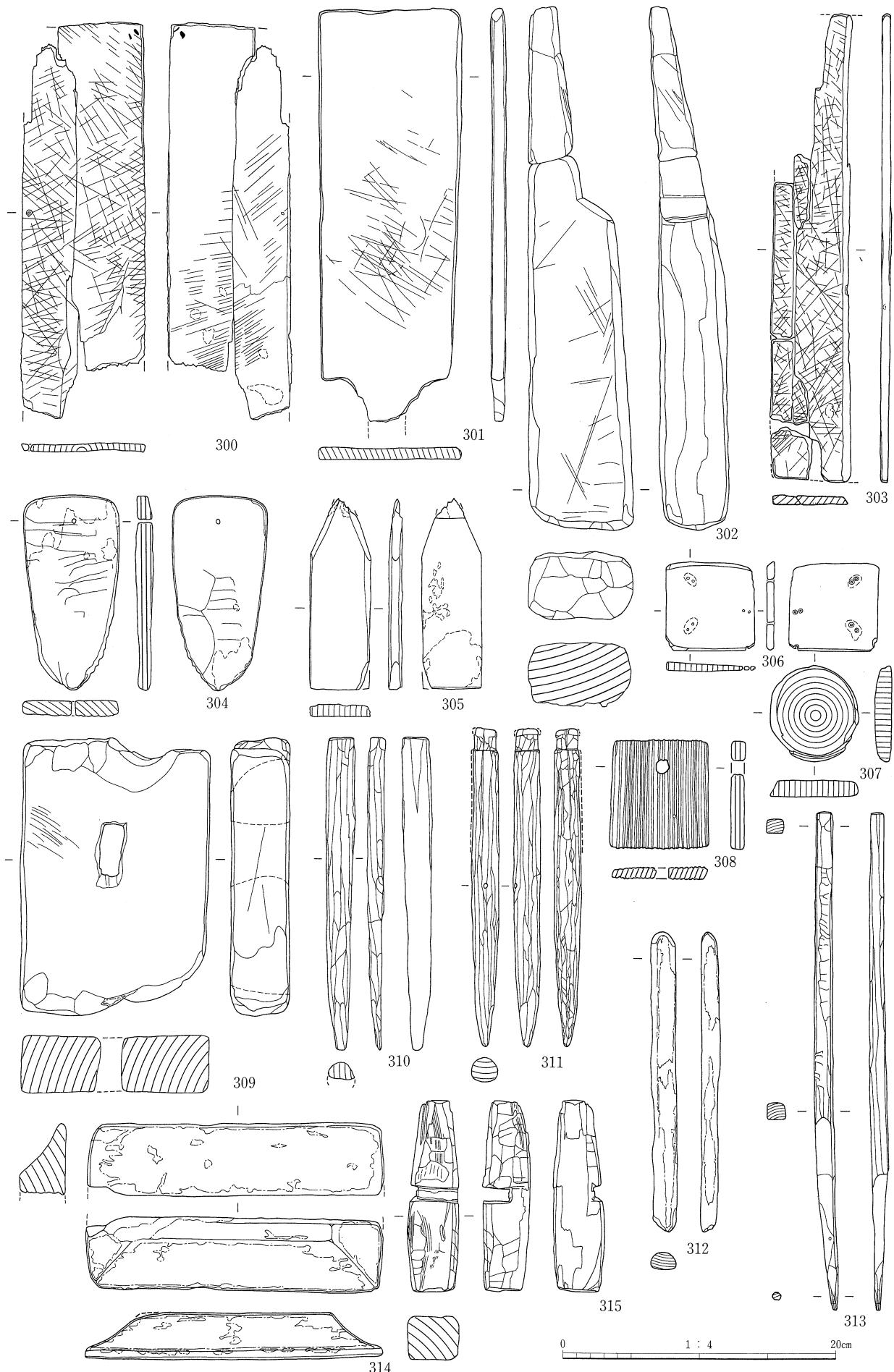
306・307・311・314～326・328～335は特殊形とした。この中には、別材と組合わさせて製品を構成するもの（部材）もみられる。306は正方形の板材で、3ヶ所に2個ずつ孔が穿たれる。それらの周囲は焼けているため火箸で穿孔されたと思われる。307は芯持ち材を芯から年輪に沿って丸く削り取ったものである。311は棒状で上端の径は、ひとまわり小さく削られる。先端は尖り、黒変する。中央に小孔が穿たれる。314は全体に厚く漆が塗られ、側面は台形を呈する。315は中央は溝状に抉られ、表面は細かく削られる。断面が隅丸方形を呈するもので、316～318・322は方形の板材の一長辺中央を台形またはコの字状に抉るものである。316は平面部分と抉りのない長辺の側面に漆が塗られる。脚か。317は同形の材を木釘で結合させ、八角形を呈していたと考えられる。両面とも二隅に墨書きで花弁のような模様が描かれる。318は長辺の2ヶ所に竹釘が打たれ、別材と結合されていたと思われる。319の側面は裾広がりの台形を呈する。上からみると、両端付近は細かく削られる。下底となる面には3孔が穿たれる。蓋の取手か。320は偏平な材の両端を削っており、何かにはめ込んでいたと考えられる。321の断面は隅丸方形を呈し、一端はほぞを削りだし、もう一端は丸く納める。322は両端が欠損するが、ほぞがあったと思われる。323は板状で中央は緩いカーブを描く。両端は左右から抉られ、何かにはめ込んでいたと考えられる。324は断面が隅丸方形を呈し、中央が若干抉られる。相対する2面に2孔が、それらと直交する2面には3孔穿たれる孔は木釘孔と思われる。赤色漆が塗られる部分がある。325は断面が三角形で、3孔穿たれ木釘が残る。326は一先端がほぞ状に削り出されている。円形の孔が5つ穿たれ、先端側から2個目と3個目の間隔が狭くなっている。328は全面漆塗りで、中央に方形の孔がある。これを抉るように長辺方向に小孔が穿たれ、木釘が残るものもある。一端は欠損し、焼けている。329は断面蒲鉾形を呈し、長辺方向に削られる。方形孔が2つみられる。一方は欠損する。方形孔の長側面に1個ずつ木釘痕があり、別材と結合されていたと思われる。330は断面が隅丸方形で中央にくびれを持つ。332は芯持ち材をロクロで成形した後、中をくり抜いたものと思われる。333は芯持ち材の芯部分をくり抜いたものである。外面には煤が付着する。334は断面が蒲鉾形で一端は欠損し、一端はくびれている。長辺方向に削りがみられる。何かの柄か。335は断面が方形の角材で、一端は欠損する。部分的に漆が残る。互いに相対する2面に方形の抉りがみられる。別材と結合されていたと考えられる。

(横山和美)

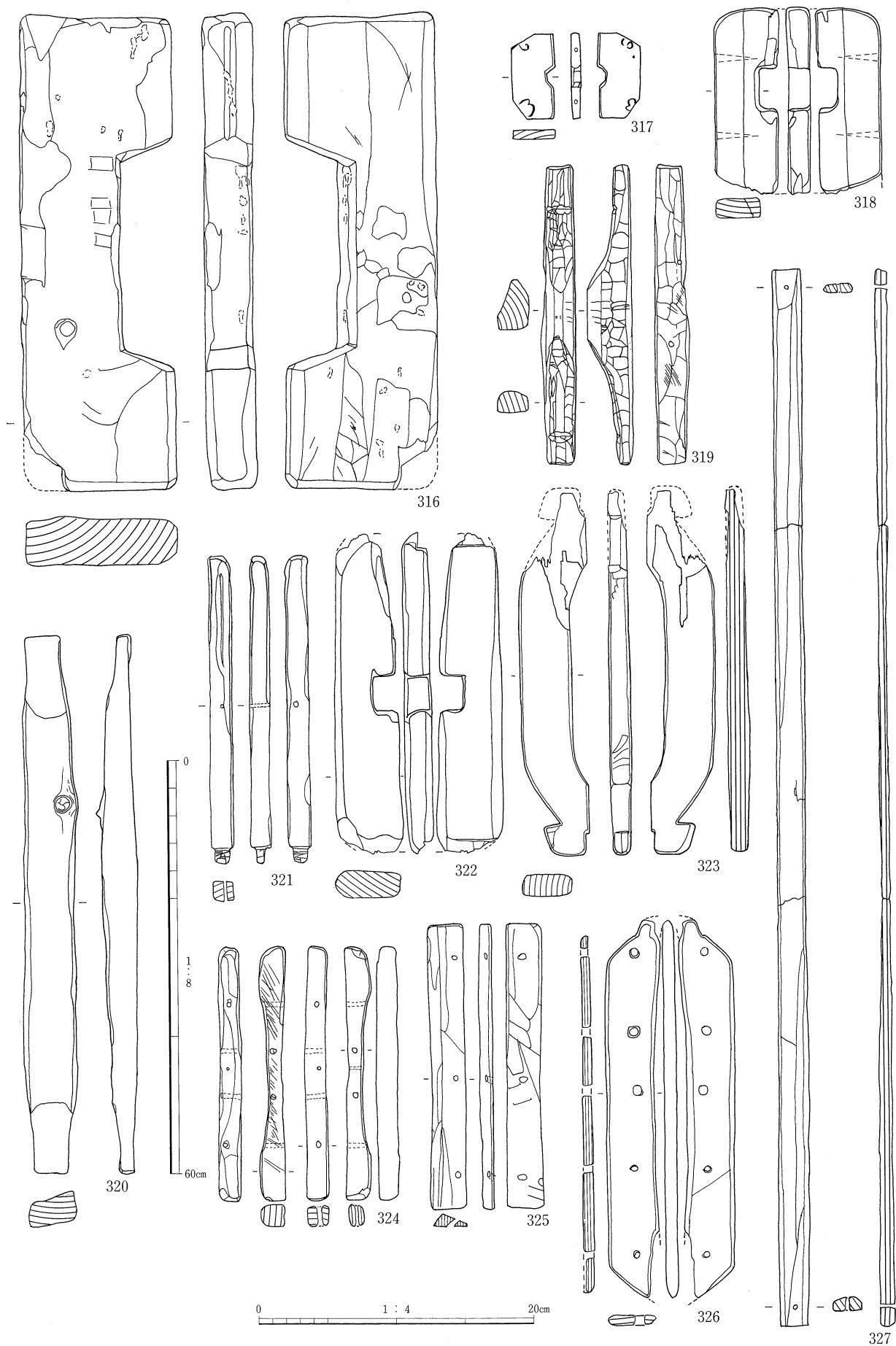
注1 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録近畿古代篇』 同研究所史料第27冊

注2 三輪茂雄 1988 ものと人間の文化史『臼(うす)』 法政大学出版

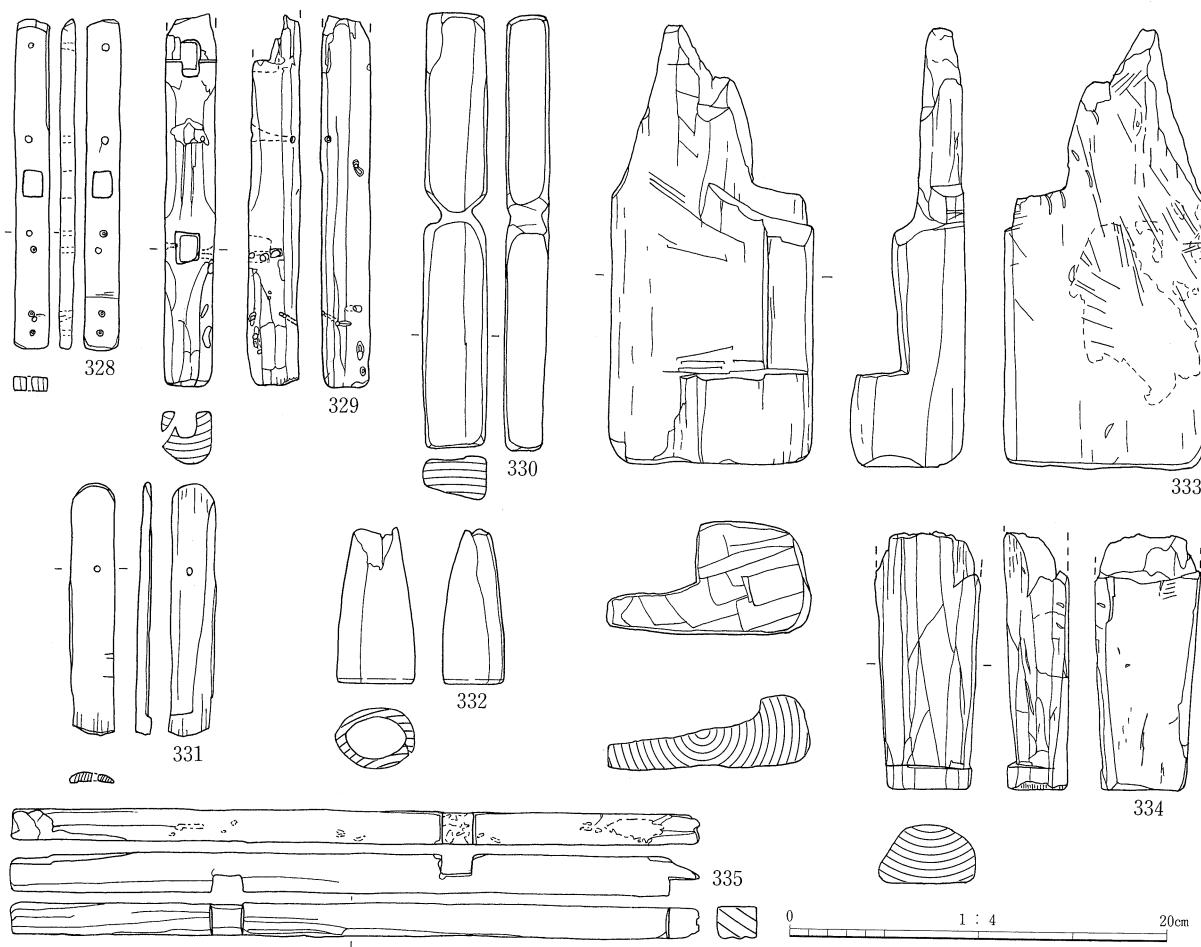
注3 西村 歩 1994 「曲物の細部技法」『奈良大学文化財学論集』 奈良大学文化財学論集刊行会



第199図 木製品25 [加工木] (1/4)



第200図 木製品26 [加工木] (316~319・321~327 1/4, 320 1/8)



第201図 木製品27 [加工木] (1/4)

E. 石 製 品

梅原胡摩堂遺跡から出土した中・近世の石製品には、石硯・石鍋・砥石・茶臼・石臼・石鉢・石製暖房具・石製井桁・五輪塔・加工石がある。共伴する土器によって決定した遺構の時期別に見ると、中世前期の遺構からは石硯・石鍋・砥石が出土しているが、その量は少ない。中世後期から近世前半の遺構からは茶臼・石臼・五輪塔などが出土しており、特に石臼の出土量が極めて多く、特徴的である。また、その石臼・石鉢は地元産の通称「桑山石」と呼ばれる安山岩質の凝灰角礫岩製のものが大きな割合を占めている。この「桑山石」は、硬度は強く、耐火性に富むが、霜に弱くやや脆いという。『福光町史』^{注1}によれば、石山の初掘は文化初年（1804）頃とされるが、当遺跡の発掘調査の出土例から、中世後半頃には採掘が始まっていたと推定される。以下、出土遺構の時期を考慮しながら各々を種類別に記述していく。

1. 石 砥（第202図1～15、第203図16～20、図版131・132）

石硯は包含層からの出土もあわせ、38点が出土している。全形を知り得るものは9点にすぎない。石材は泥岩・凝灰岩・粘板岩製のものがあり、ほとんどが泥岩である。ほとんどのものには、内面、及び周囲に墨痕が残る。これらの石硯を形態的に分けると、以下の7類に分類される。

- a 類：簡単に、硯頭から鈍角に削って海部を作り出すもの。
- b 類：裏面を硯頭側から硯尻に向かって長方形に徐々に削り双脚を作り出すもの。
- c 1類：裏面が平坦で、海部を鈍角に削って作り出すもの。
- c 2類：裏面が平坦で、海部を直角に削って作り出すもの。
- d 類：硯尻側から約3分の2程度を長方形に浅く削るもの。
- e 類：硯頭などに陰刻など装飾を施すもの。
- f 類：10cm以下の小型品。

この中で一番古い遺構から出土しているのは8で、12世紀後半から13世紀のSD2203の下層から出土している。この硯は長さ11.4cm（約3.5寸）、幅63cm（約2寸）、高さ1.2cmの長方硯で、硯頭から約2cm下がったところから鈍角に削って海部を作り出しているのが特徴的^{注2}で、a類に属する。縁帶は硯尻には廻らず、やや粗雑な調整のみにとどめ、他の中世後期以降の遺構から出土した硯とは明らかに異なった様相をしている。側面・裏面には擦痕が見られ、砥石に転用されたことが窺える。

15・16世紀の遺構からは10点出土しているが、すべて破片である。1は硯頭の縁帶が3.5cmと広く、そこには花と1羽の鳥が陰刻されている（e類）。側面と裏面には大小の擦痕が見られる。この他のものは裏面の特徴によって2タイプに分けられる。6・11・12・19は、裏面の硯頭側から約2.5cmの辺りから硯尻に向かい長方形に徐々に削り、双脚を作り出すもので、これをb類とする。11は非常によく使い込まれ、陸部が橢円形にくぼみ、擦り切れて穴があいてしまっている。これに対し、14・16・20は裏面に削りを施さない平坦なタイプで、海部を鈍角に削って作り出すもの（c 1類）と直角に削るもの（c 2類）がある。

近世の遺構からの出土量が一番多く16点出土しているが、このうち6点（2・4・7・9・10）は昭和初期までB2地区東側に存在した「以速寺」関連の遺構、または近代の土取り穴跡から出土したものである。これらは、縁帶において、硯頭の縁帶が側縁と変わらないくらい幅が狭くなったものと、まだ硯頭側の縁帶が他より明らかにまだ幅広いものがある。裏面の特徴については、平坦なもの（c 2類）と、硯尻側から約3分の2程度を長方形に浅く削るd類がある。10cm以下の小型品（e類）はこの時期から見られるようになり、これらの裏面はすべて平坦で、縁帶の幅は狭い。また、海部の面

積が小さくなり、陸部との境がはっきりしなくなる。2の裏面は未調整で、3の裏面には「中井一」、15の側面には「甚力？」の線刻が認められる。5の縁帶は部分的に剥離しているが、剥離面にも墨痕が見られ、欠けて傷ついても大事に使用していたことが窺われる。これらの硯の幅と長さを対比させると、大きく4群に分かれる。1:1.9, 1:2.2, 1:2.4, 1:2.9に分かれ、この頃にはある一定の規格の下に硯がつくられていたことが窺える。

分類したもののの大まかな変遷をみてみると、a類が一番古く、b類・c類・e類が併存する。裏面を平坦にする特徴は中世前期から存在し、極めて一般的な形態といえる。b類のように双脚を作り出す特徴も風字硯に見られる古いタイプの特徴である。時期が下るにしたがってd類のように形骸化した浅く削るだけにとどめるようになったものと推定される。このd類とc2類が近世で一番定型化したもののがある。f類は携帯用に作られたものと推定される。

2. 石 鍋 (第203図21~36, 図版132)

石鍋はすべて破片で、全形を知り得るものは少ない。出土の分布は、遺跡の北から約3分の1あたりまでにあり、中世前期の遺構の分布と重なる。18点出土しており、その半分が遺構からの出土で、特に溝からの出土が多い。破片は口縁部・体部・底部と各部位があるが、断面の一辺に擦切痕が見られるものが多く、ほとんどが再利用するために二次的な加工を施したものである。石鍋本来の形態からは、口縁部・鍔などの部位の破片は木戸雅寿氏の形式分類によると^{注3}、III類-a-2・III類-bのものが出土している。時期は12世紀末から13世紀代のもので、共伴している他の遺物と同時期である。22~24・32の外面には煤が付着しており、実際に使用されたものの破片である。34~36は明らかに温石に転用されたものである。34・36は穿孔して紐がかけられるようにしてある。34・35は板状に加工してあるが、36は石鍋の胴部のカーブもそのままで、つくりがやや粗雑である。

県内ではまだ石鍋の出土は稀で、婦負郡婦中町小倉中稻遺跡^{注4}・小矢部市五社遺跡^{注5}で出土例があるのみである。現在のところ、出土点数は当遺跡が一番多い状態である。石鍋の生産地としては長崎県西彼杵半島を中心とする一帯が有名であるが、木戸氏によればその消費地での出土の分布は九州・瀬戸内沿岸・畿内・鎌倉一帯が顕著である。当遺跡には畿内から流通の過程でもたらされたと考えられ、出土量から考えてもより畿内の影響を受けやすい集落の性格をもっていたことが窺われ、遺跡の性格を考える上でも特徴のある遺物である。

3. 砥 石 (第204・205図, 図版133)

135点出土している。このうち遺構から出土しているのは83点で、遺構の時期別による出土割合は、中世前期：中世後期：近世が3:2:2である。石材の種類は、砂岩・泥岩・凝灰岩・安山岩があり、泥岩製が一番多く、次いで凝灰岩製で、比較的軟質の石が多い。砂岩などの荒砥に用いられるものは逆に少なく、中砥・仕上砥に使われたものがほとんどと推測される。明らかに荒砥用と考えられるものは40のみで、出土した砥石のうち一番大型のもので、長さが26.8cm、幅が8.0cm、厚さが6.5cmで、断面形が長方形である。中砥・仕上砥に使われたものは、断面形が方形で柱状を呈するものと、やや薄めの板状のものに大きく分かれる。板状のもののうち62は中世前期の方形の土坑から出土したもので、半月状で、一部刃部を作り出しているようである。柱状のもののうち49・50・52は、表面や側面に「V」字状の切り込みが見られる筋砥石である。以上、石材・形状による分類は可能であるが、実際この砥石が何に用いられたのかは明確にできない。

67・68は穿孔のあるもので、携帯用に紐を通すために穿孔したものと推測されるが、剥離した凹面にも擦痕が認められることから、石を磨いて作った垂飾品の可能性もある。

4. 茶臼 (第206~208図, 図版134・135)

28点出土している。分布は中世後期の遺構の分布と同じで、遺跡の中央のB地区以南に多く出土した。上臼と下臼の出土割合は上臼：下臼が1：2の比率である。ほとんどが破碎しており、完形のものは上臼2点(69・70), 下臼1点(73)のみで、セット関係が予測できるものは1組だけである。石材には凝灰岩・凝灰角礫岩・砂岩・安山岩があり、その比は7：4：2：1である。後述の石臼の5割が地元産の凝灰角礫岩製であるのに対し、同じ臼でありながら比率が異なる。また、同じ凝灰角礫岩製のものでも色調が緑灰色で、茶臼のほうが良質のものを使用しているように見受けられる。又、下臼においても、受け部が磨かれて丁寧な造りのものが多く、石臼が地元産であるのに対し、茶臼は県外などから搬入されたものが多いと考えられよう。

69は直径23.0cm, 高さ15.0cmで、目のパターンは8分画で10本の副溝がある。側面には相対して2箇所の打込孔があり、この周囲は菱形の模様「子持菱」で装飾してある。出土した遺構は、昭和初期まで存在した「以速寺」の外堀と推測される溝である。70は直径20.0cm, 高さ10.5cmで、目のパターンは同じく8分画10本の副溝である。挽き木の打込孔周囲には一重の菱形の模様で装飾される。73はS E 6184から出土した、軸木まで残る下臼の完形品である。摺り面の直径が70と同じで、近接した遺構から出土しており、これらはセットになると考えられる。目のパターンは同じく8分画10本副溝である。71も打ち込み孔を一重の菱形で装飾するもので、摺り面・底部内面が黒色化しており、火を受けたと見られる。他の破碎した茶臼においても、目のパターンは8分画で副溝の数は6~11本、溝は周縁まで達する。また、上臼・下臼を問わずほとんどが摺り面は平坦であるが、通常は上臼の摺り面は若干凹面にして「ふくみ」という隙間をつくるものであるらしい。72は凹面となっており、下臼においては73・79のようにやや凸面になっているものもある。

茶が普及するようになったのは、12世紀末に栄西が『喫茶養生記』を著してからであると言われるが、茶臼自体が文献に現れるのは、14世紀である。当遺跡からは、茶臼の他に茶道具として、茶勺・茶筅・瀬戸美濃の天目茶碗などが出土しており、16世紀にはこの地にも茶の湯の風習があったことが窺われる。

5. 石臼 (第209~215図, 図版136~142)

出土した石製品の中では一番出土量が多いのが石臼で、200点出土している。中世後期と近世の遺構から出土しており、その分布は地区名でいうと、A 1地区からC 3地区まで広範囲に出土しているが、特にその出土量が顕著なところは、B 2地区からC 1地区にかけての一帯である。上臼と下臼の比はほとんど1：1であるが、セット関係のわかるものはない。石材の種類は凝灰角礫岩が105点、凝灰岩及び溶結凝灰岩が85点、砂岩が5点、安山岩が4点である。これを出土遺構の時期から見ると、中世後期の遺構においては凝灰角礫岩製の石臼と他の石材との比率が3：2であるのに対し、近世になるとその比率は同率となっており、近世における地元産の石臼の割合は低下していることがわかる。

形態においては、挽き木の取り付け方はすべて側面の四角の穴に差し込む横打込み式で、目のパターンもほとんど上下ともに8分画が主体である^{注6}。目の間隔には粗いものと細かいものがある。

上臼は直径は27.0cm~32.4cmのものがあり、平均29.5cmである。上臼の目のパターンは判別できるものはすべて8分画で、5本~10本の副溝が刻まれる。溝は明確なものからほとんど目が消えかかっているものまで様々である。107は未製品と考えられ、目が無く、くぼみも不明確で、芯棒受け・供給口も穿たれていない。「ものくぼり」の位置にあたるところに、不整形の穴があるのみである。ほとんどの臼は非常によく使われており、摺り面の片側が異様に減っているものや、全体に摺り減り、臼の

厚みが薄くなったもの、輪状の使用痕しか残らないものがある。摺り減りかたと臼の目の残り方にはあまり関係は認められず、摺り減って全体の形がいびつであても目が明瞭なものがあることから、目立てをしながら大事に使用していたものと推測される。

下臼は、直径26.2cm～32.6cm、平均29.4cmでほぼ上臼と同じ値を示す。摺り面はやや凸面となっているのがほとんどで、水平になっているものは少ない。厚さは7.0cm～15.2cmで、よく摺り減っているものは「ふくみ」が大きく、摺り面が水平のものは厚みがある傾向にあり、使用時間が長くなるにつれて「ふくみ」が大きくなっていることがわかる。上臼と同様非常によく使われた痕跡を顕著に残す。

6. 搗　　臼 (第217図143、図版146)

口縁部まで残らず、底部のみが完形で残る。やや小ぶりであるが、形状から搗臼と判断した。底部の直径は30cmで、残存高は19cmで、底部の厚みは14cmを測る。「桑山石」製である。旧「以速寺」の堀跡から出土しており、近世以降の所産である。

7. 石　　鉢 (第216図・第217図138～142・144・145、第218図152、図版143～145)

石鉢は中世後期・近世初頭の遺構から73点が出土している。石材は89%が凝灰角礫岩で、他は凝灰岩である。ほとんどが片口鉢で、特別な例として、取っ手状のものが付く142、持ち手部分を作り出す145、3本の脚が付く144、口縁端部が内湾する152などがある。145は石臼の上臼からの転用、152は五輪塔の水輪の転用とも考えられる。外面の調整は、粗い長方形のノミ跡が顕著に残るもの、細かいノミ跡で丁寧に仕上げてあるものがある。また、内面には口縁端部まで擦痕が残るものがある。大きさのわかるもののうち、口径は23.0cm～35.6cmの範囲にあり、これに4.4cm～8cmの片口が付く。口径と高さの比率を見てみると、大きく3群に分けられる。

a類　口径÷高さの値が2以下のもの (138・140)

b類　口径÷高さの値が2より大きく2.2未満のもの(132・133・135～137)

c類　口径÷高さの値が2.2以上のもの (130・131・134・139)

a類・及びb類の132・133・137は、底面からの口縁部への立ち上がりが60度以上となっており、133以外は片口の伸びが小さいという共通の特徴がある。これらの片口の矮小化、器形の直立化の特徴は、出土遺構の時期などから形式の新しい要素と捉えることができ、加えて石材は凝灰岩のものが多い。これに対し、130・135・136などは口縁の立ち上がりが50度～60度、片口の伸びが6cm～8cmと長く、このような特徴は古い要素と言えそうである。

石材のほとんどが凝灰角礫岩という特徴は石臼と同じで、長方形の切石なども併せて、「桑山石」の主要生産品の一つであったことが窺え、当遺跡がその地元の消費地の一つであったといえよう。しかし、近世へと時代が下るにつれて、臼・鉢などの「桑山石」製品の遺構での出土割合が減少していることから文献に現れる19世紀初頭までの間に一度その採掘・加工が衰退したのではないかと推測されるのである。

8. 石製暖房具 (第218図146・147、図版148)

炭などを入れて使用する手あぶり型の暖房具が出土している。図示できるものは2点であるが、破片も入れると7点になる。石材は凝灰岩製で、直方体をなし側面の一箇所が開口部となる。内面にはノミ跡が顕著に残り、底には146では長方形の低い脚が四隅に、147では手前の二隅に付いており、やや斜め上方に向かって開口するよう工夫されている。同じ暖房具として、SK4667から土師質の暖房具も出土している。これは天井部が丸いが、同じく一側面が開口する形で、一乗谷朝倉氏遺跡で見られるような天井部が蓋によって開閉式となるものは見られない。

9. 井 桁 (第218図148・149, 図版149)

井桁の一部と考える凝灰岩製の弧を描く形状の加工石である。148は、4個の加工石を組み合わせたと思われる円形の井桁の一部である。これは、井戸の中から出土しており、井戸の廃棄後に捨てられたものと思われる。唐津が共伴していたことから近世の井戸と判断される。井戸の上部構造がわかる遺物である。149は包含層掘削時に出土したもので、その下層では中世前期・近世の遺構が検出されている。

10. 五 輪 塔 (第218図154, 第219図157, 第220図163~175, 図版147・148)

破片をあわせ27点出土している。散発的に出土しているので、本来の位置から移動し、後世の遺構に廃棄されたものと考えられる。石材はほとんどが加工しやすい軟質な凝灰岩である。部位がわかるものは、空輪1点・風輪1点・空風輪が4点・火輪10点・水輪6点・地輪3点である。地輪は形状から他に比べ転用されることが多かったと見られ、ここでは方形の厚みのある加工石を地輪と判断した。

空風輪はすべてのものが欠首をもち、164・165は宝珠と請花の間に欠首を施し、宝珠の頂部のつまみは少し欠損してほとんど形骸化しており、ややしまりのない形になっている。163は使用した石材の形の影響を受けて、正面と側面の幅が異なる扁平な形をしており、宝珠のつまみは上方に長くのびるが、鋭さはなく側面も丸みが少なく直線的である。出土している遺構は163が14・15世紀の溝、164が17世紀の井戸、165が16世紀の溝から出土しており、時期がまちまちであるが、五輪塔だけの形式から見ると163と164・165の2群に分けられ、京田良志氏のご教示によれば、164・165が14世紀中～後半、163が15世紀中頃の特徴をもつ。

火輪は図示しているもののうち、166~168は一辺250cm前後、169が一番大きく一辺280cm、170がやや小さく240cm前後である。167以外は部分的に欠損している。168と170は空風輪との装着面が他に比べずばり、器高も高く軒反りが大きいことに特徴がある。軒の四隅の上端と下端を結ぶ稜線の特徴から見てみると、166・168・169のようにほぼ垂直に下りるものと、167・170のように内側に斜めに入るものに分けられ、後者のほうが新しい要素をもつ。

水輪は球形または橢円球形の上下端を切り取った形をしており、丁度最大径が高さの中位にくるが、171はそれがやや上方にある。また、174は上下端面の直径と高さがほぼ同じで、上下輪との接地面積が大きい。172は上端面が丸く削り貫かれており、納入孔と考えられる。一般に水輪に梵字が彫られることが多いが、当遺跡では梵字が彫られたものは水輪に限らず1点も出土していない。

図示した地輪の175は一面の中央に浅い四角の抉り痕が認められ、欠けているのではっきりとはわからないが、これも納入孔の可能性がある^{注7}。

11. その他の石製品 (第203図37~39, 第218図150・151・153, 第219図155・156・158~162, 図版149~151)

ここでは、建物の基礎に使用されたと考える切石、礎板、用途不明の石製品を取り上げる。

中世後期から近世初頭の遺構から出土している切石は凝灰角礫岩製で、長さが80cm近い大きなものも出土している(155・156・159)。建物の土台の基礎として使用されたと推定される。石であるが故に時期が下っても再利用されたと見え、遺構からの出土量は少ない。150・151・153・156・158・159は同一遺構からの出土で、旧「以速寺」の堀から出土したもので、中には昭和初期にまで下る遺物も含まれる。極めて新しいものである。建物の基礎や雨落ち溝の縁堅めなどに使われたと推定される遺物が多い。

162は直径3.9mの饅頭型をした、頂部をやや平たくくぼめて周囲を粗く加工した石である。中世後期から近世頃の建物の柱穴の底から出土しており、礎盤と考えられる。この時期の建物は数棟検出し

ているが、他の柱穴にはこのように礎盤が残存しているものはない。

37は角柱状の石製品で、表面に擦痕が見られ、一面には陰刻がある。

38・39は石筆かと推定されるもので、表面を滑らかに加工し、先端に向かってやや先細りとなっている。一部しか残っていないので詳細なことは不明である。

150は石灯籠の一部であろうか。中央に透窓が穿たれる。

153は半円球形状のものの頂部を切り取って平らにした形をしており、頂部の平坦部に四角形の差し込み孔が穿たれる。四角い棒状のものを直立させるための土台の役割をしたものかと推定される。

160は四角の大型の鉢で、四隅に脚が付く。手水鉢の類であろうか。

12. ま と め

石製品という遺物だけでその遺跡の性格を推し量ることは不可能であるが、ここでは石製品という一側面から梅原胡摩堂遺跡を見たことを簡単にまとめてみる。中世前期を特徴づける遺物は石鍋である。現在富山県下で最多の出土量を誇る。多量の輸入陶磁器の出土量ともあわせ、当時の経済の流通網の中心にあったことがうかがわれ、何棟もの大型の掘立柱建物が検出されたことから地域の有力者クラスの邸跡であったと考えられよう。

中世後期は、何度も繰り返すが、多量の石臼の出土が特徴的である。全国的に見てもこの時期から石臼の出土が顕著になるようである。石臼が多く出土する15・16世紀は遺跡の中央から南側で大規模な区画溝で邸地が仕切られた時期で、井戸が多量に掘削された時期でもある。竪穴状土坑・井戸・溝などに遺棄された石臼は、ほとんどが破碎されたものである。石臼は本来穀物を挽くためのものであるが、壊れやすいとは考えにくく、これほどの量が当時の人口に対して必要であったか非常に疑問の残るところである。逆に考えて、挽いていたのが穀物だけではなく、何らかの作業場で穀物以外のものに使用されていたのであれば、遺跡の性格もまた違った意味合いをもつようになるであろう。区画溝で仕切られた邸に住むのは地方の実力者で、溝の外側には彼の庇護のもとに集まった民が暮らし、自給自足の小さい単位ができあがっていたのではなかろうか。

(島田美佐子)

注1 福光町史編纂委員会 1971 「近世の政治と経済 11鉱業と鍛冶」『福光町史』上巻

注2 用語については水野和雄 1985 「日本石硯考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』第70巻第4号を参考にしている。

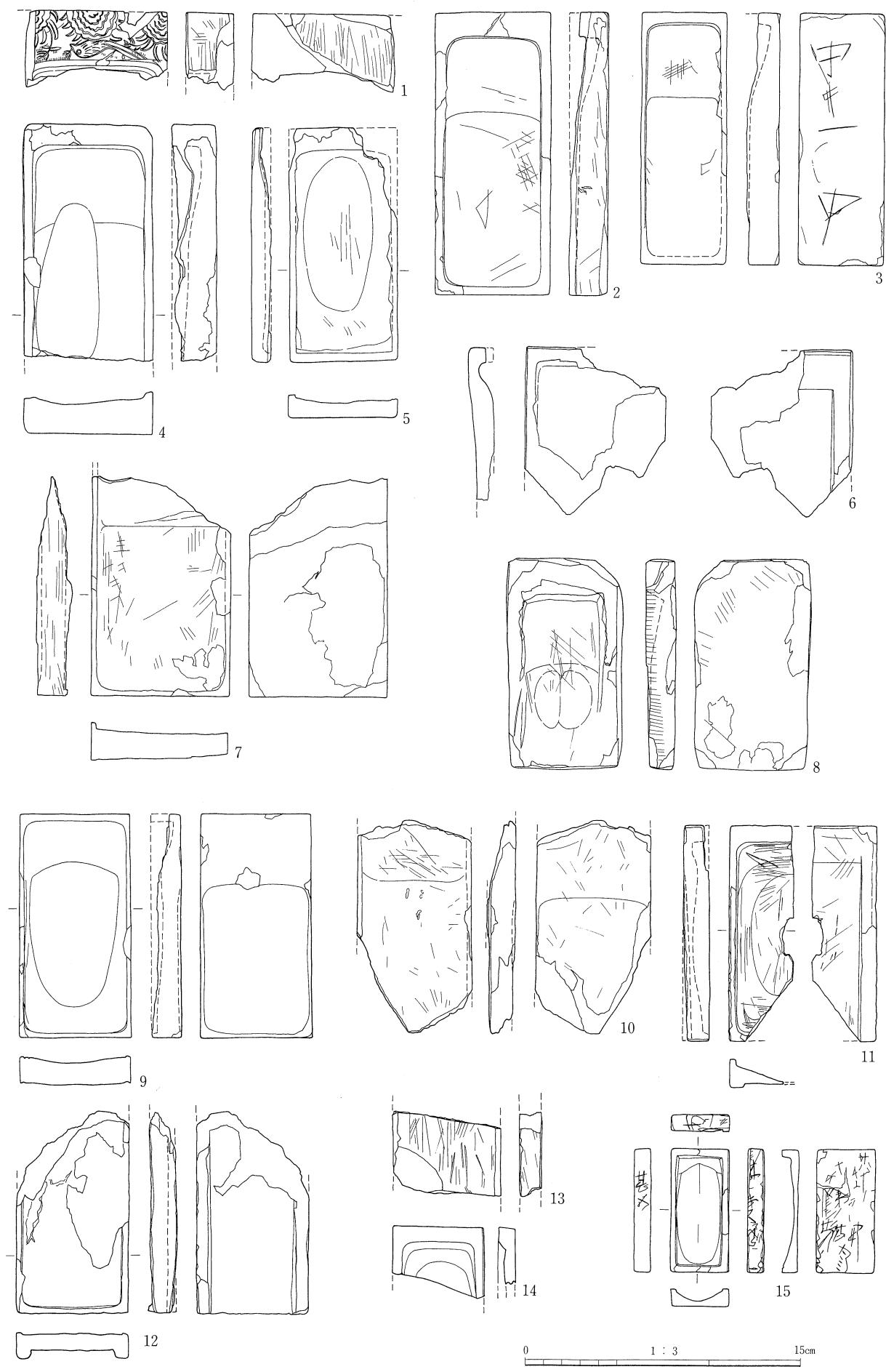
注3 木戸雅寿 1993 「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究IX』日本中世土器研究会

注4 婦中町教育委員会 1993 『富山県小倉中稻遺跡発掘調査報告』

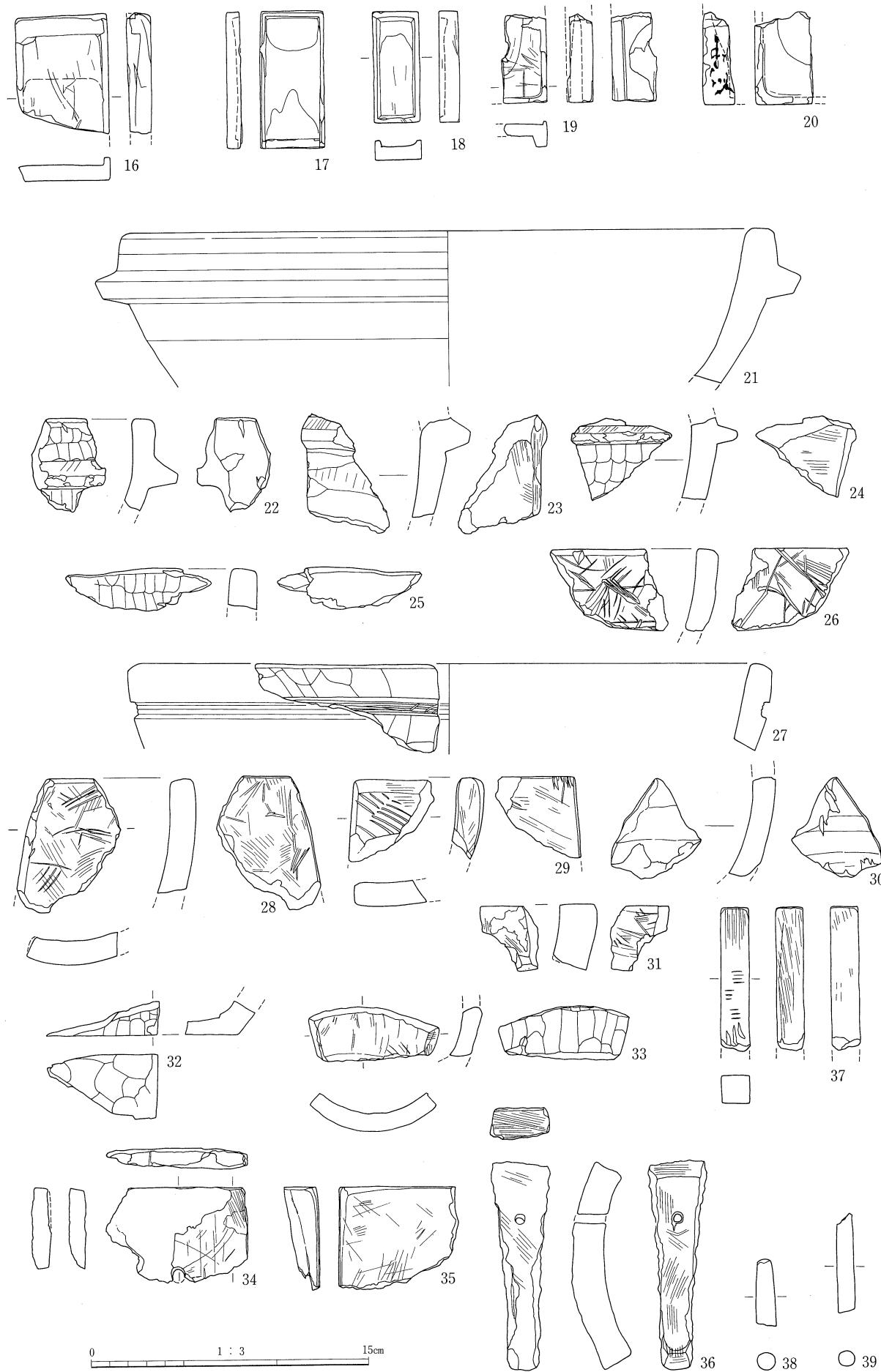
注5 (財)富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1995 『埋蔵文化財年報(6)』

注6 用語については、三輪茂雄 1978 『ものと人間の文化史 25 白』(財)法政大学出版局・同 1978 『石臼探訪』クオリアを参考にした。

注7 五輪塔の形態・時期については、京田良志氏から御教示を得た。



第202図 石製品 1 (1/3)



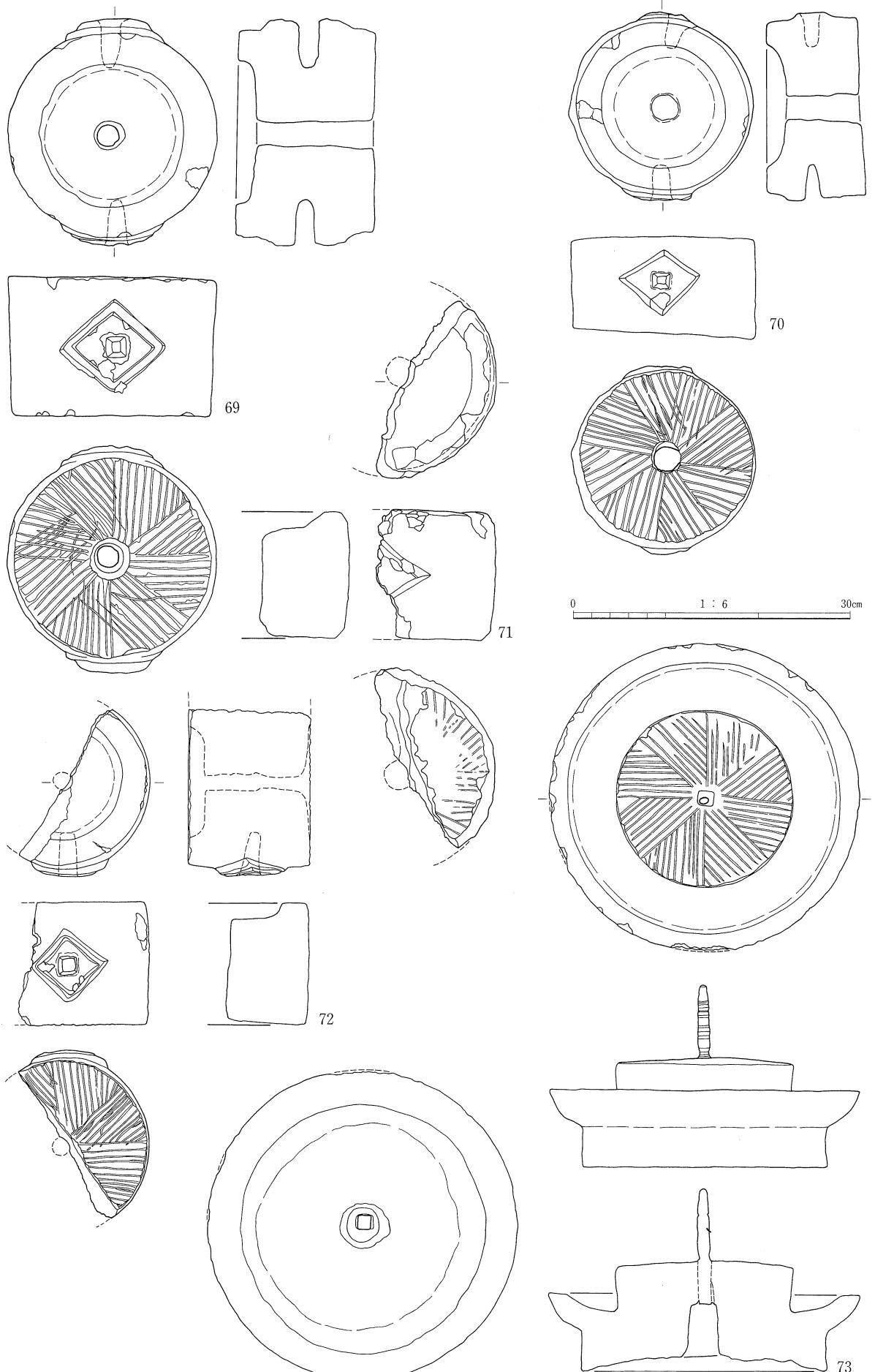
第203図 石製品2 (16~35 1/3, 36~39 1/2)



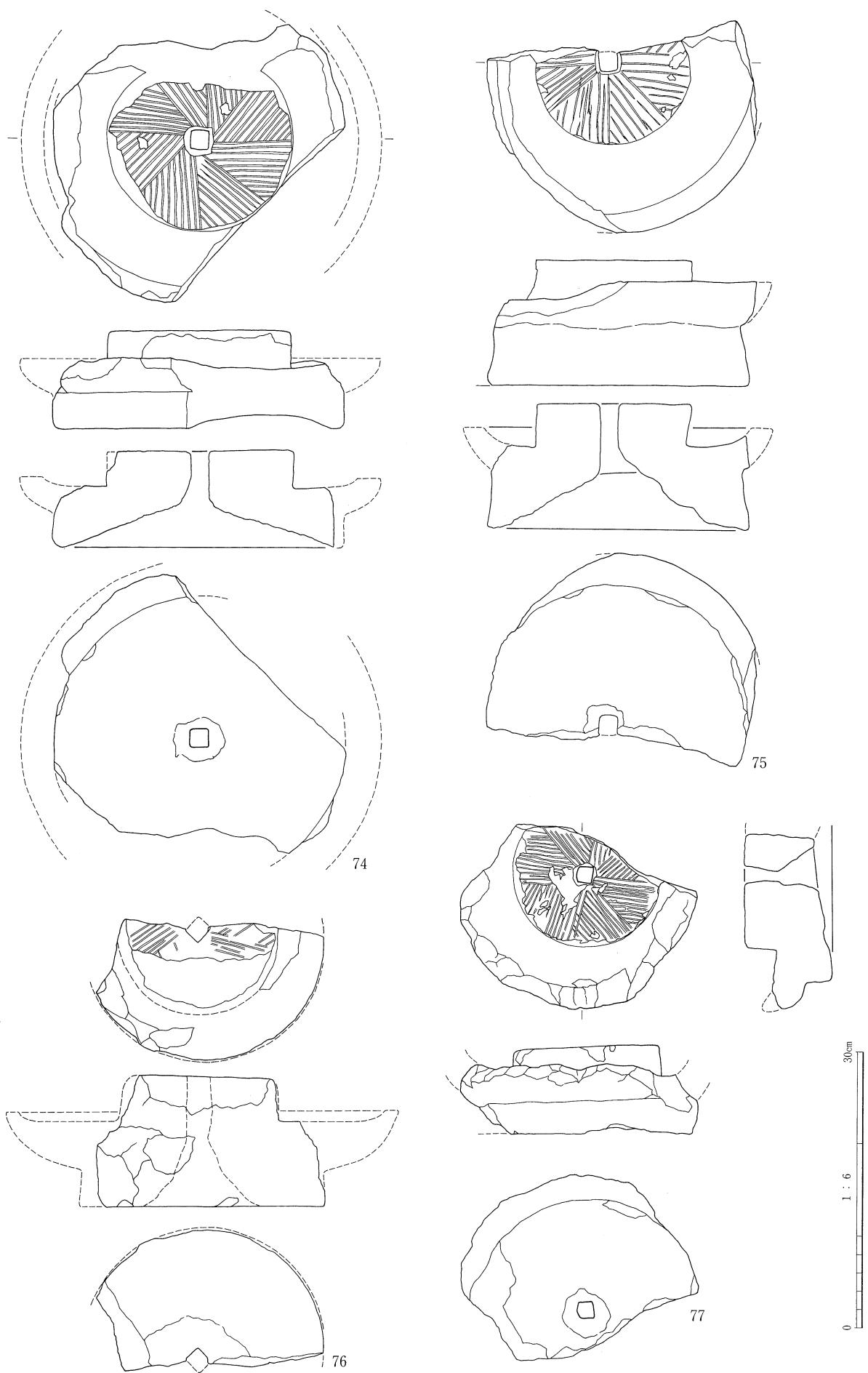
第204図 石製品3 (1/3)



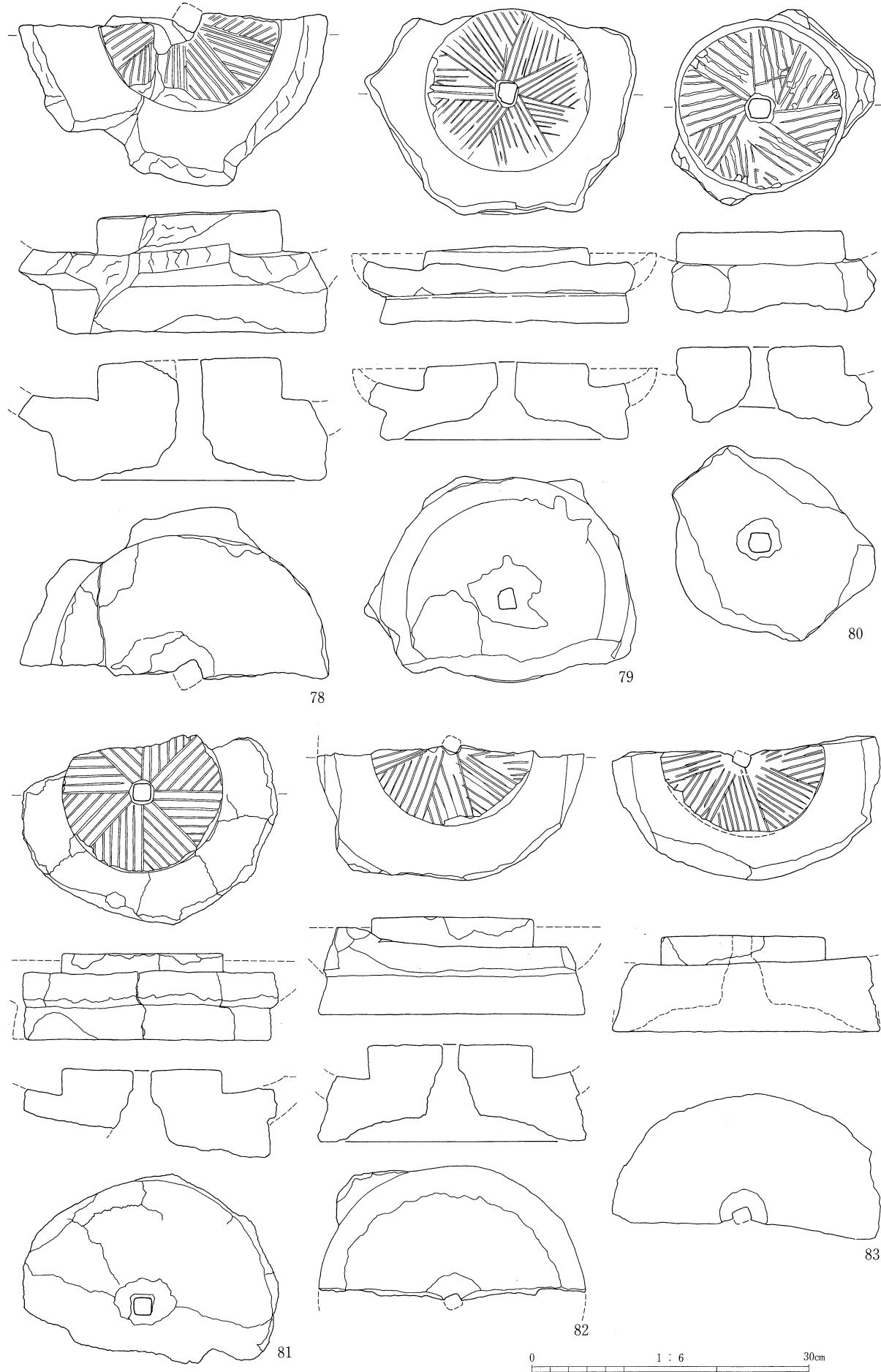
第205図 石製品4 (1/3)



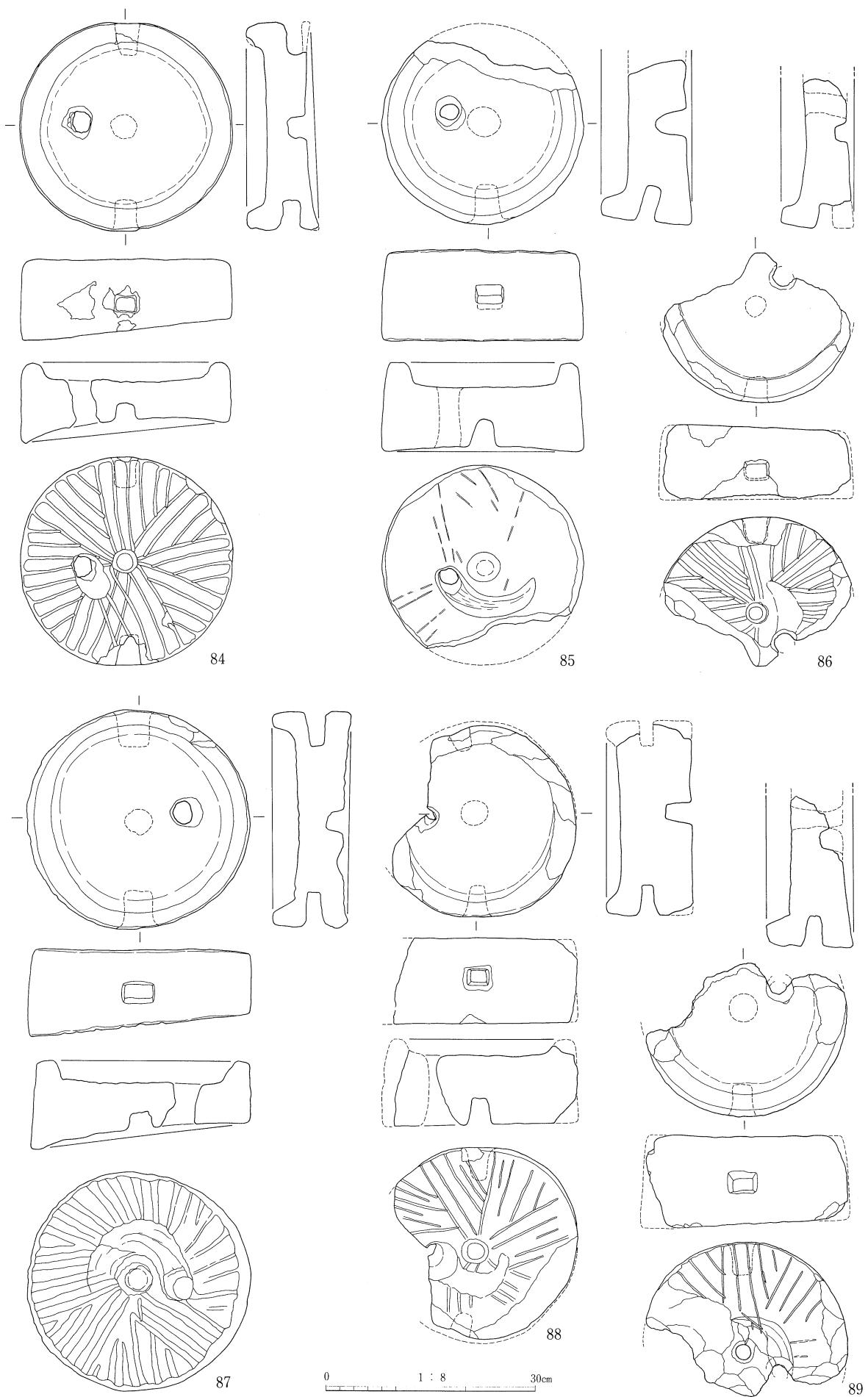
第206図 石製品5 (1/6)



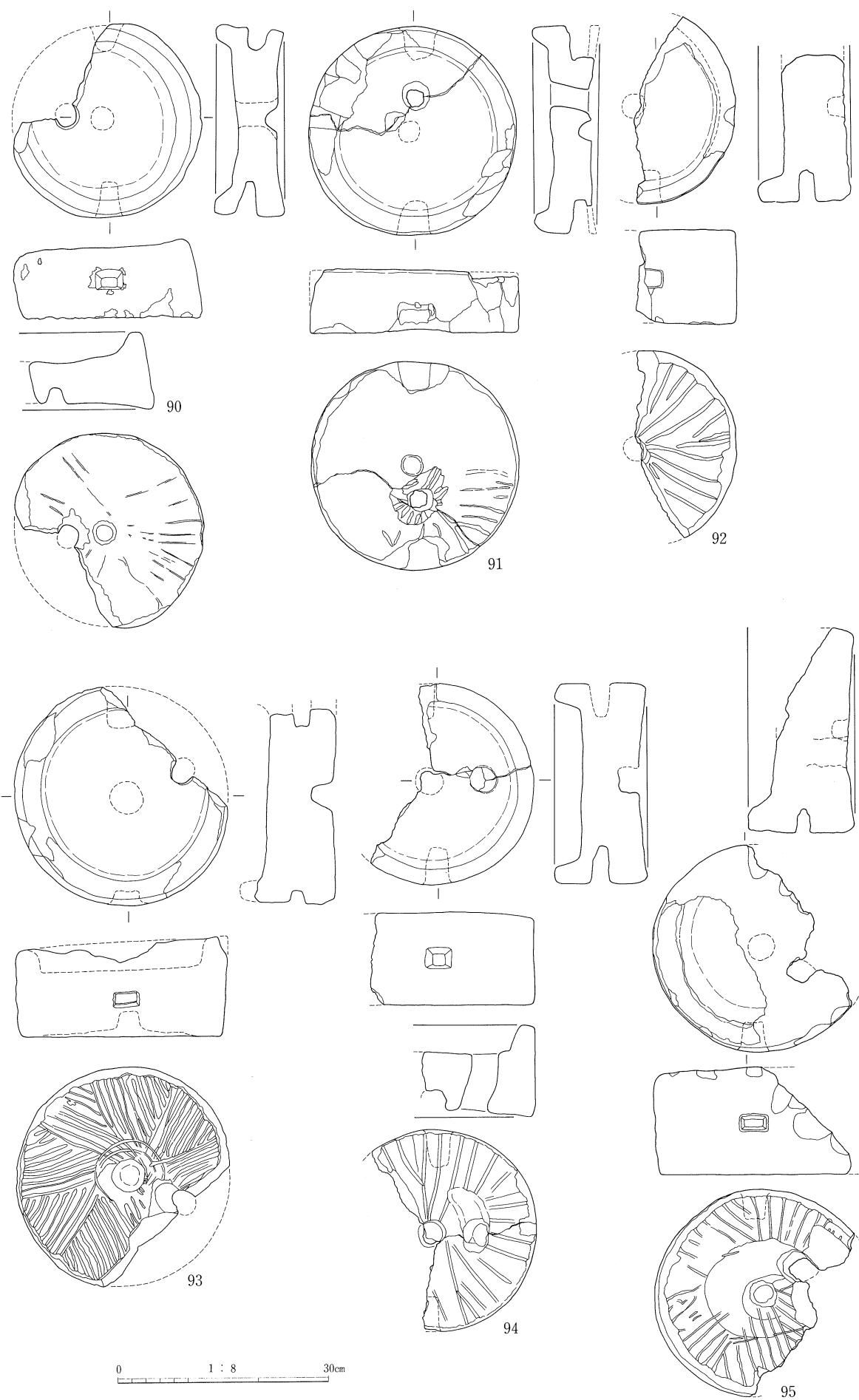
第207図 石製品 6 (1/6)



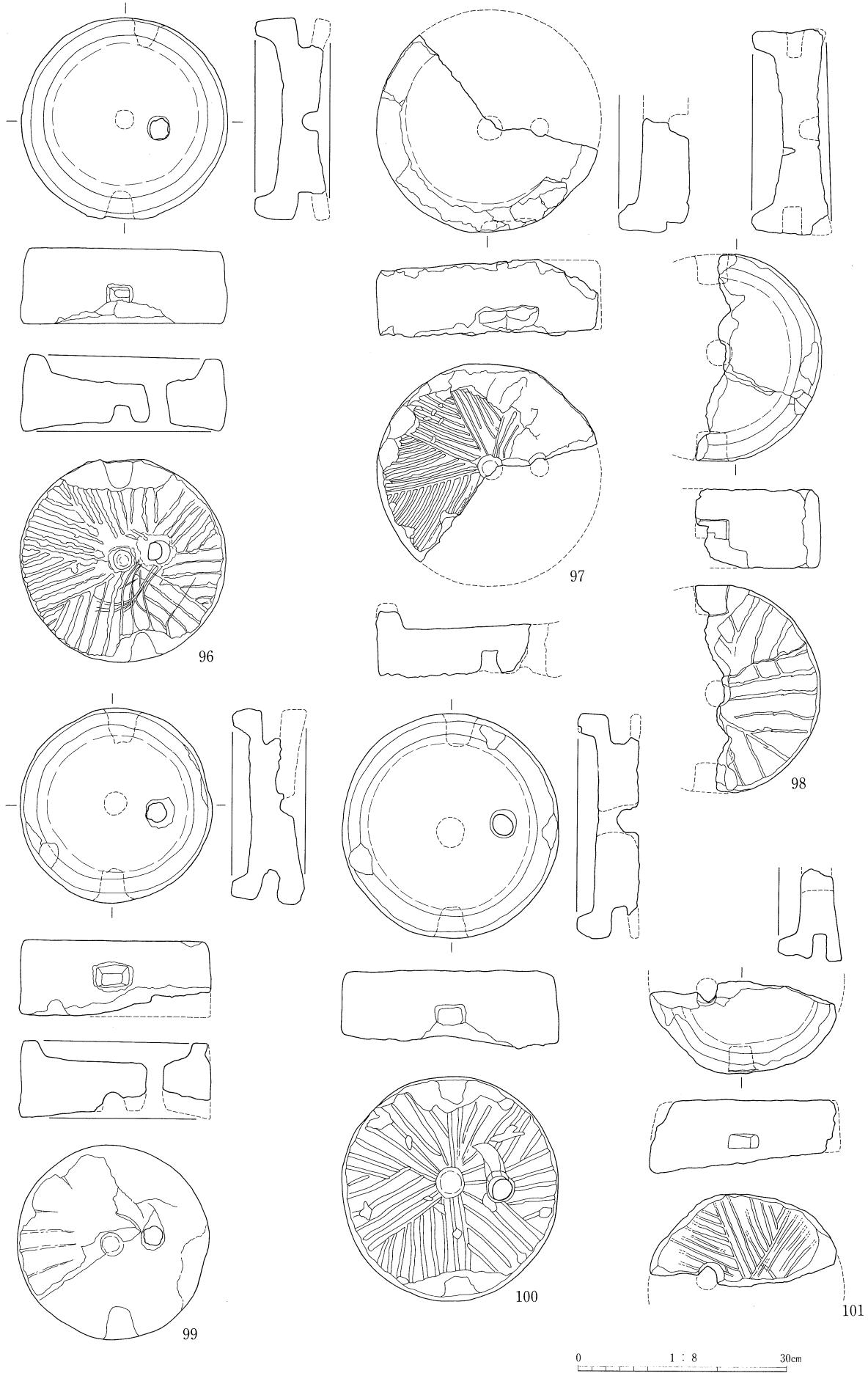
第208図 石製品 7 (1/6)



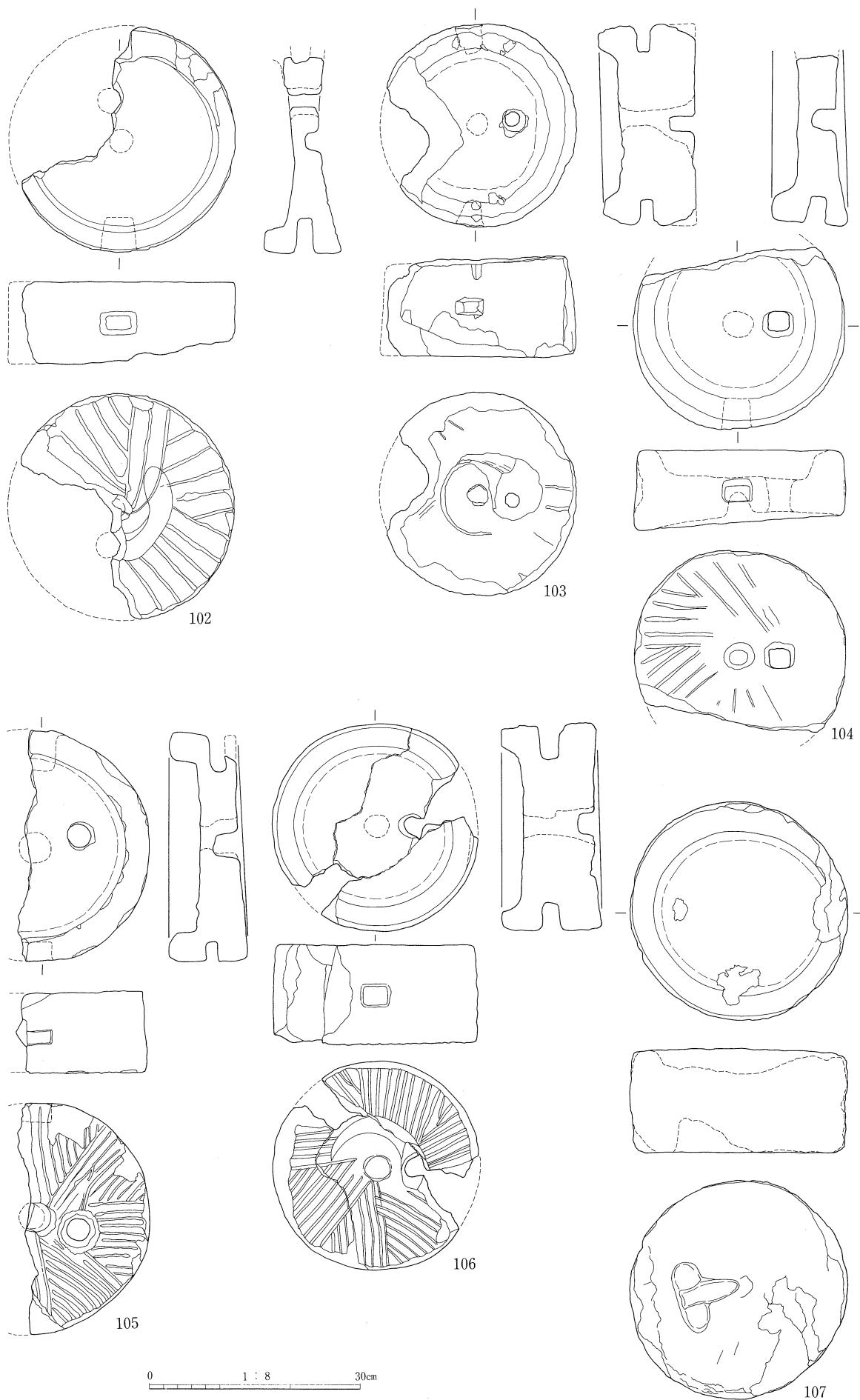
第209図 石製品 8 (1/8)



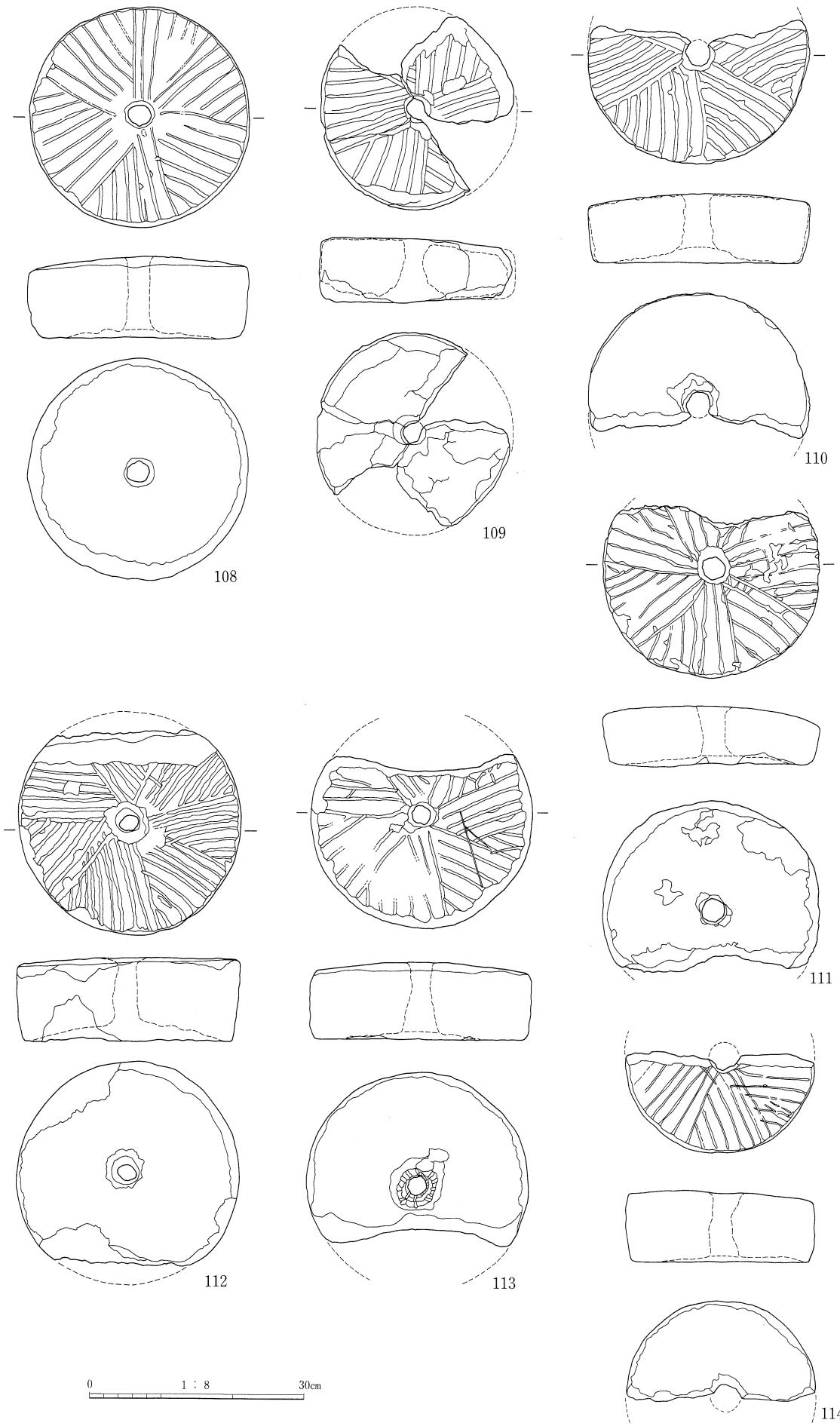
第210図 石製品9 (1/8)



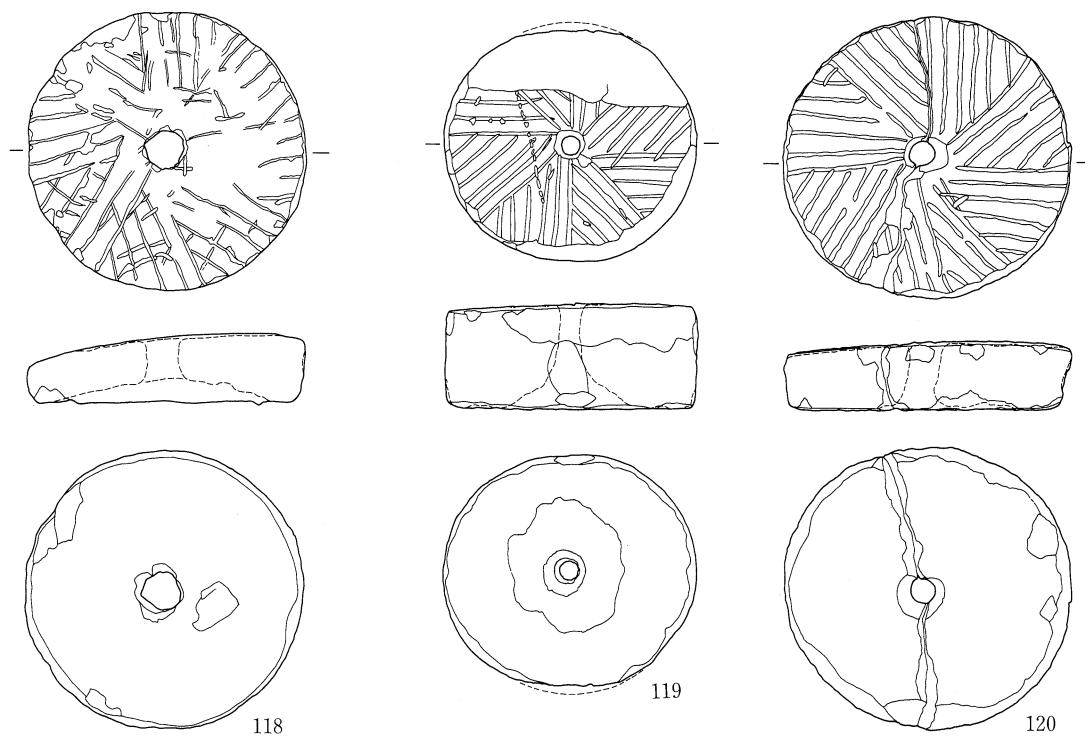
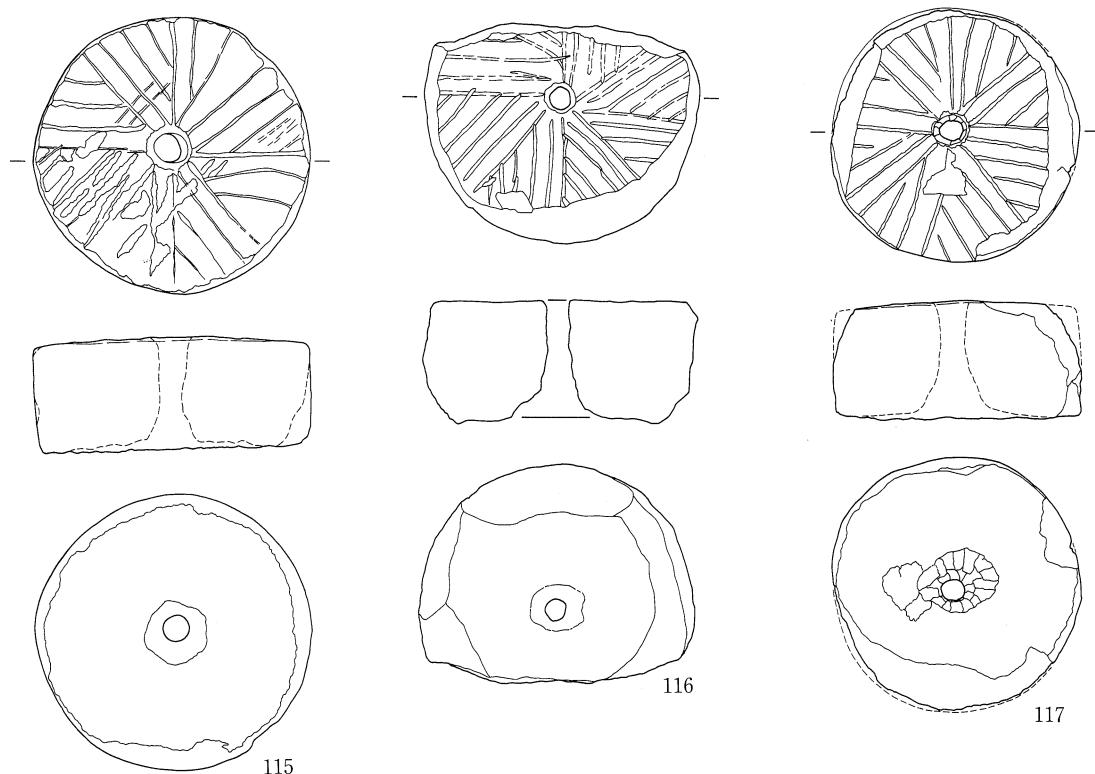
第211図 石製品10 (1/8)



第212図 石製品11 (1/8)

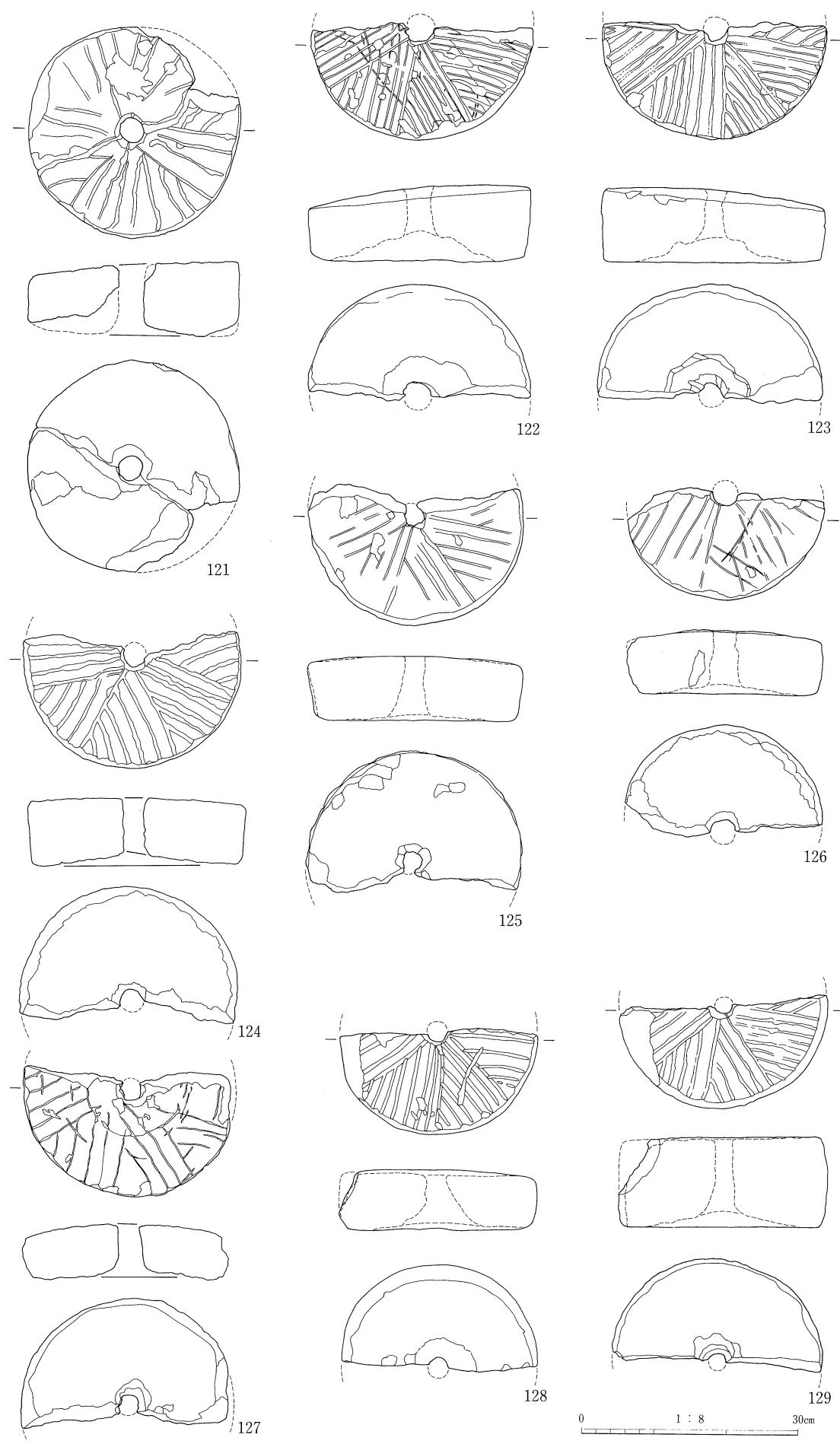


第213図 石製品12 (1/8)

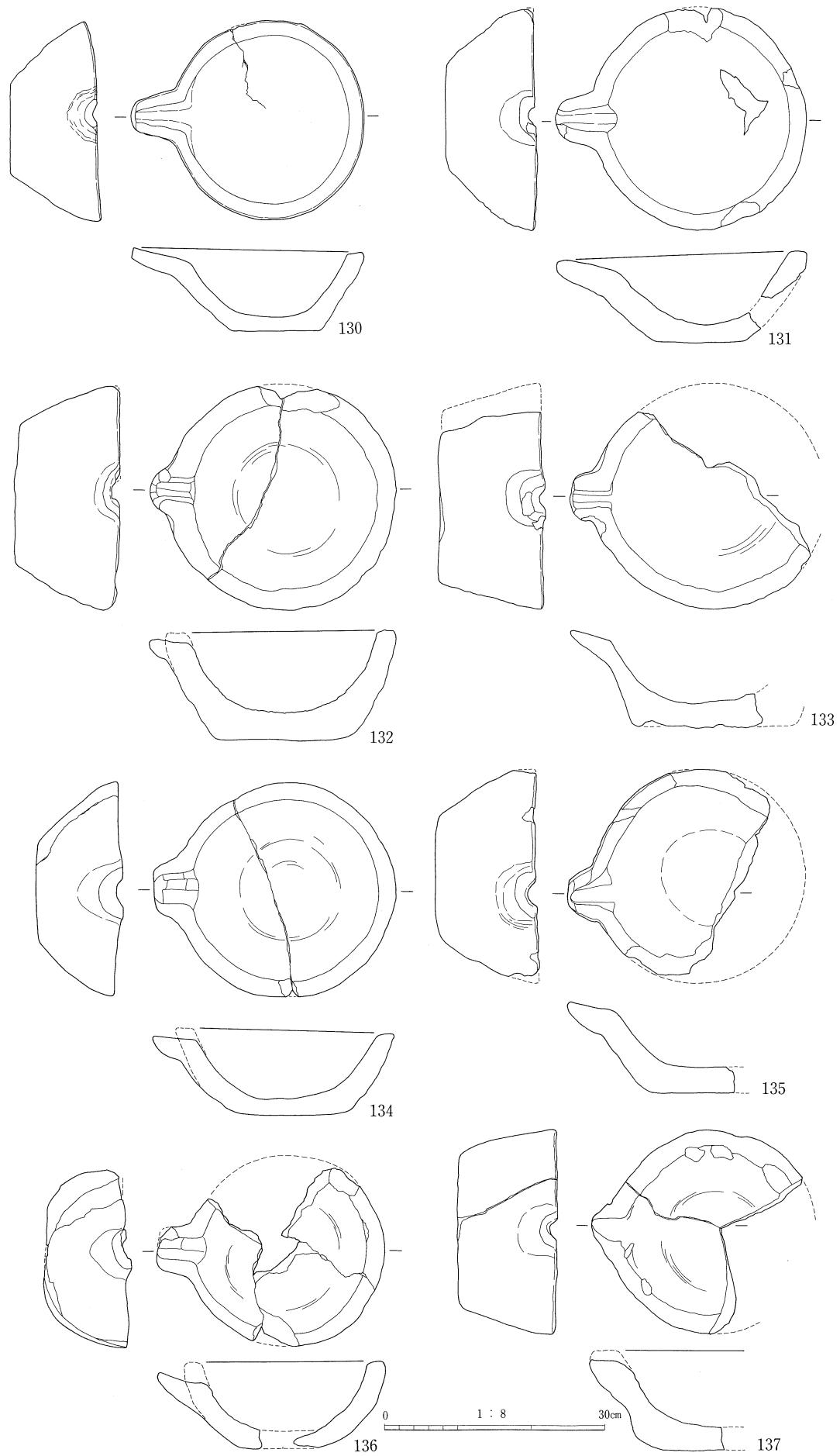


0 1 : 8 30cm

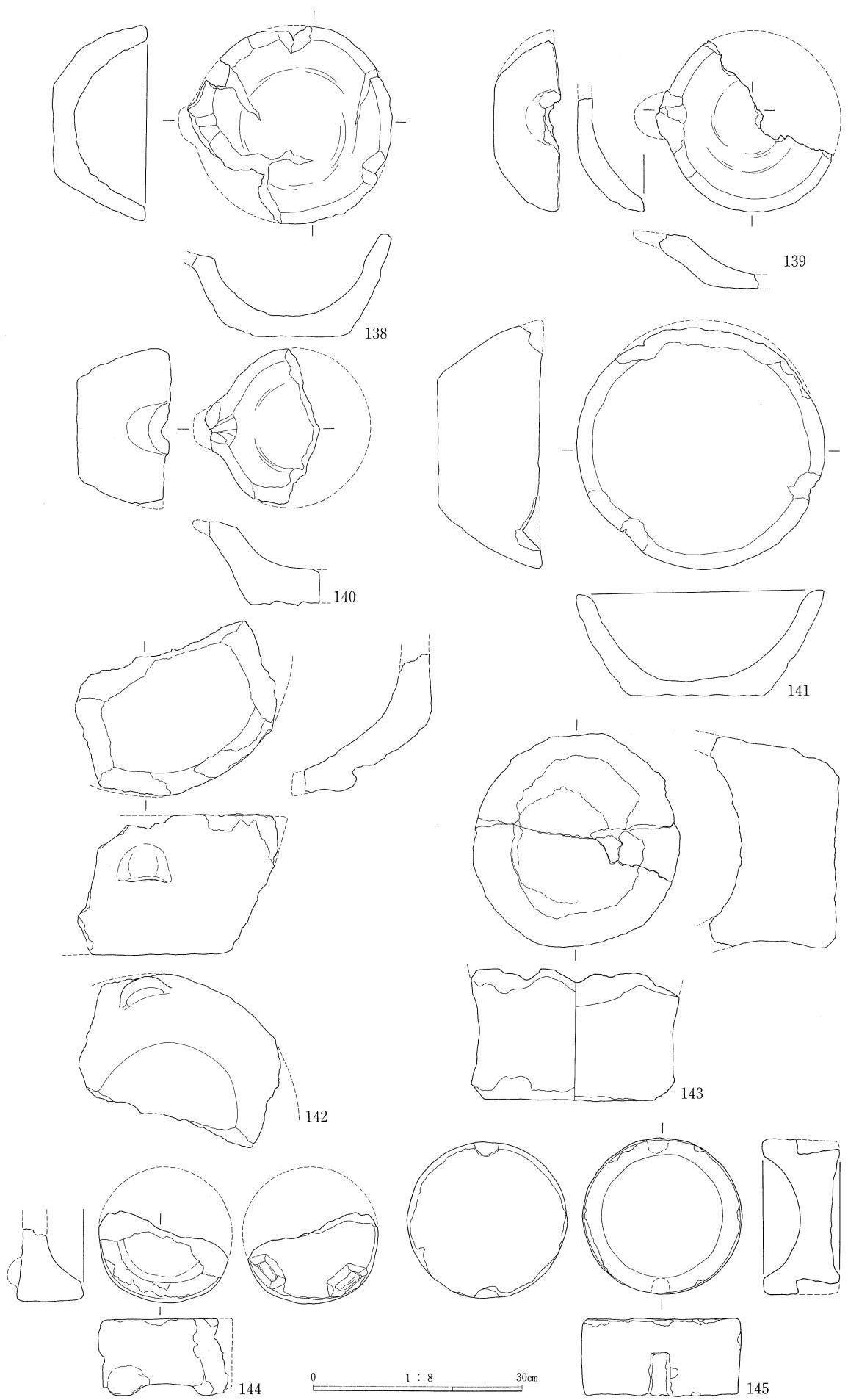
第214図 石製品13 (1/8)



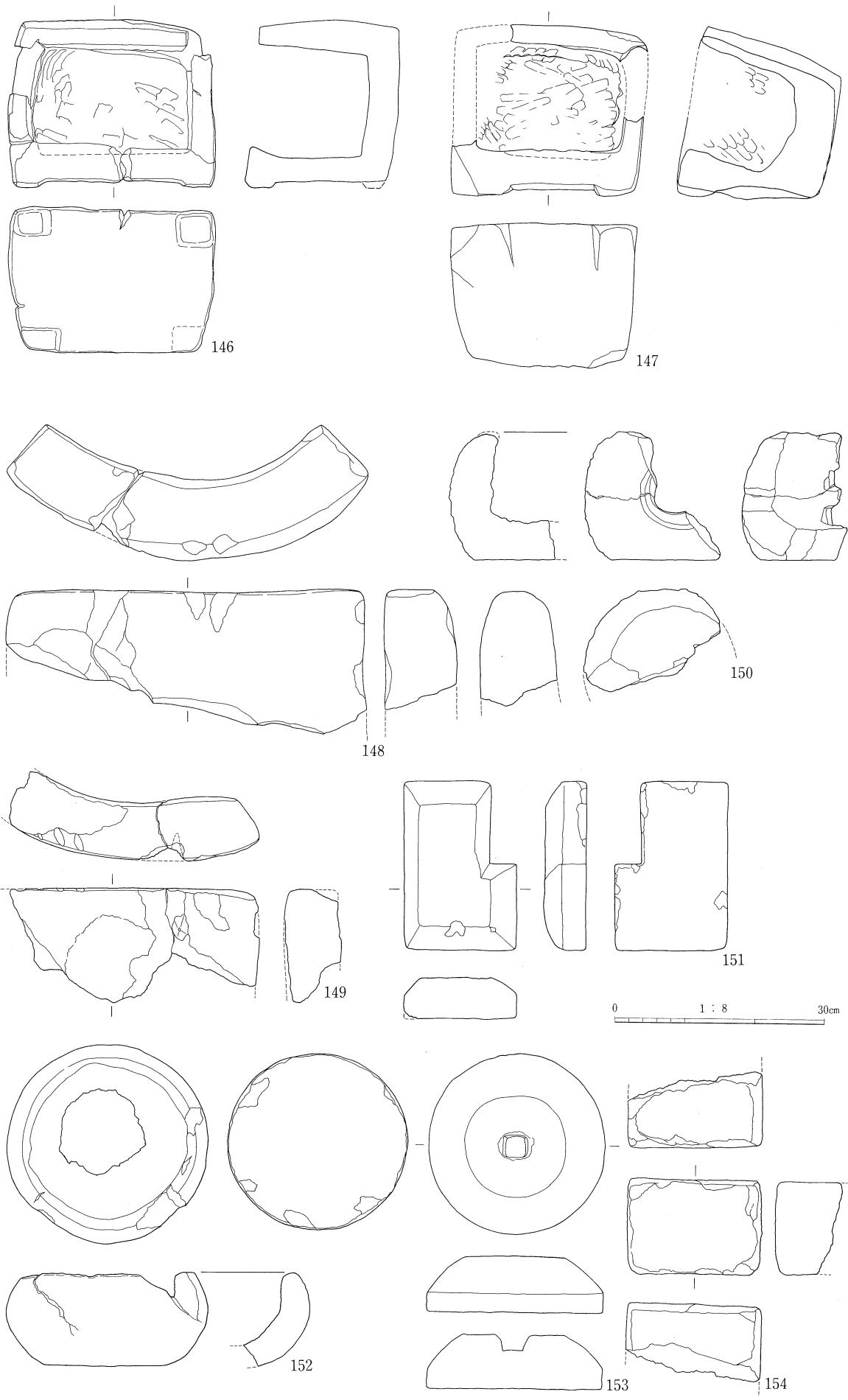
第215図 石製品14 (1/8)



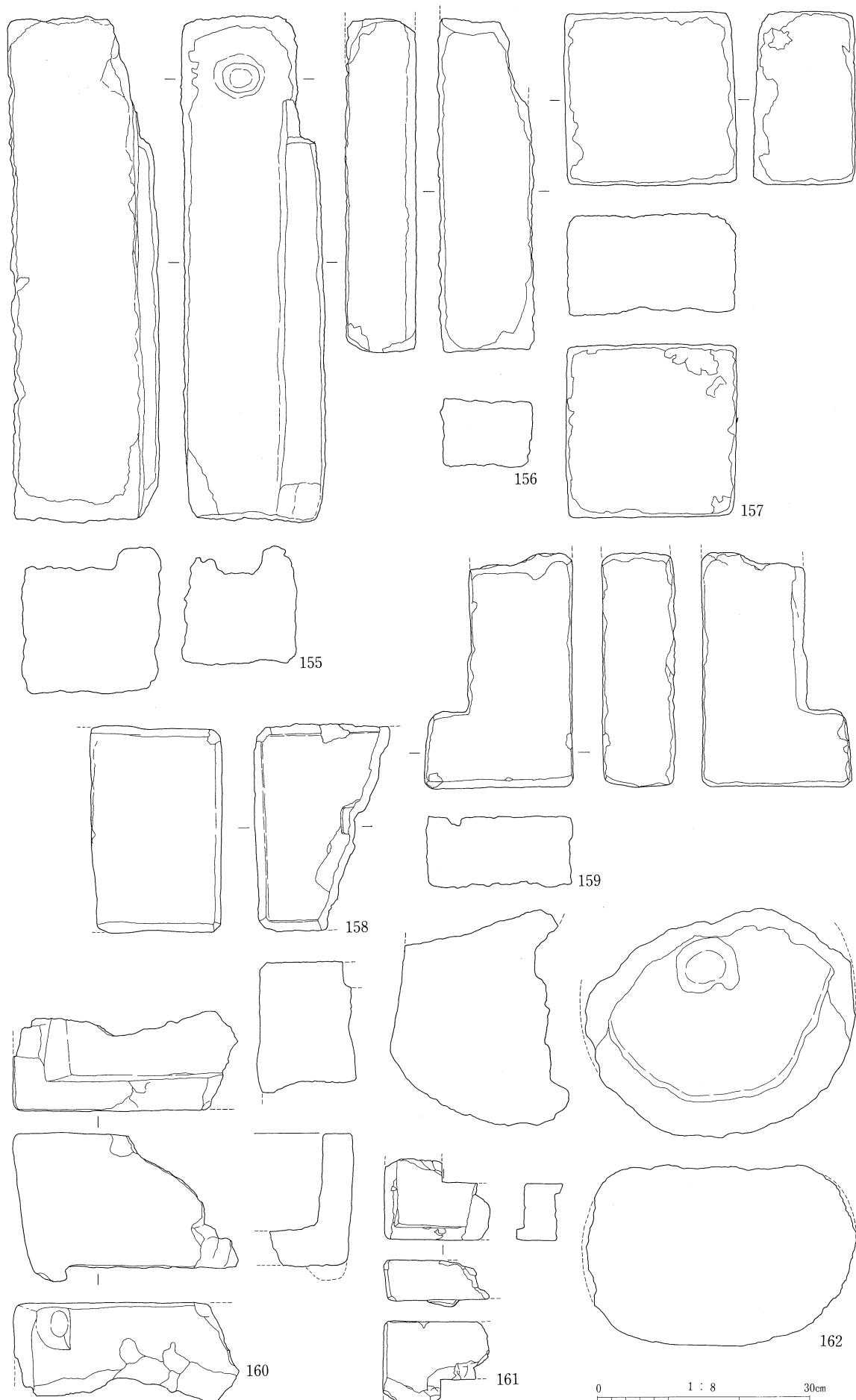
第216図 石製品15 (1/8)



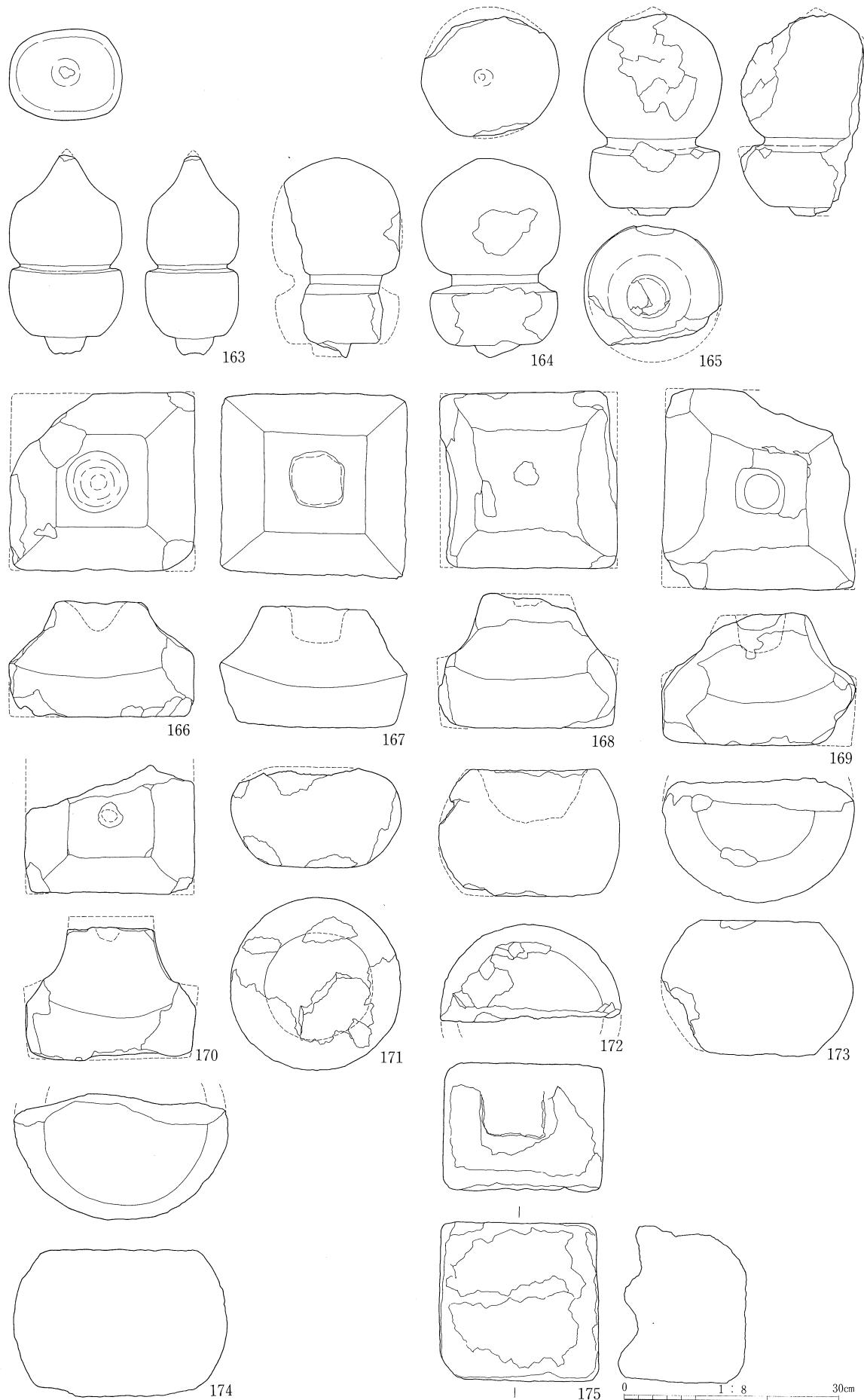
第217図 石製品16 (1/8)



第218図 石製品17 (146・147 1/5, 148~154 1/8)



第219図 石製品18 (1/8)



第220図 石製品19 (1/8)

F. 金属製品

金属製品には鉄製品・銅またはその他の金属の合金で作られた製品がある。出土金属製品に占める割合は鉄製品が約80%を占め、錢貨を除けば銅またはその他の合金製品は僅かである。用途をみると生活・生産・信仰・建築・武具・流通に関係したもの、その他に用途不明の製品もある。また金属関連としては鉄滓等が井戸・土坑・溝内から出土している。坩堝やフイゴの羽口等も出土していることから、集落内で金属生産活動を行っていたことが窺われる。以下、素材別、用途別に出土遺物の説明を行う。

1. 銅・合金製品

(1) 生活用具 (第221・222図、図版152・153)

鉄漿皿 (2・3) 2はS D3485出土。口径4.1cm、器高1.5cm、重さ12.9gを測る。五葉の輪花形をしており、内面中央には毛彫りの文様を施した飾り鉢があり、高台部は一枚物である。内面には鍍金が部分的に残っている。3はS E5777出土。土圧によって変形しているが、口径4.4cm、器高2.4cm、重さ12.9gを測る。八葉の輪花形をしており、内面中央には無文で笠形の鉢がある。高台部は側板を巻いて底板と溶接している。鉢は内面から底部外面まで抜けているように見える。この皿は被熱したらしく、黒ずんでいる。化粧用の道具と考えられる。

かんざし (4) S D3005出土。残存長14.5cm、幅1cm、重さ17.2gを測る。断面は蒲鉾形で、先端を欠損している。表面には魚々子^{ななこ}で文様を施している。文様はかんざしの形を模倣したような外側の大きな区画の中央に5弁の花をおき、花の上下に細長い線で区画を作り、その中を二分するように区切る。さらに外側と内側の区画間を魚々子で埋めたものである。魚々子の線は比較的丁寧であるが、間を埋めた魚々子は不揃いである。

串 (6・7) S D5910出土。上部によりをかけた痕跡がある。先端を欠損しているが、断面は円形で、先端に向かって細くなる。

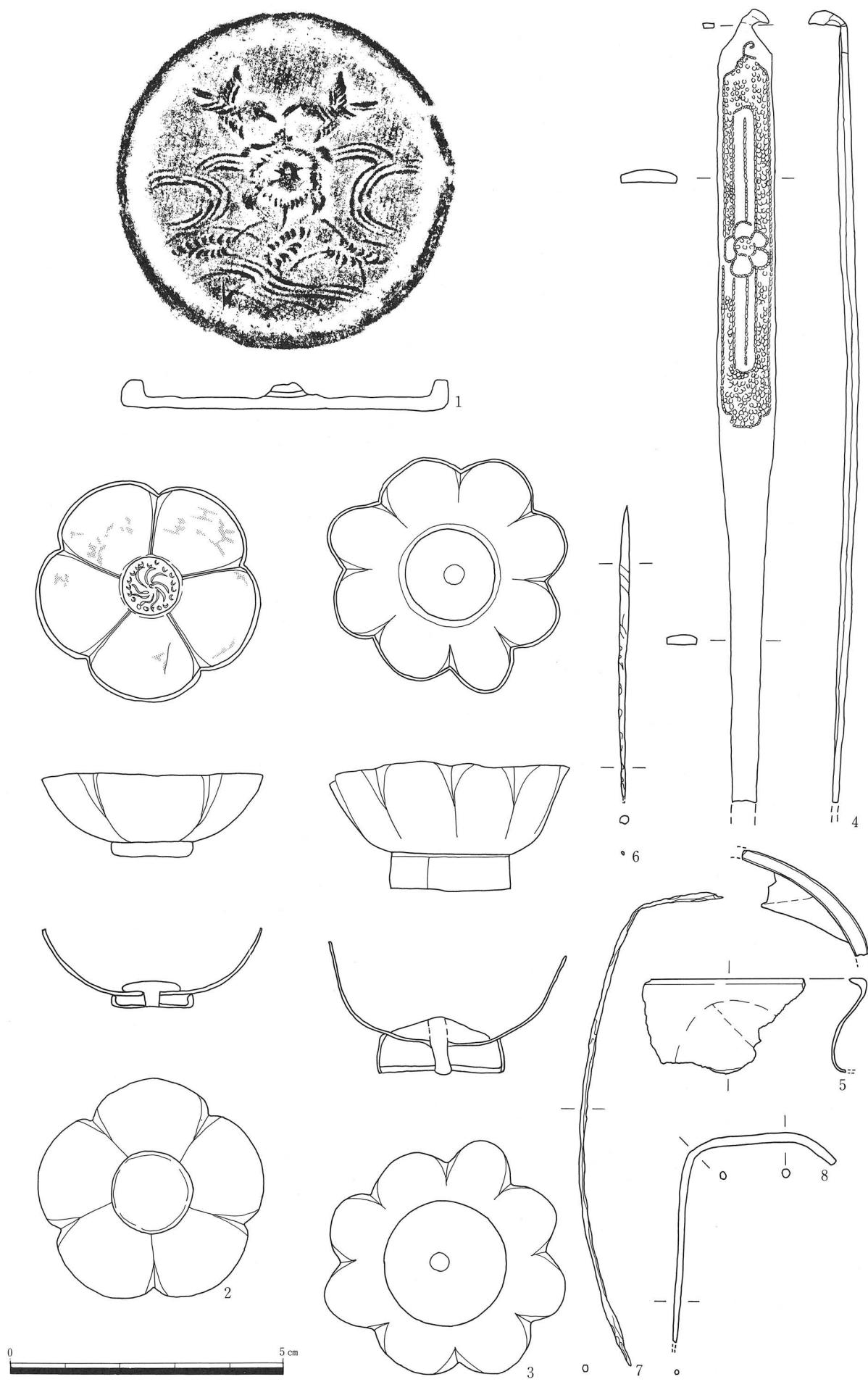
火箸状 (8) S K6120出土。L字状に折れ曲がり、先端部を欠損している。断面は円形を呈し、先端に向かって細くなる。

キセル (12~18) 12はS B6390出土で首部のみ残存している。13はC 1 W地区の包含層出土で真鍮製。火皿には小さい穴と細かい条痕がある。煙管にはヤニのようなものが付着している。首部は大きく弧を描いて屈曲する。14はA S地区の包含層出土で、完形の吸口部。15はB地区の包含層出土で、羅字部のみが欠損している。首部は水平に延び、小さく屈曲し、火皿は楕円形である。煙管内にはヤニが付着している。吸口部は羅字部をソケット状にはめ込むように先端が一回り大きくなっている。16はB 2 地区の包含層出土で、吸口部の一部を欠損している。17はB 2 地区の包含層出土。完形の吸口部。羅字部側の張り合わせ面がずれている。18はC 2 E地区の包含層出土の完形の吸口部。材質は金銅のようである。羅字部側の内部には竹が遺存している。

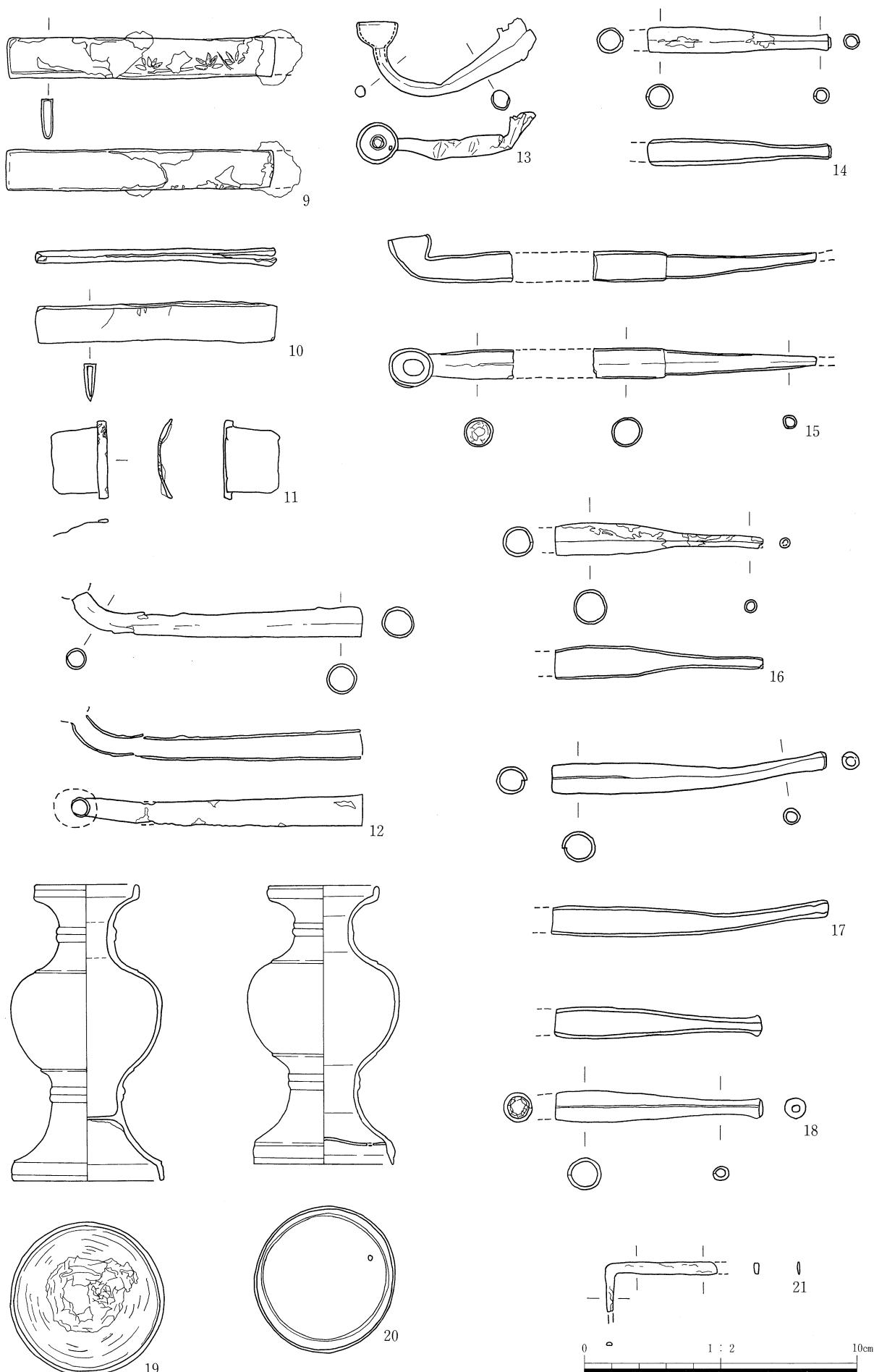
(2) 武具 (第222図、図版153)

小柄 (9・10) 9はS K7103出土。鋸びて全体に青緑色を呈する。内部の木質の上に鉄、さらに銅を卷いた構造であり、片面に笹の文様がある。峰は直であるため、刃の向きに合わせると笹の葉の向きが上下逆になる。10はC 3 W地区の包含層出土。銅製で無文。断面三角形を呈し、背の部分で繋いでいるが、身側から溶接が切れて開いている。内部は中空である。

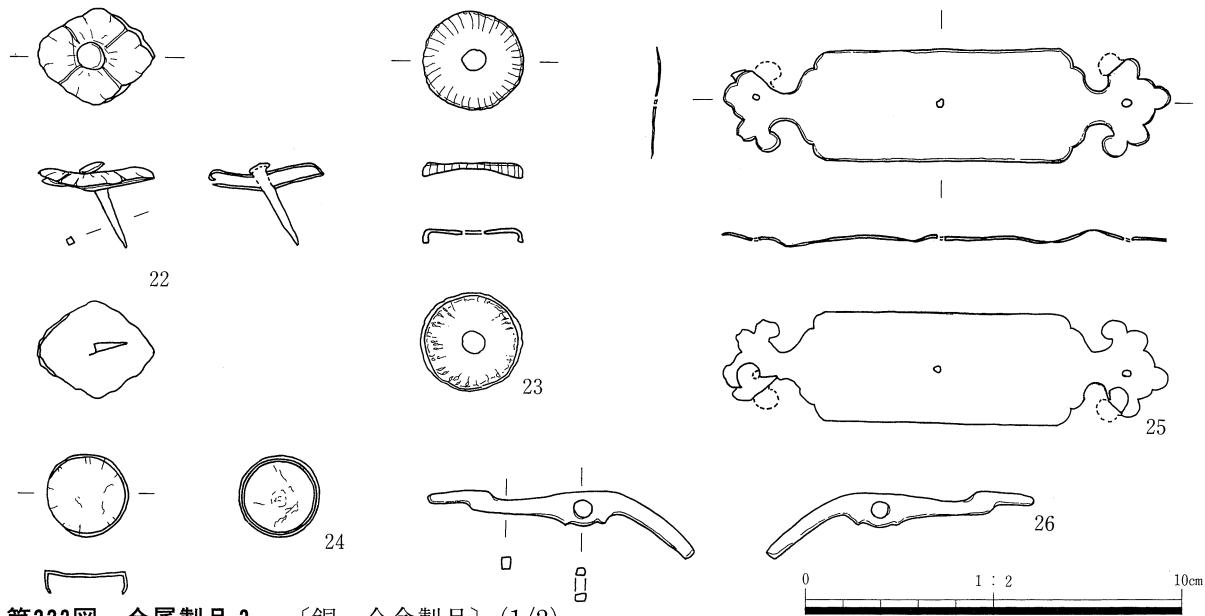
鉗 (11) S D4607出土。両端を欠損している。厚い部分と薄い部分は貼り付けてあり、厚い部分には鍍金が残っている。装着されていた刀は刃幅約2.5cmと考えられる。



第221図 金属製品 1 [銅・合金製品] (1~4 1/1, 5~8 1/2)
鏡1 鉄漿皿2・3 かんざし4 銚5 串6・7 箸8



第222図 金属製品2 [銅・合金製品] (1/2)
小柄9・10 鍔11 キセル12~18 花瓶19・20 金具21



第223図 金属製品3 〔銅・合金製品〕(1/2)
飾り鉢22 飾り金具23~25 火縄ばさみ26

(3) 信仰用具 (第221・222図, 図版152・154)

鏡 (1) SK10198出土。直径5.9cm, 縁高0.5cm, 縁厚0.25cm~0.35cmを測る和鏡, 「洲浜水草双鳥鏡」^{注1}。縁は断面方形で、内傾式の中縁であろうか。鉢は小さく盛り上がり、鉢座は亀である。遺存状態は非常に良く、赤銅色を呈し、15世紀以降のもの^{注2}と考えられる。当期の鏡は祭祀遺構や経塚から出土する例が多く、土坑から出土する例は少ない。

鉢 (5) SK5383出土で口縁部は断面三角形を呈する。体部は土庄で歪んでいる。

花瓶 (19・20) 19・20はSX5901出土。ともに完形。19は口径3.7cm, 底径5.4cm, 器高10.8cmを測る。脚部内面に漆が塗られており、中央部分の漆はしづしづになっている。底に穴が空いたための補修であろうか。器壁は薄く、口径が小さい。20は19より器高がやや低く、口径4.0cm, 底径5.1cm, 器高10.2cmを測り、肩部が丸く張っている。器壁が厚く、特に脚部端部はぼってりしている。脚部内面には底板がはめ込まれており、端よりに小さい孔が1つある。花瓶は密教法具であり、本来は二個体一対のものであるが、ここからは対の花瓶の一方のみが出土している。

(4) その他の (第222・223図, 図版154)

金具 (21) SK6624出土。鉢であろうか。両先端部を欠損している。

飾り金具 (22~25) 22はB2地区の包含層出土。完形。飾り部分の表面は四弁の花弁で菱形を呈し、裏面の板に貼り合わせてあり、その中央に頭部の丸い釘を差し込んだものである。釘は長さ2.4cm, 頭下幅0.4cmを測る。23はC2W地区の排土中から出土。直径2.7cm, 高さ0.4cmを測り、周縁部に細かい刻みを巡らし、中央に直径6mmの釘穴がある。24はSK6191出土。直径2.1cm, 高さ0.5cmを測る。材質は鉛である。蓋状を呈し、端部はやや内傾してわずかに段をもち、どこかにはめ込んで用いたと考えられる。25はSK4746出土。長さ11.8cm, 幅2.9cm, 厚さ0.03cmを測る。きわめて薄い金属板の両側を雲形状にしたもので、両端と中央部に小さい孔が三カ所ある。これらは釘孔で、何かに打ち付けて使用したと考えられる。

これらの出土した飾り金具の多くが金色を呈していたことは、表面に部分的に鍍金が残存していることからも推定される。

火縄銃の火縄挟み (26) SK4009出土。両先端を欠損しているが、残存長7.2cm, 孔径0.5cmを測る。

2. 錢 貨(第224・225図、図版155~157)

北宋銭を中心として194枚の銅銭が出土した。それらは遺構内や包含層からバラで出土する場合が多い。しかし S E 6025からは79枚が藁紐に通した錢縕の状態で出土し、その藁紐の一方の端は結んであるが、他方の端はのびており、さらにつながっていた可能性も考えられる。また S P 6947から出土した銭には布が付着しており、この布は銭とともに紐を通してたらしく穴が開いている。これらの他にも B 2 地区の遺構上面の包含層からは「天禧通寶」を含む29枚が、S D 1250からは13枚がまとめて出土している。出土銭貨中では「寛永通寶」・「一銭」以外は中国からの輸入銭であり、最も古いものは「開元通寶」、最も新しいものは「永樂通寶」である。なお出土銭貨数は第3表に、複数種類の銭が共伴している遺構については第4表にまとめた。

3. 鉄 製 品

(1) 生活用具(第226図)

火箸 (1・2) 1はS X 10319出土。先端が屈曲している。断面は長方形を呈する。2はS P 4809出土。先端を欠損しているが、頂部は円形、断面は長方形を呈する。

串 (3~7) 3~7はS D 5112出土。断面は楕円形を呈するが、細いので針金状のものである可能性もある。

自在鉤 (8) S K 6264出土。基部を一部欠損しているが、断面は長方形を呈する。

脚 (18) B地区の包含層から出土。獸足をもつ香炉の脚の可能性がある。被熱しているが、赤色塗彩が残存している。

(2) 生産用具(第226・227図、図版157~159)

釣針 (9) S K 8952出土。糸掛け部から下が直線的に伸びるJ字形を呈する。屈曲した先端が欠損しているが先細りしている。

口金 (10) S K 2266出土。鎌などの柄に固定するための口金。内径から径2.4cmの柄に用いたと考えられる。

蹄鉄 (11) S P 4909出土。この他にも7点出土しているが、大きさには大小がある。

取手金具 (12) S K 6134出土。断面円形の取っ手の両端はやや広がっており、取付用の金具がある。取付用の金具は、取っ手の両端を細い板で巻いて張り合わせたもので、中央に向かって傾いている。

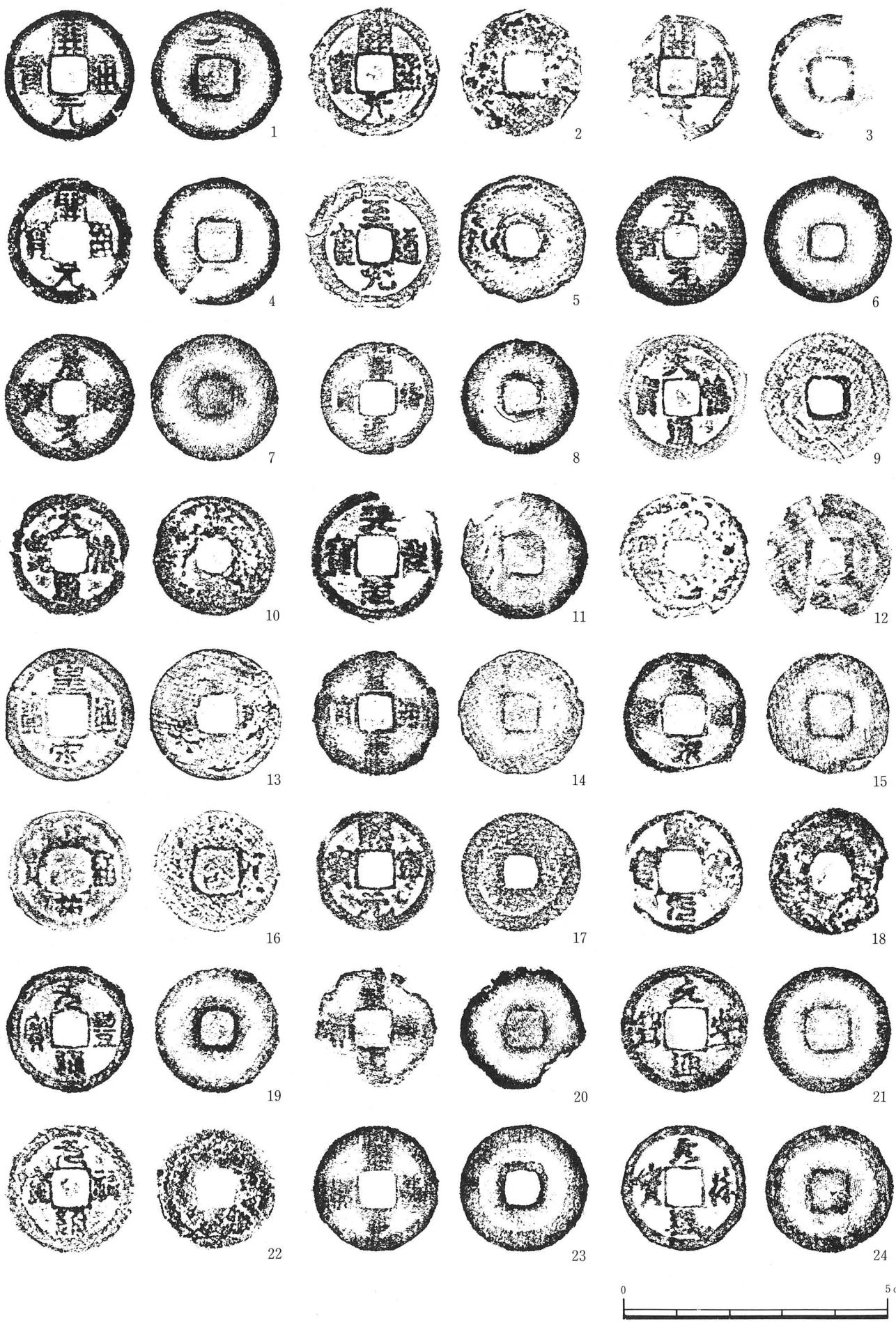
銭貨名	国名	初鑄年	A地区	B地区	C地区	合計
開元通寶	唐	621	1	3	1	5
至道元寶	北宋	995		1		1
景德元寶	〃	1004	1	1		2
祥符通寶	〃	1009		1		1
天禧通寶	〃	1017		2		2
天聖元寶	〃	1023	1			1
景祐元寶	〃	1034	1			1
皇宋通寶	〃	1038	1	3		4
嘉祐通寶	〃	1056		1		1
熙寧元寶	〃	1068		2		2
元豐通寶	〃	1078		3		3
元祐通寶	〃	1086		3	1	4
元符通寶	〃	1098		1	1	2
聖宋元寶	〃	1101	1	4		5
政和通寶	〃	1111		1		1
洪武通寶	明	1368		3		3
永樂通寶	〃	1408		2		2
不 明			14	113		127
			20	144	3	167

不明の中には錢縕・付着したものを含む

第3表 出土銭貨一覧

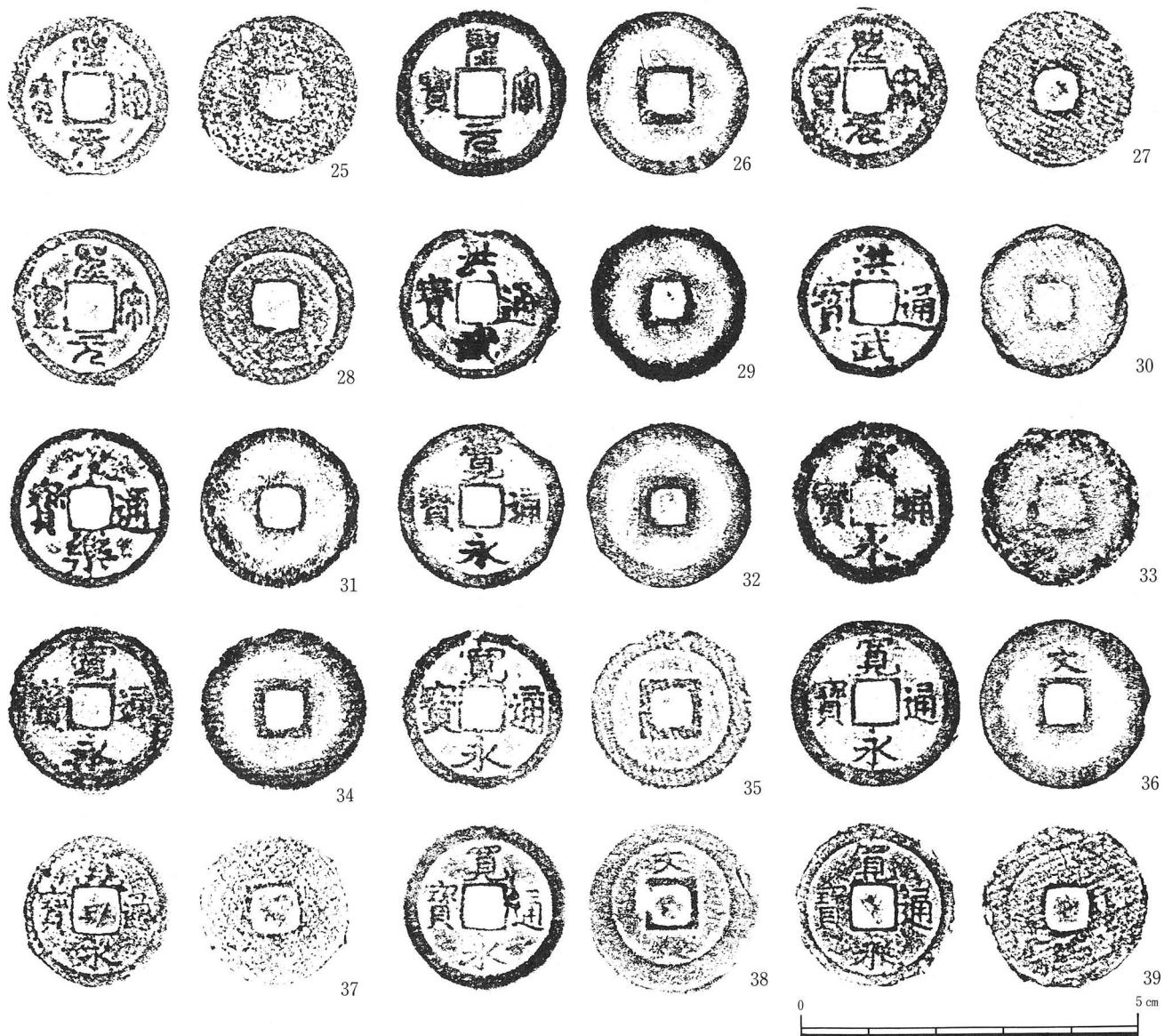
出土地点	出 土 銭 貨
S D 1 2 5 0	不明13枚
S D 3 4 0 1	皇宋通寶 元豐通寶
S E 3 4 1 8	□□元寶 ?
S D 4 3 0 3	開元通寶 寛永通寶
S K 5 0 5 1	元符通寶 洪武通寶
S E 6 0 2 5	至道元寶 元祐通寶 政和通寶 洪武通寶 元□通寶 他73枚
B 2 遺構上面	天禧通寶 熙寧元寶 元祐通寶 永樂通寶 他25枚
B 2 遺構上面	聖宋元寶 ?

第4表 共伴出土銭貨一覧



第224図 金属製品4 [錢] (1/1)

開元通寶1~4 至道元寶5 景德元寶6・7 祥符通寶8 天禧通寶9・10 天聖元寶11 景祐元寶12 皇宋通寶13~15
嘉祐通寶16 懿寧元寶17・18 元豐通寶19~21 元祐通寶22 元符通寶23・24



第225図 金属製品5 [銭] (1/1)

聖宋元寶25~28 洪武通寶29・30 永樂通寶31 寛永通寶32~39

鎌 (13~17) 13はS D2203出土。峰が直であることから刀子の可能性もある。14はS D1252出土。茎の先端を刃部に直行して折り曲げており、曲げた先端部を柄の溝にはめ込んで固定していると考えられる。刃部は直線に近い形態のものである。15はS D2201出土。先端部が先細りしていることから刀子の可能性もあるが、鋤びているため不明である。16はS P3903出土。17はS E9877出土。茎に柄がついた状態で出土しており、柄の片面には小穴が2つある。しかし茎は先端まで直で、柄の穴に対応するような穴ではなく、目釘孔ではないことがわかる。柄は先端を欠損しているが、刃を差し込む側は削って面取りしており、口金で固定して使用したと考えられる。刃は鋤朽してほとんど残っていない。

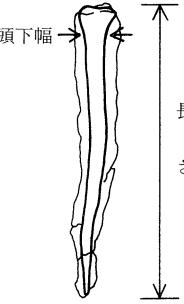
鋤 (19・20) 19はS D4307出土。20はS E7702出土。ともにほぼ完形のU字形のもの。木製の風呂部に固定される返りが残存し、特に20は左右の側面まで明瞭に残存している。

馬鍔の刃 (21~27) 21はB地区の包含層出土。先端を欠損している。22~27はS D9339からまとまって出土。同一個体のものと考えられ、その形態は頭部が広がり、先端に向かって細くなり、断面長方形で、頂部はやや盛り上がっている。使用によって先端は片端側が磨滅している。

(3) 建築用具 (第228・229図, 図版160)

槌 (28) S E 9624出土。一方の端部を欠損しているが、両頭使用の金槌と考える。ほぼ中央に柄を通す1.2cm×2.1cmの穴が開いている。

釘 (29~84) 溝や土坑を中心として約200余点が出土している。出土した釘はほとんどが角釘であり、頭部を叩きつぶしただけの29・49・50以外は、頭部を偏平に叩きつぶして片側から折り曲げた形態のものである^{注3}。鋸がひどく計測に耐えられないものが多いが、比較的実長に近い数値を計測可能なものについて計測したのが第5表である。それによると、長さについては大まかに、10cm前後~それ以上のもの、7~8cmのもの、4~6cmのものの3種に分類できる。また太さについては、それぞれに細いものと太いものがあると推定できる。



番号	出土地点	長さ	頭下幅	番号	出土地点	長さ	頭下幅
31	S D 1252	5.2cm	0.3cm	29	S B 6390	(7.5)cm	0.7cm
50	S K 2218	7.6	0.7	35	S D 701	(4.6)	1.0
51	S K 2464	6.0	0.4	39	S K 1283	(7.8)	0.5
52	S K 2464	5.6	0.4	40	S K 1283	(9.0)	0.9
59	S K 1267	8.4	0.3	47	S D 1250	(9.3)	(0.6)
68	S K 2228	6.4	0.6	55	S K 3010	(8.8)	(0.7)
76	S K 6624	4.6	0.4	57	S K 2221	(8.9)	0.7
80	S K 2966	4.6	0.2	58	S K 2221	(9.2)	(0.3)
84	S K 5405	4.6	0.3				

数値は釘の実長を計測したものであり、欠損等による場合は残存部分の数値を()内に示した。

第5表 釘計測値一覧

鎌 (85~87) 85はS D 6236出土。一方を欠損しているが、薄く細長い板状で、先端に向かって細くなっている。屈曲の角度は約95度である。86はS D 6000出土。一方の先端部を欠損しているが、細長い板状の棒を中央でひねっており、先端は尖っている。87はS P 2567出土。断面方形の細い棒状で、屈曲部から先端にかけて残存している。屈曲の角度はほぼ90度である。

飾り金具 (88) S P 2625出土。一辺約2cmの正方形で、四辺の中央に切れ込みがあり、花弁を模しているようである。中央には直径0.5cmの釘穴がある。

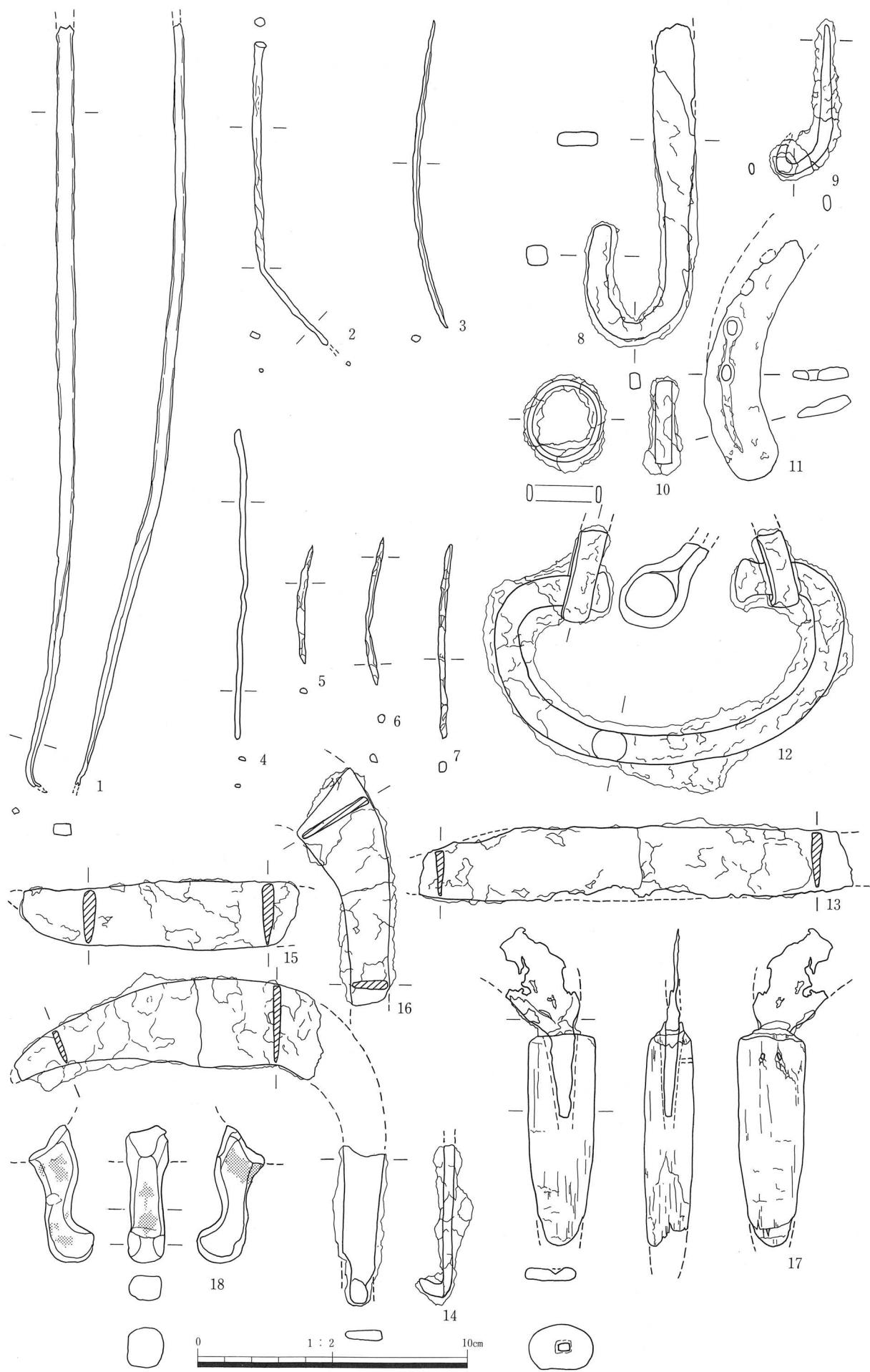
その他の金具 (89) S E 9351出土。鎌のように屈曲している。内側は直で断面は長方形を呈し、先端は尖っている。屈曲の角度は約95度を測る。他方の端部は欠損しているが、断面はほぼ正方形を呈し、屈曲部を境に細くなっている。

(4) 武具 (第230図, 図版160・161)

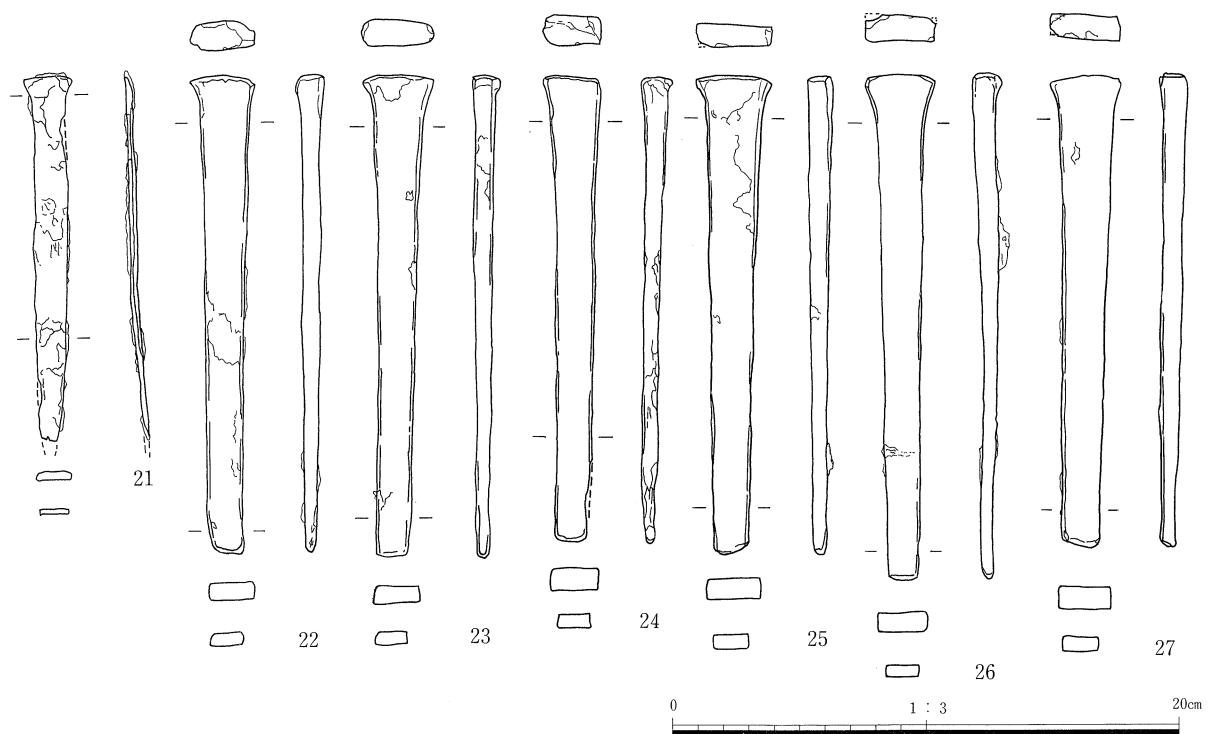
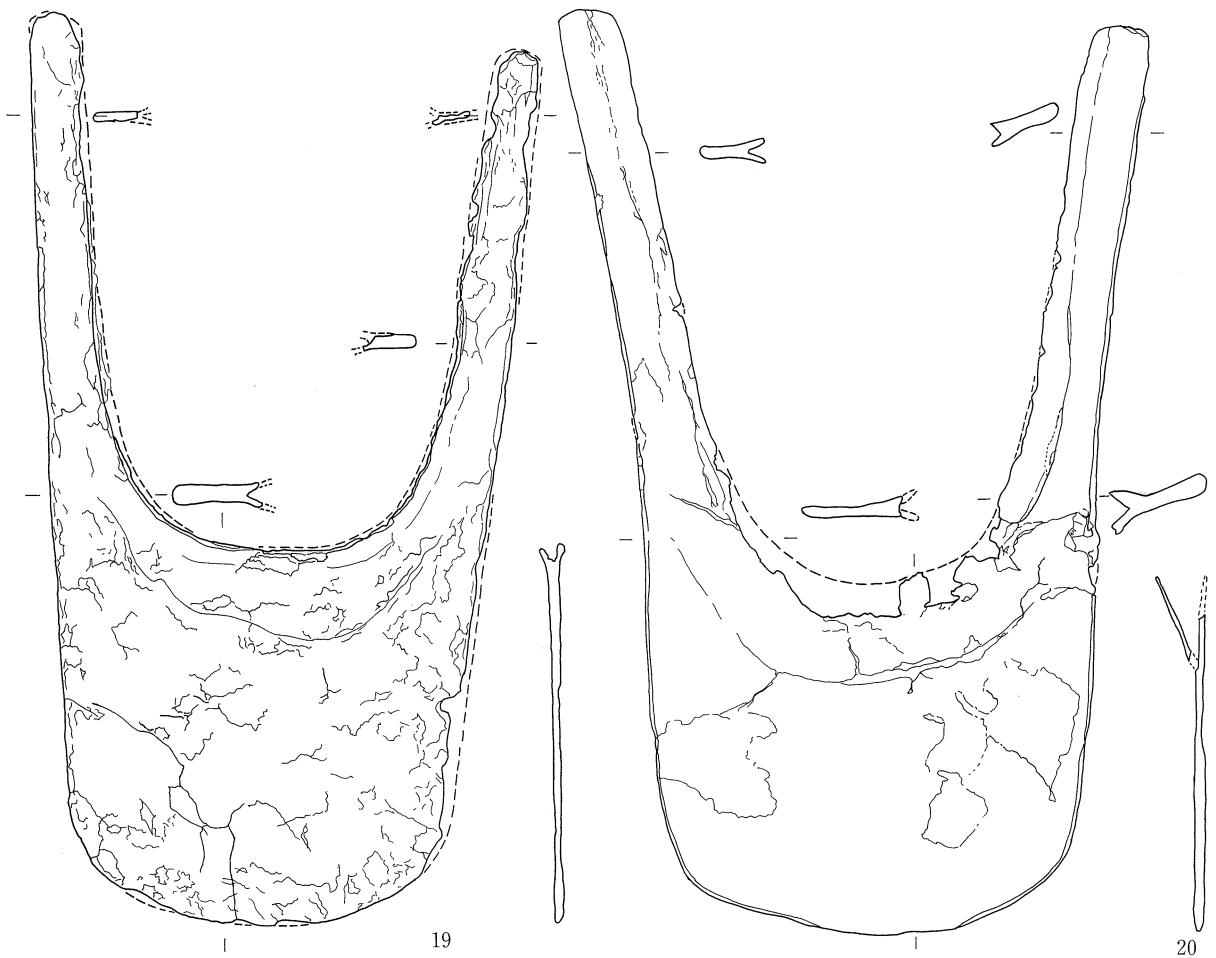
小柄 (90) S E 10227出土。刀身先端・茎の端部ともに欠損しているが、峰・刃側とも関は直角である。茎に植物の纖維状のものが巻き付けられている。

刀子 (91~105) 91はS E 10227出土。茎の端部が欠損しているが、茎には装着していた柄の木質が部分的に残存している。92はS P 9204出土。茎に柄が装着された状態で出土したもので、柄と茎を固定する目釘も残存している。刃の部分は鏽ぬして残っていないが、刃の周りに鞘状に付着した鏽から刃の形態を復元できる。その他に刀子の刃部(周囲に付着した鏽のみのものも含む)の先端部、身部、茎部がある。形態は峰・刃とともに直である。茎部が残存している93・104については、茎が直線的に細くのびるもの(93)と、ほとんど幅が変わらずに端部を折り曲げているもの(104)とがある。

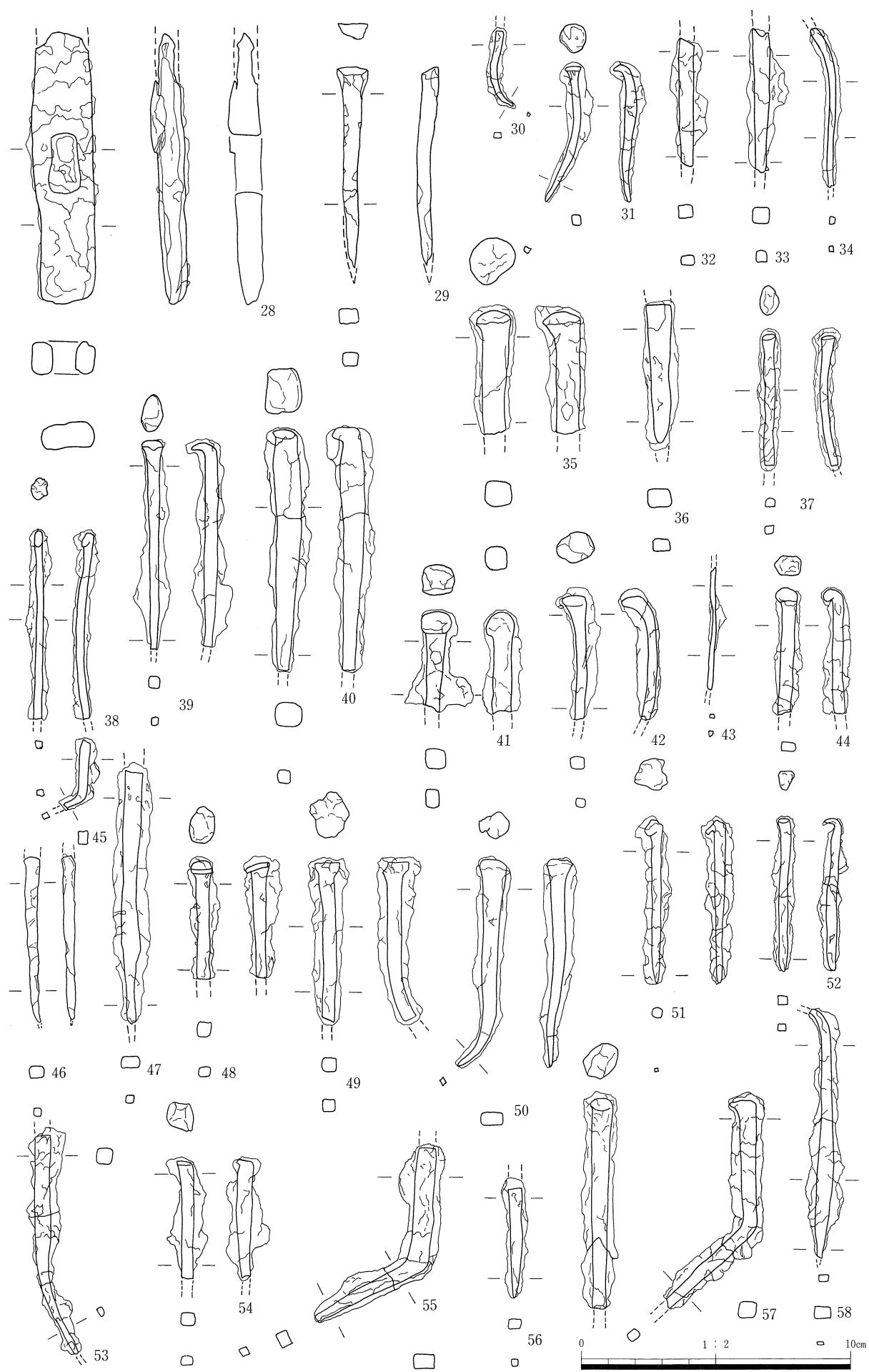
鎌 (106・107) 雁又形式の鎌が2点出土。106はS K 2460出土。107はS D 3425出土。106は片側の



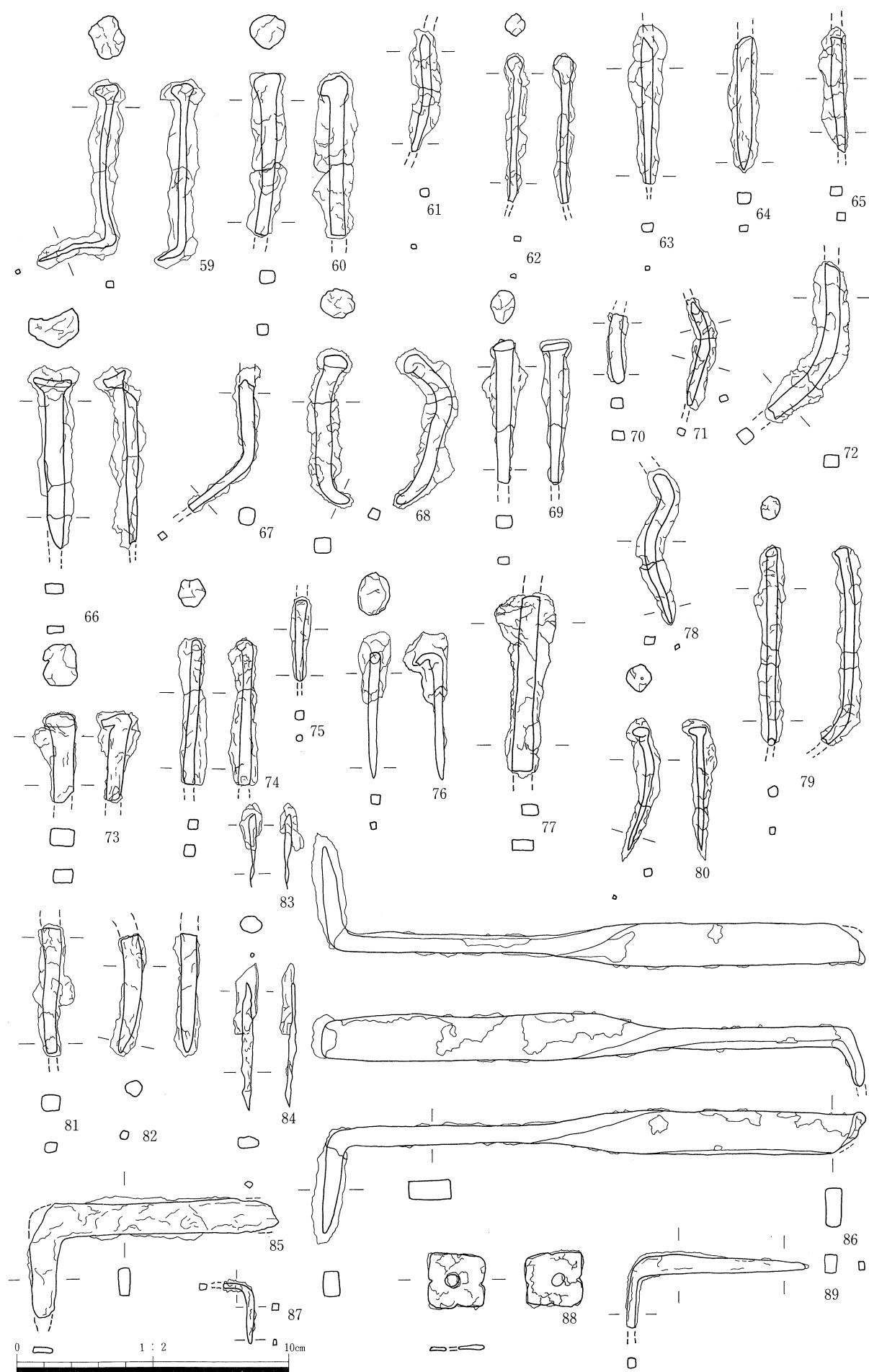
第226図 金属製品 6 [鉄製品] (1/2)
火箸1~7 在自鉤8 鉤針9 口金10 跡鉄11 取手金具12 鎌13~17 脚18



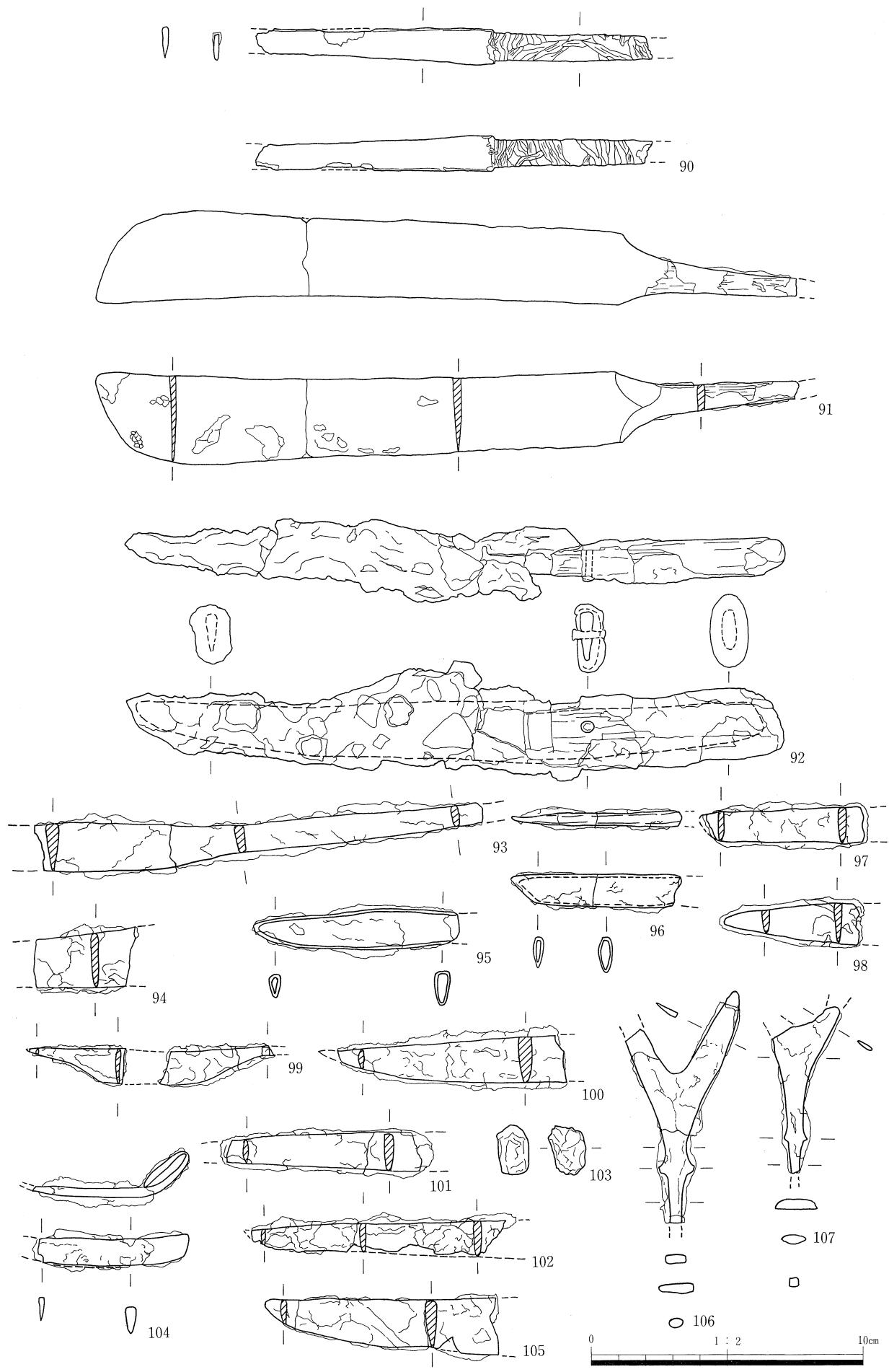
第227図 金属製品7 [鉄製品] (1/3)
鋤先19・20 馬鍬21~27



第228図 金属製品8 [鉄製品] (1/2)
鎖28 釘29~58



第229図 金属製品9 [鉄製品] (1/2)
釘59~84 錫85~87 飾り金具88 金具89



第230図 金属製品10 [鉄製品] (1/2)
小柄90 刀子91~105 雁又鍤106・107

刃部先端・茎端部を欠損している。茎の断面は長方形を呈し、関部は台形状に突起している。107は刃部先端・茎端部を欠損している。身部断面は蒲鉾形を呈し、関部は棘状に突起しており、茎断面は方形を呈する。

その他の鉄製品としては、鍔・つる・鍵・輪・板状などの一部、時代が新しいものとしては鍔・鉄瓶・鉄鍋などが出土している。

4. 土製品・炉壁・鉄滓（第231～233図、図版161）

金属製品を集落内で製造加工していたことを窺わせる遺物として、坩堝・鞴羽口・炉壁・鉄滓等が出土している。

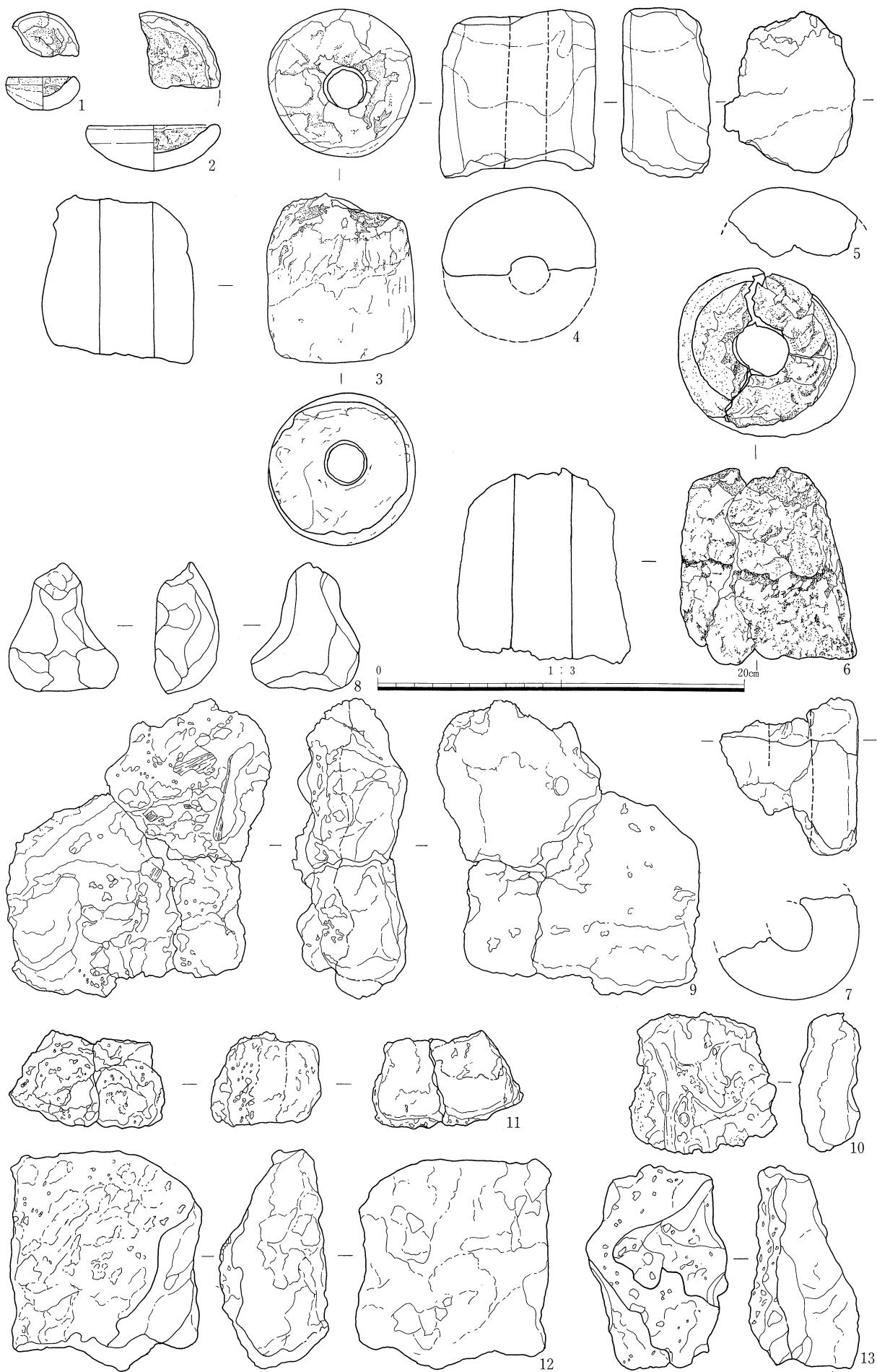
坩堝（1・2） 鋸造に際し、炉で溶かした各種の鉱物を受け、溶けた湯を鋳型に流し込む道具である。1はSD6282出土。口径3.6cm、器高1.9cmを測る小型のもので、約3分の1が残存するのみである。湯を指す注ぎ口は残存していないが、おそらく片口であろう。内面には熔解物が付着し多数の気泡がみられる。外面は底部を除いて、二次的に被熱したため変色している。2はSK6244出土。口径7cm、器高2.5cmを測り、約4分の1が残存しているが、注ぎ口は残存していない。内面には熔解物が付着しており、器面には亀裂が入り、気泡がみられる。口縁端部内面と外面は二次的に被熱したため変色している。いずれも砂粒を多く含む粗土を用い、手捏で作られるため、外面に指頭痕が明瞭に残る。

鞴羽口（3～7） 3はSD3401出土。完形。残存長9.3cm、径8.0cm、内口径2.3cm、器厚3cm（最大）を測る。鞴に取り付く先端部は使用によって溶けており、ガラス化した熔解物が付着している。先端から約3.5cmが二次的に被熱して暗灰色を呈し、それより後方の送風口に取り付く端部にかけては素焼き本来の淡黄褐色を呈する。胎土はやや粗であるが、外面はナデて滑らかになっている。また被熱した部分の観察から、この鞴羽口は水平から約21度傾けた状態で使用されたことがわかる。4はSE5536出土。送風口側を欠損しているが、約2分の1が残存している。鞴側の先端部約2cmにはスラグが付着しており、後方約2～5cmは二次的被熱のため変色している。胎土は粗で、ナデて外面を平滑にしている。被熱範囲から水平より約30.5度傾けて使用したことがわかる。5はSK6335出土。鞴側の先端に熔解物が付着している。6はSK1609出土。送風口側は欠損している。残存長10.8cm、径9.5cm、内口径3.3cm、器厚3.2cmを測る。鞴側の先端部1～2cmは溶けており、黒褐色を呈する。その後方3～4cmには鉄の熔解物が付着しており、さらに送風口にかけては被熱によって変色している。胎土は粗で、外面はナデて仕上げている。被熱範囲から水平より約12度傾けて使用していたことがわかる。7はSK8150出土。両端部を欠損しているが、鞴側の先端には熔解物が付着している。

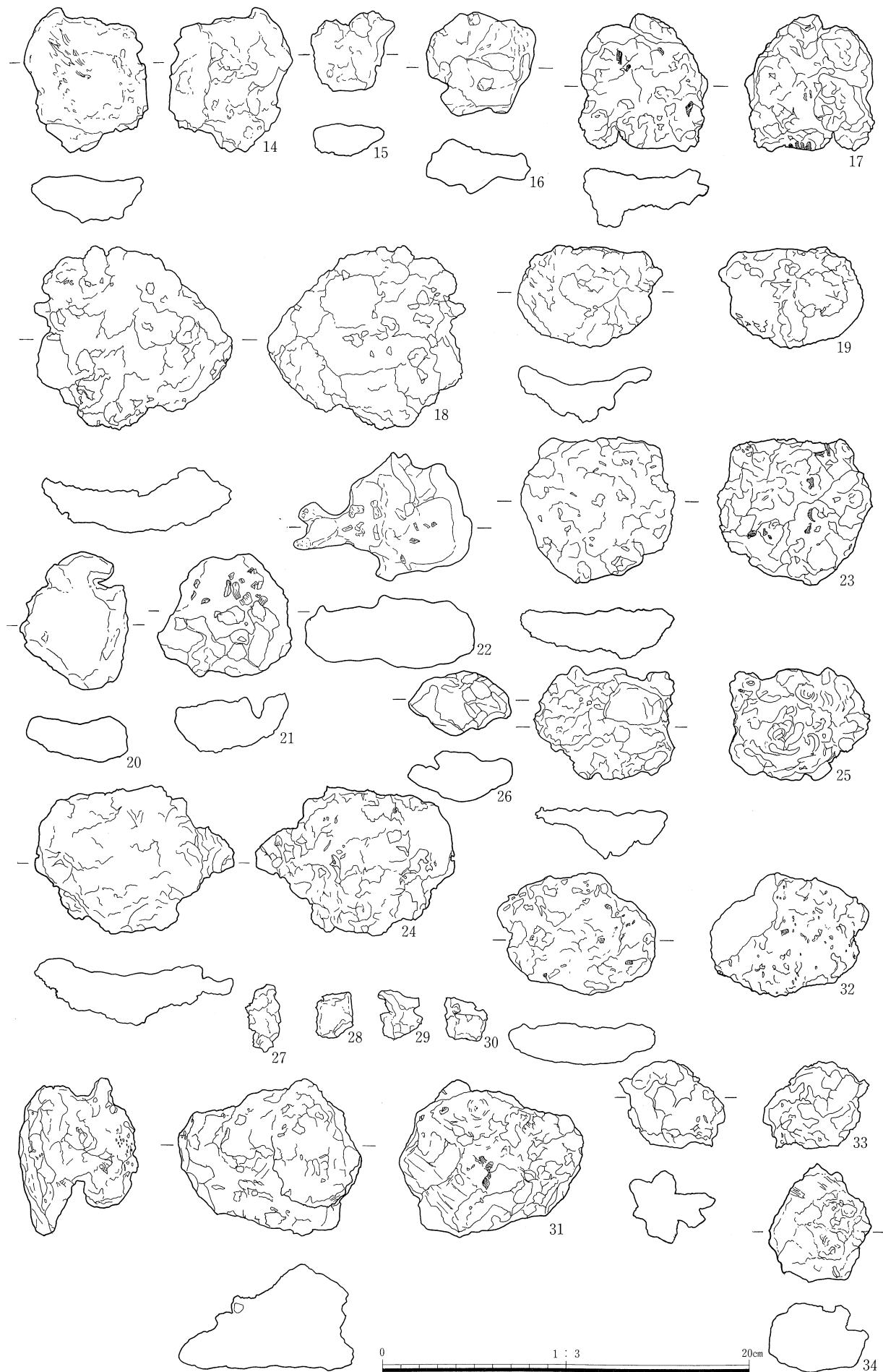
不明土製品（8） SP5368出土。一部欠損しているが三方に突起があり、琴柱状の支脚と考える。

炉壁（9～13） 9はSP5579出土。内面側には熔解物が付着し、木炭痕があり、外面側は被熱していない粘土のままである。胎土は粗で、スサ・炭化物が混入する。10はSK5434出土。内面側にはガラス化した熔解物が流れた痕跡がはっきりと見られ、外面は粘土のままである。11はSP5368出土。内面側には熔解物が付着し、外面は粘土のままである。胎土は粗で、スサ・炭化物が混じる。12・13はB地区の包含層出土。内面側には熔解物が流れた痕跡がはっきりしている。なお、炉壁付着物の分析結果からこれらは鋸造用の金属溶解炉の炉壁であることがわかった^{注4}。

鉄滓（14・15・17～40・42・44～49） 鉄滓の多くは椀形滓であり、その大きさから大型（長径約10～11cm）・中型（7～8cm）・小型（5cm前後）に分類できる。14はSK309出土。15はSD1250出土。17～23はSK9006出土。24はSP8905出土。木炭痕がある。25はSP8950出土。26はSK3750出土。



第231図 土製品・炉壁・鉄滓 1 (1・2 1/2, 3~13 1/3)
埴塙1・2 鞍羽口3~7 不明土製品8 炉壁9~13



第232図 土製品・炉壁・鉄滓 2 (1/3)
鉄滓14・15・17~34 鉄塊16

27~30はS K5083出土。31はS E8971出土。二段楕形溝で、木炭痕がある。32はS P8972出土。33はS D9116出土。34はS P9116出土。35はS D10446出土。36はS E9382出土。37はS K5336出土。38~40はS K7151出土。38は二段重ねの楕形溝である。42はS P9171出土。44はA 2 地区、45はC S 地区の包含層出土。46はS P8993出土。47はA 3 S 地区の遺構上面出土。48はS P9227出土。小型楕形溝であり、鍛造剝片が出土した遺構が付近に位置する。49はC N 地区の包含層出土。木炭痕が残る。

鉄塊 (16・41・43) 16はS K3009出土のまだら鋳鉄で、金属鉄は残存していない。41はC S 地区の包含層出土の鉄片で金属鉄が残る。43はA S 地区包含層出土の白鋳鉄で金属鉄は残存しない。

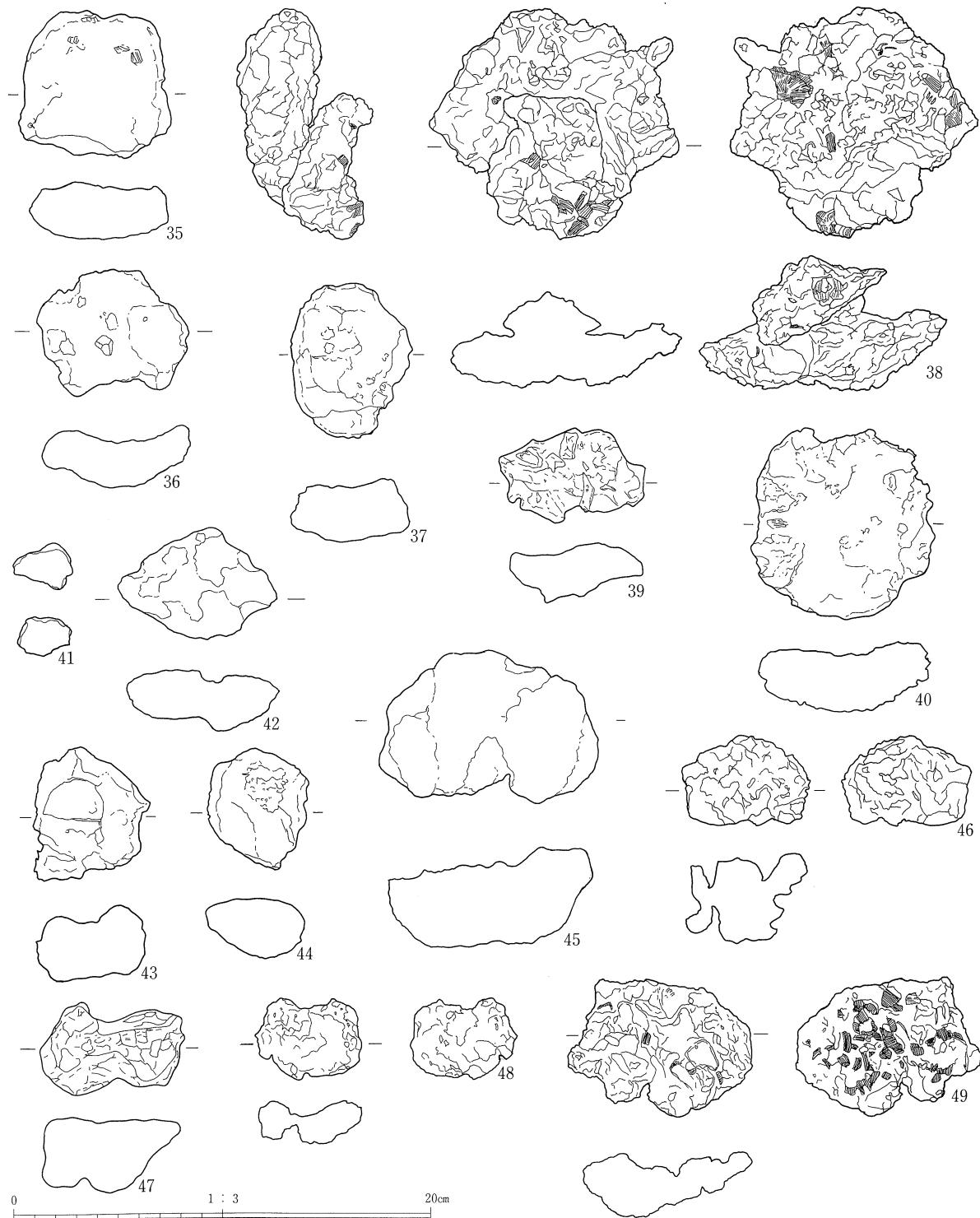
注1 久保智康氏の御教示を得た。

注2 久保智康氏の御教示を得た。

注3 「和釘」といわれる鍛造の角釘。竹島卓一氏がいう「巻蓋釘」

であろうか。(竹島卓一『營造方式の研究一』1970 頭を一旦平らにして巻き込んだものを「巻蓋釘」と推定している。)

注4 大澤正己氏による分析の結果による。 (中川道子)



第233図 土製品・炉壁・鉄滓 3 (1/3) 鉄滓35~40, 42, 44~49 鉄塊41, 43

第III章 遺構出土の一括遺物

本章では、遺構から出土した土器・陶磁器及び一部の木製品のうち、一括遺物としての資料価値が高いと思われる遺物や、遺構の年代等を考える上で重要と考えられる遺物を遺構別にとりあげる。なお遺構の記載順序は「遺構編」に従う。

1 中世前期

A. 建物

7号掘立柱建物（S B07, 第234図）

発掘区北端部の建物群のほぼ中央に位置する、9間×4間の南北棟総柱建物である。建物群の中でも最大級の規模を誇り、中心的な建物である。柱穴内から比較的まとまった量の土器が出土している。中世土師器では皿NDII類(783・784・786・789・790)・皿RB類(24~28)を主体に皿NAII類(241)・皿NDI類(696)があり、他に須恵器？(14)、中国製白磁水注III類などが出土している。出土土器から建物の時期は12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。

10号掘立柱建物（S B10, 第234図）

発掘区北端部の建物群のほぼ中央に位置する、4間×3間の東西棟総柱建物である。柱穴からの出土遺物は少なく、図化したのは2点のみである。いずれも中世土師器皿NDII類(787・788)で、建物の時期は13～14世紀と考えられる。

14号掘立柱建物（S B14, 第234図）

発掘区北端部の建物群のやや東寄りに位置する、3間×3間の南北棟総柱建物である。柱穴からの出土遺物は少なく、図化したのは中世土師器皿NCI類(433)が1点のみであるが、建物に付属する土坑SK303からまとまった遺物が出土しており、建物の時期は12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

15号掘立柱建物（S B15, 第234図）

発掘区北端部の建物群のやや東寄りに位置する、4間×3間の東西棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿、珠洲、中国製白磁皿V～VII類(100)、中国製青磁蓮弁文碗I類5bが出土している。建物の時期は13世紀後半～14世紀初頭と考えられる。

17号掘立柱建物（S B17, 第234図）

発掘区北端部の建物群のやや東寄りに位置する、7間×4間の南北棟総柱建物である。建物群の中ではS B07に次ぐ規模を持ち、これも中心的な建物である。柱穴から中世土師器皿NAII類(240)・皿NBI類・皿NDII類(785)などが出土しているが量は少ない。建物の時期は13世紀代と考えられる。

23号掘立柱建物（S B23, 第234図）

発掘区北端部の建物群の中でもやや南よりで、SD701の北側近くに位置する、5間×5間の南北棟総柱建物である。中世土師器皿NDII類(901)が出土しており、時期は13世紀後半と考えられる。

25号掘立柱建物（S B25, 第234図）

発掘区北端部の建物群のやや南西寄りで、SD701が折れて北流するあたりの東岸近くに位置する、3間×2間の東西棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿NG類(1563)が出土している。建物の時期は14世紀代と考えられる。

26号掘立柱建物（S B26, 第234図）

発掘区北端部の建物群に含まれ、S B25の南半部に重なる、3間×3間の南北棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿N C I類（427）が出土している。建物の時期は13世紀前半と考えられる。

30号掘立柱建物 (S B30, 第234図)

発掘区北端部の建物群で、S D701の北側に位置する、2間×2間の南北棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿N D II類（902）が出土している。建物の時期は14世紀代と考えられる。

34号掘立柱建物 (S B34, 第234図)

発掘区北側でS D701が折れて北流するあたりの西側に位置する、4間×4間の南北棟側柱建物である。柱穴から中世土師器皿N D II類（853）が出土している。建物の時期は13～14世紀代と考えられる。

35号掘立柱建物 (S B35, 第234図)

この建物もS D701の西側にあり、S B34に重なる、3間×2間の南北棟総柱建物である。中世土師器皿R B類（43・44）、珠洲I期の擂鉢（144）が出土している。時期は13世紀と考えられる。

39号掘立柱建物 (S B39, 第234図)

S D701の西側の建物群のやや南側に位置する、2間×1間の柱列が確認されており、さらに西側の発掘区外に延びる可能性が高い。柱穴から中世土師器皿N A II類（265）が出土しており、建物の時期は13～14世紀と考えられる。

40号掘立柱建物 (S B40, 第234図)

発掘区北側でS D701の南側建物群に位置する、6間×4間の東西棟総柱建物である。この建物群の中では最大規模の建物で、さらに西側に延びる可能性もある。柱穴から中世土師器皿N D II類（877・878）が出土している。建物の時期は13世紀代と考えられる。

42号掘立柱建物 (S B42, 第234図)

発掘区北側でS D701の南側建物群に位置し、S B40に重なる、4間×3間の南北棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿R A類（9）、珠洲が出土している。建物の時期は13世紀である。

50号掘立柱建物 (S B50, 第234図)

発掘区北側のA 1地区南半部建物群の西寄りに位置する、4間×2間の東西棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿N D II類（1143）が出土している。建物の時期は13世紀と考えられる。

57号掘立柱建物 (S B57, 第234図)

発掘区北側のA 1地区南半部建物群のほぼ中央に位置する、3間×3間の南北棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿R B類（84）が出土している。建物の時期は12～13世紀と考えられる。

63号掘立柱建物 (S B63, 第234図)

発掘区北側のA 1地区南半部建物群の南東寄りに位置する、8間×6間の東西棟総柱建物で、建物群中最大規模のものである。柱穴から中世土師器皿N D II類（1137・1142）が出土している。建物の時期は13世紀と考えられる。

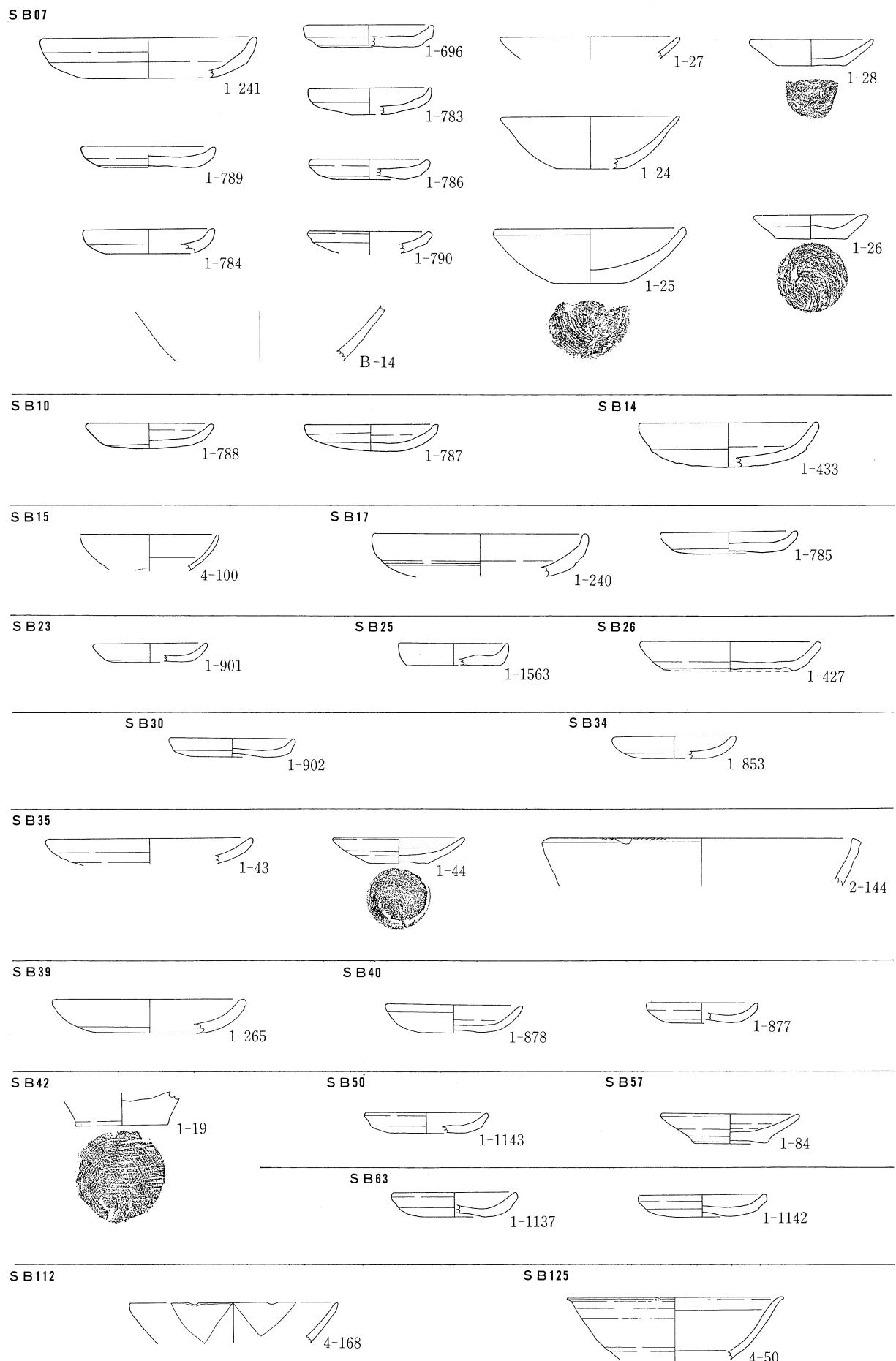
112号掘立柱建物 (S B112, 第234図)

発掘区やや北側のA 3地区建物群の北寄りに位置する、5間×4間の南北棟総柱建物である。中世土師器皿、中国製青磁碗I類1 b?（168）が出土している。建物の時期は13～14世紀と考えられる。

125号掘立柱建物 (S B125, 第234図)

発掘区やや北側のA 3地区建物群の南寄りに位置する。S D3425に区画された内部の北寄りにある、5間×4間の南北棟総柱建物である。柱穴から中世土師器皿、中国製白磁碗V類4 a（50）、鍛冶滓が出土している。建物の時期は13世紀と考えられる。

(山本正敏)



第234図 遺構出土の遺物 1

SB07・SB10・SB14・SB15・SB17・SB23・SB25・SB26・SB30・SB34・SB35・SB39・SB40・SB42・SB50・SB57・SB63・SB112・SB125

B. 溝

701号溝 (S D 701, 第235~240図)

自然河川である。遺物は中層から下層に多くみられ、X455Y100の北側に集中する。出土遺物は縄文土器、土師器甕(29・30)、須恵器、中世土師器皿NA I類(214~222)・皿NA II類(242~264)・皿NB I類(294~296)・皿NC I類(406~414)・皿NC III類(662)・皿ND I類(698~715)・皿ND II類(791~852)・皿NF類(1538)・皿NG類(1542~1548)・皿NH類(1664)・皿RA類(3~7)・皿RB類(29~42)・高台皿(1742・1745)・大皿(1738・1740)その他(1748)、常滑鉢(38)、八尾甕、珠洲I期の甕(6・7)・I~II期の甕(22)・I期の壺(292・299)・II期の壺(309)・壺(308)・I期の擂鉢(140~142)・II期の擂鉢(143)・III期の擂鉢(206)、珠洲系陶器甕(339~341・345・346・349)、越前、山茶椀V形式の椀(2)・瀬戸美濃大窯IV期の志野菊皿(224)、中国製白磁碗II類・碗II類1a(4・6・9・10)・碗II類4(14)・碗II類4b(18)・碗IV類(24~27・29・32・33・35・36)・碗IV類1a(37)・碗V類(58・59)・碗V類2a(42)・碗V類4a(47・49)・碗V類4b(53・55)・碗V類4あるいはVIII類1・3(63)・碗VI類1a(65・66)・碗VII類(71・72)・碗VIII類2(73・74・77~79)・皿III類1(89・90)・皿V類あるいはVI類1a(99)・皿VI類・皿VI類1a(92)・皿VI類あるいはVII類2(101)・壺II類(131)・四耳壺III類(122)・小壺蓋II類(135)・水注III類(128)、中国製青白磁碗(141)・皿(143)・合子身(154)、中国製青磁碗I類1a(162・163・307)・碗I類1a?(308)・碗I類1b(311・319・320)・碗I類1~6・碗I類2(175)・碗I類2~4(197・198)・碗I類3(182)・碗I類4(184)・碗I類5b(206)・碗IV類ア・碗C II類(229)・皿I類b(337)・皿I類2(338)・皿I類2b(334)・皿I類2b or I類2c(282)・鉢(323)、中国製染付皿(396)、越中瀬戸椀(10・24)・皿A 1類(31・32)・皿F 2類(100)・皿(116)・小壺・擂鉢C類(168)・擂鉢E類(172・173)・匣鉢(153)、唐津椀(188・192)・椀1類・皿1c類(23)・皿1e類(48)・擂鉢3類(220)・擂鉢4類(226)・鉢(201~203)・瓶?(174)、伊万里碗(9)・皿(99・102・103・107・109)・小杯(146・148)・火入れ(132)、瀬戸美濃新製?の椀(9)、陶器椀・壺(44)、漆器椀A II類(146)・漆器椀B I類(167)・箸・柱、砥石・打製石斧・磨製石斧・石鍋片・鉄製品等がある。このように中世と近世の遺物が混在するが、近世の遺物はこの溝の上面を流れるS D1441のものと考えられる。中世のものは12世紀後半から13世紀前半のものがほとんどで、わずかに14世紀のものが混入する。このことから13世紀中頃から14世紀にかけて人為的あるいは自然に埋まったと推定される。

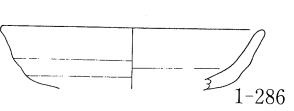
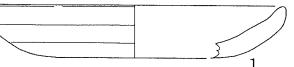
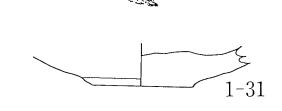
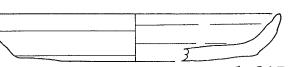
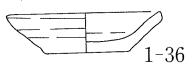
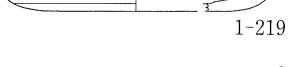
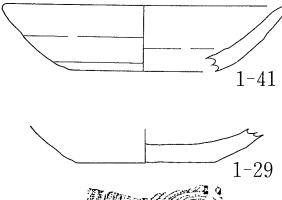
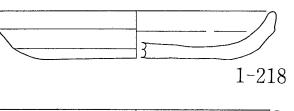
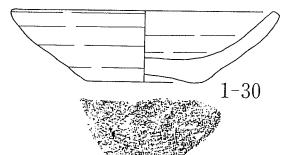
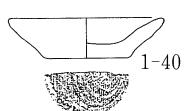
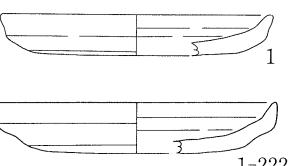
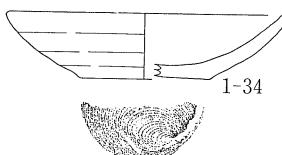
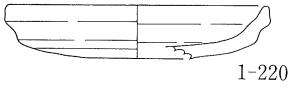
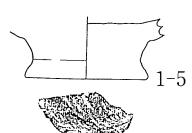
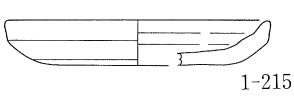
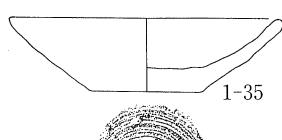
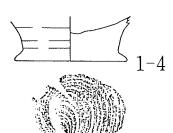
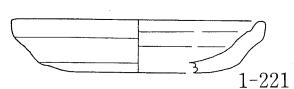
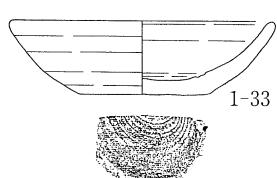
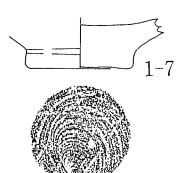
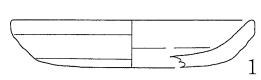
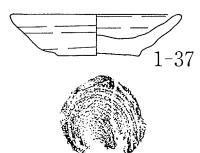
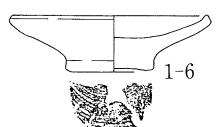
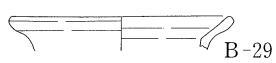
911号溝 (S D 911, 第241図)

この溝は切り合い関係でS D 701より新しい。S D 701が13世紀中頃から14世紀にかけて埋まった後、この溝に改修されたものと考えられる。S B 29の棟方向がこの溝の流路と平行している。中世土師器の皿は下層から大量の破片が出土している。遺物は縄文土器深鉢、須恵器甕(25)、中世土師器皿NB I類・皿NC I類(420~425)・皿NC III類(675)・皿ND II類(879~896)・皿NF類(1539~1541)・皿NG類(1551~1562)、八尾壺、珠洲II~III期の壺(315)、越前擂鉢(4)、中国製青磁碗I類2(180)・碗I類5b、唐津京焼風の火入れ(232)が出土している。遺物から14世紀を中心とした遺構である。

1250号溝 (S D 1250, 第241~243図)

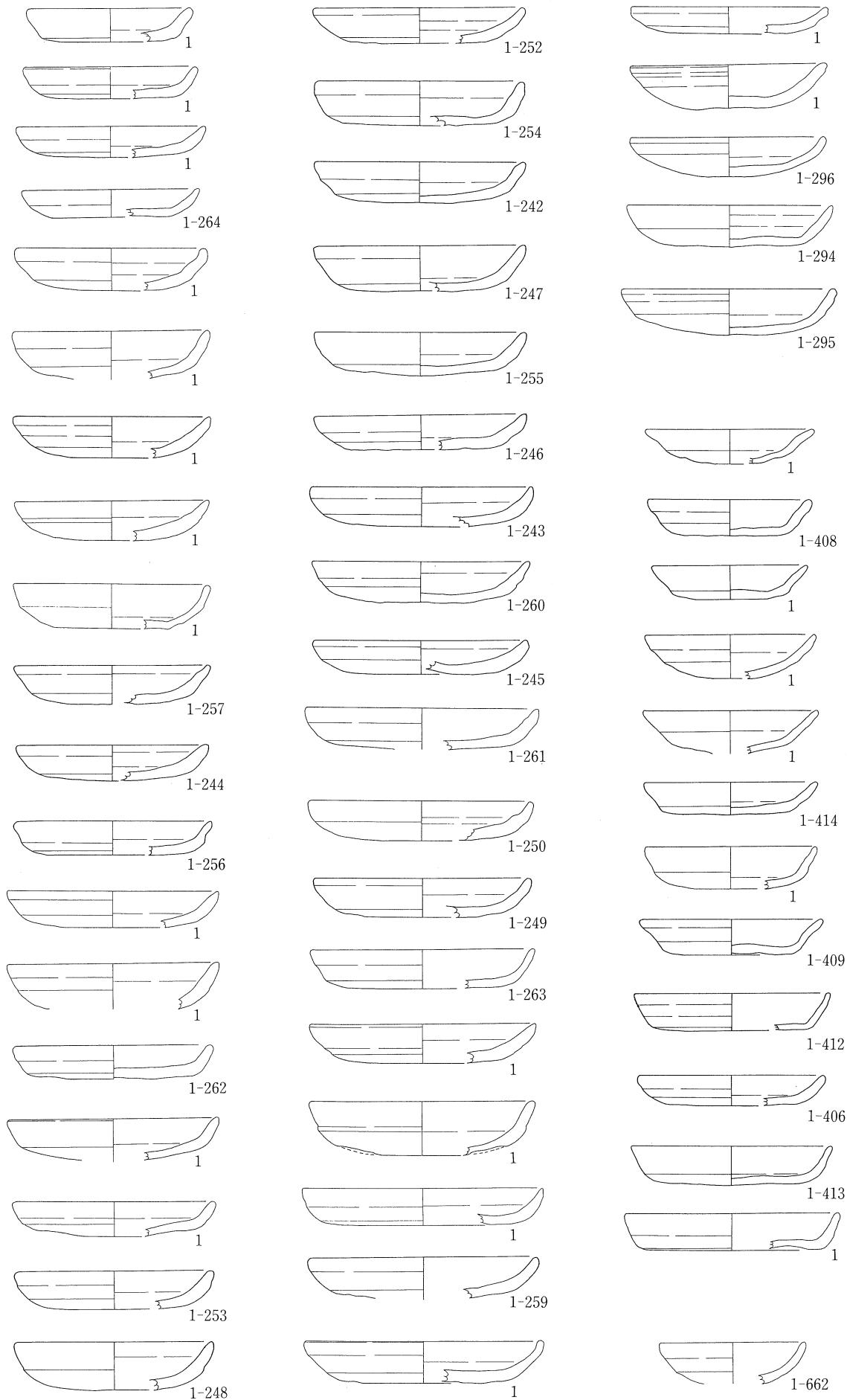
東から北に屈曲するL字状の溝である。東西方向ではS D 1252と切り合い関係があり、これより新しい。断面は逆台形状を呈し、上面幅170cm~260cm、深さ30cm~95cmである。S B 61に伴う溝と考えられる。出土遺物には須恵器杯(3)・壺(19)、中世土師器皿NA II類(267~269)・皿NB I類(299)・皿NB II類(326~329)・皿NC I類(437~439)・皿NC II類(648~650)・皿ND I類(726~729)・

S D 701



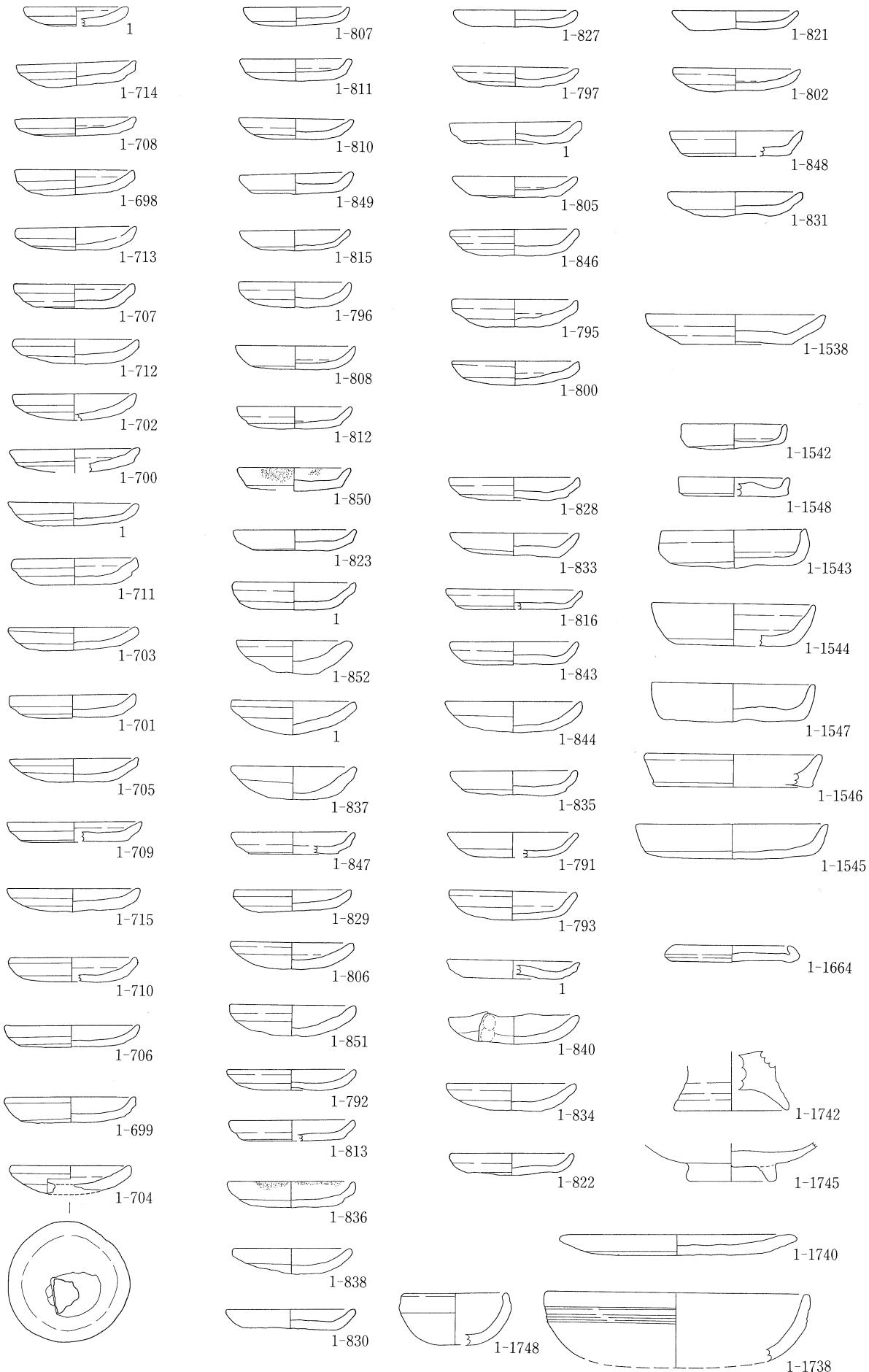
第235図 遺構出土の遺物 2
S D 701

S D 701



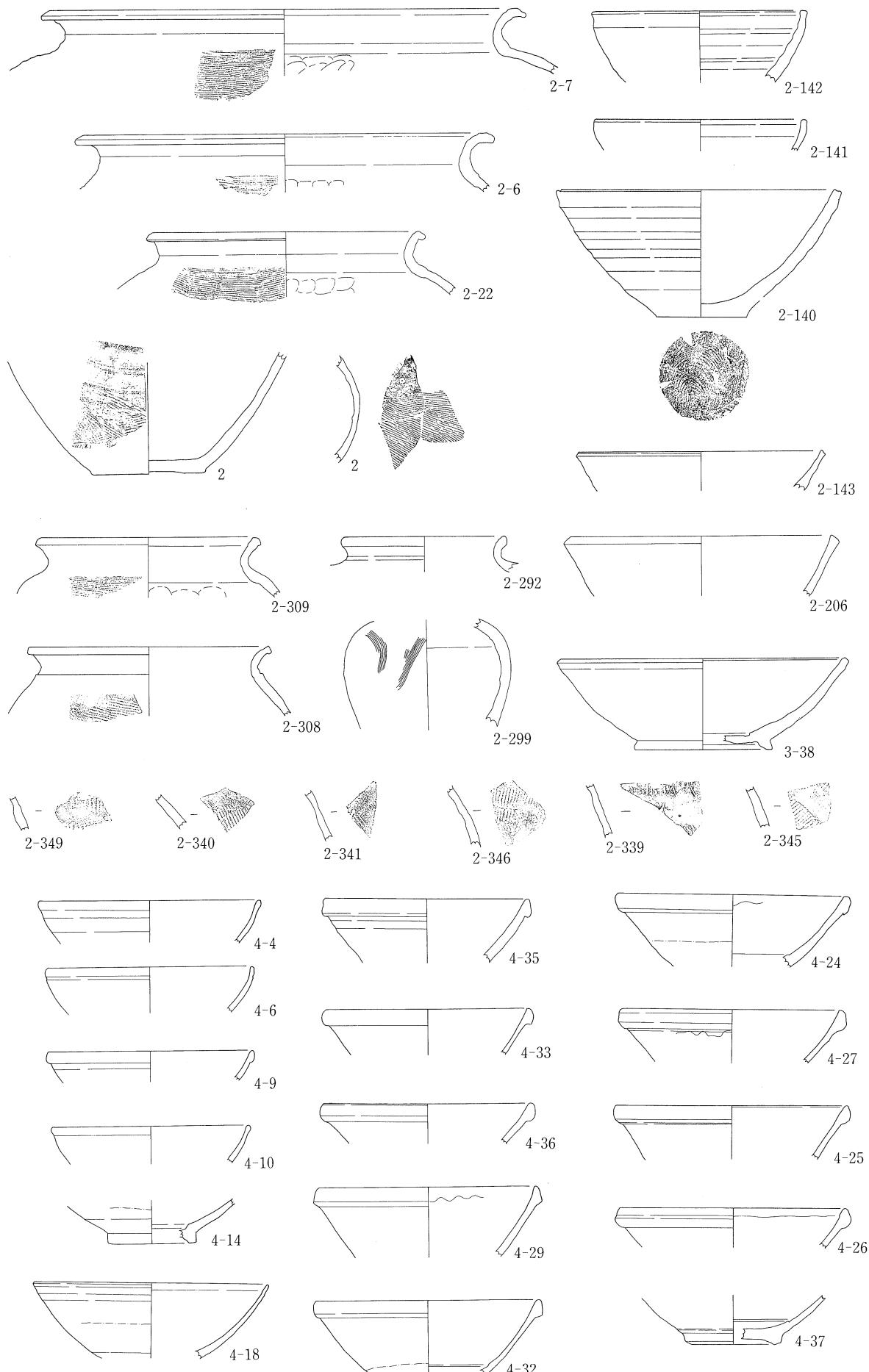
第236図 遺構出土の遺物 3
S D 701

S D 701



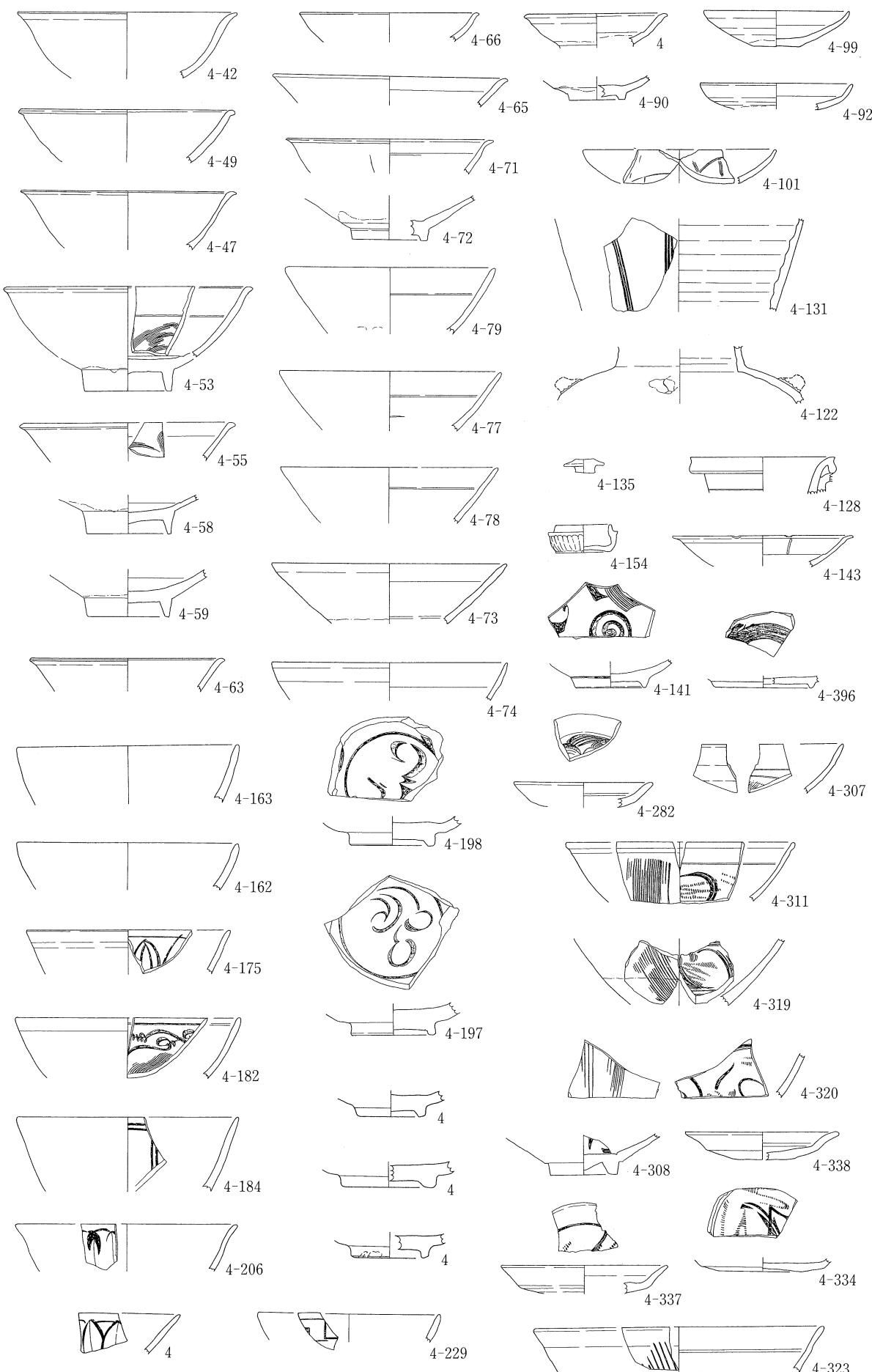
第237図 遺構出土の遺物 4
S D 701

S D 701



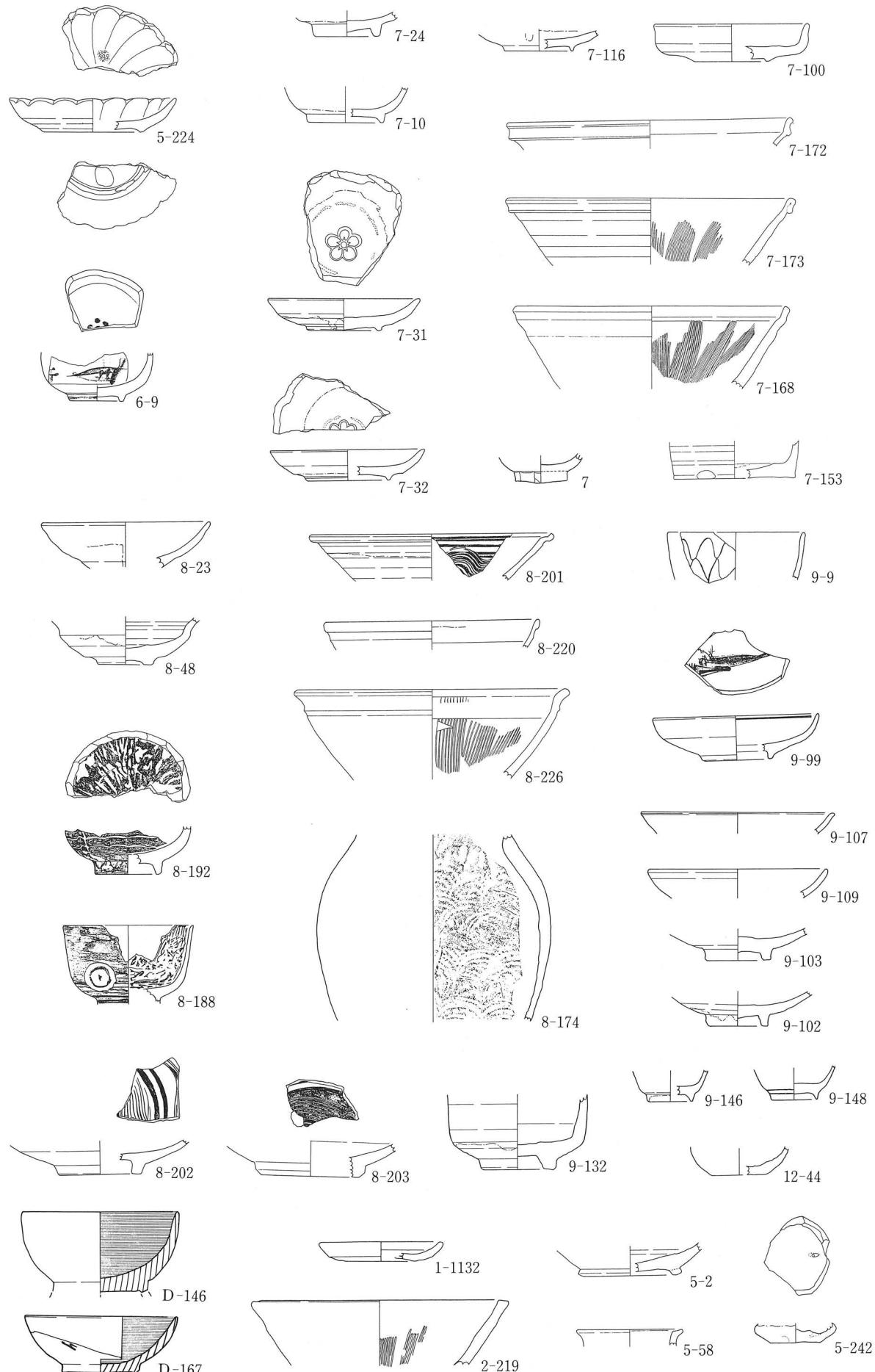
第238図 遺構出土の遺物 5
S D 701

S D 701



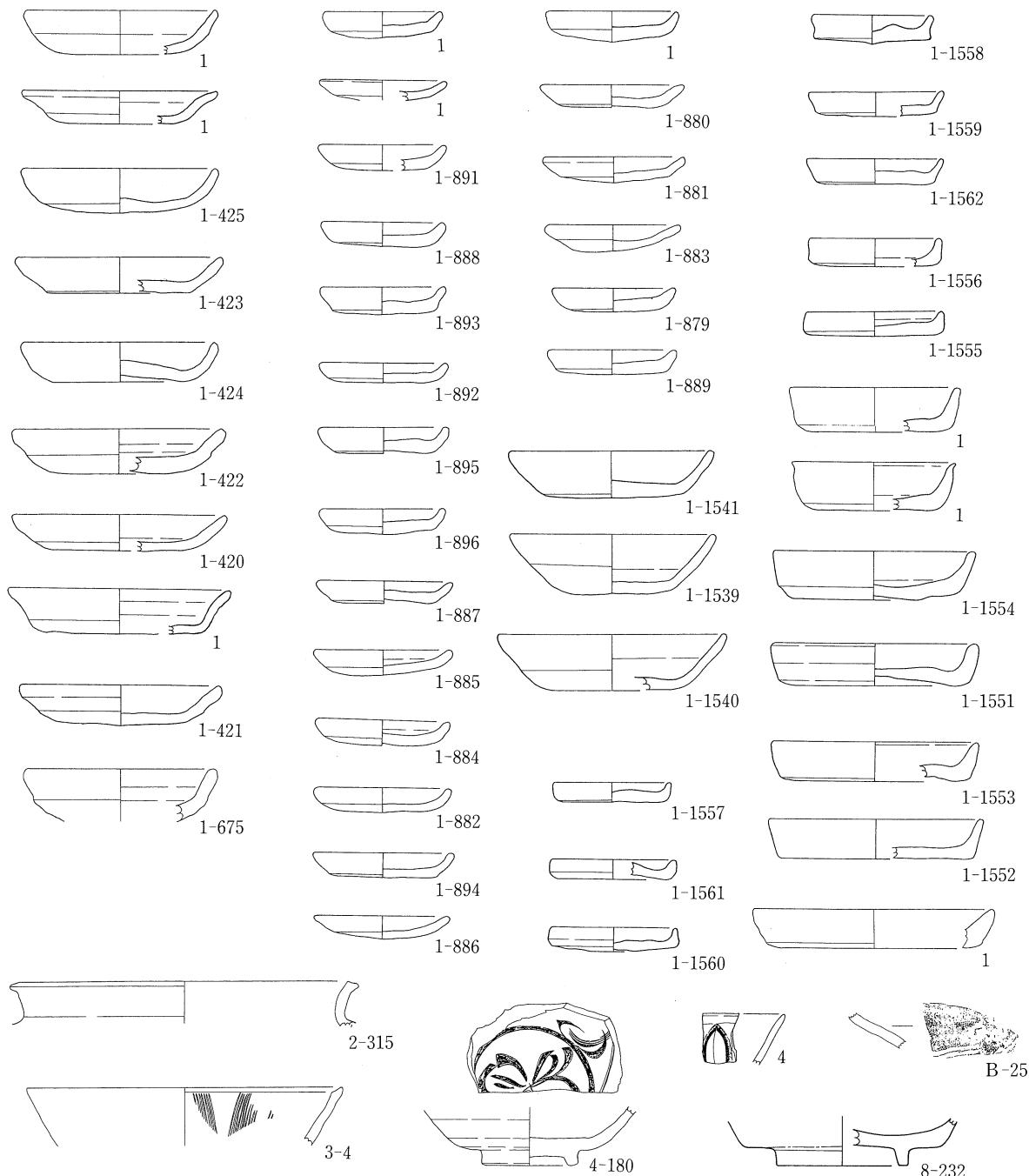
第239図 遺構出土の遺物 6
S D 701

SD 701

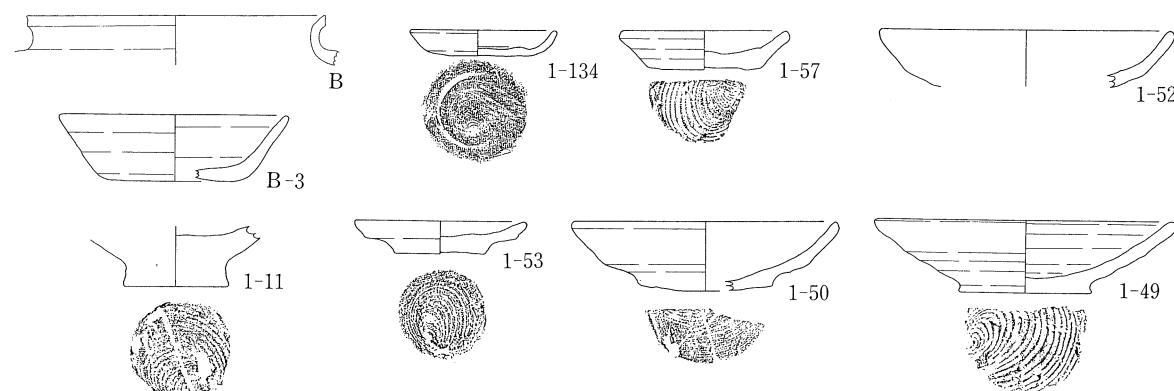


第240図 遺構出土の遺物 7
SD 701

S D911

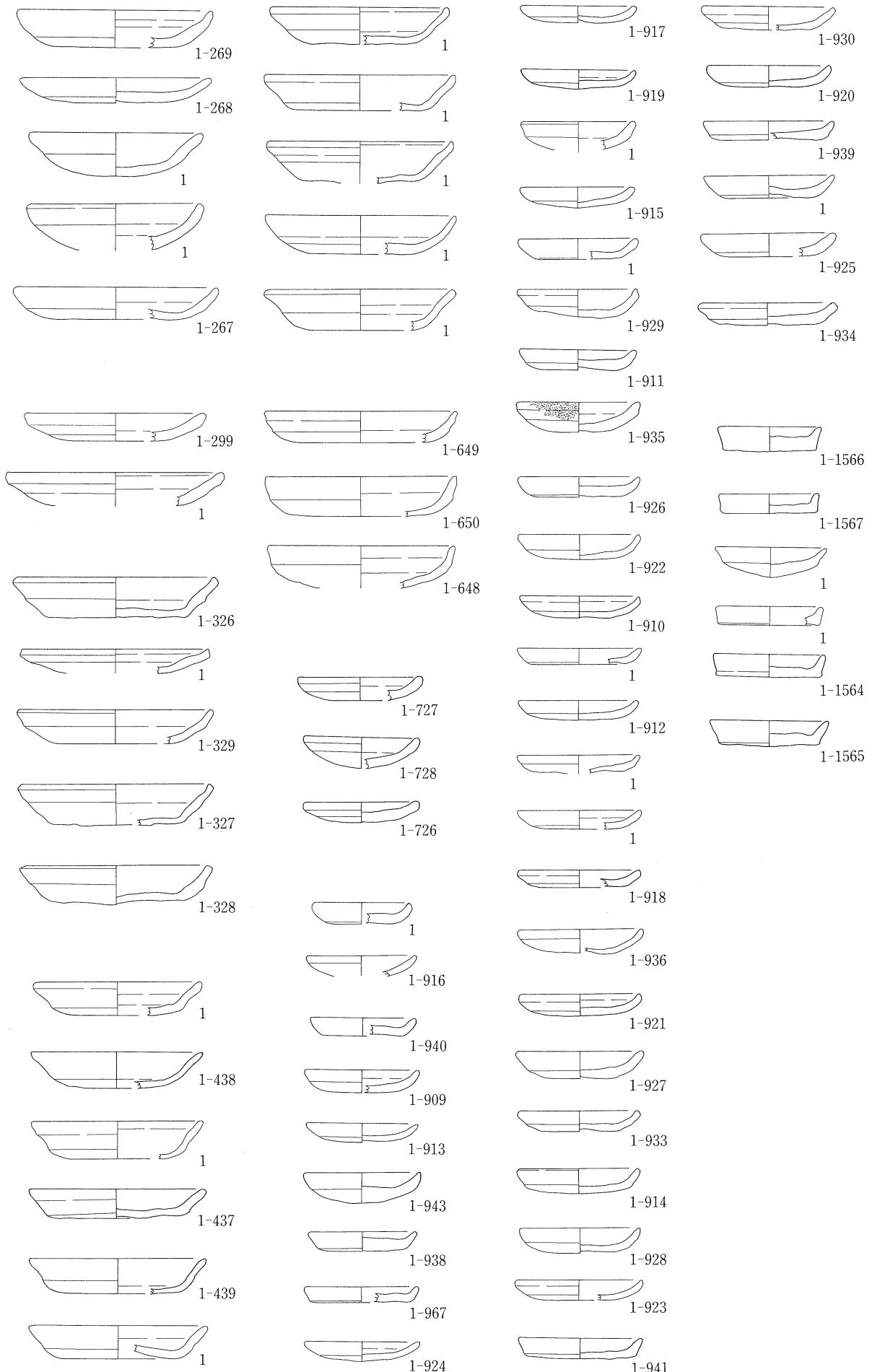


SD1250



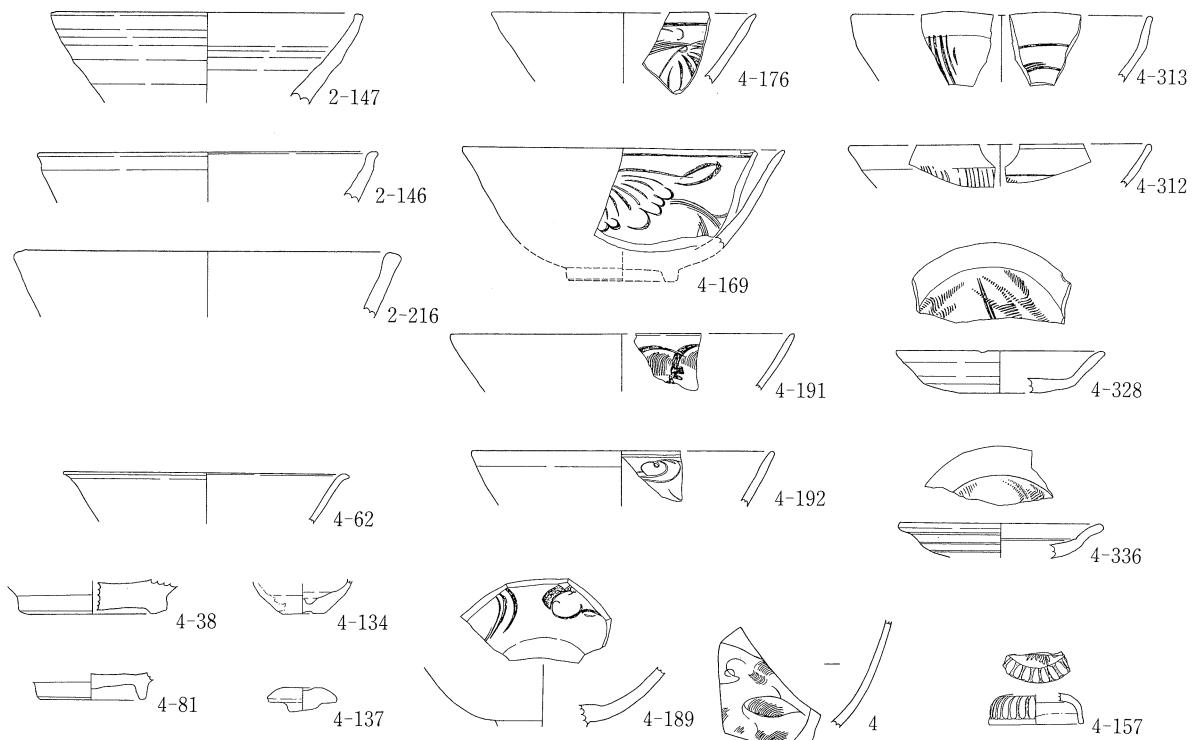
第241図 遺構出土の遺物 8
SD911・SD1250

S D 1250

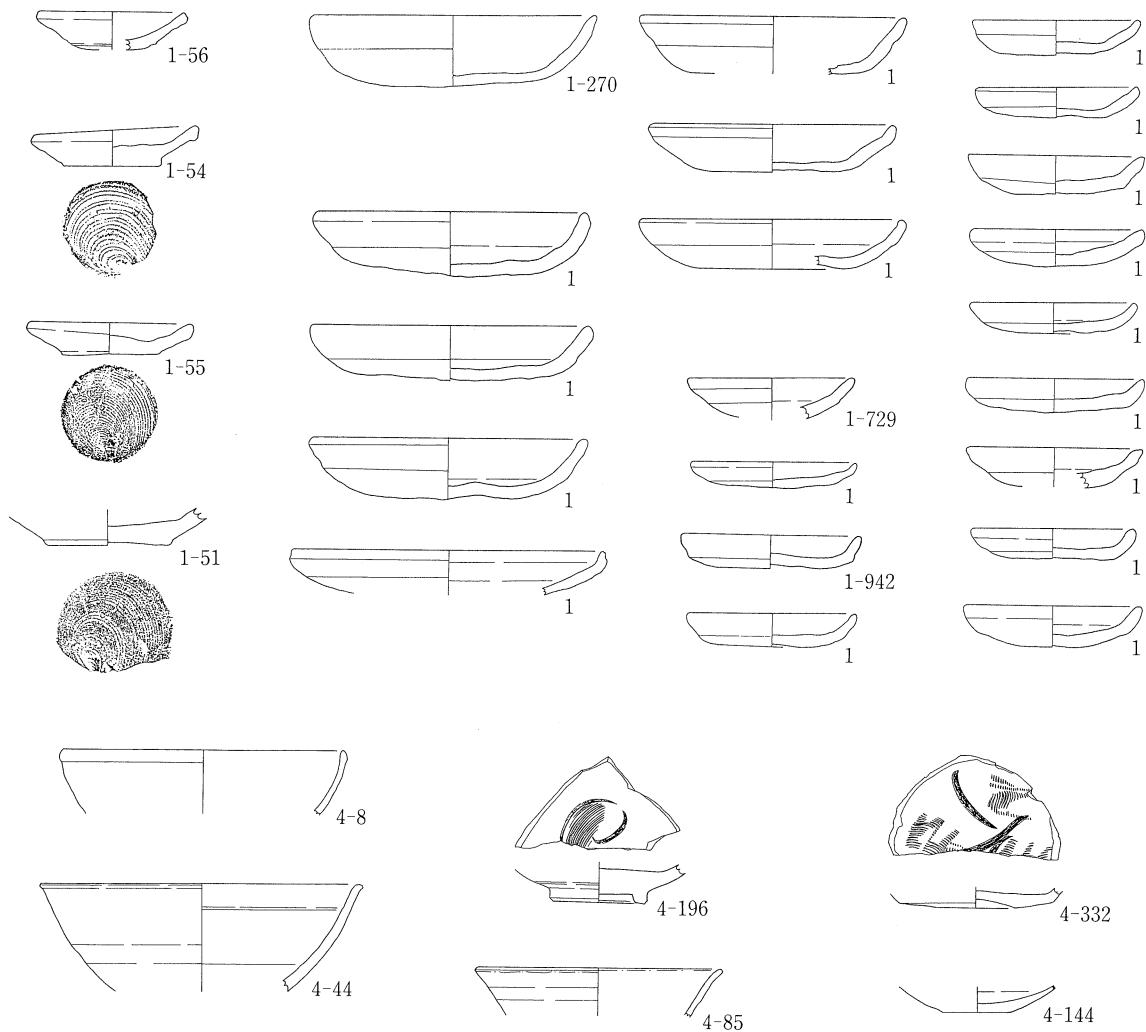


第242図 遺構出土の遺物 9
S D 1250

SD 1250



SD 1250 / 1252



第243図 遺構出土の遺物10

SD 1250 · SD 1250 / 1252

ⅢN D II類 (909~943)・ⅢN G類 (1564~1567)・ⅢR A I類 (11)・ⅢR B類 (49・50・52・53・57)・ⅢR E類 (134), 八尾, 珠洲 I 期の擂鉢 (146・147)・III~IV期の擂鉢 (216), 中国製白磁碗II類・碗II類 1 a・碗IV類 1 (38)・碗V類・碗V類 4 あるいはVIII類 1・3 (62)・碗VIII類 (81)・小壺II類 (134)・小壺の蓋II類(137), 中国製青白磁の合子蓋(157), 中国製青磁碗 I 類 1 b (312・313)・碗 I 類 2 (176)・碗 I 類 2 b (169)・碗 I 類 2 あるいは I 類 3 (191・192)・碗 I 類 2 ~ 4 (196)・碗 I 類 3 ・碗 I 類 4 (189)・Ⅲ I 類 b (336)・Ⅲ I 類 2 b (328), 中国製染付がある。越中瀬戸, 唐津, 伊万里などもみられるが, 混入と考えられる。石製品には砥石がある。このように多種類がみられるが, 出土量は遺構の規模の割に少ない。その分布についてはX 431・432の範囲, S D1442と交差する周辺, S D1252との重複部分に多くみられた。この重複部分からは, 中世土師器ⅢN A II類 (270)・ⅢR B類 (51・54~56), 中国製白磁碗II類 1 a (8)・碗V類 4 a (44)・碗IX類 1 c (85), 中国製青白磁Ⅲ (144), 中国製青磁Ⅲ I 類 2 b (332)が出土しており, どちらの遺構のものは不明である。遺構の時期は13・14世紀である。

1252号溝 (S D1252, 第244~246図)

S D1250と重複する溝である。重複部分から出土する遺物は, 第3層を中心とした上下約50cmの深さの範囲に多くみられる。ここから出土する12世紀後半の中世土師器に遺構の上限をおいている。重複部分の西側のX 419 Y 97からX 420 Y 93の範囲には, 中世土師器が集中して3ヶ所にみられた。また, この上層から重複部分にみられなかった珠洲が出土している。I期の擂鉢 (147~150)である。下層から出土した遺物は少ない。S D1252の重複部分はS D1250をつくるために埋められ, 西側部分はほとんどが埋まりながら, 上層は13世紀前半まで機能したものと考えられる。須恵器瓶類(27), 中世土師器ⅢN A I類 (224)・ⅢN A II類 (271~273・290)・ⅢN A III類 (291)・ⅢN B I類 (300~309)・ⅢN B II類 (330~397)・ⅢN B II'類・ⅢN C I類 (442・443)・ⅢN D I類 (730~732)・ⅢN D II類 (944~1013)・ⅢN D III類 (1496)・ⅢN G類 (1568・1569)・ⅢR B類 (58~66), 中国製白磁碗II類・碗V類 (57)・ⅢVIII類 1 b (102)・小碗? (120), 中国製青磁碗 I 類 1 b (310・315)・碗 I 類 2 あるいは I 類 3 (193・194)・Ⅲ I 類 2 b (327・329・331), 石鍋片・打製石斧・砥石, 金属製品が出土している。この溝と同時期に存在する建物にS B52とS B63がある。

1406号溝 (S D1406, 第247図)

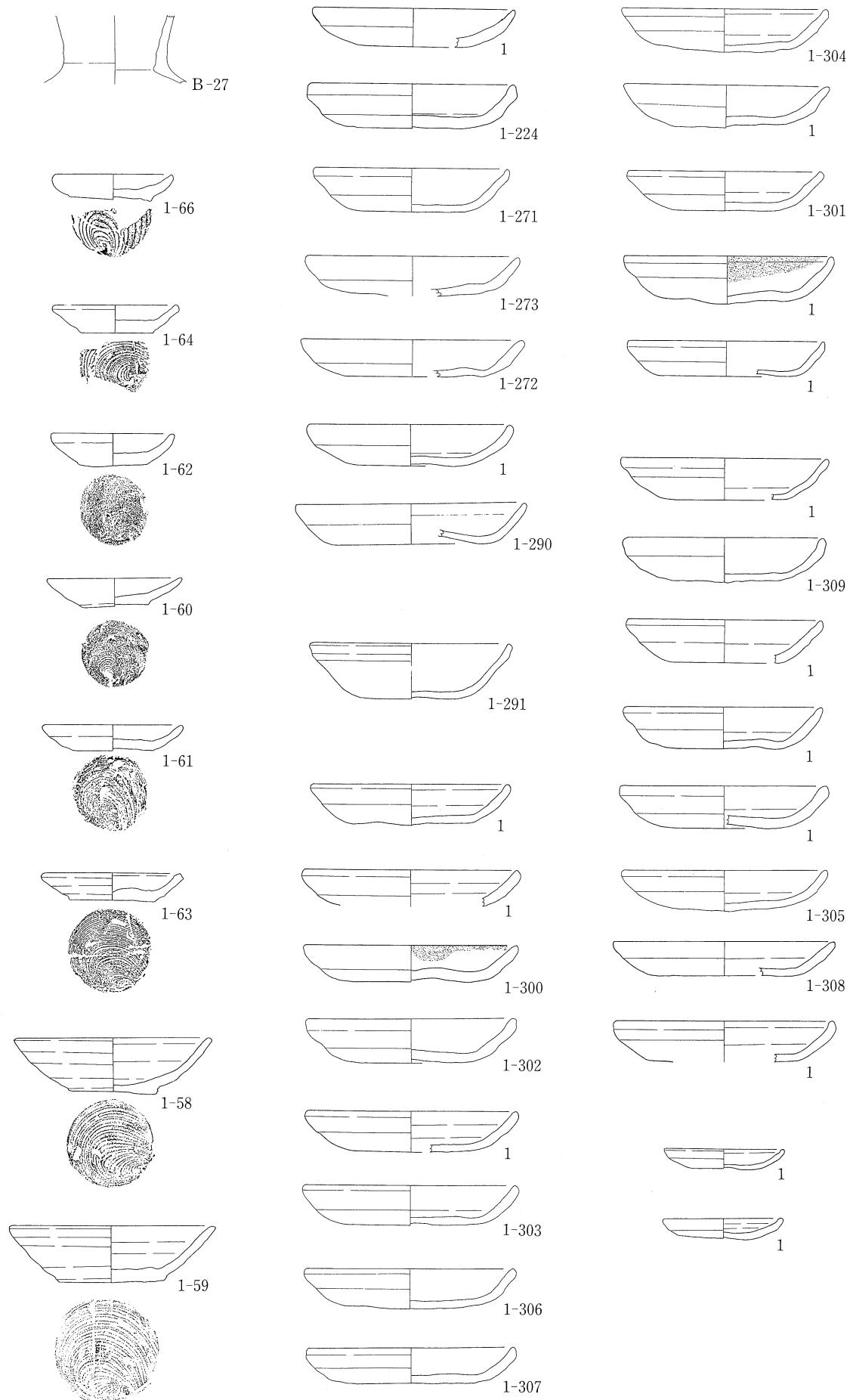
須恵器, 中世土師器ⅢN B I類 (315・316)・ⅢN C I類 (484)・ⅢN D I類 (736・737)・ⅢN D II類 (1115~1123)・ⅢR A I類 (13)・ⅢR A II類 (14)・ⅢR B類 (75~79)・高台Ⅲ (1746)・珠洲・越前・中国製白磁・中国製青磁・越中瀬戸・唐津がある。

2201号溝 (S D2201, 第247図)

幅2.5~3.3m, 深さ25cm~50cmの溝である。溝底は南北で30cmの高低差があり, 北に向かって流れ。土師器, 中世土師器ⅢN C I類 (495・496)・ⅢN D II類 (1153)・ⅢN D III類 (1507)・ⅢN G類 (1583・1584), 八尾甕, 珠洲 I 期の甕 (10)・I 期の擂鉢 (161)・II 期の擂鉢 (191), 瀬戸美濃窯窯後期末期の天目茶碗 (7), 中国製白磁, 中国製青磁碗 I 類 2 (179)・Ⅲ I 類 2 b (330), 越中瀬戸, 唐津, 伊万里, 砥石が出土している。遺構の時期は13~15世紀である。

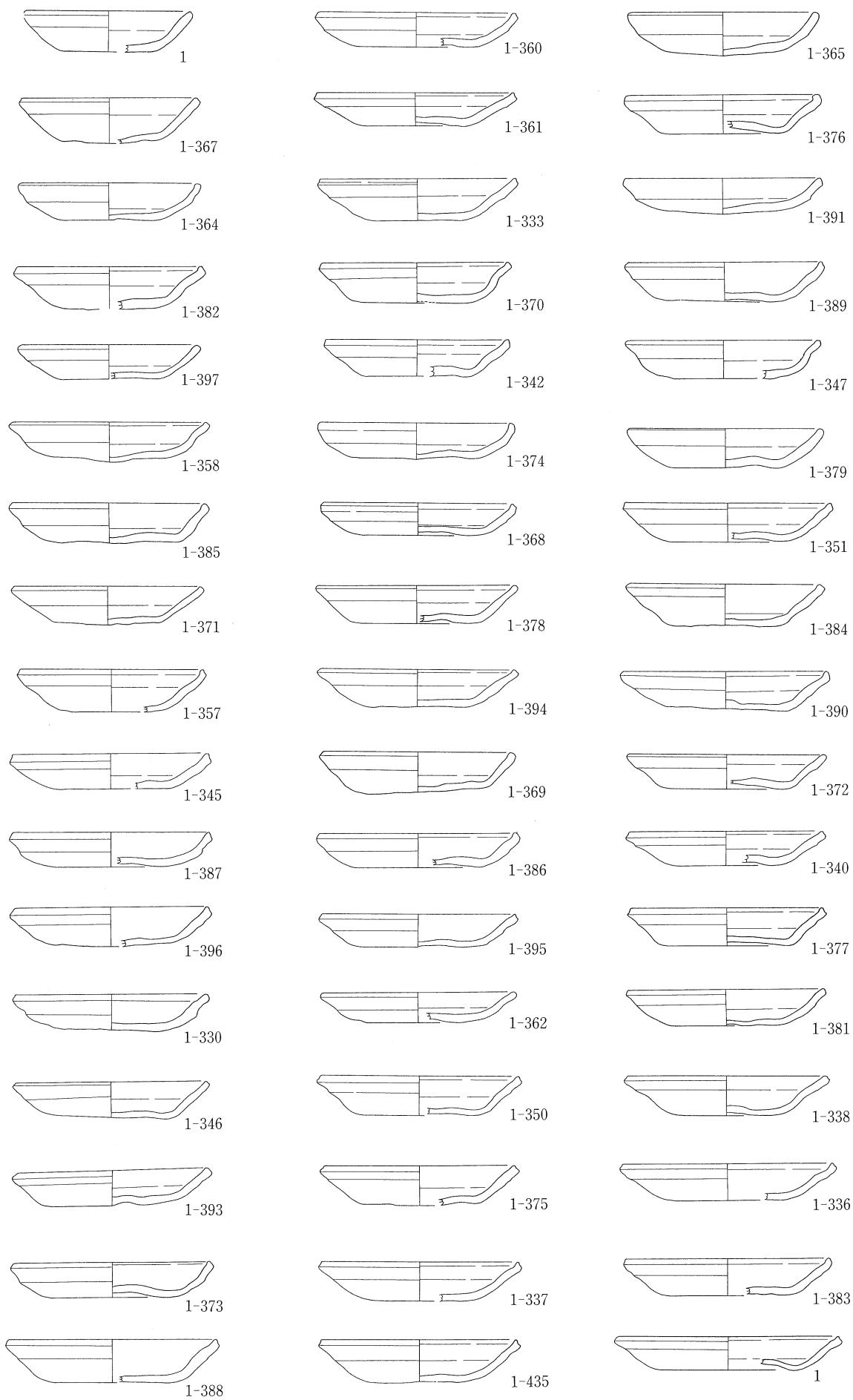
2203号溝 (S D2203, 第247~250図)

コの字状に走る溝である。平均約40度の勾配を持ち, 南東隅と北東隅の落差が約1mある。上層から下層まで中世土師器が大量に出土している。土師器, 須恵器杯(4)・高台杯(8)・甕(24)・壺(20)がある。中世土師器ⅢN A I類(227~232)・ⅢN A II類(274~284)・ⅢN B I類(319~322)・ⅢN C



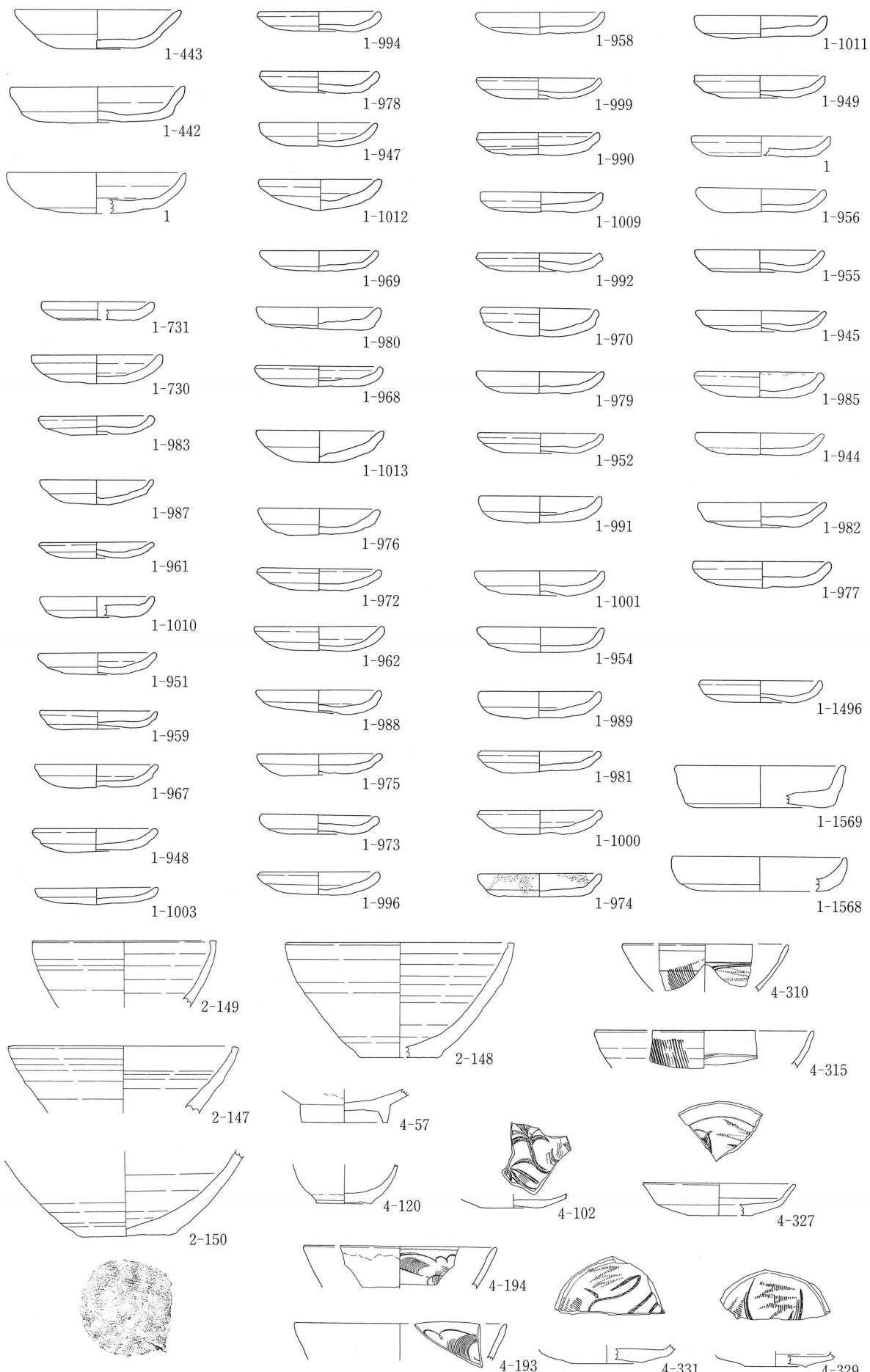
第244図 遺構出土の遺物11
SD 1252

S D 1252



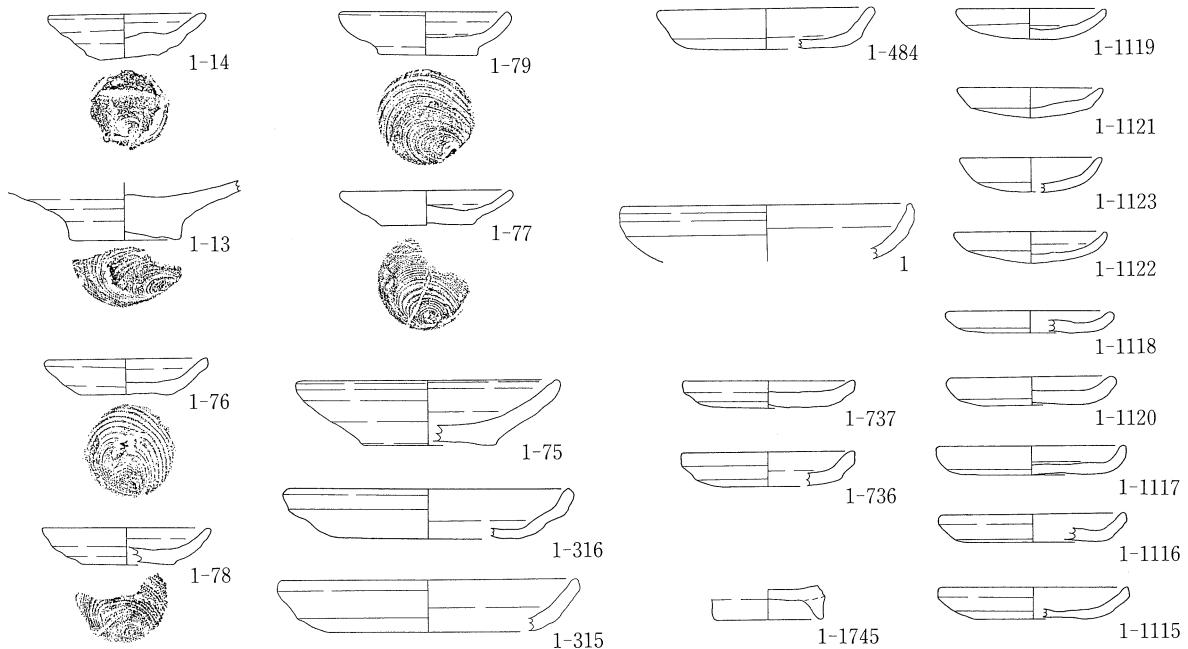
第245図 遺構出土の遺物12
S D 1 2 5 2

S D 1252

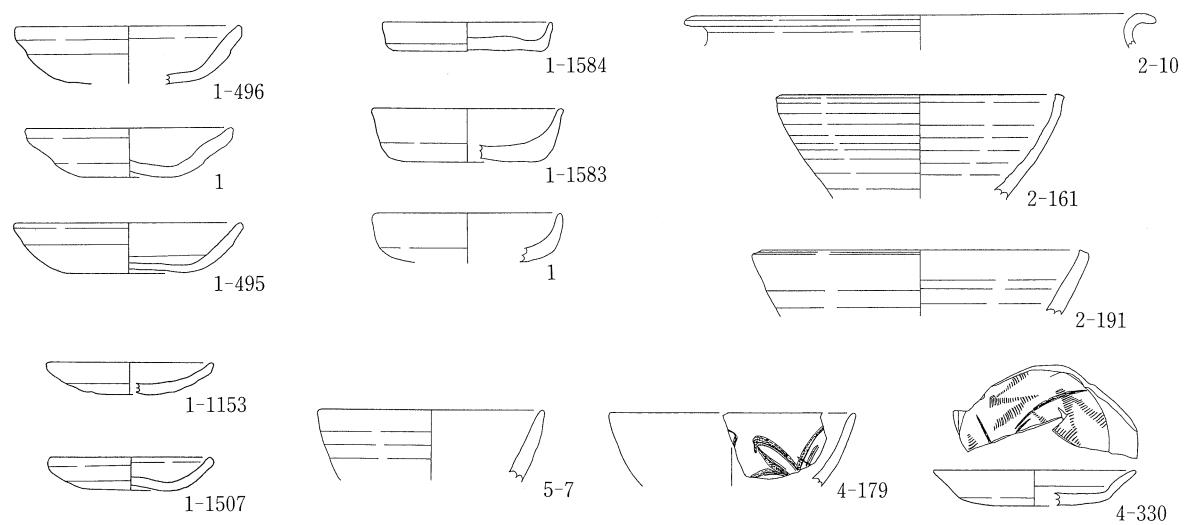


第246図 遺構出土の遺物13
S D 1252

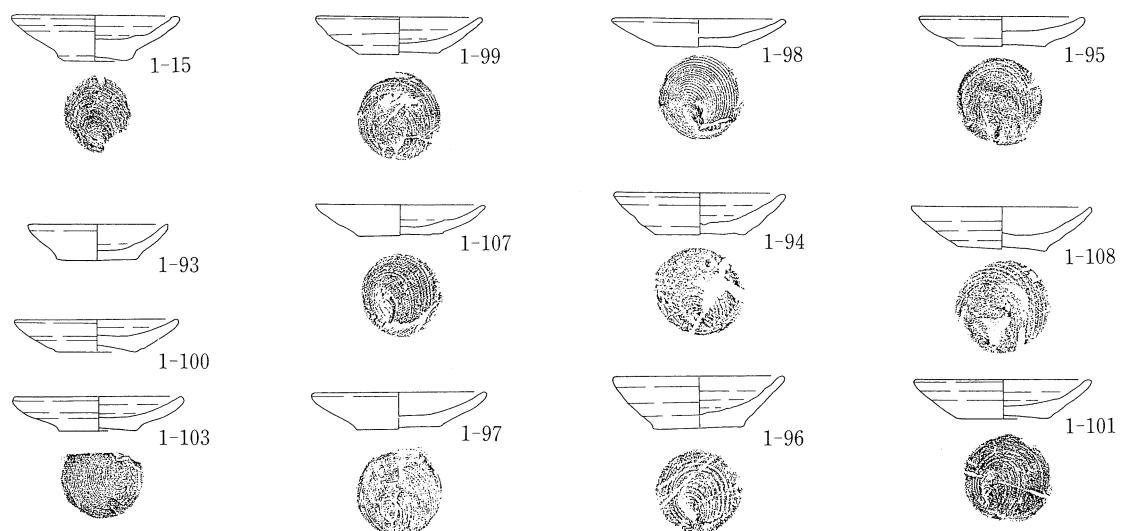
SD 1406



SD 2201



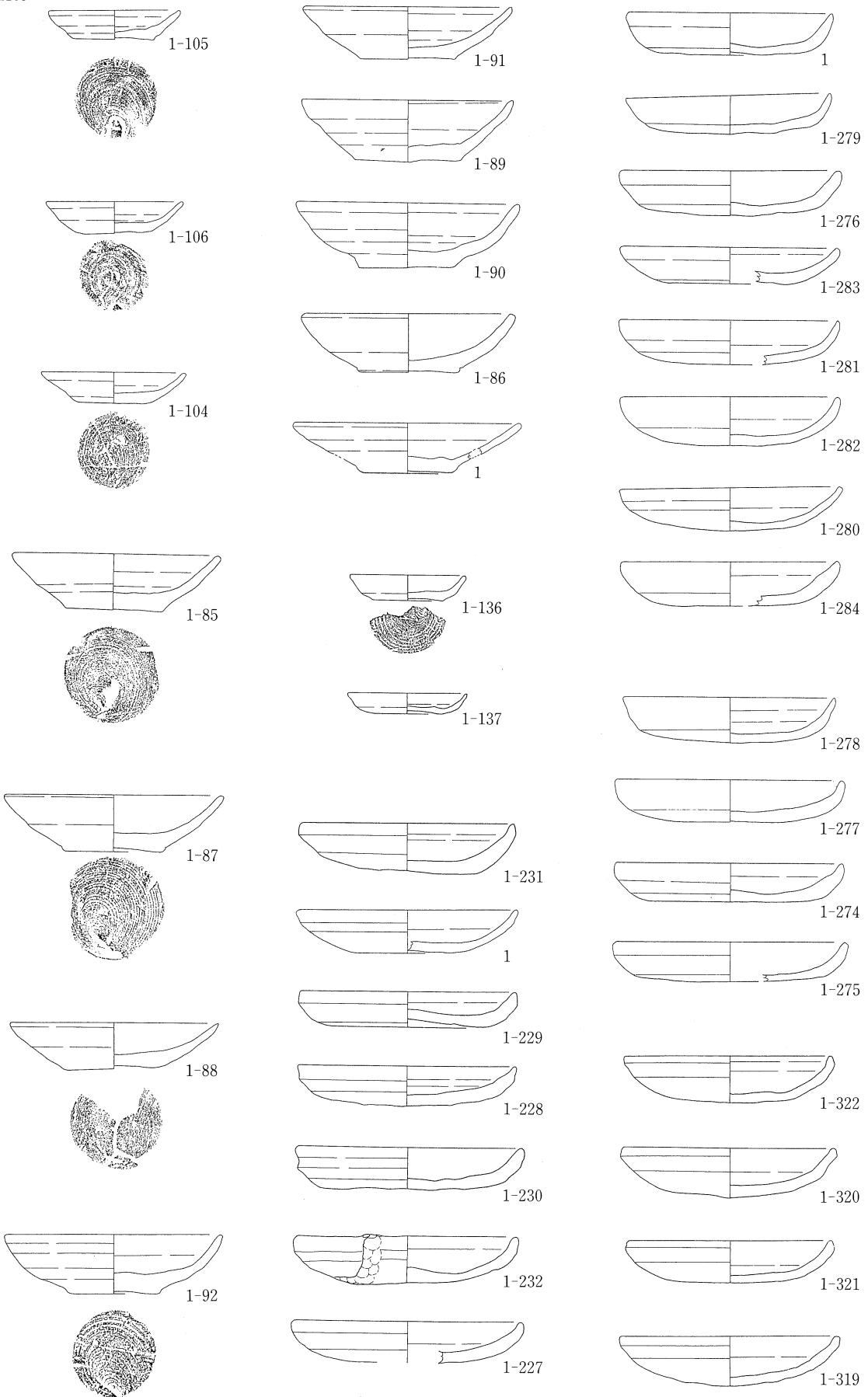
SD 2203



第247図 遺構出土の遺物14

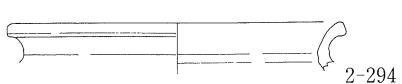
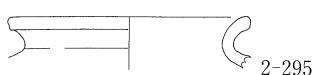
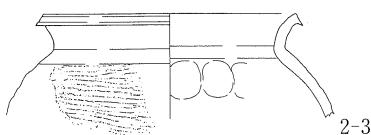
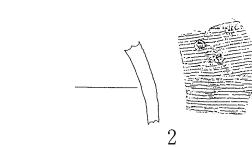
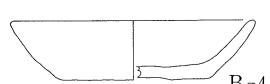
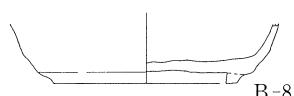
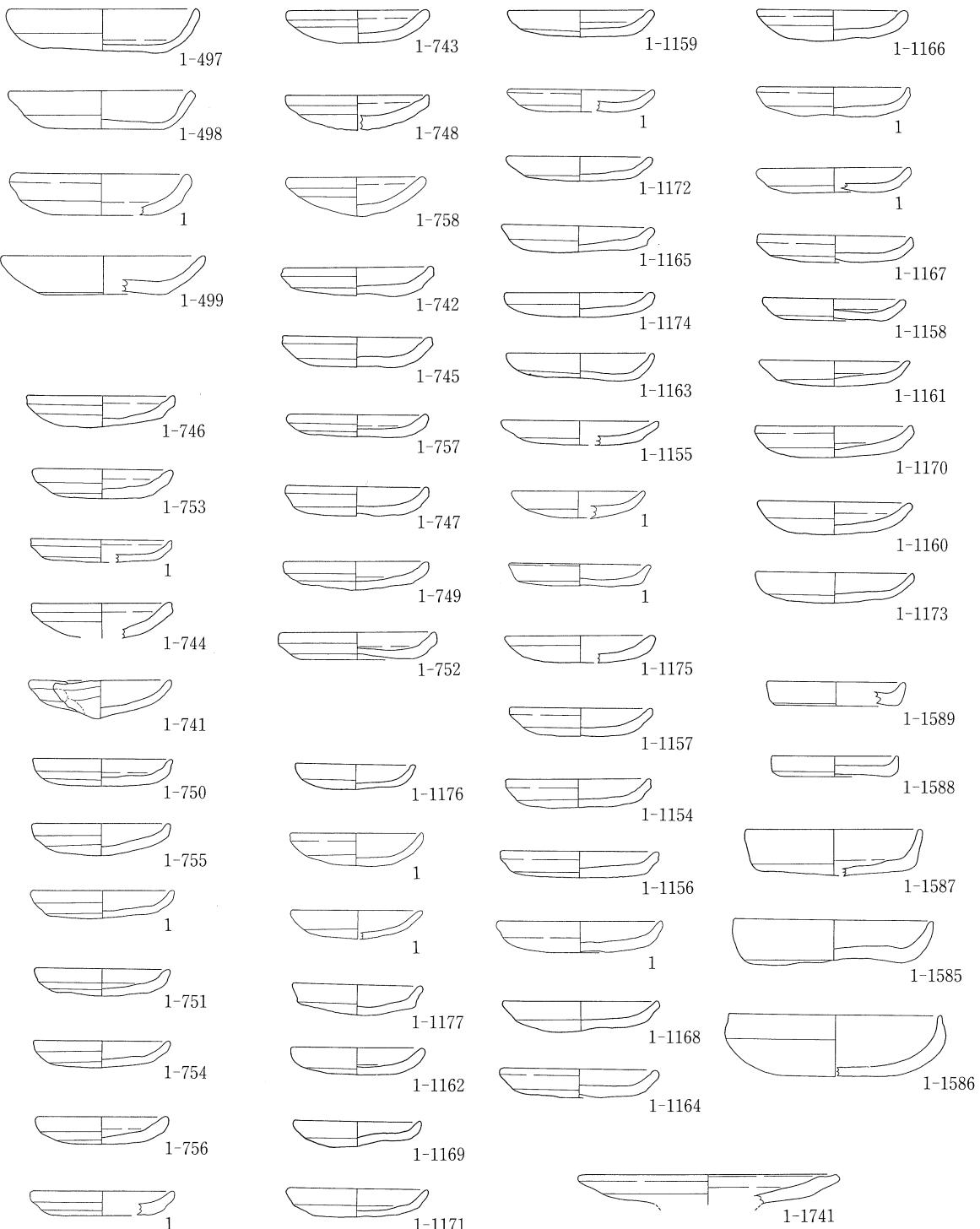
SD 1406 · SD 2201 · SD 2203

S D 2203



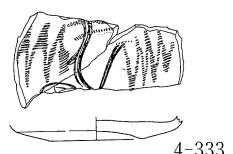
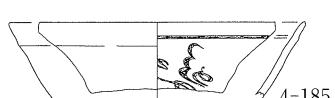
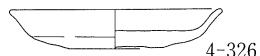
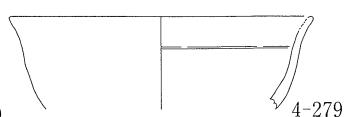
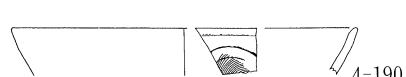
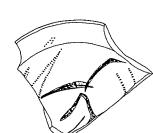
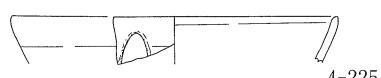
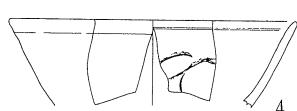
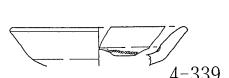
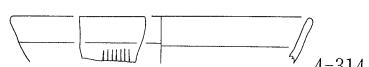
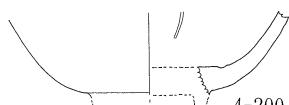
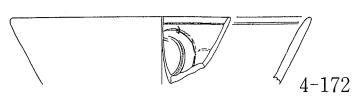
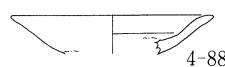
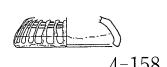
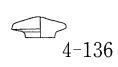
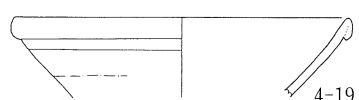
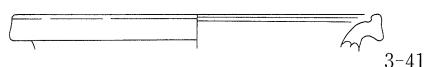
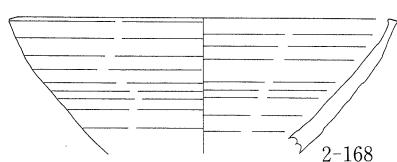
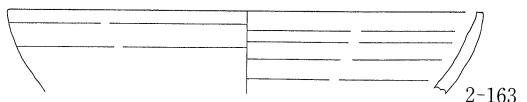
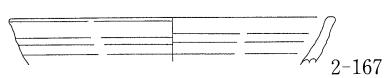
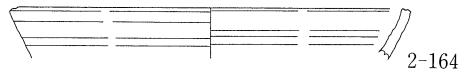
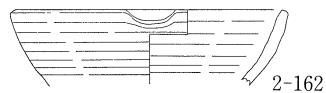
第248図 遺構出土の遺物15
S D 2203

SD 2203



第249図 遺構出土の遺物16
SD 2203

S D 2203



第250図 遺構出土の遺物17
S D 2203

I類(497~499)・皿NDI類(741~758)・皿NDII類(1154~1177)・皿NG類(1585~1589)・皿RA
II類(15)・皿RB類(85~108)・皿RE類(136・137)・皿RK類(212)・皿RF類(151)・大皿(1741),
八尾甕(41), 珠洲I期の甕(18)・II~III期の甕(30)・I期の壺(294・295)・II~III期の壺(318)・I期
の擂鉢(162~169)・II期の擂鉢(203)・IV期の擂鉢(232)・V期の擂鉢(246)・I期の水瓶?(291), 珠
洲?I1期の壺(4), 珠洲系陶器甕, 越前壺(8), 濱戸美濃窯窯後期の皿?, 中国製白磁碗IV類(19~
23)・碗VI類1b(69)・皿II類1あるいはIII類(87)・皿III類1(88)・皿VI類・小壺蓋II類(136), 中国
製青白磁皿(146)・合子蓋(158), 中国製青磁碗(279)・碗I類1b(314)・碗I類2(172・173)・碗I
類2あるいはI類3(190)・碗I類4(185)・碗I類4c(200)・碗I類5b・碗III類2(221)・碗IV類?
(225)・碗IV類イ(247)・碗BII類(227)・皿I類b(339)・皿I類2b(326・333), 唐津, 石硯・石鍋
が出土している。遺構の時期は12世紀後半~13世紀である。

2451号溝 (S D2451, 第251図)

東西溝である。SD2203より新しいが, SD2201との切り合い関係は不明である。水流が西向きで
あったことは, 西側の溝底が東側より標高で約50cm低いことからわかる。遺物は土師器, 須恵器杯蓋
(10), 中世土師器皿NCI類(503・504)・皿NCCI類(653)・皿NDI類(759)・皿NDII類
(1186~1195)・皿NG類(1592・1593), 珠洲I期の甕(12)・II期の擂鉢(204)・III期の擂鉢(211),
濱戸美濃, 中国製白磁, 中国製青磁碗I類2(177)・碗I類5b(203)・碗III類2(219)・皿I類2
d(286), 伊万里, 陶器椀(25), 砥石・石鍋片が出土している。遺構の時期は13世紀~14世紀である。

2453号溝 (S D2453, 第252~253図)

東西溝で, 南側に重複するSD2453bより新しい。遺物はSD2453bと分けて取り上げることができなかつた。須恵器壺(22), 中世土師器皿NAII類(285)・皿NCI類(505~509)・皿NCCI類(655)・
皿NCIII類・皿NDII類(1199~1218)・皿NE類(1528)・皿NG類(1594~1609)・皿RA類(16)・
皿RB類(109~113)・皿RC類(121)・皿RE類(140~147)・高台皿(1747), 八尾甕, 珠洲I期の
甕(8)・I~II期の甕(24)・IV期の甕(51・52)・II~III期の壺(320)・I期の擂鉢(170)・I~II
期の擂鉢(182)・II期の擂鉢(187・188・192)・III期の擂鉢(207)・III~IV期の擂鉢(214・215)・IV
期の擂鉢(228・229), 珠洲系陶器甕, 越前, 濱戸美濃窯窯後I期の平椀(25)・窯窯後I II III期の大
平椀(33)・窯窯後I期の天目茶椀(6)・窯窯前期?の花瓶(52), 中国製白磁碗V類2a(43)・碗V
類4a・碗VI類1b(68)・碗VIII類(82), 中国製青磁碗I類1a(165)・碗I類1b(309・316)・碗
I類2 or I類3・碗I類4(187)・碗I類5b(210・212)・碗I類5c(217)・碗III類2(223)・
碗IV類?, 皿I類2(285)・皿I類2bあるいはI類2c(283), 打製石斧・砥石, 鉄製品・鉄滓,
ヒトの焼骨が出土している。遺構の主体となる時期は14世紀である。

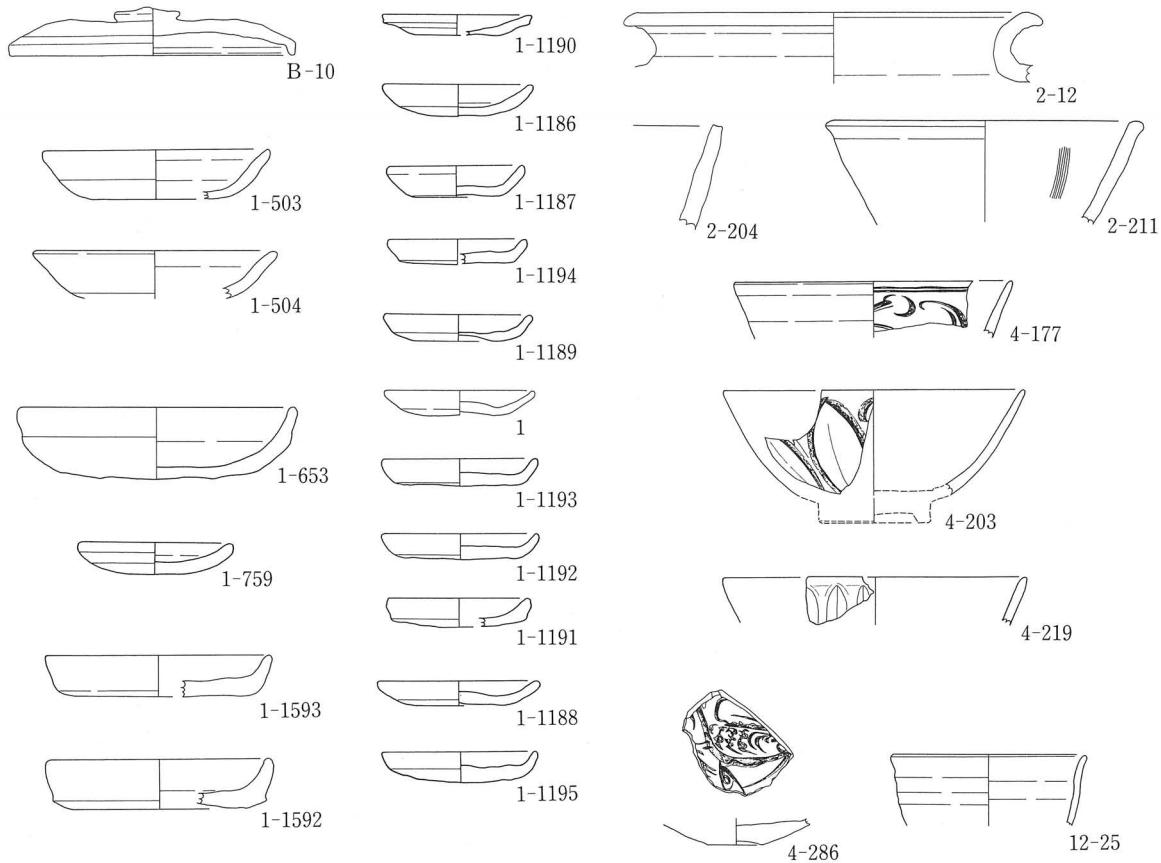
3402号溝 (S D3402, 第251図)

SD3401に切られる東西溝である。遺物は縄文土器, 土師器椀(37)・内黒椀(38)・甕(36)・鍋(35),
須恵器杯蓋(11~13)・杯・高台杯(7)・双耳瓶(26), 中世土師器皿NAII類・皿NDII類(1392),
八尾, 珠洲I期の擂鉢(174)・II期の擂鉢(197), 珠洲系陶器甕(342), 越前, 加賀甕(37), 濱戸美
濃, 中国製白磁, 中国製青磁碗I類・碗IV類?(234), 越中瀬戸, 唐津, 伊万里が出土している。覆
土の状況から古代の溝(8世紀後半~10世紀初)と考えられ, 近世の遺物はSD3401からの混入と考え
られる。

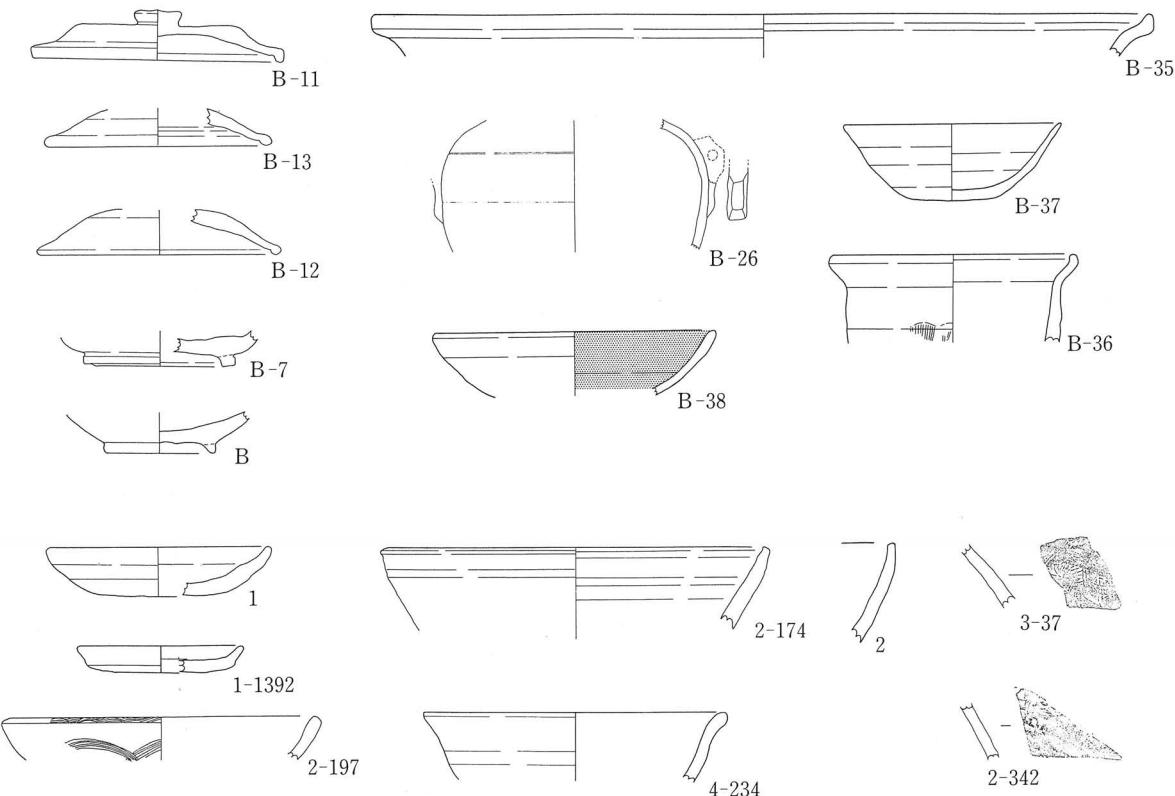
3425号溝 (S D3425, 第254図)

建物のまわりを「口」字状に巡る区画溝である。ここから出土した中世の遺物は, 北溝の東側から

SD 2451



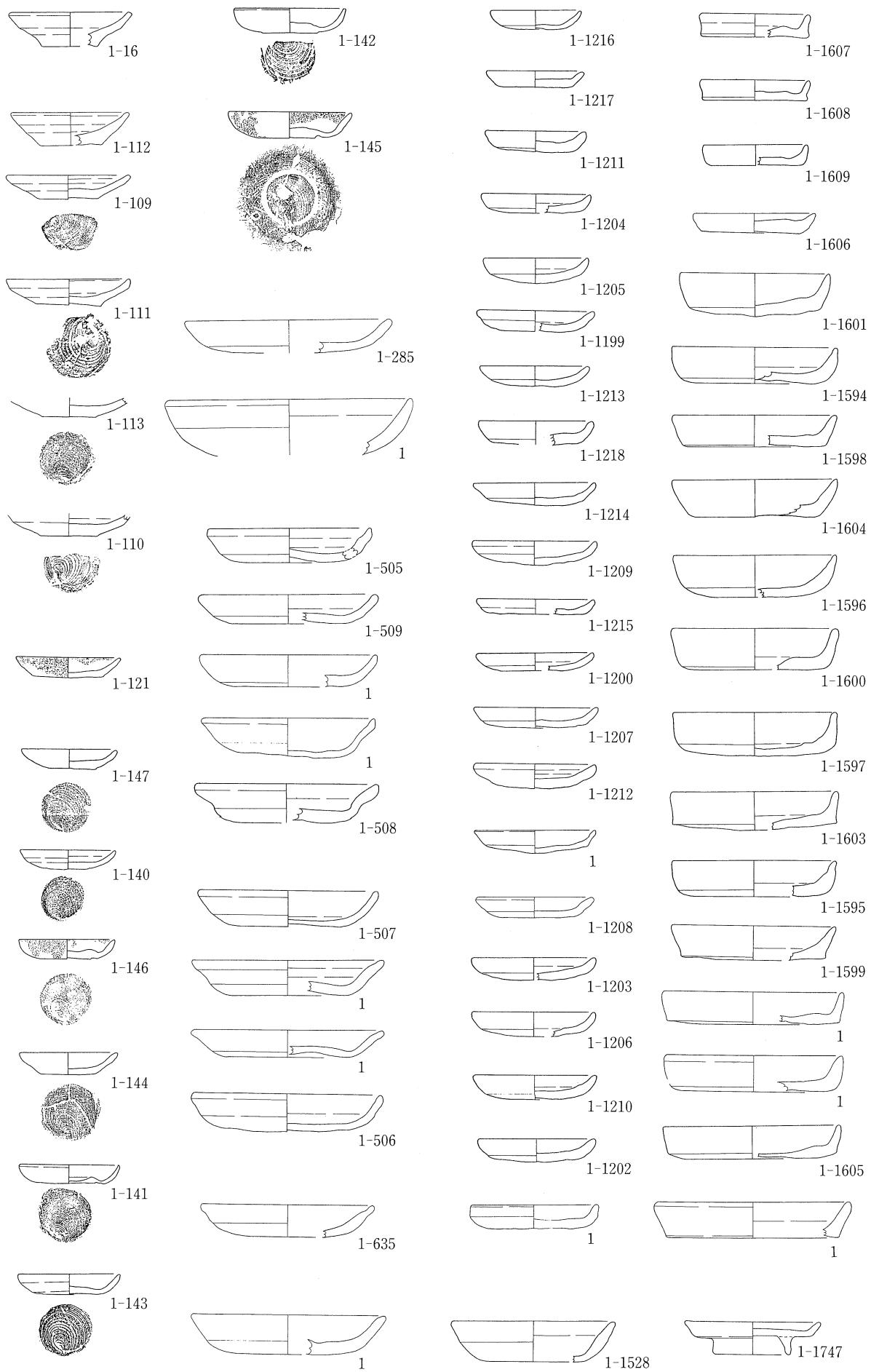
SD 3402



第251図 遺構出土の遺物18

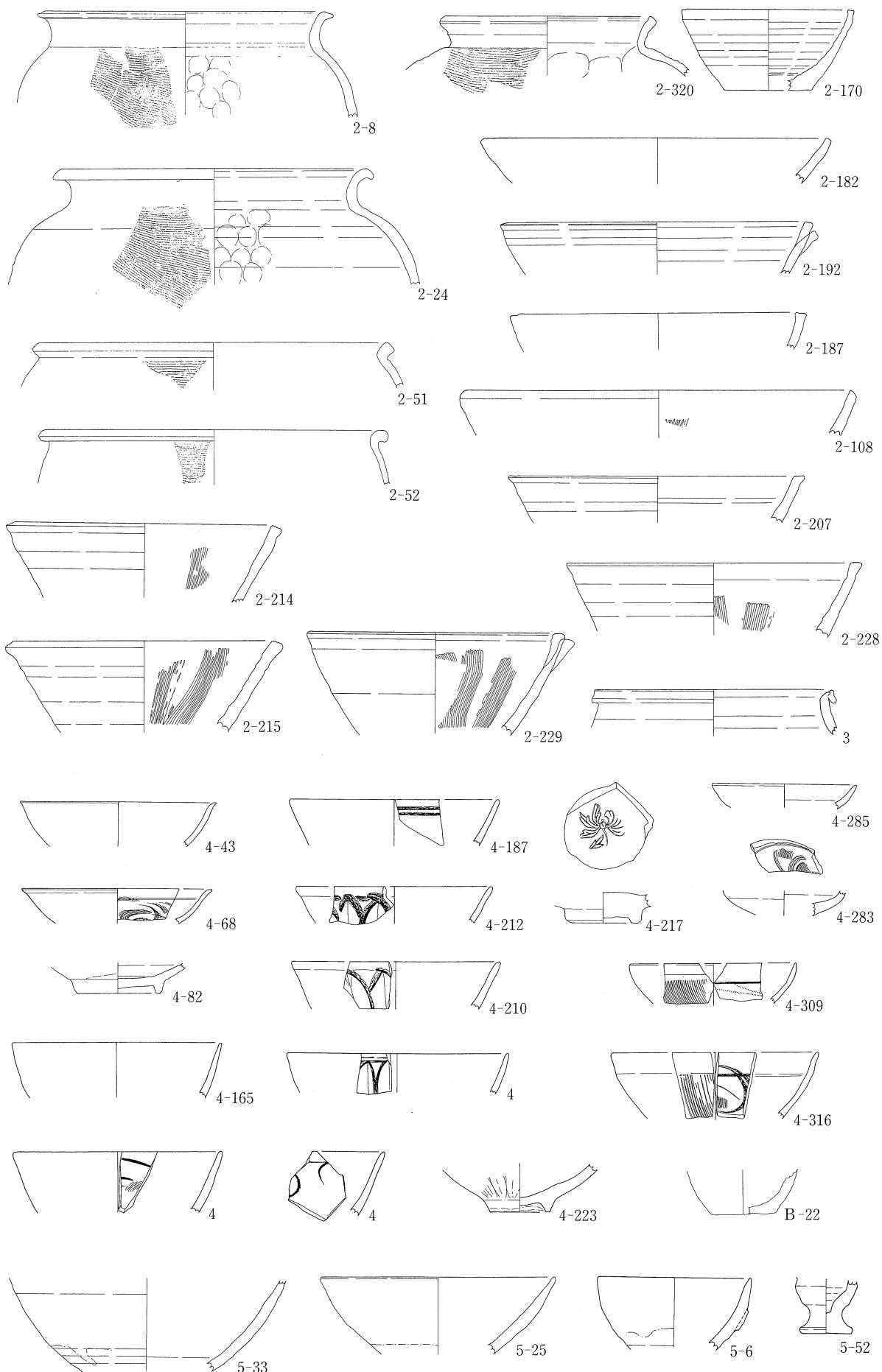
SD 2451 · SD 3402

SD 2453



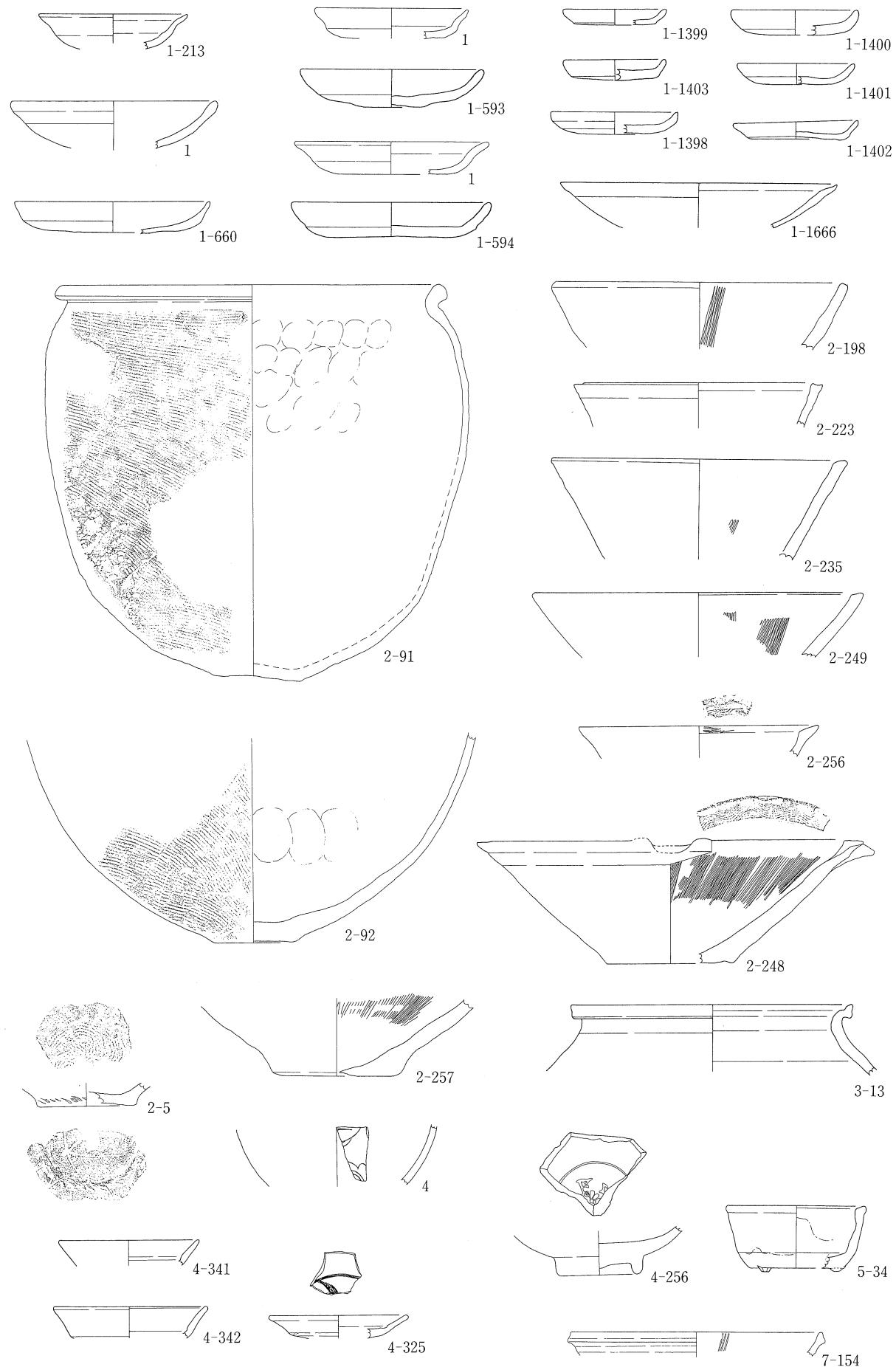
第252図 遺構出土の遺物19
SD 2453

S D 2453



第253図 遺構出土の遺物20
S D 2453

S D 3425



第254図 遺構出土の遺物21
S D 3425

東溝の北側と南側に集中する。溝の遺物がS E 3431やS B 132のものと接合できるため、それらの遺構は同時期に存在していたと思われる。遺物には縄文土器深鉢、土師器、須恵器、中世土師器皿N B I類・皿N C I類(593・594)・皿N C II類(660)・皿N D II類(1398~1403)・N J類(1666)・皿R K類(213)、八尾、珠洲I 1期の甕(5)・IV期の甕(85)・IV~V期の甕(91・92)・壺・II期の擂鉢(198)・III~IV期の擂鉢(223)・IV期の擂鉢(235)・V期の擂鉢(248・249・256・257)、珠洲系陶器甕、越前甕(13)、瀬戸美濃窯窯後IもしくはII期の筒形香炉(34)、中国製白磁、中国製青磁碗I類2もしくはI類3・碗C II類a(256)・皿I類(341・342)・皿I類1 b(325)、越中瀬戸擂鉢A類(154)がある。越中瀬戸は混入と思われる。ほかには南溝の西半分から西溝の南部分の底にみられる黒褐色粘質土から漆器が出土している。石製品には石硯・五輪塔・石鍋などがある。五輪塔の空風輪は西溝の出入口の覆土上面に廃棄されている。鉄製品も出土している。時期は14世紀~15世紀前半である。

(横山和美)

C. 井 戸

1314号井戸 (S E 1314, 第255図)

発掘区北半部のA 1 S地区建物群の北寄りにある。250×210cmの楕円形掘り方を持つ、現存する深さ161cmの素掘りの井戸である。井戸内南西部に中世土師器皿の碎片が多く含まれる。遺物は中世土師器皿N C I類(481~482)・皿N D II類(1099~1109)、八尾、珠洲IV期の甕(53~55)・I期の擂鉢(154・155)・III期の擂鉢(210)、中国製白磁、中国製青磁碗I類、釘(67・68)などが出土している。井戸の時期は最も新しい珠洲IV期の甕を手がかりとすると、14世紀と考えられる。

2497号井戸 (S E 2497, 第255図)

発掘区北半部のA 2地区で北西寄りの建物群中に位置する。275×263cmの方形の掘り方を持つ、現存する深さ175cmの井戸である。遺存していなかったが井戸側があった可能性が高く、また覆屋を持つと考えられる。遺物は中世土師器皿が大部分を占め、皿N A II類(287)・皿N B I類(323)・皿N C II類(659)・皿N D II類(1369~1378)の他、中国製青磁割花文碗I類2もしくは3が出土している。井戸の時期は13~14世紀と考えられる。

3970号井戸 (S E 3970, 第255図)

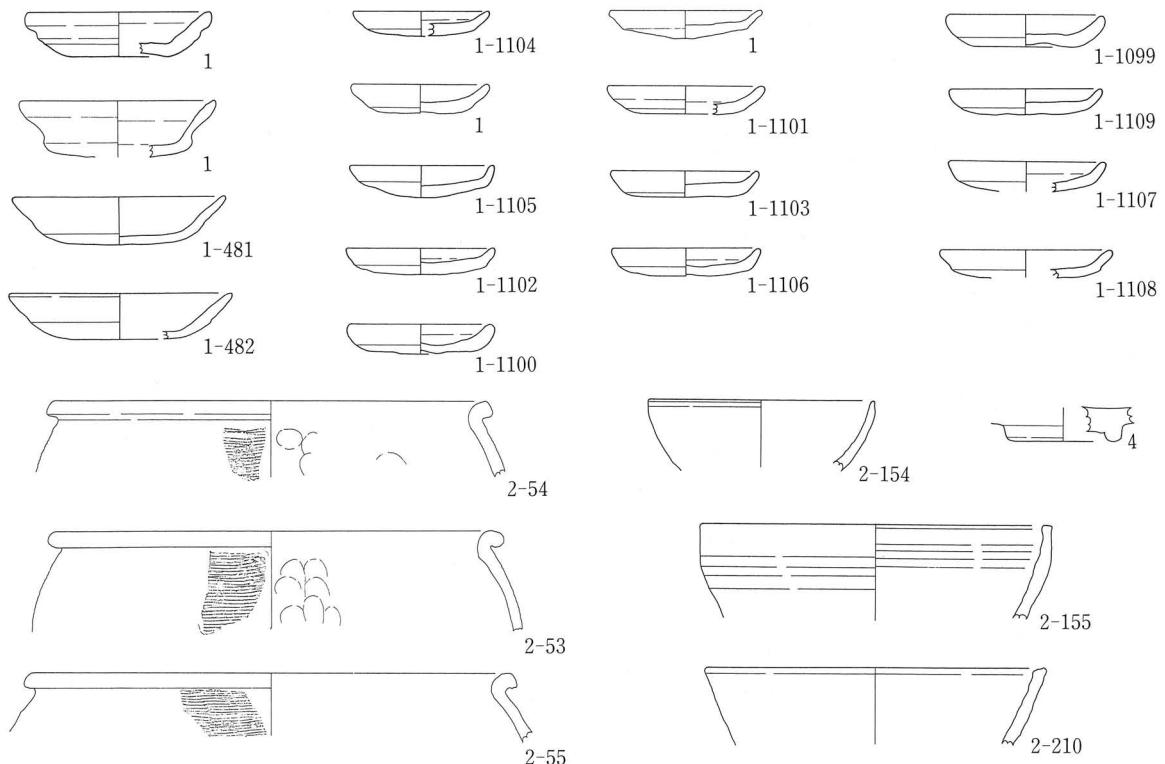
発掘区北半部のA 3地区で北東寄りの建物群中に位置する。直径約200cmの楕円形を呈する、現存する深さ250cmの素掘りの井戸である。遺物は中世土師器皿N C I類(602・603)・皿N D II類(1438~1440)・皿N G類(1648・1649)、珠洲、中国製青磁鎧蓮弁文碗I類5 b、瓦質の火鉢(6)、加工木、柄杓の柄、刀子状(104)などが出土している。井戸の時期は13~14世紀と考えられる。なおS E 3970は、次に述べるS E 3971が埋没後、重なって掘り込んだものであるが、あまり時期差はないものと考えられる。出土遺物の内、中世土師器皿N D II類(1438・1440)はS E 3971の遺物が混入した可能性のあるものである。

3971号井戸 (S E 3971, 第256図)

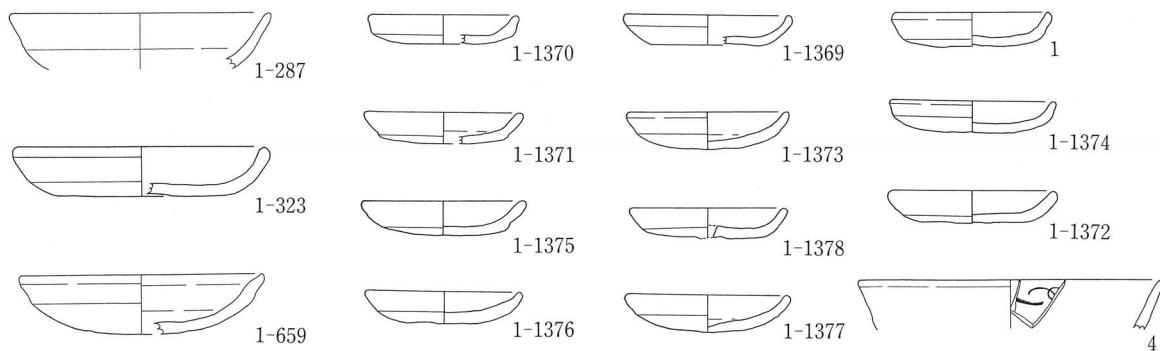
S E 3970の掘り込みにより、相当部分が破壊されているため、平面形や規模は不明。現存する深さ167cmで、素掘りの井戸である。遺物は須恵器、中世土師器皿N C I類(604~608)・皿N D II類(1435~1437・1441)・皿N G類(1647・1650~1655)、珠洲I期の擂鉢(175)、中国製青磁鎧蓮弁文碗I類5 b、砥石、釘(57)などが出土している。井戸の時期は13~14世紀と考えられる。

(山本正敏)

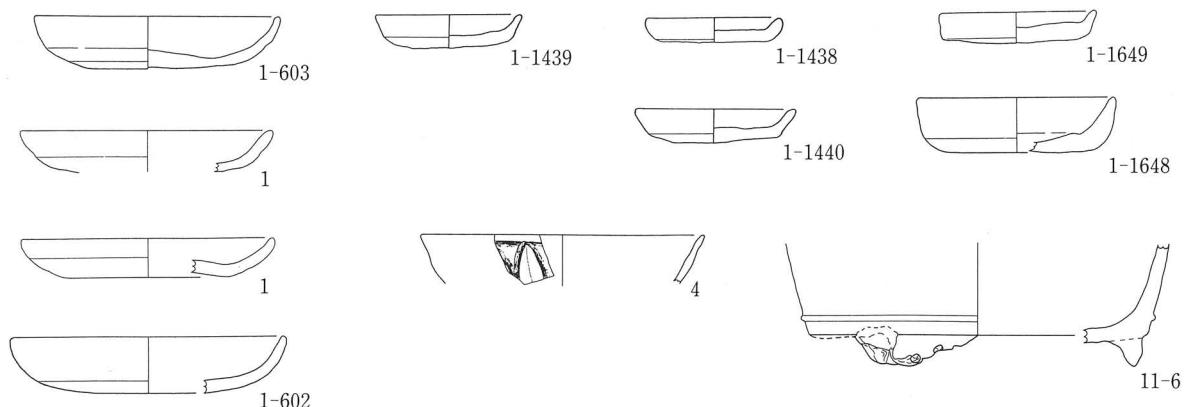
SE 1314



SE 2497



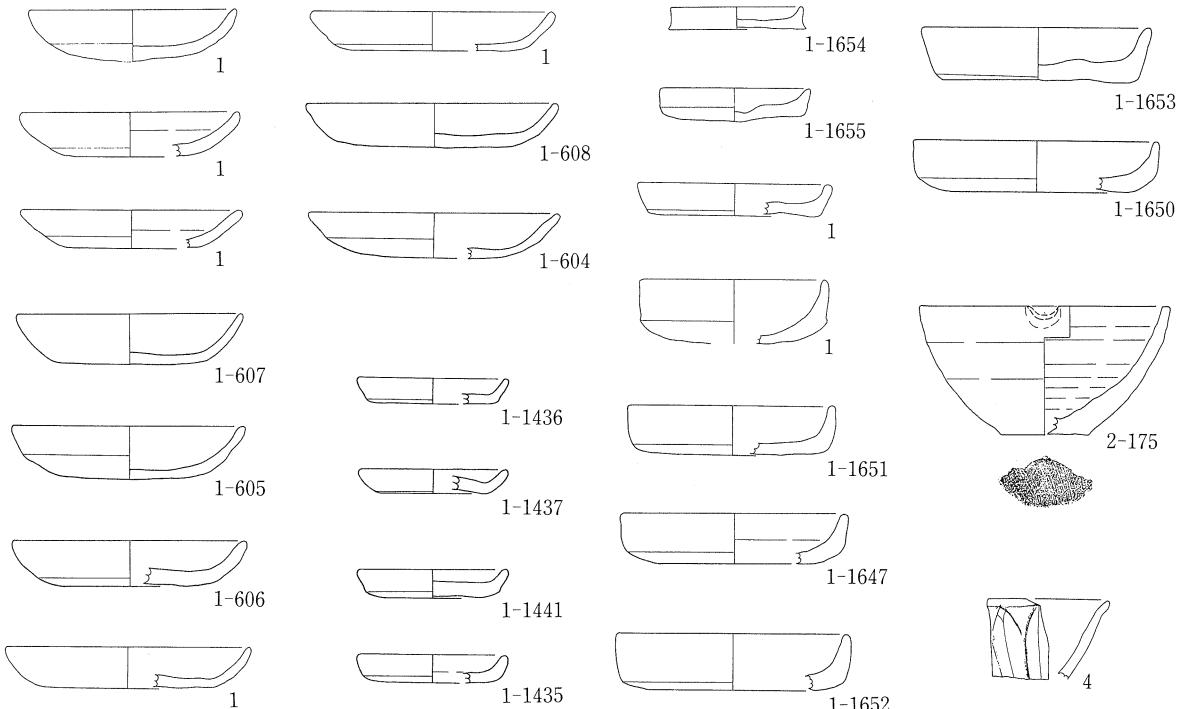
SE 3970



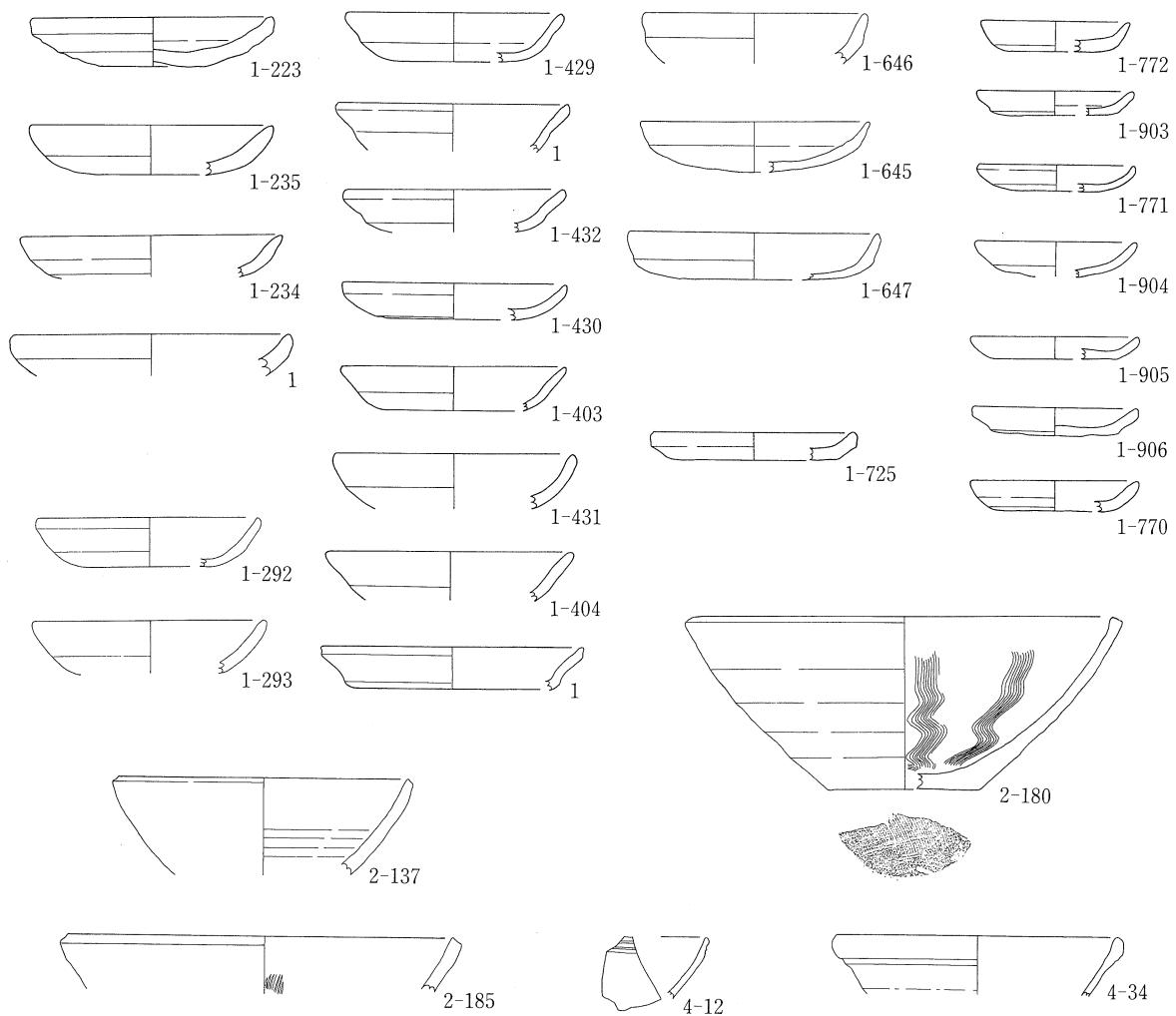
第255図 遺構出土の遺物22

SE 1314・SE 2497・SE 3970

S E 3971



SK 303



第256図 遺構出土の遺物23

SE3971 · SK303

D. 土坑・土壙墓

303号土坑（S K303, 第256図）

S B13に伴う竪穴状土坑である。長軸420cm, 短軸340cm, 深さ26cmの長方形の土坑で、皿状に窪む。中世土師器皿NA I類(223)・皿NA II類(234・235)・皿NB I類(292・293)・皿NC I類(403・404・429～432)・皿NC II類(645～647)・皿ND I類(725)・皿ND II類(770～772・903～906), 珠洲I期の擂鉢(137)・I～II期の擂鉢(180)・II期の擂鉢(185), 中国製白磁碗II類1a(12)・碗IV類(34)・皿II～VIII類, 中国製青磁碗I類5bが出土している。遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半である。

309号土坑（S K309, 第257図）

長軸398cm, 短軸314cm, 深さ63cmの円形の土坑である。中世土師器皿RB類(22・23)・皿NA II類(238・239)・皿ND I類(695)・皿ND II類(777～782), 珠洲I期の壺(298), 中国製白磁碗II類(11)・碗IV類(30), 鍛冶滓が出土している。遺構の時期は12世紀後半である。

713号土坑（S K773, 第257図）

南北345cm, 東西435cm, 深さ32cmの長方形の土坑である。覆土には堅くしまった叩き床様の層があり, S B23内東北隅に位置する方形竪穴状土坑と考えられる。切り合いでS D785より新しい。須恵器, 緑釉陶器壺(40), 中世土師器皿ND II類(856・857), 珠洲, 中国製白磁碗II類1a(13), 中国製青磁碗I類1・碗I類5b, 中国製青白磁壺(159)・碗(142)が出土している。遺構の時期は13世紀後半である。

783号土坑（S K783, 第257図）

南側の立ち上がり部分が試掘溝にあたり, 西側もS D701があるため立ち上がりが不明瞭であるが, 長方形を呈すると推定される土坑である。S K839の関連施設の可能性が考えられる。須恵器, 中世土師器皿NC I類(416・417)・皿ND I類(716～719)・皿ND II類(859～864), 珠洲, 越前, 中国製白磁, 中国製青磁が出土している。遺構の時期は13世紀～14世紀である。

839号土坑（S K839, 第257図）

試掘溝による攪乱のため平面形は明らかでないが, 南北195cm, 東西200cmの方形になると推定される。床面は平坦で, 覆土に多量の土器片, 焼土, 炭化物が混入するため, 土師器焼成窯の可能性も含めて特殊な機能をもつ土坑と考えられる。須恵器, 中世土師器皿NC III類(664～674)・皿ND II類(865～876), 珠洲, 中国製白磁が出土している。

913号土坑（S K913, 第258図）

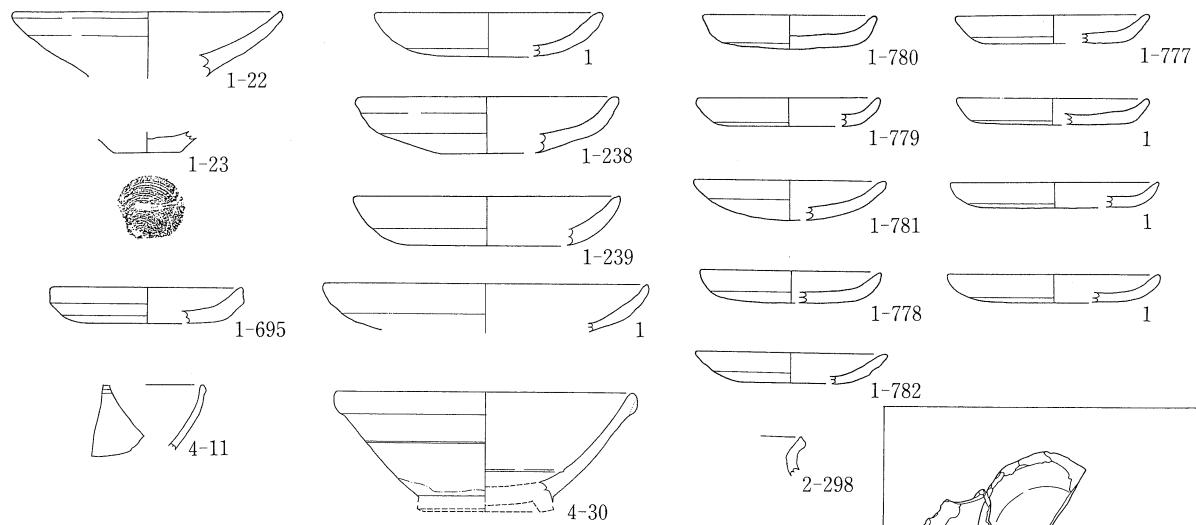
南北277cm, 東西220cmの楕円形で, 断面はレンズ形を呈する土坑で, 深さは最深部で48cmである。南東隅にかかるS K915より古い。遺物は土坑の中央部から多く出土した。中世土師器皿RB類(46～48)・皿NB II類(324・325)・皿ND I類(722～724)・皿ND II類(897～900)・高台皿(1743), 中国製白磁碗, 中国製青白磁碗(139)が出土している。遺構の時期は12世紀後半～13世紀初である。

1282号土坑（S K1282, 第258図）

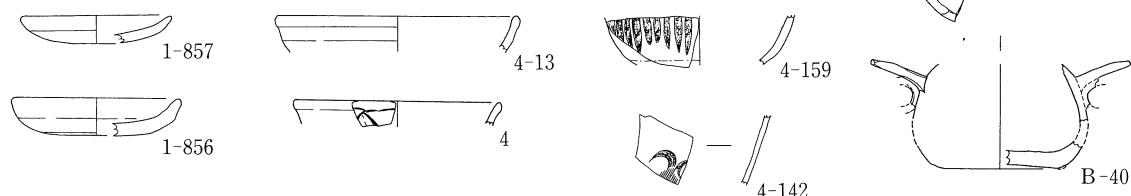
北側は攪乱により不明瞭であるが, 本体部分の規模は南北242cm, 東西は推定約230cm, 深さ31cmの方形土坑である。覆土には炭化粒, 焼土, 多量の土器片が混入する。S D1250より古いと考えられる。須恵器, 中世土師器皿NC I類(447)・皿ND II類(1020～1023)・皿NG類(1572), 珠洲III期の擂鉢(209), 中国製白磁, 中国製青磁が出土している。遺構の時期は13～14世紀である。

1283号土坑（S K1283, 第258図）

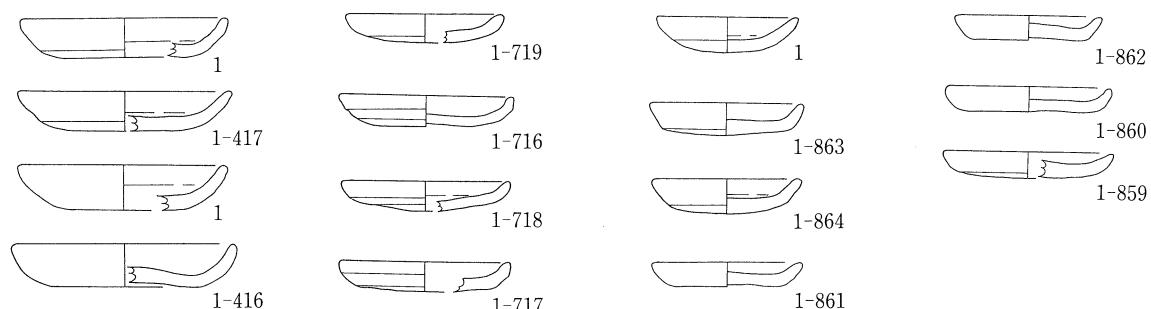
SK 309



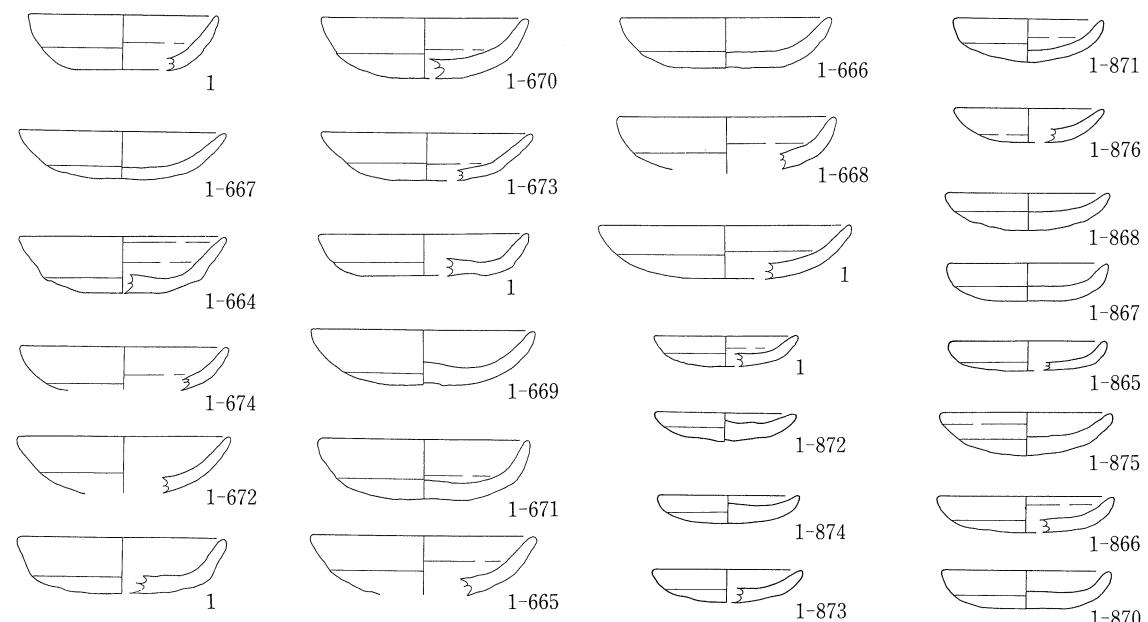
SK 773



SK 783



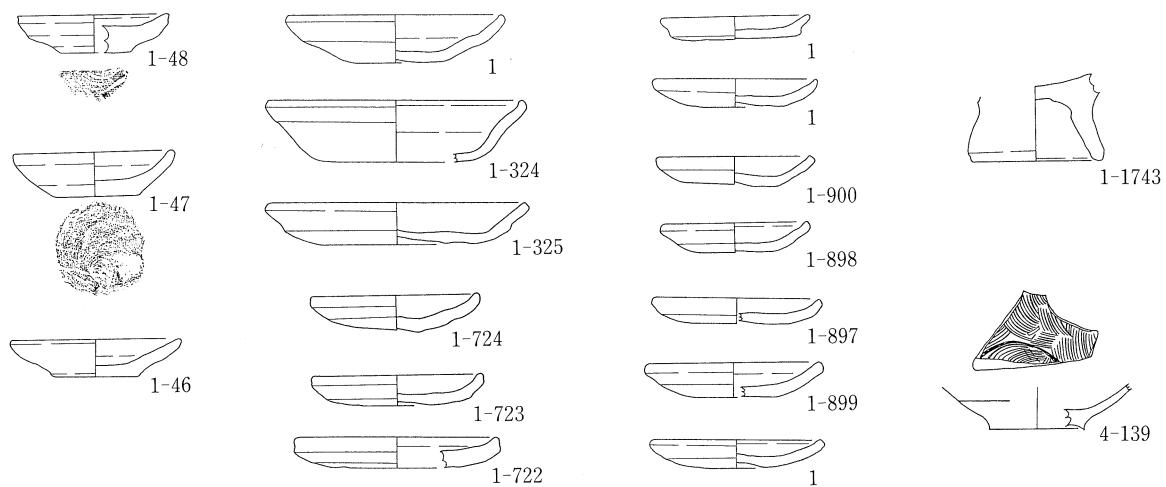
SK 839



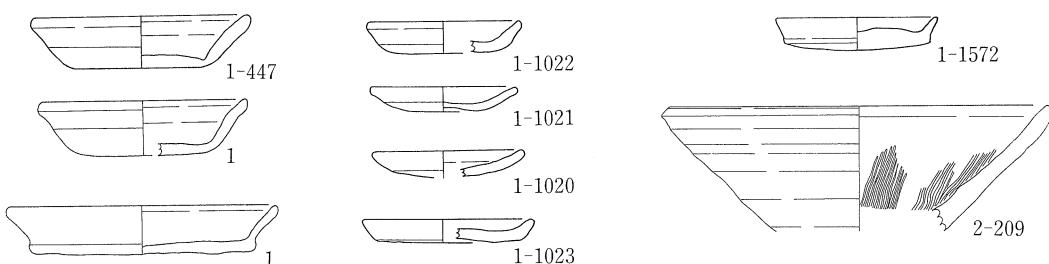
第257図 遺構出土の遺物24

SK 309 · SK 773 · SK 783 · SK 839

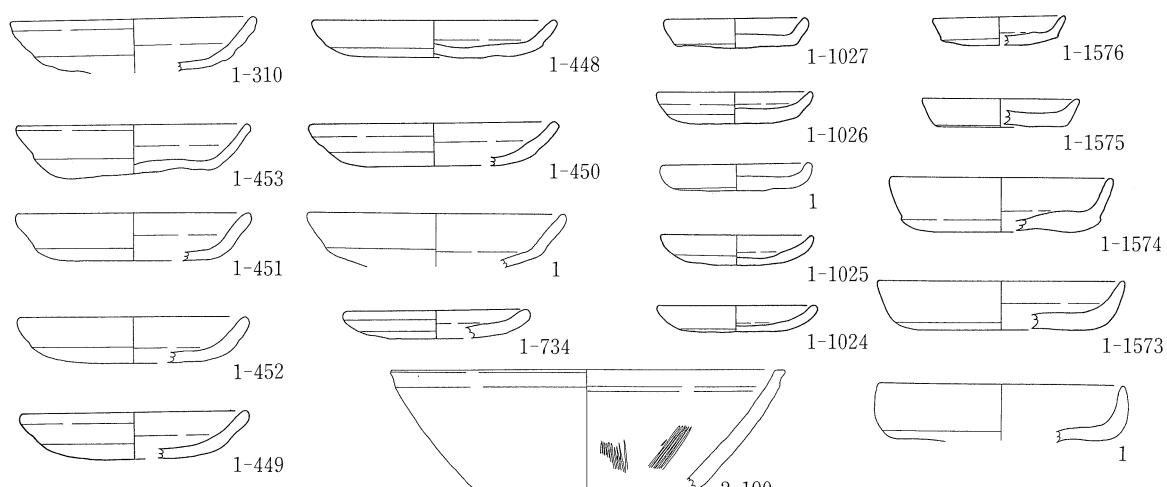
SK913



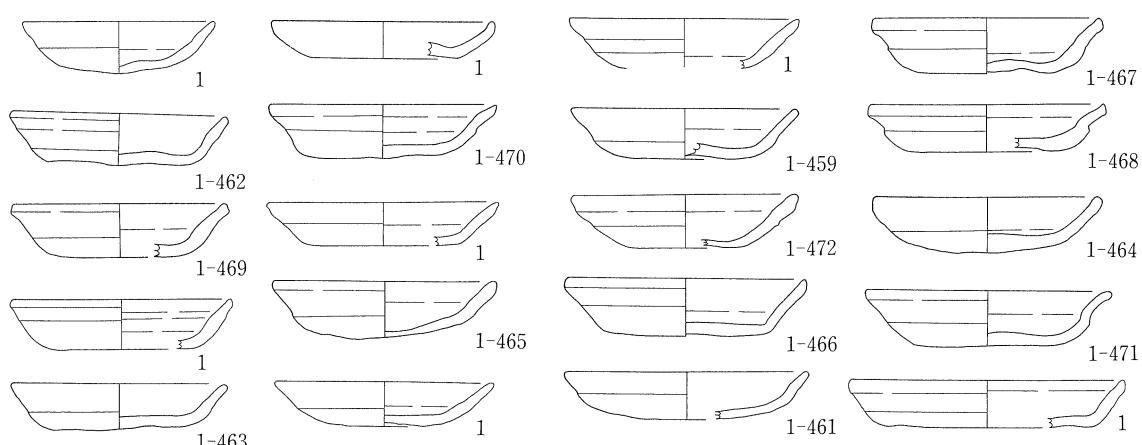
SK1282



SK1283



SK1306



第258図 遺構出土の遺物25

SK913・SK1282・SK1283・SK1306

南北は360cmの方形の土坑であったと考えられる。壁の立ち上がりは緩やかで床面は部分的に浅く窪む。切り合いかから S D1250, S E1284より古いと考えられる。中世土師器皿N B I類(310)・皿N C I類(448~453)・皿N D I類(734)・皿N D II類(1024~1027)・皿N G類(1573~1576), 珠洲II期の擂鉢(190), 中国製青磁が出土している。遺構の時期は13~14世紀である。

1306号土坑 (SK1306, 第258~259図)

南北280cm, 東西285cmのほぼ正方形で, 底は丸く深さ88cmの土坑である。覆土は3層に分かれるが, 遺物は上面から多量の中世土師器片が出土したほか, 主に第2層中から集石とともに検出されており, 意識的に一括で投げ込まれたものと考えられる。中世土師器皿N C I類(459~473)・皿N C III類(678)・皿N D II類(1041~1063)・皿N D III類(1503~1506)・皿N G類(1579), 八尾, 珠洲III~IV期の擂鉢(218), 中国製白磁, 中国製青磁碗I類5b, 唐津が出土している。

1310号土坑 (SK1310, 第259図)

深さ約20cmに堆積した暗茶褐色シルト中から, 中世土師器皿がまとまって出土した土器溜まりである。完形の土師器も混在する。遺構としての明確な平面プランは確認できなかった。中世土師器皿N C I類(475~480)・皿N C III類(679~687)・皿N D II類(1067~1098)が出土している。

2218号土坑 (SK2218, 第260図)

西側部分が未調査のため全体の規模は不明の土坑であるが, 深さは40cmを測る。中世土師器皿N C I類(500)・皿N C III類(688)・皿N D II類(1179)・皿N G類(1590・1591), 珠洲甕・II~III期の壺(319)が出土している。

2456号土坑 (SK2456, 第260~261図)

長軸291cm, 短軸248cm, 深さ59cmの長方形の土坑である。中層には炭化物が混入し, 上層から下層にかけて完形の中世土師器皿が大量に出土した。中世土師器皿N C I類(512~539)・皿N D II類(1220~1274)・皿N G類(1610~1624), 中国製青磁碗I類3(183)が出土している。遺構の時期は13世紀後半~14世紀である。

2460号土坑 (SK2460, 第261図)

南北408cm, 東西278cm, 深さ51cmの長方形の土坑である。覆土には炭化物が混入する。中世土師器皿N C I類(543~548)・皿N D I類(761)・皿N D II類(1281~1290)・皿N D III類(1508~1510)・皿N G類(1625・1626), 珠洲I期の擂鉢(172)・II期の擂鉢(193), 中国製白磁碗VIII類(83)・皿IX類1, 中国製黄釉, 唐津?, 陶器甕(69), 砥石が出土している。遺構の時期は13世紀後半~14世紀である。

2462号土坑 (SK2462, 第262図)

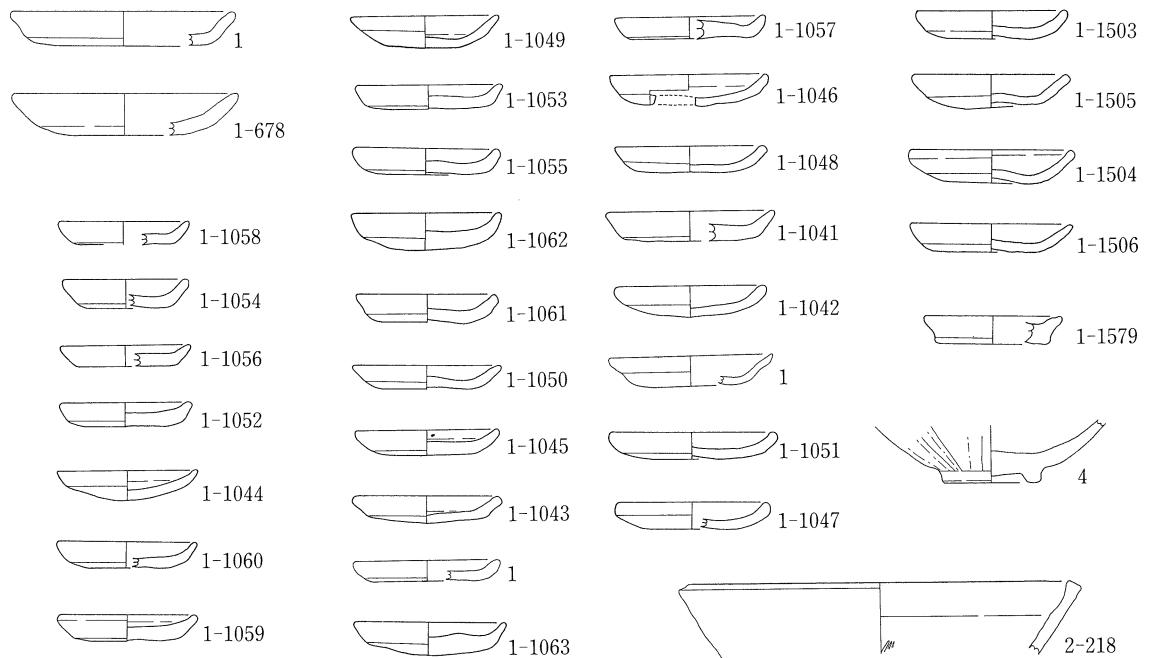
不整形であるが, 一辺513cmを測る土坑である。中世土師器皿N C I類(549)・皿N C III類(689)・皿N D II類(1294~1297)・皿N G類(1628~1630), 珠洲IV期の甕(56)・II~III期の壺(323), 濑戸美濃, 中国製白磁皿IX類1, 砥石が出土している。遺構の時期は14世紀である。

2464号土坑 (SK2464, 第262図)

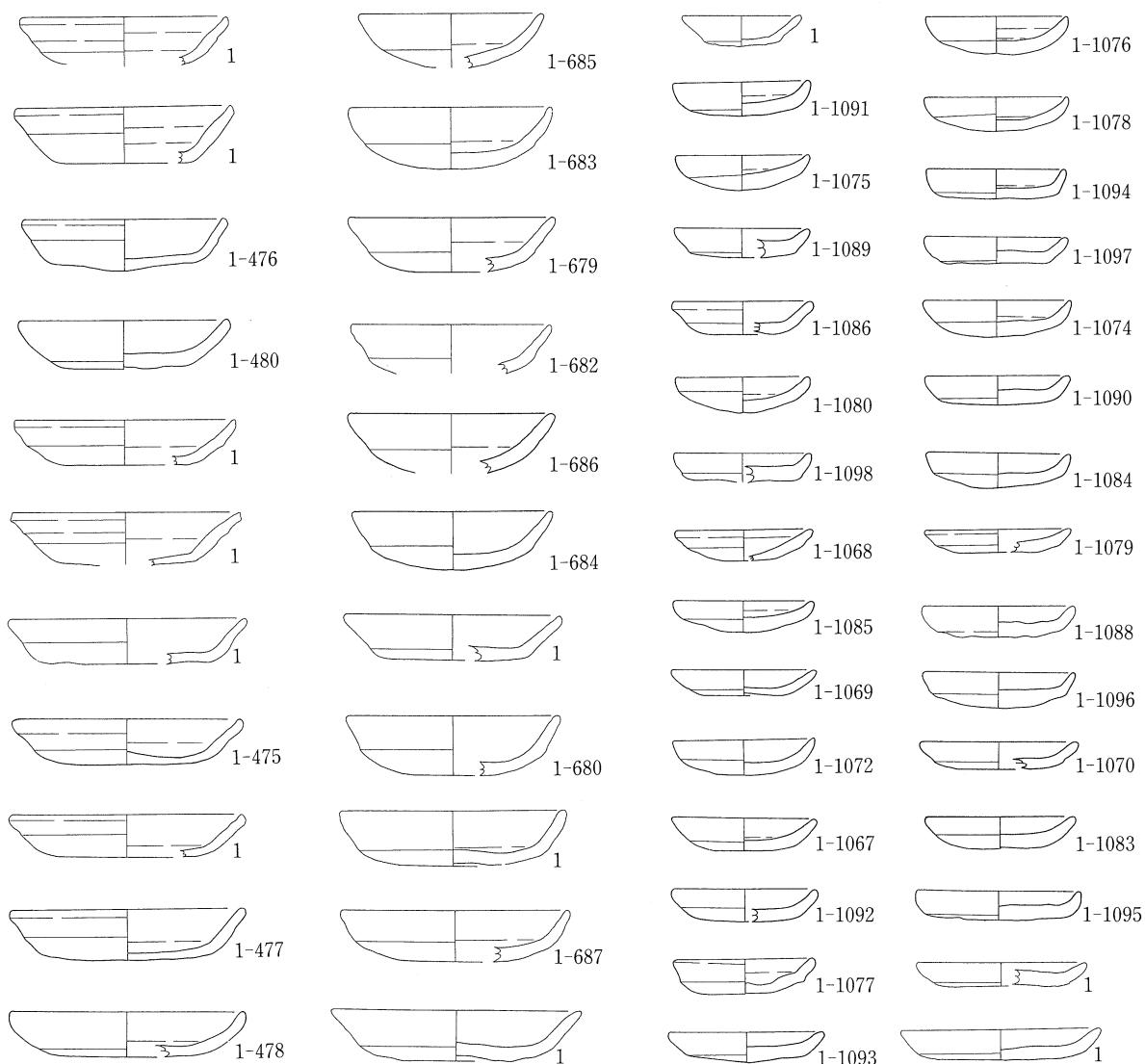
西側は未調査区であるが, 方形になると思われる土坑で, 南北は440cm, 東西現存260cmを測る。覆土はレンズ状に堆積し, 焼土, 炭化物がわずかに混じる。中世土師器が多数出土しており, 特に東側上層に多い。中世土師器皿N A II類(286)・皿N C I類(550~558)・皿N D I類(762)・皿N D II類(1307~1328)・皿N D III類(1511)・皿N G類(1632~1635), 珠洲III~IV期の擂鉢, 中国製白磁, 中国製青白磁皿(148)が出土している。遺構の時期は13・14世紀である。

2470号土坑 (SK2470, 第263図)

S K1306



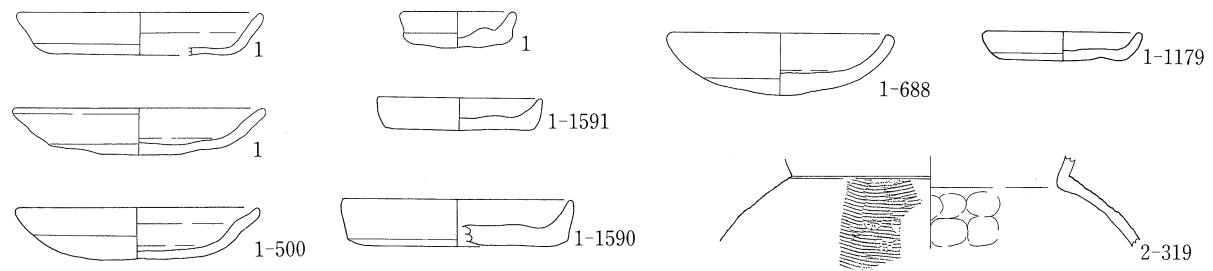
SK1310



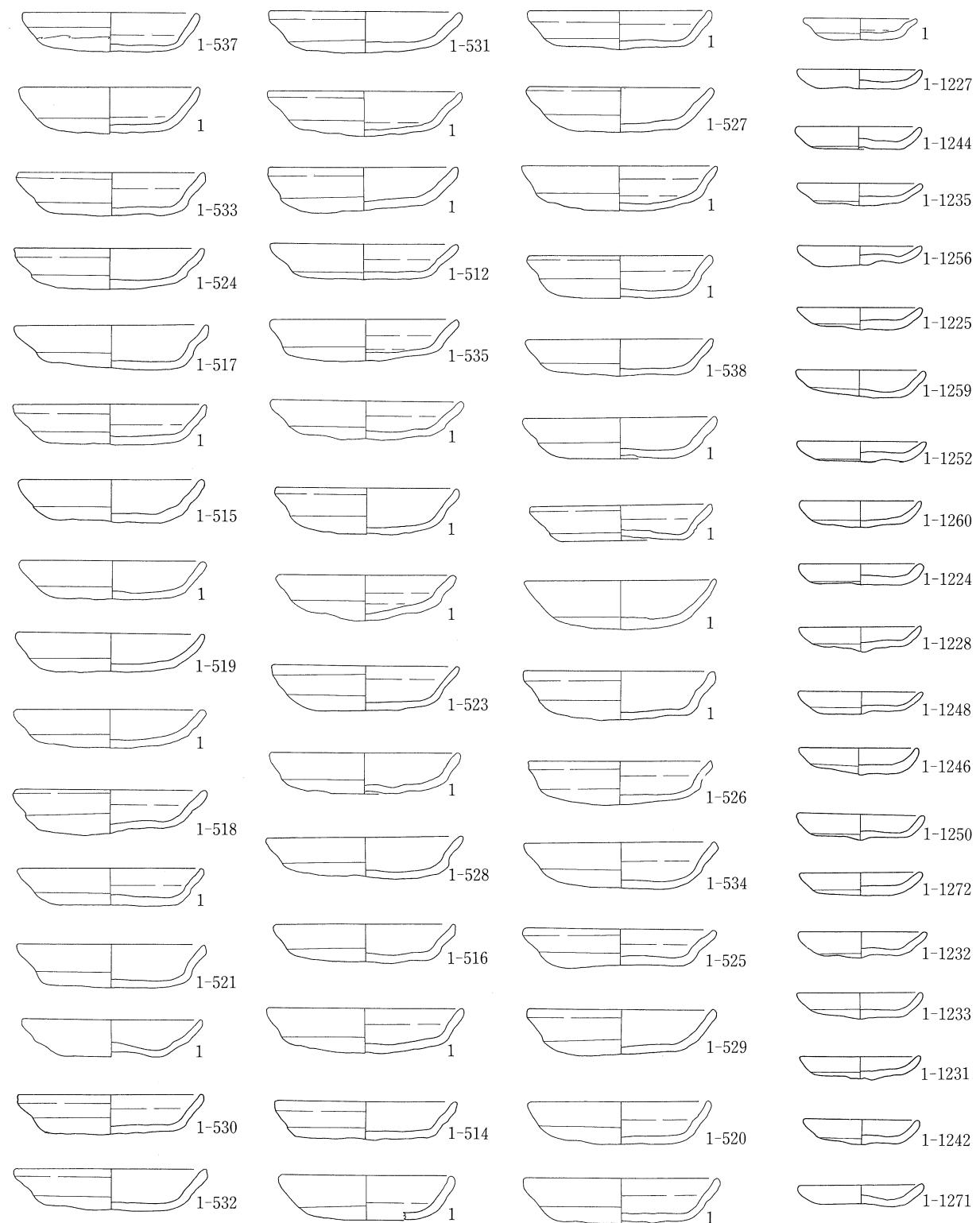
第259図 遺構出土の遺物2

SK1306 · SK1310

S K 2218



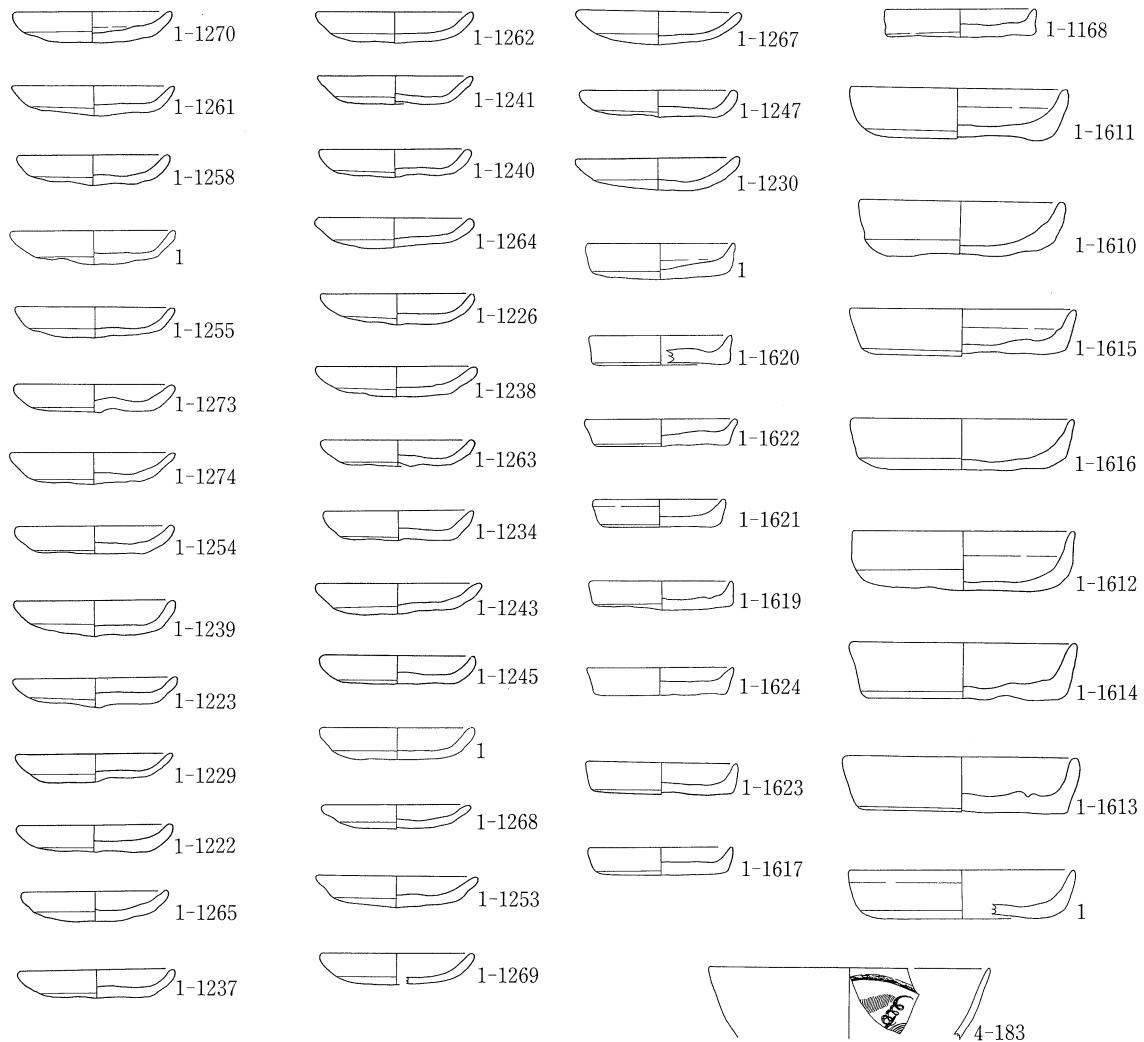
S K 2456



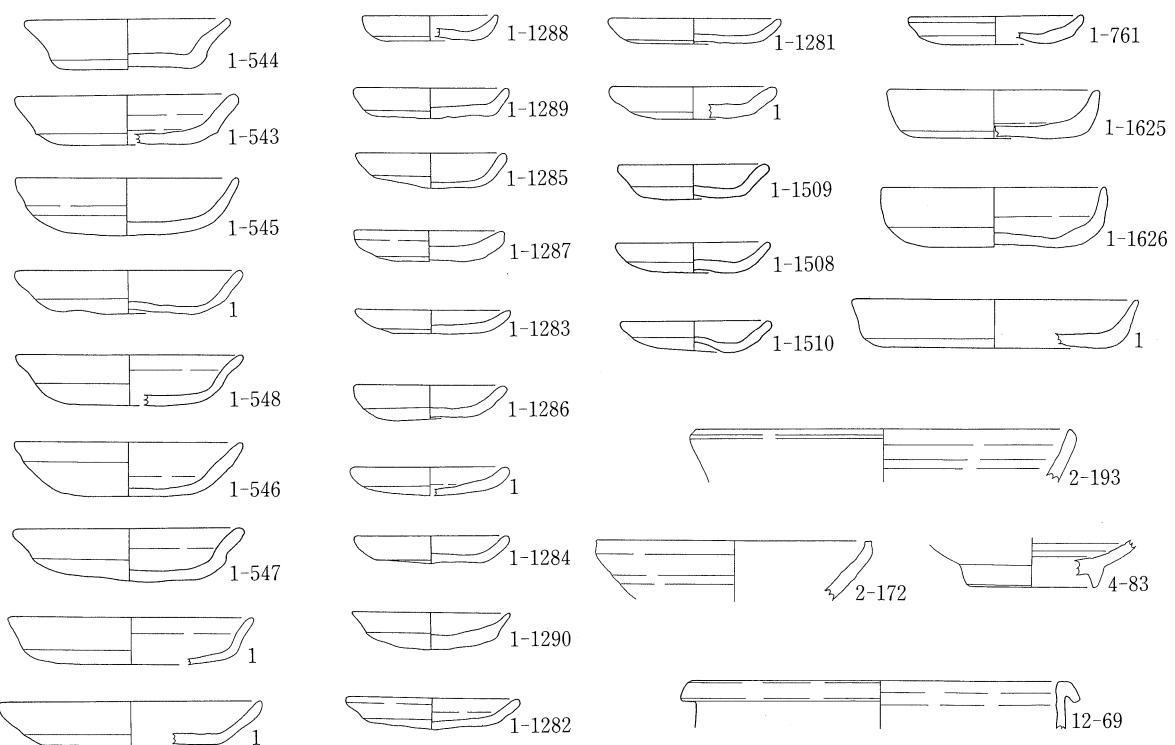
第260図 遺構出土の遺物27

S K 2218 · S K 2456

SK 2456



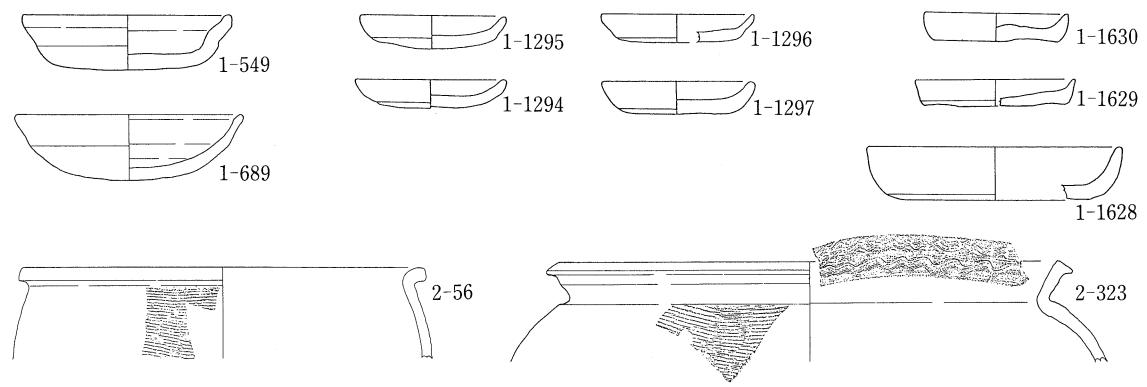
SK 2460



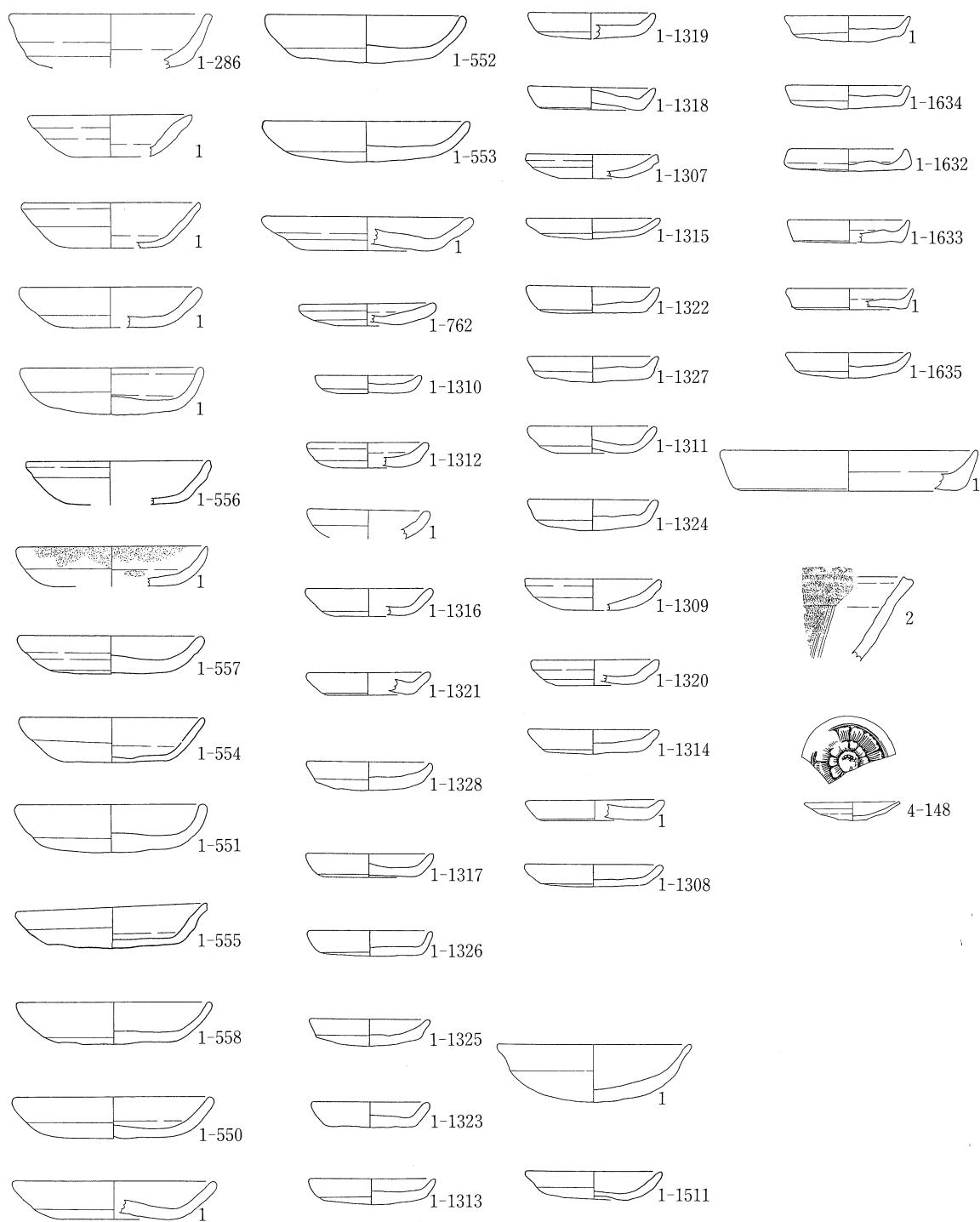
第261図 遺構出土の遺物28

SK 2456 · SK 2460

SK 2462



SK 2464



第262図 遺構出土の遺物29

SK 2462・SK 2464

西側は未調査で長さは不明であるが、短軸は153cm、深さ50cmの土坑である。覆土には炭化物が混じる。切り合いからS K2462より古い。中世土師器皿N C I類(562・563)・皿N D II類(1334～1336)・皿N D III類(1513)，珠洲，瀬戸美濃窯前期後期の鉢(43・44)，中国製青磁碗I類1a(164)・皿I類b(340)，中国製黄釉が出土している。遺構の時期は13世紀～14世紀である。

2486号土坑 (S K2486, 第263図)

南北320cm、東西314cmの不整方形の土坑である。深さは北で57cm、南は73cmを測る。5～30cmの石が中層から上層にかけて多く混じる。中世土師器皿N C I類(570)・皿N C II類(657)・皿N D II類(1343・1344)，珠洲IV期の甕(57～59)，擂鉢(234)，山茶碗，瀬戸美濃，中国製白磁，中国製青白磁小壺(153)，中国製青磁？壺？が出土している。遺構の時期は13世紀～14世紀である。

3597号土坑 (S K3597, 第263図)

長軸365cm、短軸200cmの長方形を呈する土坑である。上層は貼床面を形成しており、下層には炭が混じる。中世土師器皿N C I類(596～599)・皿N D II類(1413～1423)，珠洲，中国製白磁，羽釜が出土している。羽釜は下層から出土した。

3750号土坑 (S K3750, 第263図)

長軸447cm、短軸360cm、深さ51cmの長方形の土坑である。覆土には砂利や礫が多く、底面の土は炭化物を含み、藁状のものを敷いたとも考えられ、竪穴状土坑と推定される。中世土師器皿N C I類(600・601)・皿N D II類(1429・1430)，八尾，珠洲II期の擂鉢(199)・IV～V期の甕(92)，珠洲系陶器甕，越前，中国製青磁碗D II類(240)，石鉢，羽口が出土している。遺構の時期は14～15世紀である。

4483号土坑 (S K4483, 第264図)

S D3404の下層から確認した土坑である。南北105cm、東西120cm、深さ45cmの不整形の土坑である。下層からは多量の中世土師器皿と卒都婆，柄箸等の木製品が出土した。卒都婆には梵字が墨書きされていたことや、中世土師器が大量に出土したこと、箸が斎串として使用されることなどから供養関連の祭祀を行ったと考えられる。中世土師器皿はN C I類(610～613)・皿N D II類(1445～1457)が出土している。遺構の時期は13世紀である。

1199号土壙墓 (S Z1199, 第265図)

長軸185cm、短軸80cm、深さ30cmの長方形の土坑である。土坑の北端で完形の中世土師器が小皿4枚の中心に大皿1枚を配する状態で検出された。木棺墓とその副葬品と推定される。中世土師器皿N B II'類(398～402)が出土している。遺構の時期は13世紀初頭である。

3011号畝状土坑 (S X3011, 第265図)

長軸8m、短軸7.4mの長方形の範囲に、30～40cm幅の溝が東西に35条、南北に6条連なる畝状遺構である。S B98の柱穴より新しい。中世土師器皿N D II類(1388～1390)・皿N G類(1638・1639)，珠洲，中国製白磁，中国製青磁が出土している。遺構の時期は13世紀～14世紀である。(越前慎子)

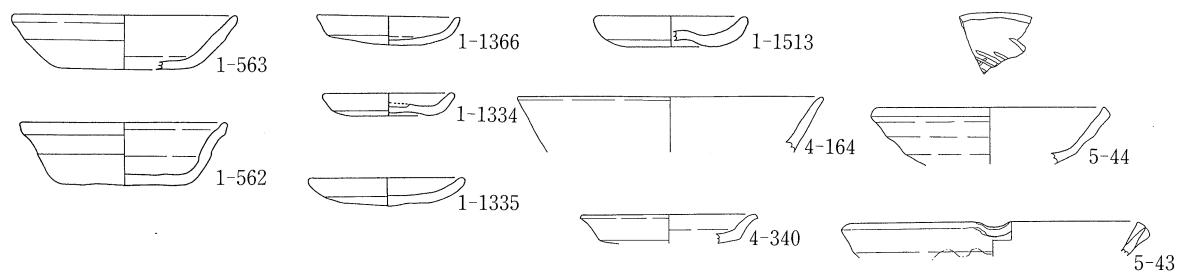
2. 中世後期

A. 建物

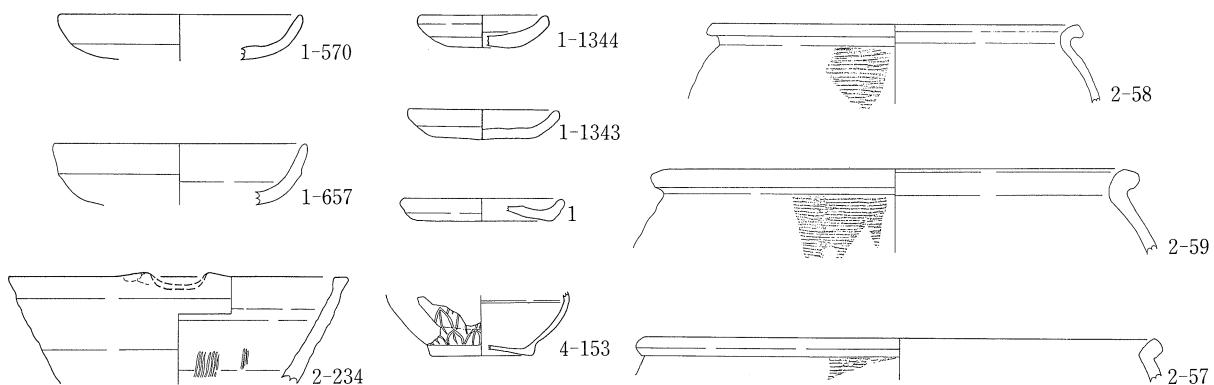
145号掘立柱建物 (S B145, 第265図)

発掘区中央部B地区の建物群のやや北寄りに位置する、1間×1間の南北棟側柱建物である。柱穴の掘り方は円形で、直径約1mの大型のものである。柱穴内から中世土師器，瀬戸美濃腰折皿(36)，中国製青磁稜花皿(287)，土師質土器擂鉢(35・41)，柱，石臼などが出土している。青磁稜花皿は15

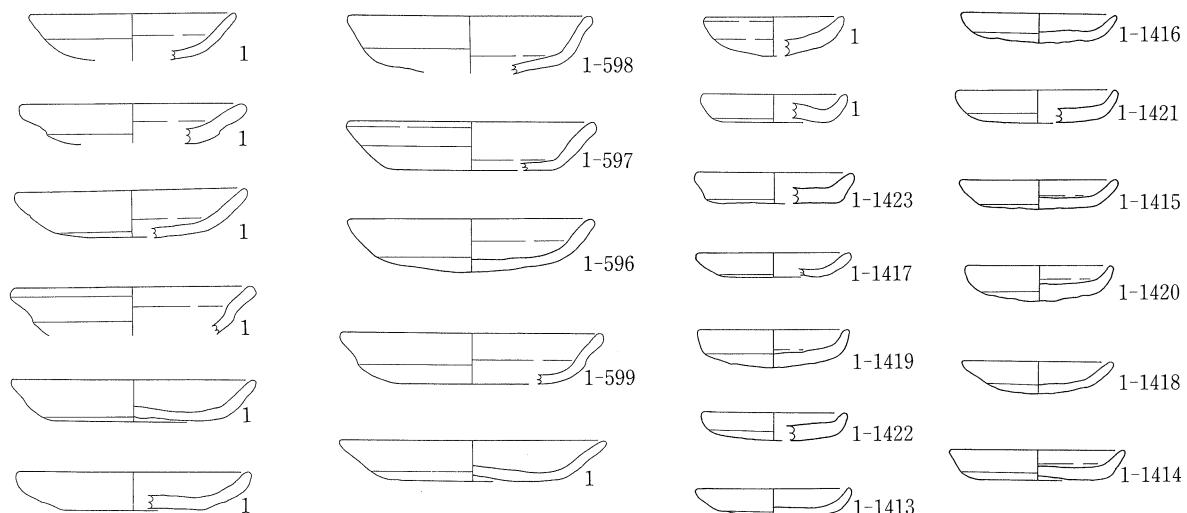
SK 2470



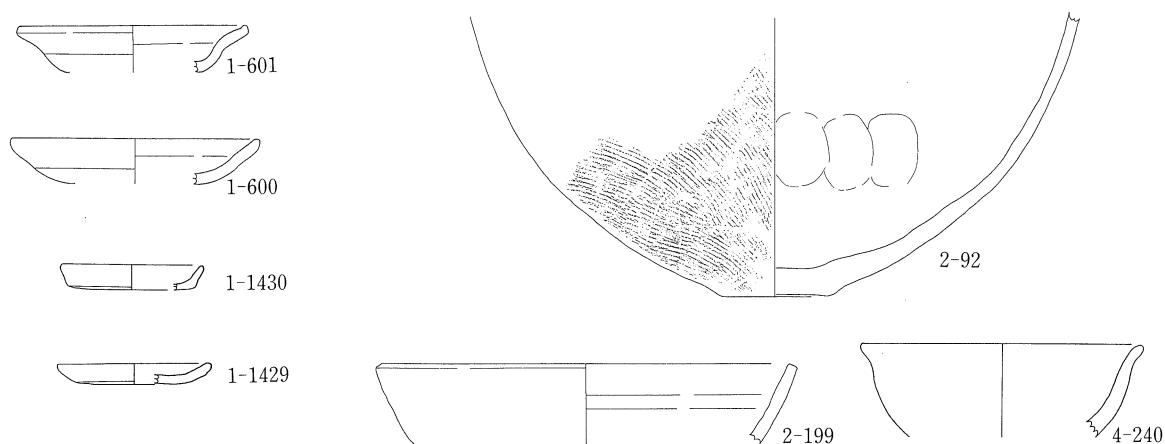
SK 2486



SK 3597



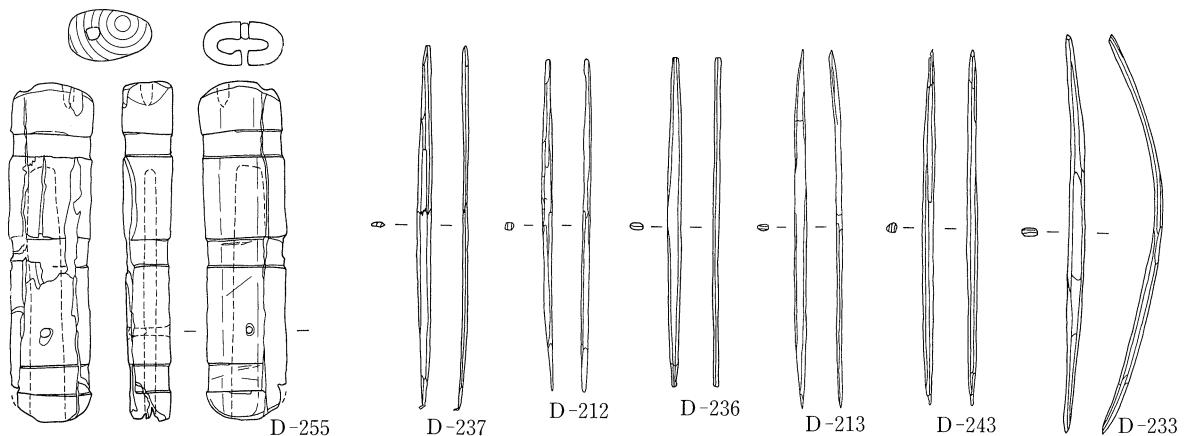
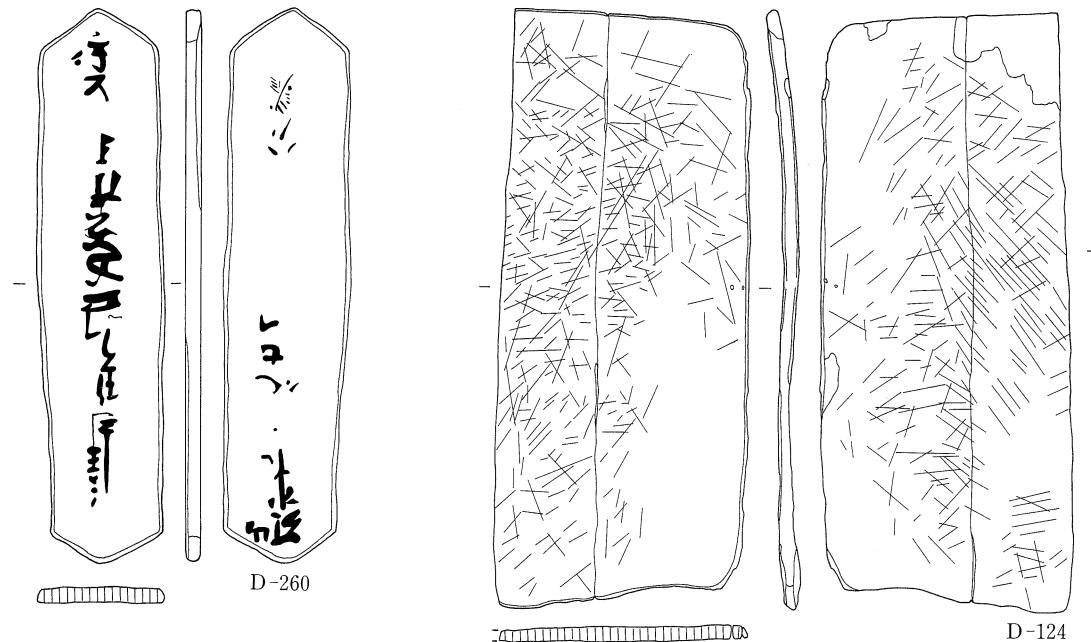
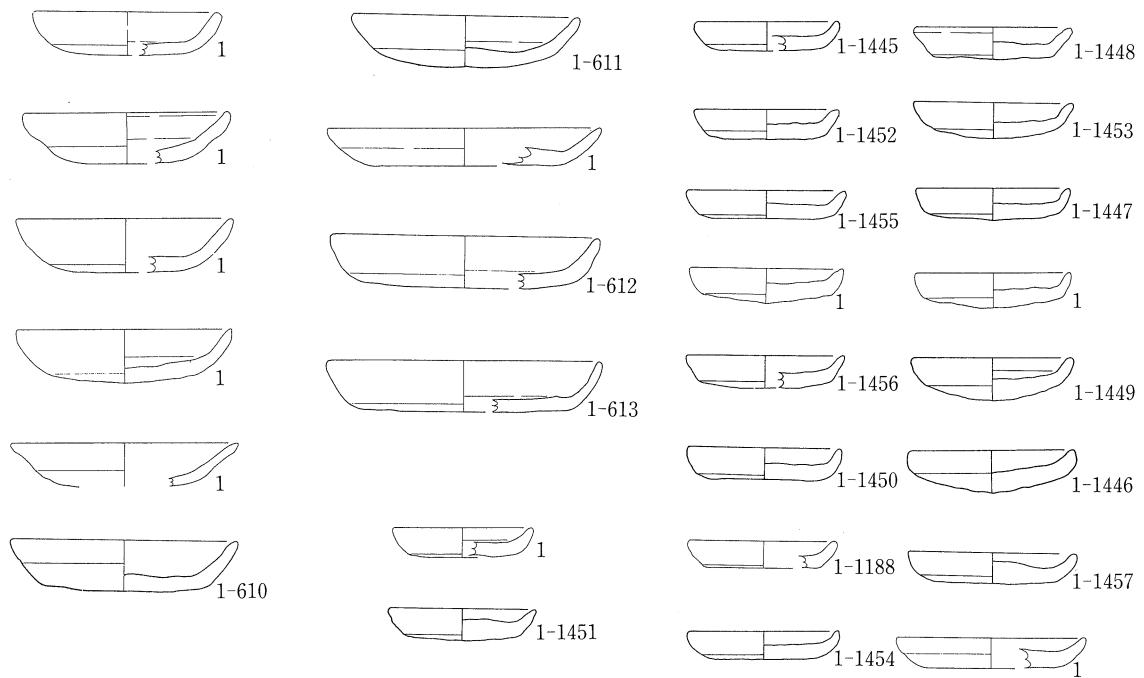
SK 3750



第263図 遺構出土の遺物30

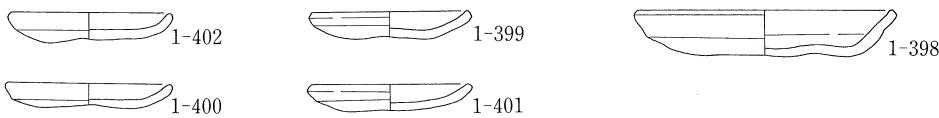
SK 2470・SK 2486・SK 3597・SK 3750

S K 4483

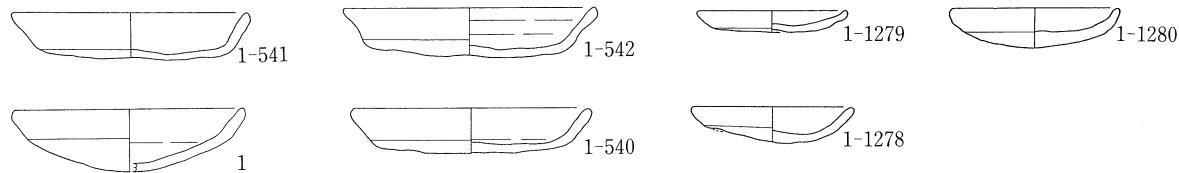


第264図 遺構出土の遺物31
S K 4483

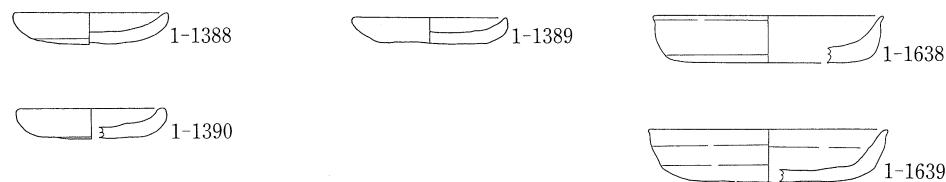
S Z 1199



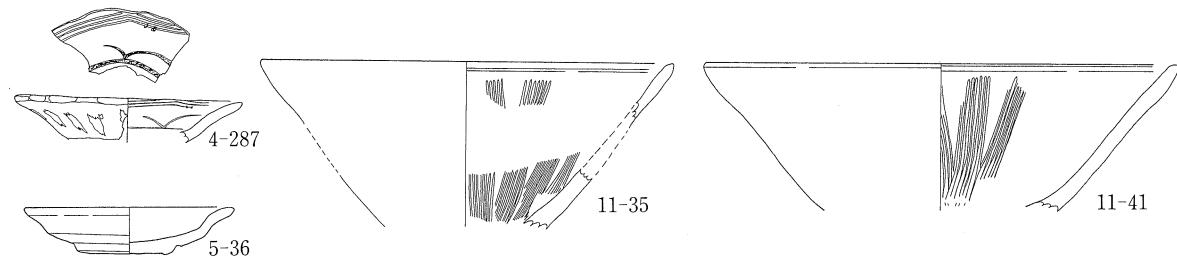
S X 2458



S X 3011



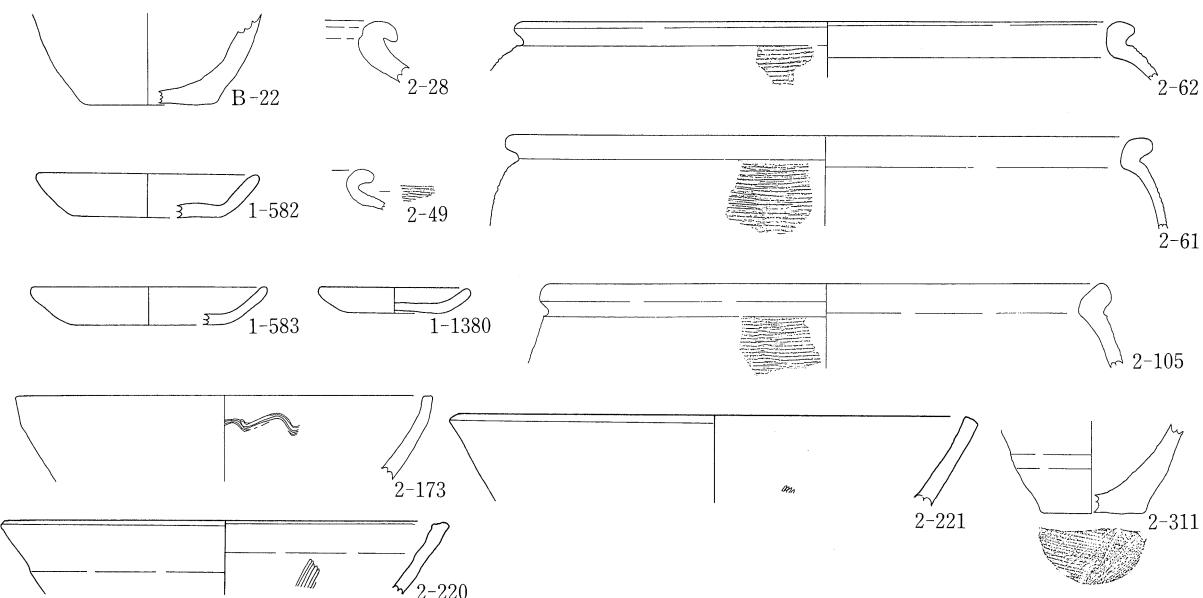
S B 145



S B 189



S D 3005



第265図 遺構出土の遺物32

S Z 1199 · S X 2458 · S X 3011 · S B 145 · S B 189 · S D 3005

世紀代、瀬戸美濃皿は窯窓後期末のもので15世紀後半期の年代が与えられる。建物の時期は、15世紀末～16世紀前半と考えられる。

189号掘立柱建物（S B189, 第265図）

発掘区やや南寄りのC 1 地区の北東部に位置する、2間×1間の南北棟側柱建物である。柱穴から瀬戸美濃天目茶碗(80), 柱が出土している。瀬戸美濃の編年では大窯のI期に比定でき15世紀末～16世紀前葉の年代が与えられる。建物の時期は16世紀代と考えられる。 (山本正敏)

B. 溝

3005号溝（S D3005, 第265～266図）

S D2203と並行し北に向かって流れる溝である。遺物には土師器、須恵器壺(22), 中世土師器皿N C I類 (582・583)・皿N D II類 (1380), 八尾甕 (39), 珠洲II期の甕 (28)・III期の甕 (49)・IV期の甕 (61・62)・V期の甕 (105)・II～III期の壺 (311)・I期の擂鉢 (173)・III～IV期の擂鉢 (220・221), 越前甕, 瀬戸美濃窯窓後I期～III期の椀 (31)・窯窓後期の壺? (59), 中国製白磁, 中国製青磁碗IV? 類 (235)・壺類III類 (304)・杯? III 1類 (294), 中国製染付, 瓦器火鉢類 (1) がある。そのほか近世の遺物に越中瀬戸, 唐津, 伊万里皿 (106・122) が出土している。これらはS D2203との間にみられる近世溝のものである。遺構の時期は13～16世紀である。

3404号溝（S D3404, 第266図）

北流する南北溝で, S D3407に続く。遺物は縄文土器, 須恵器, 中世土師器皿N C I類 (588)・皿 N D II類 (1393), 珠洲甕・壺・V期の擂鉢, 珠洲系陶器甕 (348), 越前甕 (31), 瀬戸美濃, 中国製白磁, 中国製青磁, 中国製染付, 越中瀬戸が出土している。

3407号溝（S D3407, 第266図）

西流する東西溝でS D3404とS D4602に続くと考えられる。遺物は須恵器, 中世土師器皿N B I類・皿N D I類 (763)・皿N D II類 (1394)・皿N G類 (1641)・皿R F類 (152), 珠洲II～III期の甕 (37)・IV～V期の甕 (98)・I期の壺 (296), 越前, 瀬戸美濃, 中国製白磁, 中国製青磁碗I類5 b, 土師質土器擂鉢 (30), 唐津壺? (168) がある。木製品には横杵, 金属製品には鋤先が出土している。またS E4363の西側から成人男性と思われる前頭骨片, 側頭骨片, 下顎骨片, 白歯歯根破片がみられた。遺構の時期は15～16世紀である。

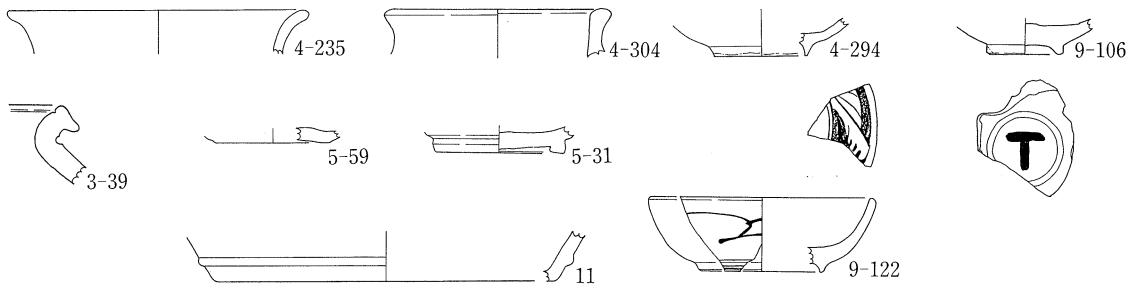
4602号溝（S D4602, 第266図）

東西溝で, 中央やや東寄りから以西ではこの溝と合流しながら並走する。S D3407に続く可能性が高い。遺物は縄文土器, 土師器, 須恵器, 中世土師器皿N C I類 (614～616)・皿N G類 (1659・1660), 珠洲I期の擂鉢 (178)・V期の擂鉢 (250・258), 越前甕 (26・36), 瀬戸美濃大窯II期の丸皿 (194・195), 中国製白磁皿E群 (111), 中国製青磁碗B IV類 (264), 中国製染付碗, 土師質土器擂鉢 (34), 漆器椀 (133・153・155・163) が出土している。また埋土に含まれる花粉分析の結果から, 林を切り倒した土地に立地し, 周辺に畠がつくられていたことが推測される。遺構の時期は15・16世紀である。

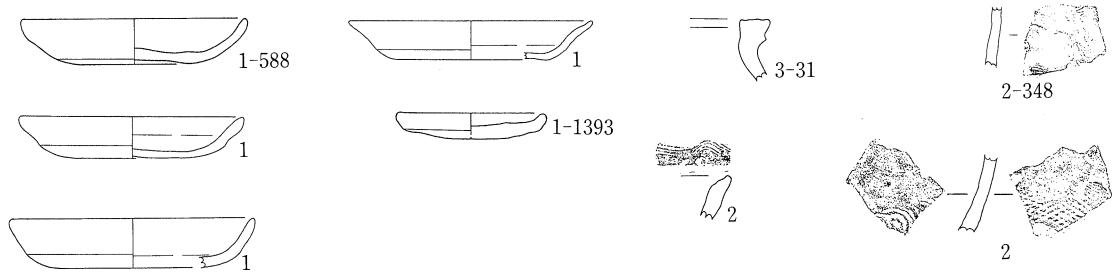
4605号溝（S D4605, 第267図）

南北溝で, 中世後期と近世の2時期の流れが推定され, 近世の流れはS D502に続くものと考えられる。遺物は縄文土器, 須恵器, 中世土師器皿R F類 (154)・皿N C I類 (617)・皿N D III類 (1520)・皿N J類 (1675～1677), 八尾, 珠洲IV期の甕 (65)・壺?, 越前, 瀬戸美濃大窯III期以降の天目茶碗 (133・134)・窯窓後III期の折縁深皿 (50), 中国製白磁碗V類4 a (48), 中国製青白磁合子身 (155), 中国製青磁碗B IV'類 (274)・碗III類2, 中国製染付, 越中瀬戸, 唐津椀 (190), 伊万里がある。木製

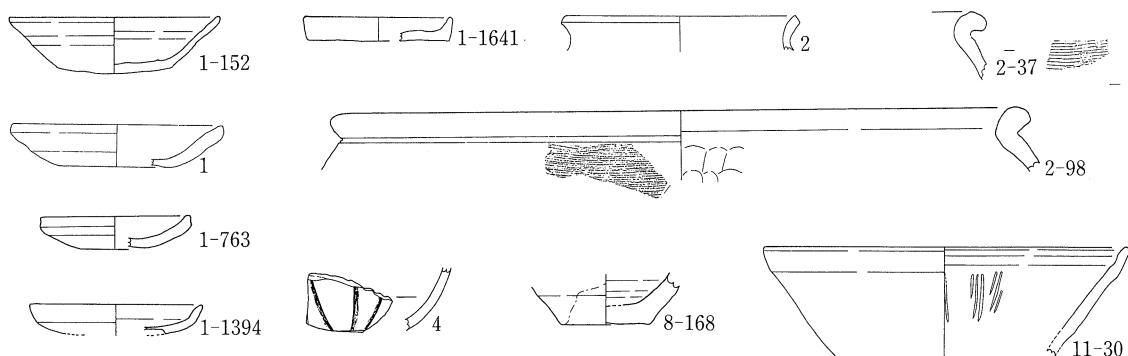
SD 3005



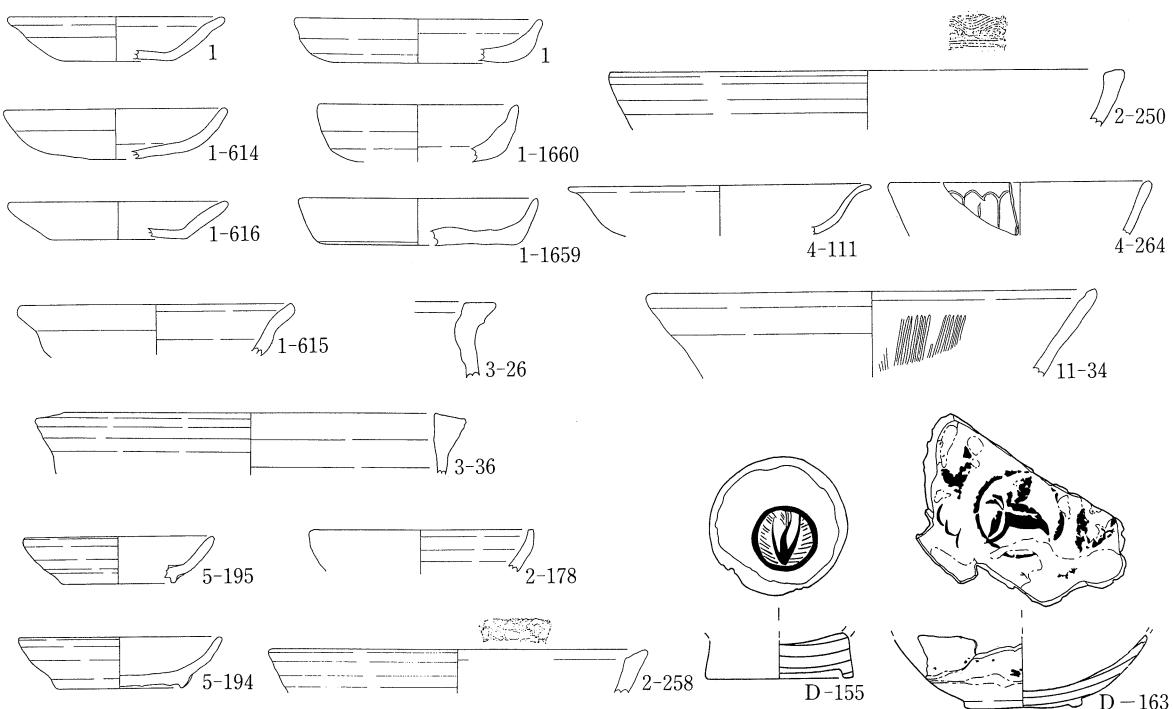
SD 3404



SD 3407



SD 4602



第266図 遺構出土の遺物33

SD 3005 · SD 3404 · SD 3407 · SD 4602

品には漆器・下駄・加工木、石製品には石臼が出土している。遺構の時期は15~17世紀である。

4606号溝（S D 4606, 第267図）

東西方向からX281Y91で北に直角に曲がり、S D 4605に平行して北流する。そこでS D 4607に切られる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は縄文土器、須恵器、中世土師器皿N C I類(619)・皿N D II類(1459・1460)・皿N D III類(1521)、八尾甕(49)、珠洲IV期の甕(87)・V期の擂鉢(259)、越前、瀬戸美濃窯後IV期の平椀(29)・大窯I期の丸椀(165)・大窯I期の端反皿(168)・大窓I期ないしII期の擂鉢(252)、中国製白磁皿E群(112)、中国製青磁碗I類5b(211)、中国製染付碗(347)、唐津、陶器小壺(42)、漆器椀(147)、石臼が出土している。

4805号溝（S D 4805, 第267図）

S D 4802と平行する東西方向の溝である。遺物は中世土師器の皿N C I類(629・630)・皿N D II類(1468・1469・1471~1473)・皿N D III類(1525)・皿N E類(1529~1536)・皿R C類(123)、珠洲IV期の甕(86)・III~IV期の擂鉢(224)、越前、瀬戸美濃窯前期後期の底卸皿(47)、瓦器火鉢類(3)、伊万里が出土している。遺構の時期は15世紀である。

5312号溝（S D 5312, 第268図）

南北方向の溝で、S D 5059と切り合うが新旧関係は不明確である。S D 5059と交差する北側では最下層から中世土師器が出土する。遺物には土師器鍋(32)、須恵器、中世土師器皿N C I類(638・642)・皿N D II類(1482)・皿R B類(117・118)・皿R F類(166)、瀬戸美濃、中国製青磁碗I類6b(218)が出土している。遺構の時期は13~16世紀である。

5935号溝（S D 5935, 第268図）

南北方向の溝で、15~16世紀のS E 5914・S E 5915より新しい。中世土師器皿N J類(1701)、八尾、珠洲I期の甕(15)・V期の甕(110)・IV期の擂鉢(239・240)、瀬戸美濃大窯I期の天目茶椀(70・71)・窯窓後期末の香炉(35)、中国製青磁碗I類1~6・IV類？(232)、土師質土器擂鉢、越中瀬戸秉燭(135)、唐津、伊万里碗(55・58)、瀬戸美濃本業III期の壺？(15)、陶器椀、砥石が出土している。近世の遺物は混入と考えられ遺構の時期は15~16世紀である。

6096号溝（S D 6096, 第268図）

南北方向から東西方向に屈曲する逆「L」字状の溝で、S K 6048に続く可能性がある。遺物は中世土師器皿N J類(1686)・皿N D II類(1491)、珠洲IV類の壺(329)、越前、加賀、瀬戸美濃大窯III期の丸皿(203)、中国製白磁、中国製染付、越中瀬戸A類の擂鉢(157)、唐津、伊万里、陶器徳利(12)、砥石・石硯・石鉢が出土している。この溝は近世土坑との切り合いが多く、前述のように近世の遺物も多く混入する。しかし、ここでは切り合い関係を考慮して、遺構の時期は16世紀と考えたい。

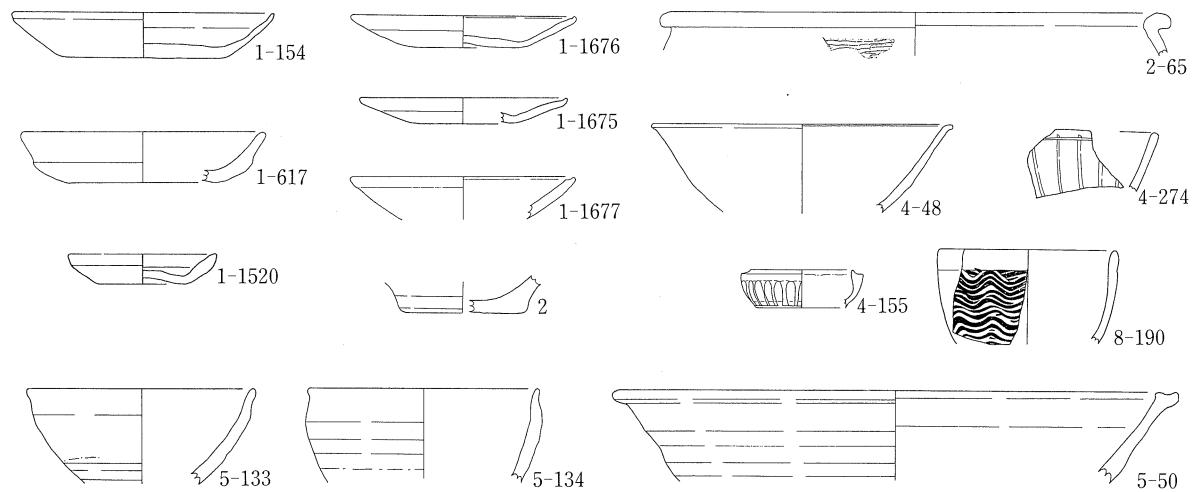
7200号溝（S D 7200, 第269図）

南北方向から東西方向に屈曲する逆「L」字状の溝である。南北方向ではS D 5910に、東西方向では18・19世紀の遺構に切られる。またS D 7220・S D 7535と同時期に機能していたものである。遺物は中世土師器皿N J類(1703~1705)・皿N D II類(1493)、珠洲、越前、瀬戸美濃、中国製白磁、中国製青磁碗IV?類(233・237)、中国製染付碗(345)、越中瀬戸皿、唐津皿3類(117)、伊万里碗(23)・小杯(145)・そば猪口(141)、砥石・石硯・石鉢が出土している。近世の遺物も出土しているが主体の時期は16・17世紀である。

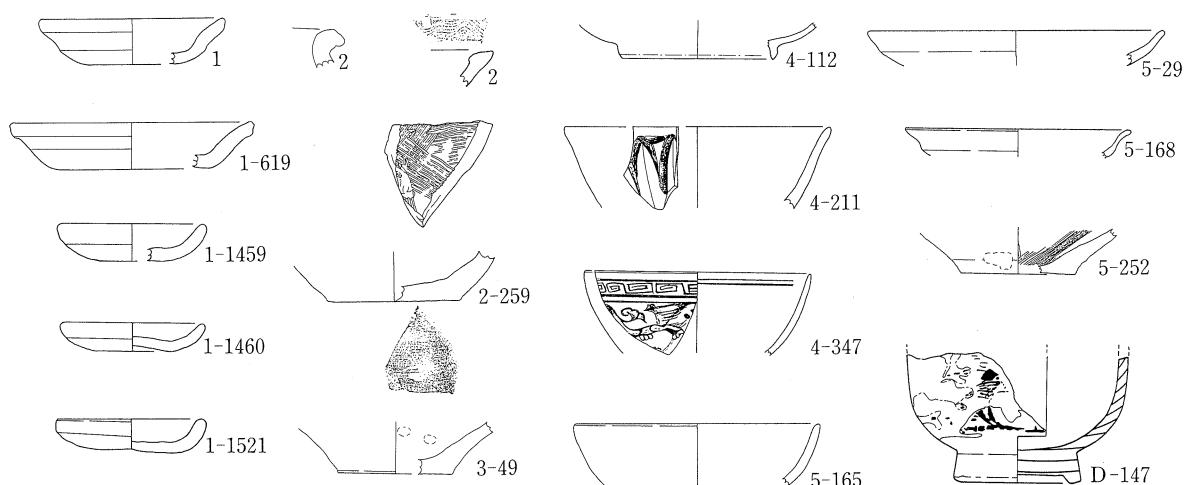
7220号溝（S D 7220, 第269図）

S D 7200とS D 7600を繋ぐ南北溝である。遺物は中世土師器皿、珠洲III~IV期の擂鉢(225)、瀬戸

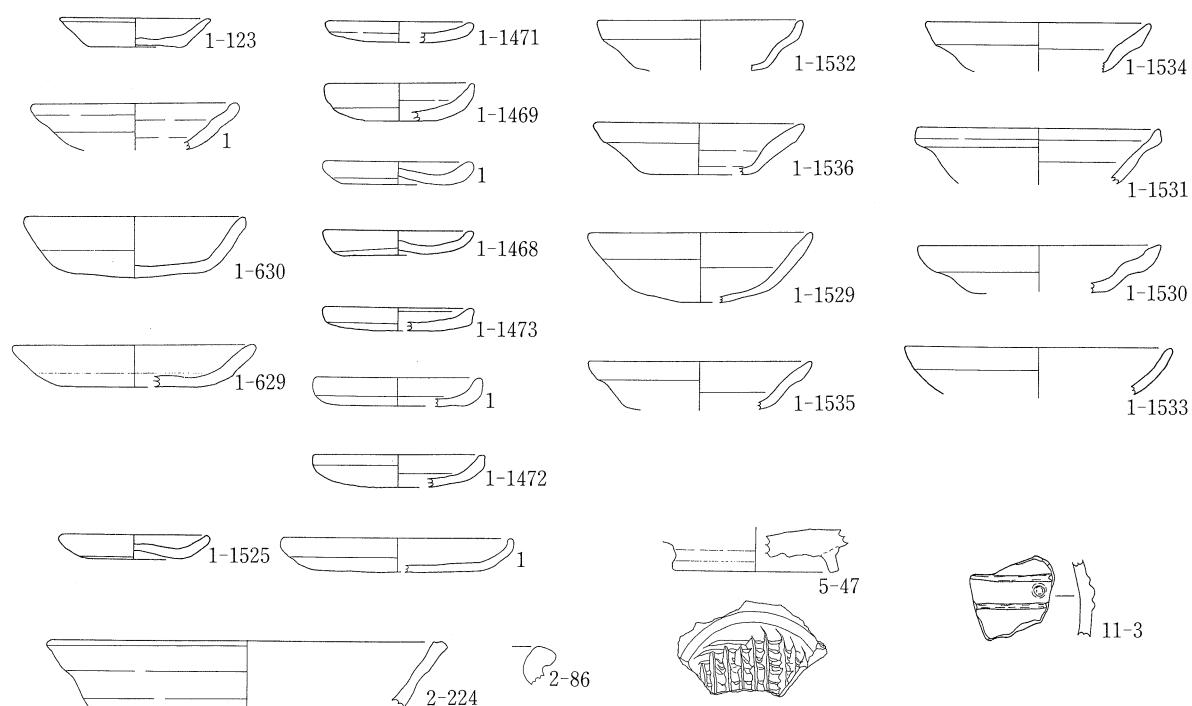
SD 4605



SD 4606



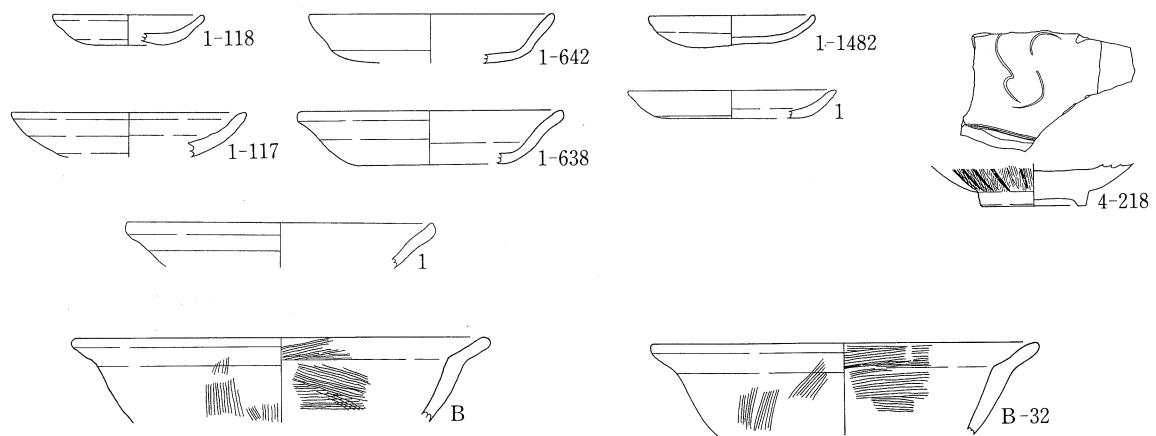
SD 4805



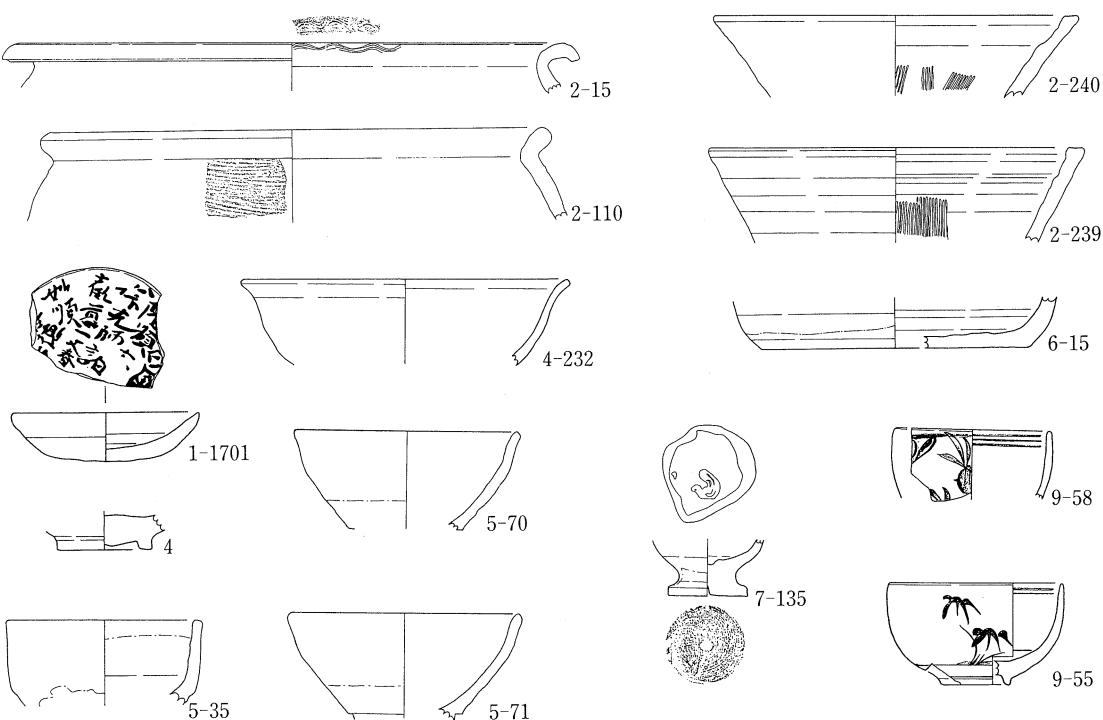
第267図 遺構出土の遺物34

SD 4605 · SD 4606 · SD 4805

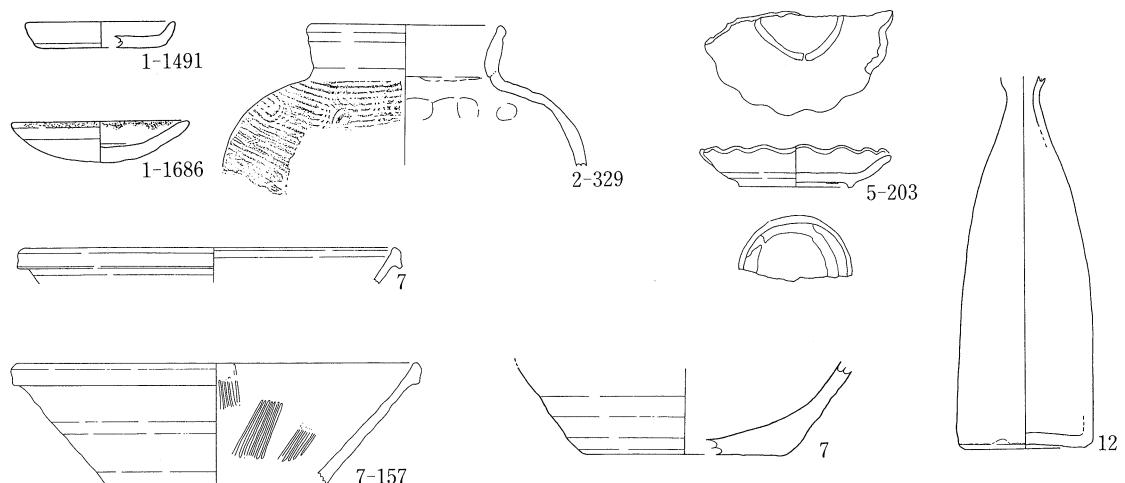
SD 5312



SD 5935



SD 6096



第268図 遺構出土の遺物35

SD 5312 · SD 5935 · SD 6096

美濃, 中国製白磁, 中国製青磁碗C III ?類(278), 中国製染付碗(356), 越中瀬戸, 唐津椀4類(158), 伊万里瓶(143), 石臼・石鉢が出土している。近世の遺物は混入と考えられる。遺構の時期は14世紀～16世紀である。

7520号溝 (S D 7520, 第269図)

S D 7535を起点とする東西方向の溝で西端は北に屈曲する。S D 7220・S K 7690・S K 8707に切られる。遺物は中世土師器皿N J類(1706・1712)皿R F類(178), 珠洲, 加賀, 瀬戸美濃, 中国製青磁碗IVイ類, 越中瀬戸, 唐津, 伊万里, ヒトの焼骨片が出土している。主体となる時期は16・17世紀である。

7535号溝 (S D 7535, 第269図)

S D 7220に平行し, S D 7200とS D 7600を繋ぐ南北溝である。S D 7600と交差する付近は一段浅くなり, S D 7600の南岸に向かって一直線に石列が検出された。この石列で溝の水量調節を行っていたのであろうか。遺物には中世土師器, 八尾, 珠洲IV期の甕(68), 加賀, 瀬戸美濃大窯III期の天目茶椀(144), 中国製白磁碗, 唐津皿1c類(16), 伊万里がある。

7600号溝 (S D 7600, 第269図)

東西方向の溝で, 調査区中央でクランクする。周辺は梅原と宗守の境界になるため, この溝がその役割を果たしたとも考えられる。覆土の堆積状況から2時期の流れが確認できる。遺物は土師器, 中世土師器皿N J類(1713～1715), 珠洲, 越前, 瀬戸美濃大窯I期の天目茶椀(74)・大窯III期以降の天目茶椀(145)・大窯I期の丸椀(161)・窖窯期の折縁深皿(51)・大窯I期の端反皿(176)・大窯III期の丸皿(206), 中国製白磁, 中国製青磁碗IVオ類・碗IV?類, 中国製染付皿(383・389), 越中瀬戸皿, 唐津椀1c類(146), 唐津京焼風火入れ(233), 陶器蓋, 漆器椀D類(177), 円形板が出土している。遺構の時期は15世紀～17世紀である。

8100号溝 (S D 8100, 第270図)

遺物には中世土師器, 珠洲, 瀬戸美濃窖窯後II期ないしIII期の平椀(27)・大窯I期の天目茶椀(76)・大窯III期以降の天目茶椀(146)・大窯I期の茶入れ(237), 中国製青磁碗, 土師質土器擂鉢, 越中瀬戸皿, 伊万里, 磁器碗が出土している。遺構の時期は16世紀である。

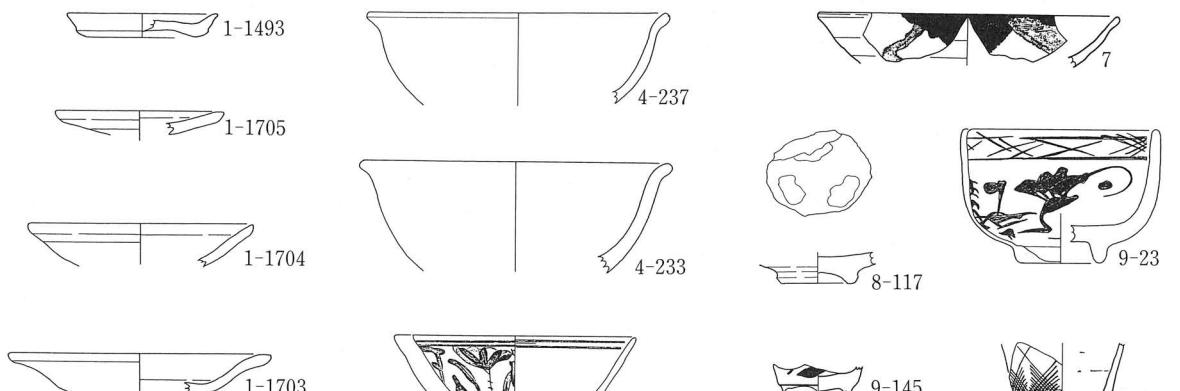
9301号溝 (S D 9301, 第270図)

北に向かって「コ」の字状を呈し, S D 9310, S D 9330を切る溝である。調査区外にのびると考えられ, 全体としては方形に巡る区画溝と推察する。溝の断面は逆台形状で, これに囲まれるようにS D 9312, S D 9313, S K 9345, 建物がある。遺物は中世土師器皿R F類(184～186), 珠洲IV期の甕(73・89)・V期の擂鉢(276)・VI期の擂鉢(288), 越前擂鉢, 瀬戸美濃窖窯後期末期の椀(32)・大窯I期の天目茶椀(81～86)・大窯II期の丸椀(167)・窖窯後期末期の腰折皿(37・38)・大窯I期ないしII期の皿・大窯I期の擂鉢・大窯I期ないしII期の擂鉢・大窯II期ないしIII期の擂鉢(257), 中国製白磁, 中国製青磁碗D II類(241), 中国製染付皿(381・382), 越中瀬戸, 唐津皿1類(66), 陶器椀がある。ほかには下駄・曲物・漆器・底板, 石硯・石臼・五輪塔が出土している。また溝の東側には帶状に遺構が希薄となっている。この部分は南北に走る道の可能性が高い。

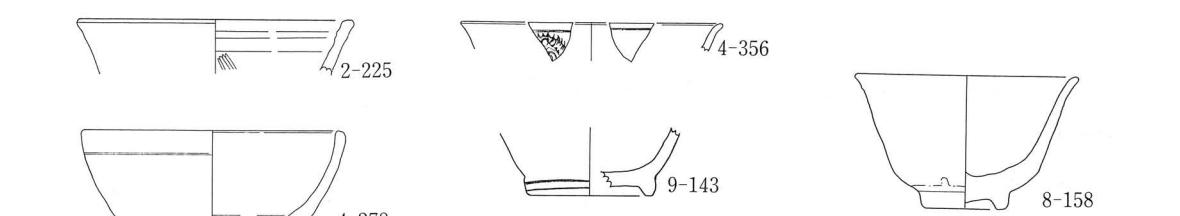
9310号溝 (S D 9310, 第270図)

南北方向の溝で, X133Y52でS D 9301と直交する。北端はS K 9358に切られる。遺物は中世土師器皿R F類(187), 珠洲, 越前, 信楽, 瀬戸美濃大窯III期以降の天目茶椀(148)・窖窯後IV期の折縁深皿, 中国製青磁碗(280), 羽口, 下駄が出土している。遺構の時期は16世紀前半である。

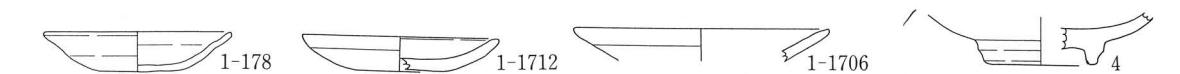
SD7200



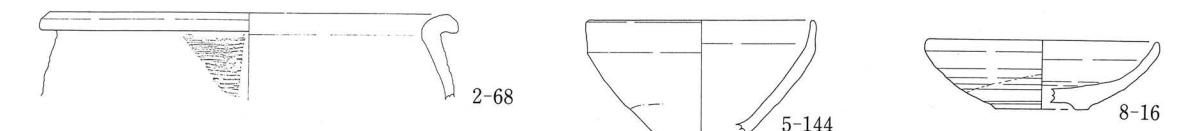
SD7220



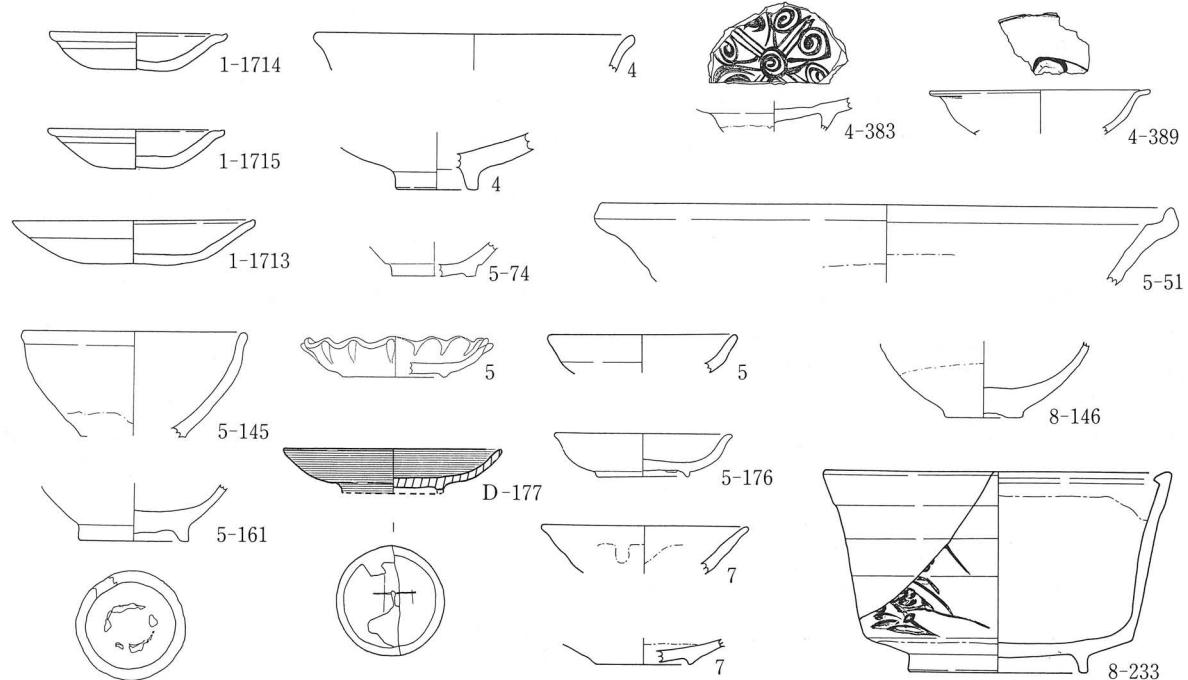
SD7520



SD7535



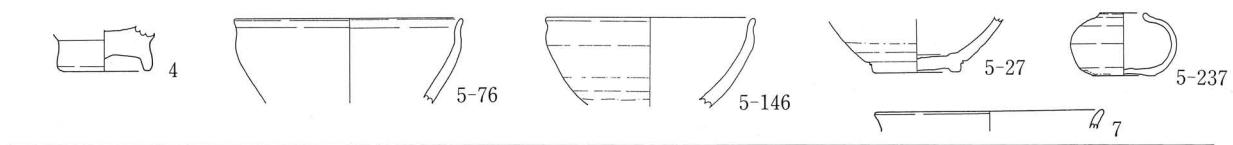
SD7600



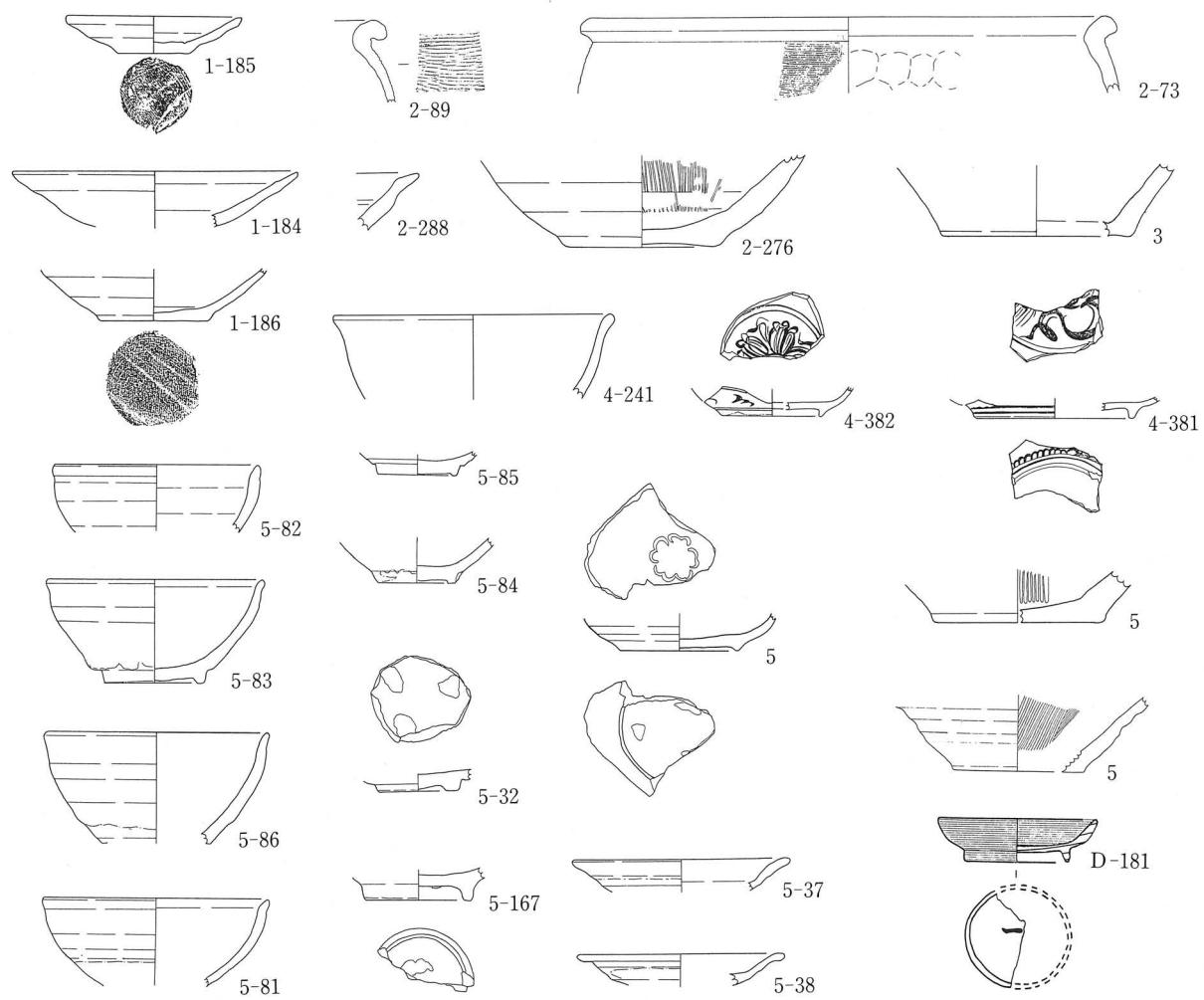
第269図 遺構出土の遺物36

SD7200・SD7220・SD7520・SD7535・SD7600

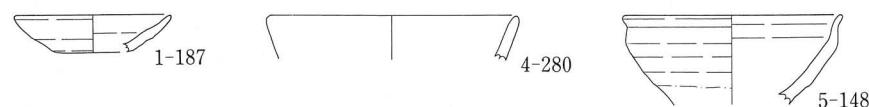
SD 8100



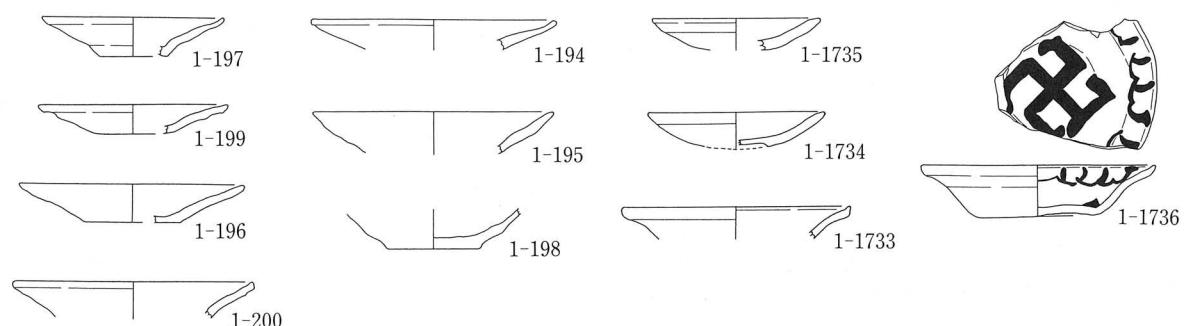
SD 9301



SD 9310



SD 10101



第270図 遺構出土の遺物37

SD 8100 · SD 9301 · SD 9310 · SD 10101

10101号溝（S D10101, 第270~272図）

南北方向の区画溝で、南端は調査区外へのびる。この溝の西側では S D10102, S D10103, S D10113, S D10116が直交する。これらは S D10101とほぼ同時期と考えられる。この溝に囲まれる集落の本体は、西側の水田部分にあるものと推測される。遺物には主に中下層位から出土した。溝の流れがなくほとんど澁んだ状態であったためか木製品が多くみられる。中世土師器皿N J類(1733~1735)・皿N K類(1736)・皿R F類(194~200), 八尾甕(40), 珠洲III期の甕(48)・IV期の甕(79~81)・IV~V期の甕(95・96)・V期の甕(115・116・117)・V~VI期の甕(131・132・136)・V期の壺(336), 越前甕(17・18・20)・中甕(16)・大甕(19), 濑戸美濃窯後期末期の天目茶碗(14~17)・大窯I期の天目茶碗(95~98)・大窯II期の天目茶碗(129)・大窯IV期の天目茶碗(153)・大窯I期の丸碗(164)・大窯I期の端反皿(184・185), 中国製青磁碗B IV'類(273)・碗E'類(251・255)・碗IV類ア(246)・皿(292), 瓦器火鉢類(5), 土師質土器擂鉢(42・44), 越中瀬戸皿B 2類(61)がある。木製品には下駄・曲物・箸・漆器椀(137・156・165)・匙・円形板・加工木があり、遺構別では最も多く出土する。石製品は打製石斧・石鉢・石臼・茶臼・五輪塔が出土している。遺構の時期は15・16世紀である。

(横山和美)

C. 井 戸

4327号井戸（S E4327, 第272図）

発掘区中央部B 1地区のS D3401・S D4602などで画される方形区画内建物群の西寄りに位置する。直径約80cm, 現存する深さ約52cmの素掘りの井戸である。遺物は中世土師器皿R F類(153)のほか、円形板・舟形(264)などが出土している。井戸の時期は、16世紀代と考えられる。

8950号井戸（S E8950, 第273図）

発掘区中央部南寄りのC N地区の中に位置する。125×95cmの楕円形を呈し、現存する深さ182cmの素掘りの井戸である。遺物は大部分が珠洲で、III期の甕(45)・IV期の甕(72)・V期の甕(112)・II~III期の壺(324)・IV期の壺(330~332)・V期の擂鉢(263~265)など珠洲編年II期からV期まで時期幅がある。他に瀬戸美濃小壺(60), 鉄滓(25)が出土している。珠洲V期は14世紀後葉~15世紀前半の年代が想定されており、瀬戸美濃の小壺は窯IIないしIII期に比定できるもので、14世紀末~15世紀前半の年代が与えられている。これらの遺物から井戸の時期は、15世紀後半と考えられる。

9648号井戸（S E9648, 第272図）

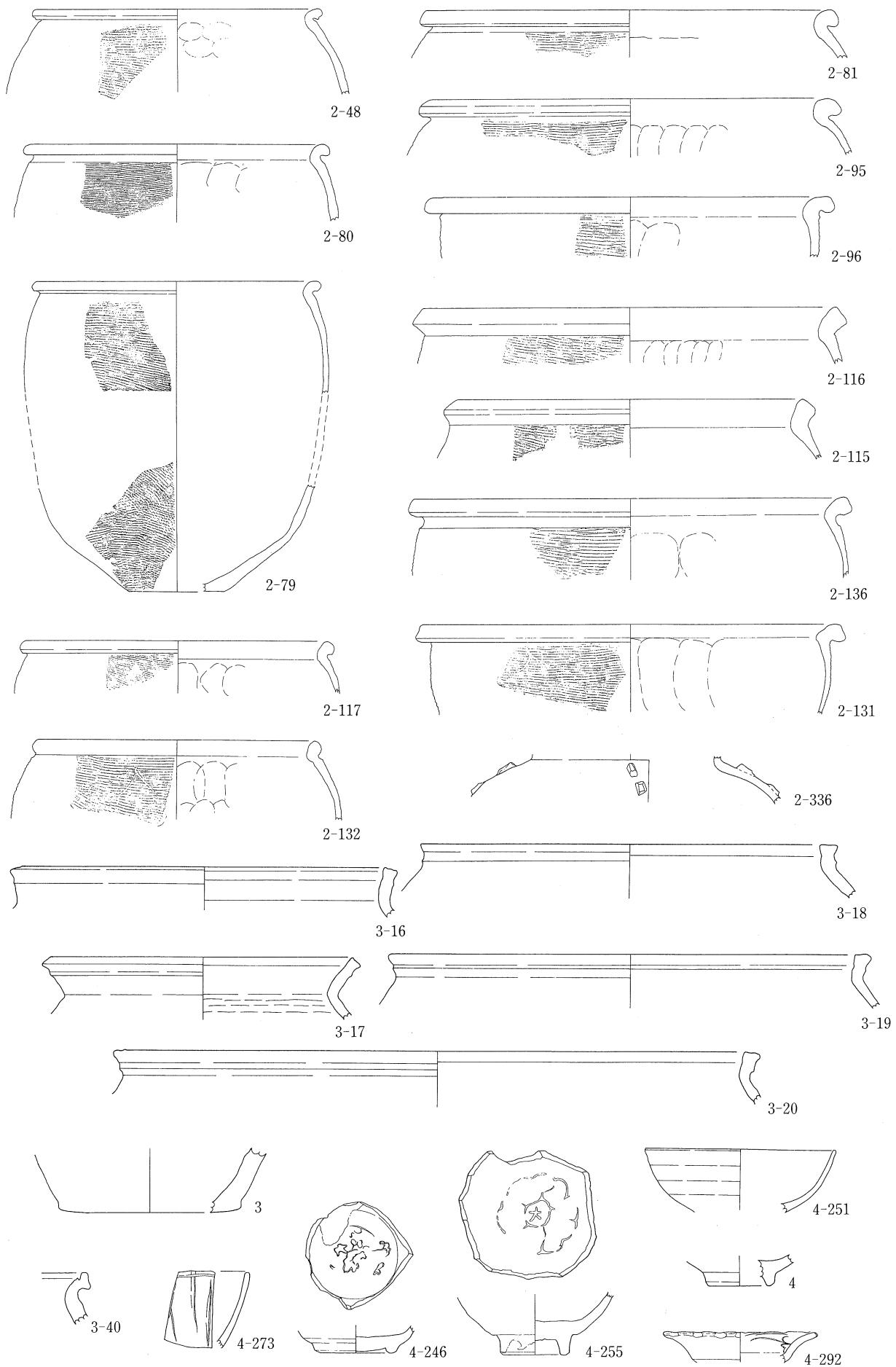
発掘区南半部C 1地区の南寄り建物群中に位置する。直径約60cmの円形を呈する、現存する深さ220cmの素掘りの井戸である。遺物は中世土師器皿R F類(190・191), 瀬戸美濃天目茶碗(92), 中国製青磁碗E'類(253)の他, 櫛・円形板などが出土している。中国製青磁碗は上田氏の編年で15世紀後葉~16世紀前葉に比定され、瀬戸美濃椀は大窯のI期で15世紀末~16世紀前葉の年代が与えられる。以上の遺物から、井戸の時期は16世紀代と考えられる。

9835号井戸（S E9835, 第272図）

発掘区南半部C 1地区の建物群中のほぼ中央に位置する。97×88cmのほぼ円形の掘り方をもつ素掘りの井戸である。遺物は中世土師器皿R E類(149), 珠洲IV期の甕(77)・同IV~V期の甕(94), 中国製白磁碗IV類(20), 中国製青磁碗IV類(238)の他, 曲物・編竹状製品(258・259), バンドコ(146), 砥石(46), などが出土している。珠洲の甕は14世紀~15世紀前半期におさまり、中国製青磁碗は14世紀中葉~末葉の年代が与えられる。これらの遺物から、井戸の時期は15世紀代と考えられる。

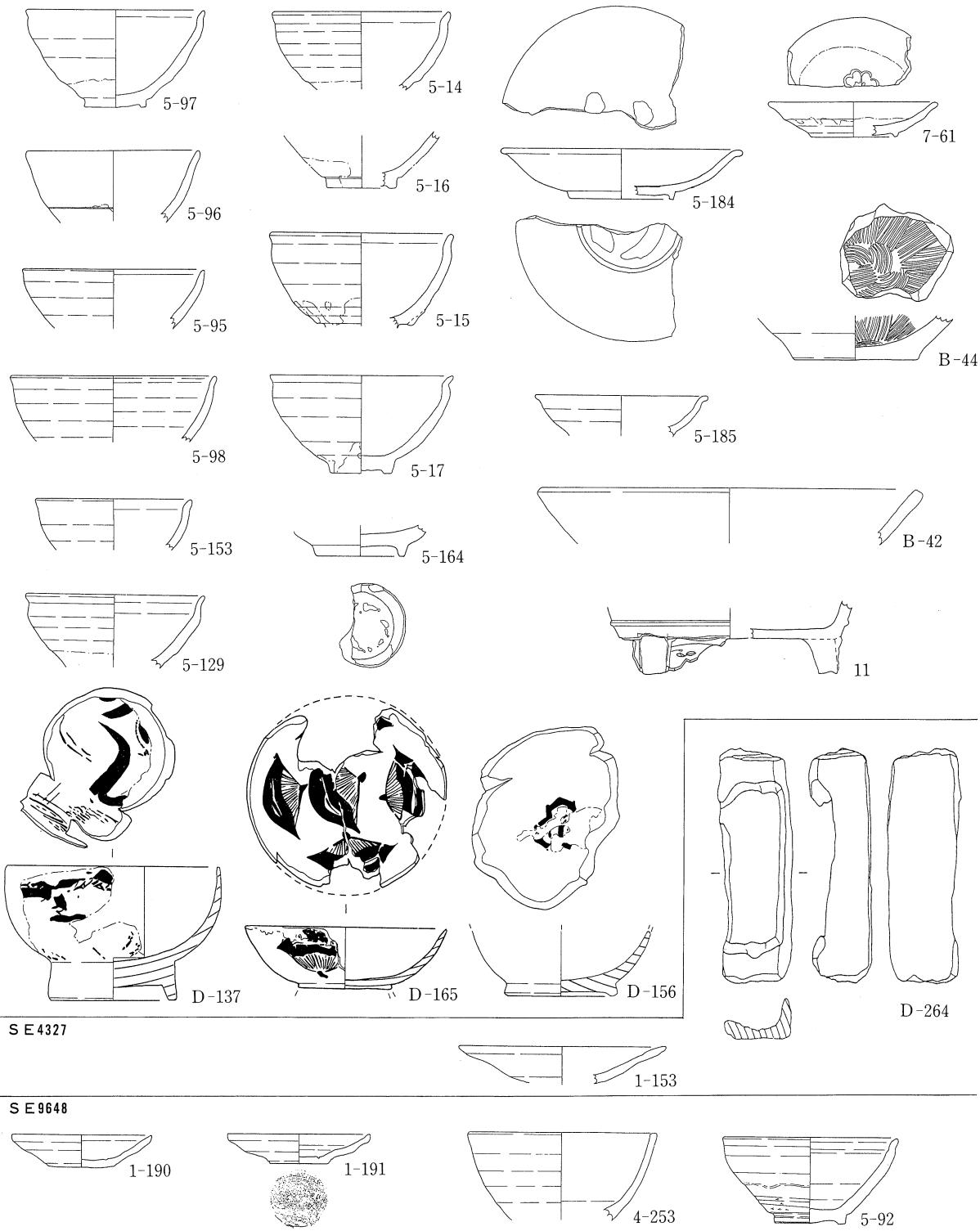
(山本正敏)

S D 10101



第271図 遺構出土の遺物38
S D 10101

S D 10101



第272図 遺構出土の遺物39

SD10101 · SE4327 · SE9648 · SE9835

3. 近世

A. 建物

6390号土台建物（S B6390, 第273~274図）

発掘区中央部のB2NからB2地区にかけて位置する、土台建物と考えられる遺構である。地山を浅い土坑状に掘りくぼめ、埋め戻して整地し、石列・貼り床・石敷などの施設を設ける。S B6390は、南北19.5m、東西16.5m、面積約300m²の大きさで、土台建物としては最大規模のものである。

埋め戻し土の中からは中世土師器皿NJ類（1699）・皿RF類（172・171）、珠洲V期の甕（109）、越前の甕（23・34）・擂鉢（7）、瀬戸美濃大窯I期の小壺（236）・大窯II期端反皿（169）、大窯II期の擂鉢（254）、中国製白磁、中国製青磁碗I類5b、中国製染付皿（357）、越中瀬戸皿BII類（66）・皿FII類（108）・皿（115・118）・椀（15・27）・擂鉢A類（156）、唐津皿1b類（6）・皿1c類（33）・皿1f類（55・56）・皿3類（110）・鉄絵大皿（165）・鉄絵鉢（125）、信楽壺（1）、縄文土器、土師器、須恵器、伊万里などの土器類の他、漆器・櫛（96）・箸（219）・加工木（320）・楔（30）・砥石・石臼・茶臼・石硯・石鉢・台石・加工石・キセル（11）・銅錢・鉄製品など様々な遺物が出土している。

土器類の年代を検討すると、越前については、概ね16世紀後葉から17世紀前葉におさまる、信楽の壺は16世紀後葉から末、唐津は16世紀末から17世紀前葉、比較的出土量の多い越中瀬戸も、16世紀末から17世紀前半代の年代を与えて問題ないと考えられる。また珠洲の甕は14世紀後葉から15世紀前半代、瀬戸美濃は15世紀末から16世紀中葉、中国製染付は16世紀初頭から中葉と、やや古くさかのぼるものである。以上のように、土器類の新しいものでも、17世紀前半代までおさえられるものが多く、建物の時期は17世紀中頃から後半と考えられる。

168号掘立柱建物（S B168, 第274図）

発掘区中央部のB2地区に位置する、1間×1間の東西棟側柱建物である。大形楕円形柱穴のもので、柱穴から中世土師器皿NG類（1662）が出土している。建物の時期については、16世紀後半～17世紀代と考えられる。

173号掘立柱建物（S B173, 第274図）

発掘区中央部のB3地区に位置する、1間×1間の東西棟側柱建物である。柱穴から越中瀬戸皿（125）、唐津が出土している。建物の時期は17世紀代と考えられる。

176号掘立柱建物（S B176, 第274図）

発掘区中央部のB3地区の東寄りに位置する、1間×1間の南北棟側柱建物である。柱穴から中世土師器、珠洲、瀬戸美濃大窯IV期ないし登窯I期の志野丸皿（229）、石臼などが出土している。建物の時期は17世紀代と考えられる。

192号掘立柱建物（S B192, 第274図）

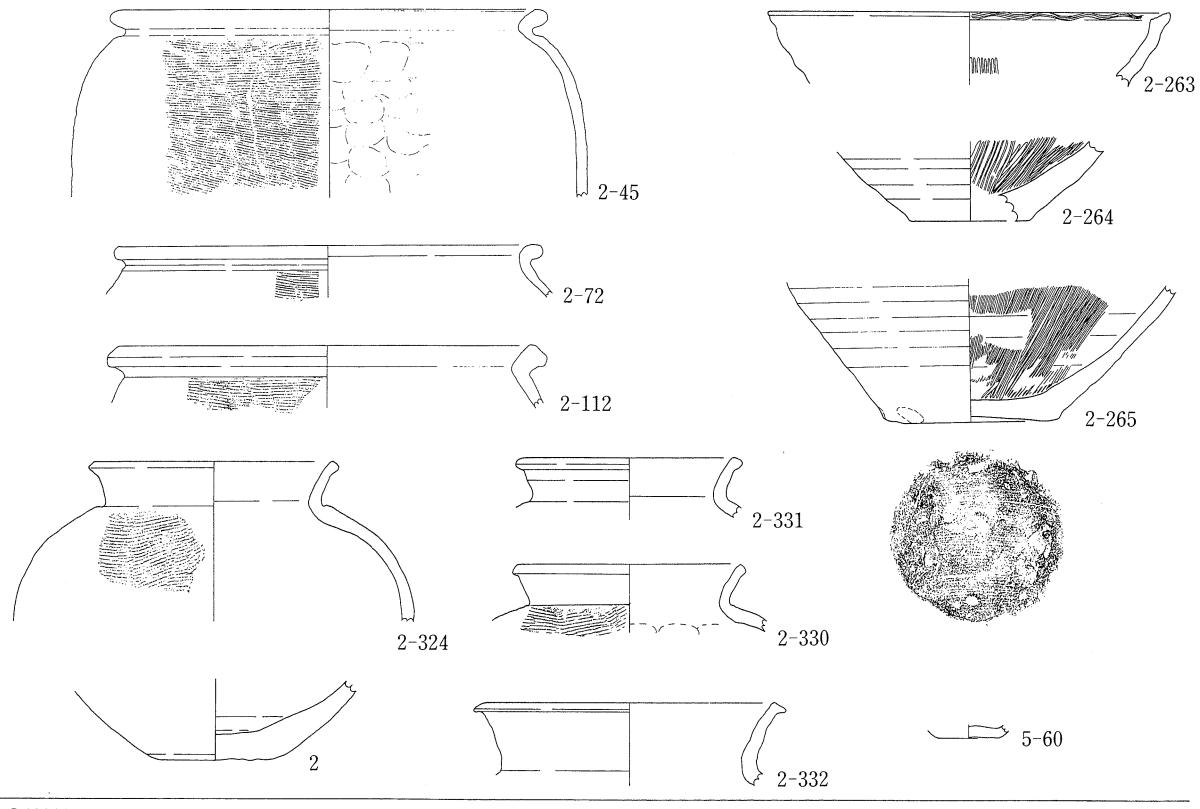
発掘区南半部C1地区の北寄りに位置する、2間×1間の南北棟側柱建物である。16世紀末から17世紀初頭の唐津鉄絵皿2d類（87）が出土している。遺構の時期は17世紀前半と考えられる。

194号掘立柱建物（S B194, 第274図）

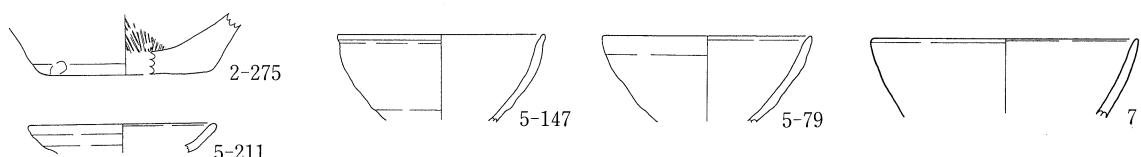
発掘区南半部C1地区のやや北寄りに位置する、3間×2間の南北棟側柱建物である。柱穴から瀬戸美濃大窯II期の丸皿（201）、越前、石臼などが出土している。瀬戸美濃丸皿は16世紀前葉から中葉のもので、建物の時期は16世紀後半から17世紀前半と考えられる。

197号掘立柱建物（S B197, 第274図）

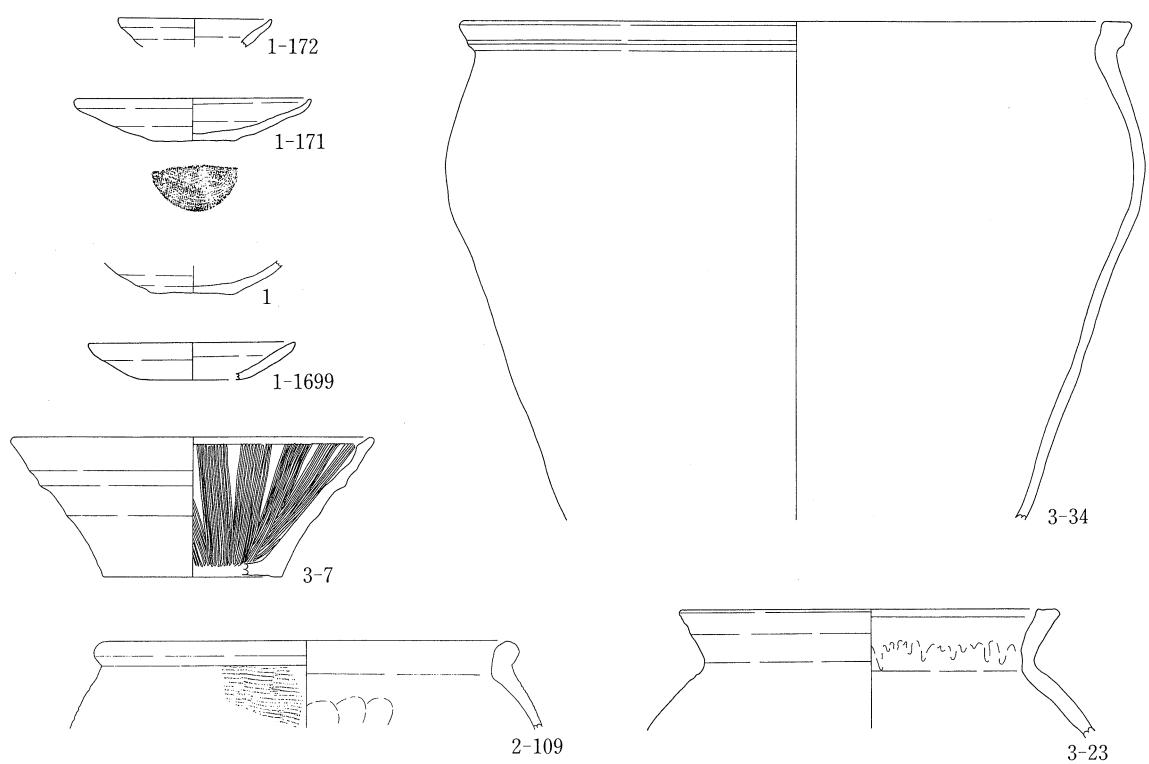
S E 8950



S K 9164



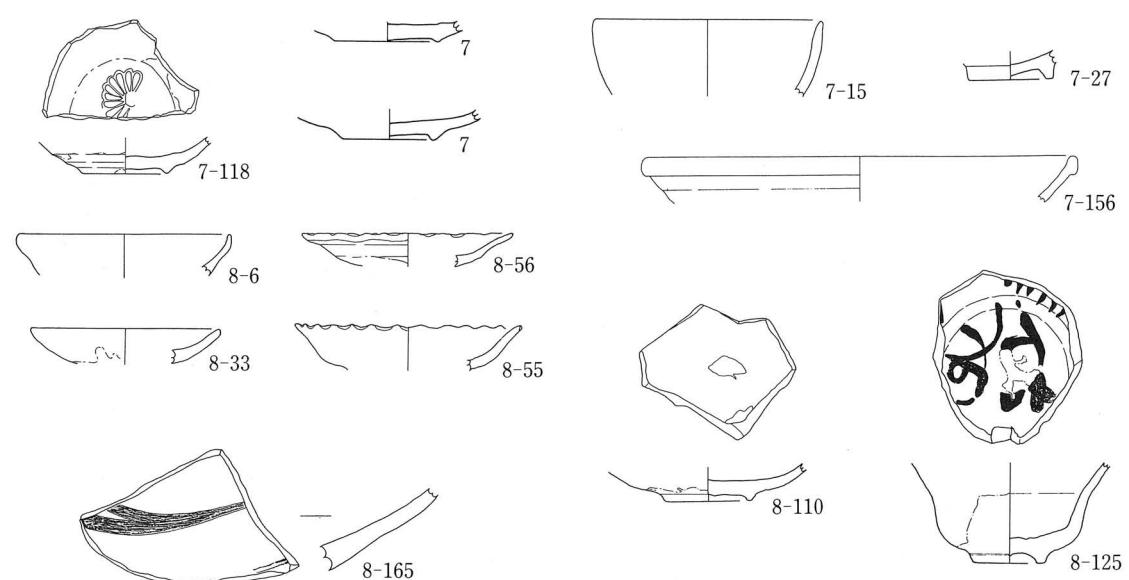
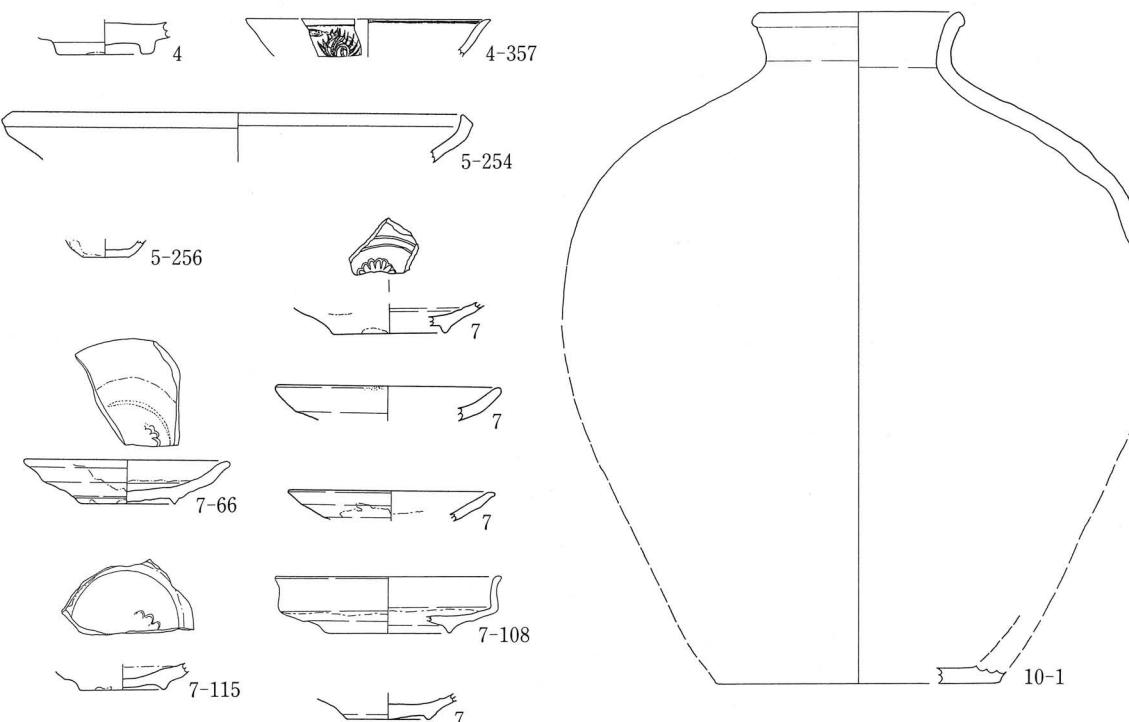
S B 6390



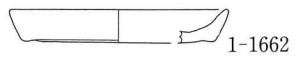
第273図 遺構出土の遺物40

S E 8950 · S K 9164 · S B 6390

S B 6390



S B 168



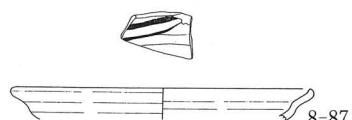
S B 173



S B 176



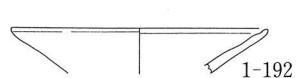
S B 192



S B 194



S B 197



第274図 遺構出土の遺物41

S B 6390 · S B 168 · S B 173 · S B 176 · S B 192 · S B 194 · S B 197

発掘区南半部C 1 地区の中央東寄りに位置する、 2間×1間の南北棟側柱建物である。柱穴から中世土師器皿R F類 (192), 唐津が出土している。建物の時期は17世紀代と考えられる。 (山本正敏)

B. 溝

824号溝 (S D824, 第275図)

南北方向に走る溝である。遺物はほぼ全域にみられ、ほとんどが下層から出土している。中世土師器皿N D I類, 珠洲IV期の甕(51), 珠洲系陶器甕(351), 越前, 加賀, 濑戸美濃, 中国製白磁, 中国製青磁, 中国製染付皿(391・395), 越中瀬戸, 唐津椀1類(147)・椀1e類(153)・皿(260)・擂鉢2類(215)・擂鉢3類(217・219)・擂鉢(222), 京焼風唐津椀2類(236), 刷毛目唐津の椀(193)・伊万里碗(15)・火入れ(133), 打製石斧・磨製石斧が出土している。遺構の時期は17・18世紀である。

1441号溝 (S D1441, 第275図)

S D701とS D911の境上面で検出した東西方向の溝である。覆土の堆積状況からある程度の流れをもっていたことがわかる。遺物には中世土師器皿N D II類 (1132), 珠洲III~IV期の擂鉢 (219), 濑戸美濃窯後期末期の壺 (58)・窯末なし大窯期の水滴 (242), 中国製青磁, 唐津, 伊万里がある。木製品には調査区西壁付近上面から出土した柱がある。これは溝に伴うものというより, 後世に埋められたものではないかと考えられる。ほかには箸・漆器椀がある。漆器椀は口縁に藁が巡らされた状態で出土した。遺構の時期は17世紀後半~18世紀である。

3401号溝 (S D3401, 第275~276図)

クランク状に曲がる旧橋本川である。昭和初年の圃場整備事業で埋められるまで使用されていた。時期の上限は遺物の出土状況から考えて、中世まで遡る可能性がある。遺物は土師器, 須恵器, 中世土師器皿N C I類 (587)・皿N D II類 (1391)・皿N G類 (1640), 八尾甕 (50), 珠洲III期の甕 (38・39)・V期の甕 (106), 越前, 濑戸美濃, 中国製白磁, 中国製青磁, 越中瀬戸椀・皿E 4類 (94)・皿F 2類 (101)・匣鉢 (149), 唐津皿 (275)・鉢 (195・206), 伊万里碗 (24・27・38・71)・皿 (113・123・124)・壺 (135), 伊万里?碗 (85)・皿 (127), 丸山, 陶器椀 (3)・皿 (13)・壺 (62)・擂鉢 (46・49)・瓶 (71), 磁器の碗 (89~91・93)・小杯 (84)・瓶 (70), 軒平瓦 (78) が出土している。

5002号溝 (S D5002, 第277図)

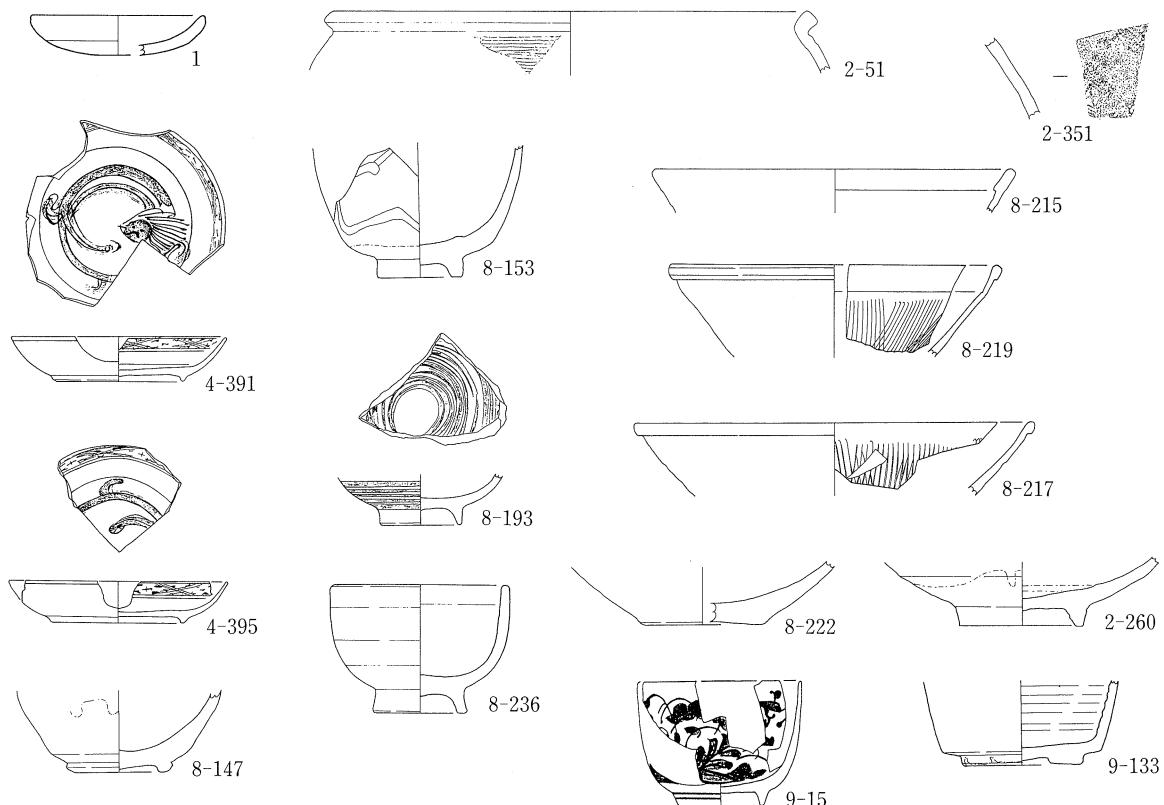
近世の土坑S K5051の東側と重複する南北溝で、北側ではS D4605に続く可能性が考えられる。遺物は須恵器, 中世土師器皿N J類 (1681)・皿R F類 (160・161), 珠洲III期の甕 (41), 越前, 濑戸美濃大窯I期の天目茶椀 (63)・大窯II期の天目茶椀 (112)・大窯III期以降の天目茶椀 (135), 中国製白磁, 中国製青磁香炉IV類 (306), 越中瀬戸削りだし高台の皿 (122), 唐津椀1c類 (143)・小鉢 (126)がある。木製品には漆器椀 (161)・瓶子脚・箸・曲物がある。瓶子脚は、この溝とS D5105が合流する部分のしがらみ付近から出土している。この付近から他には石臼, 五輪塔, 銅錢が出土している。遺構の時期は14~17世紀である。

5105号溝 (S D5105, 第277図)

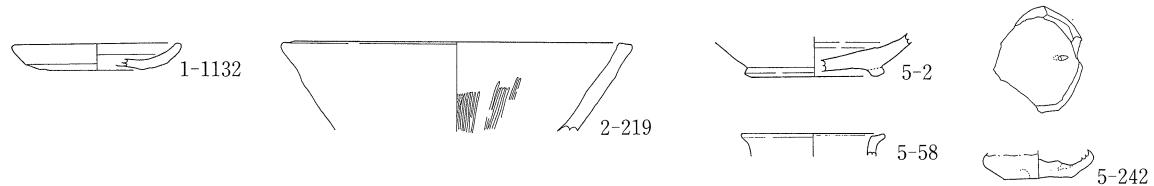
東西方向の溝で、東端はS D5002に合流する。この合流点にはしがらみとの関係からか、西側の溝底は畦状に盛り上がる。遺物には土師器, 中世土師器皿N J類 (1684・1685)・皿N C I類 (637)・皿R F類 (164・165), 珠洲, 越前, 濑戸美濃大窯I期の天目茶椀 (64), 中国製青磁, 越中瀬戸皿A1類 (34)・皿B1類 (57), 唐津椀 (160), 伊万里がある。木製品には下駄・箸・円形板, 石製品には打製石斧・砥石, 金属製品には銅錢がある。遺構の時期は13~17世紀後半である。

5910号溝 (S D5910, 第277~281図)

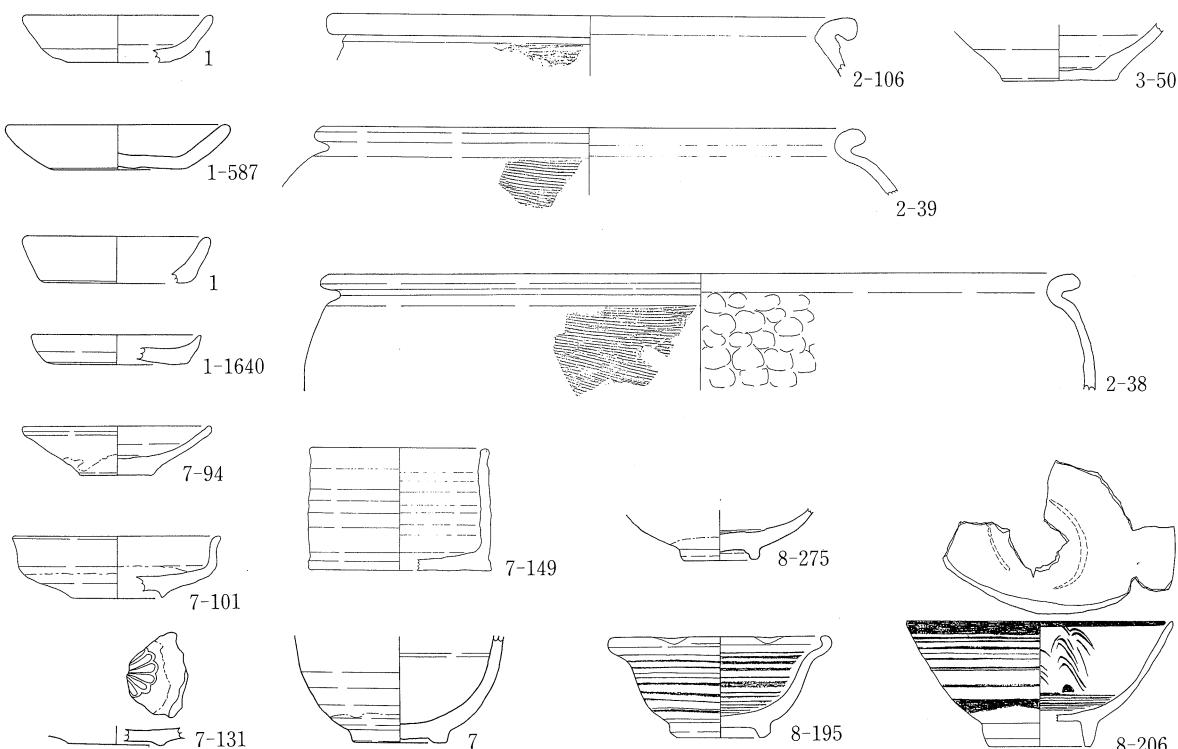
SD 824



SD 1441

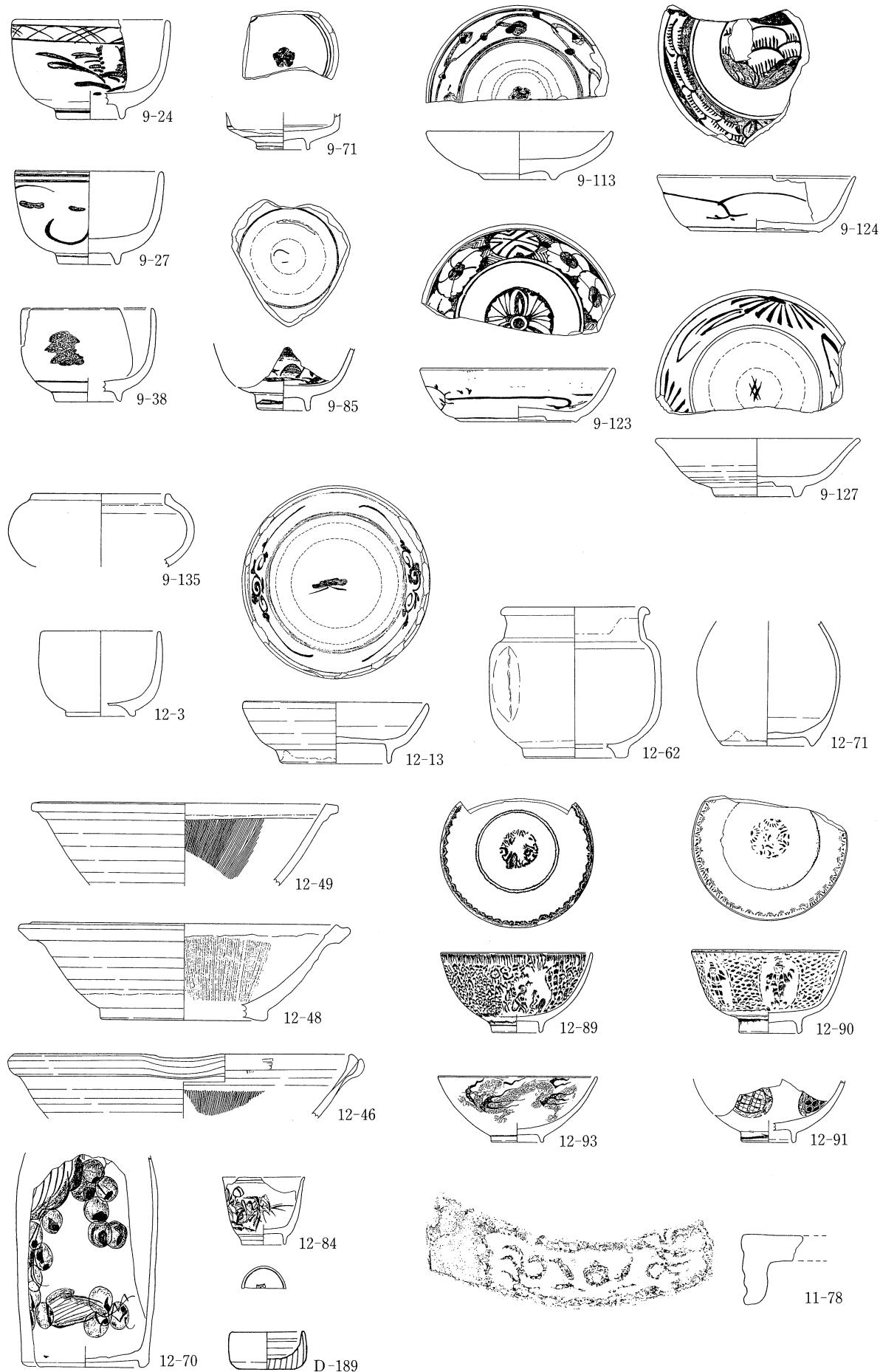


SD 3401



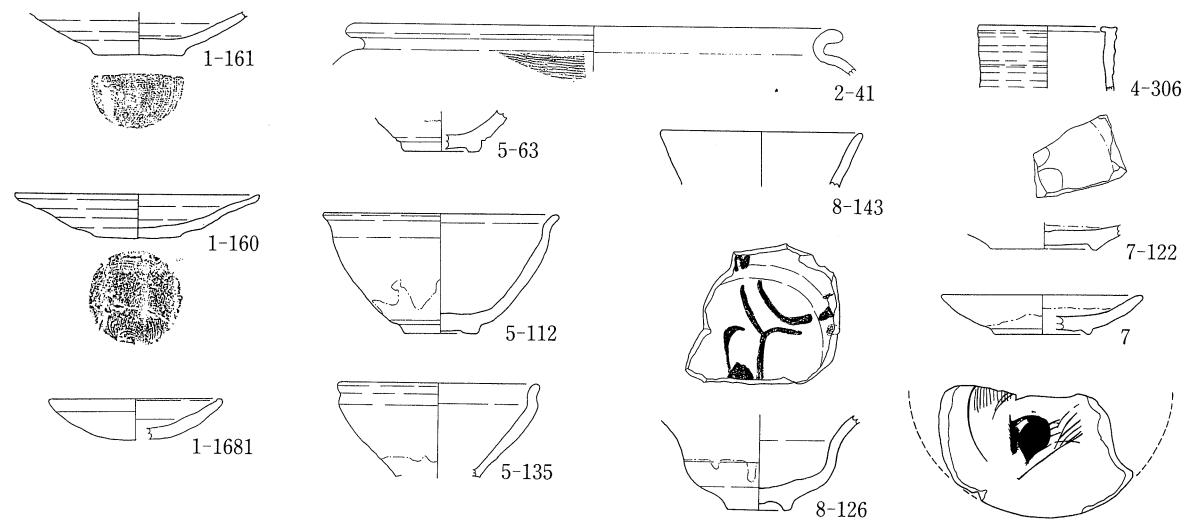
第275図 遺構出土の遺物42

SD 824 · SD 1441 · SD 3401

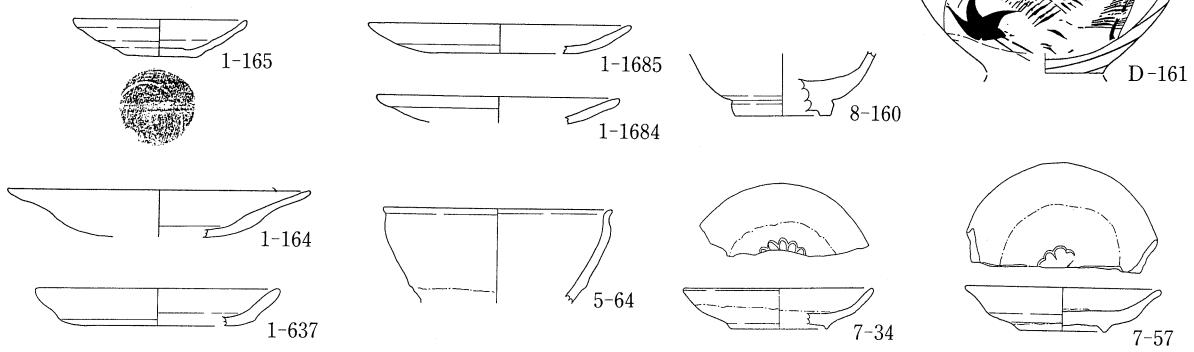


第276図 遺構出土の遺物43
SD3401

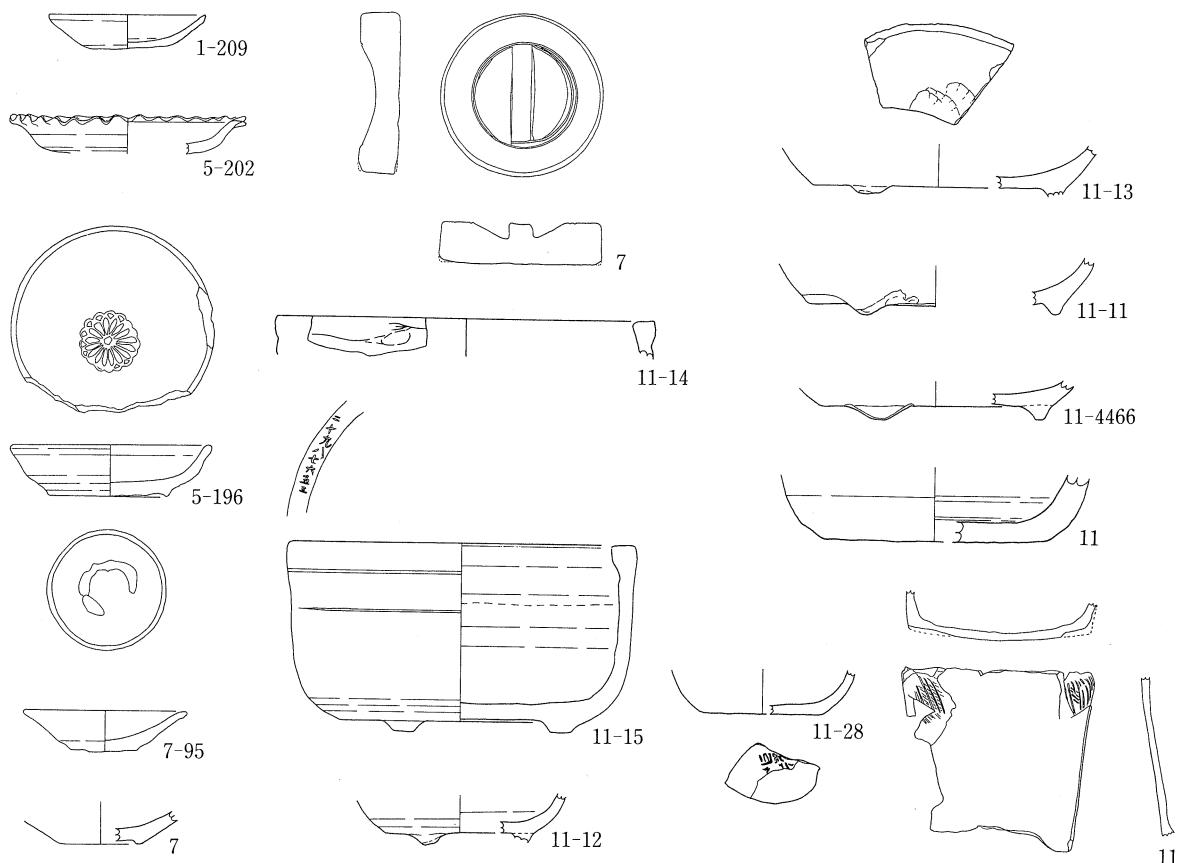
SD 5002



SD 5105



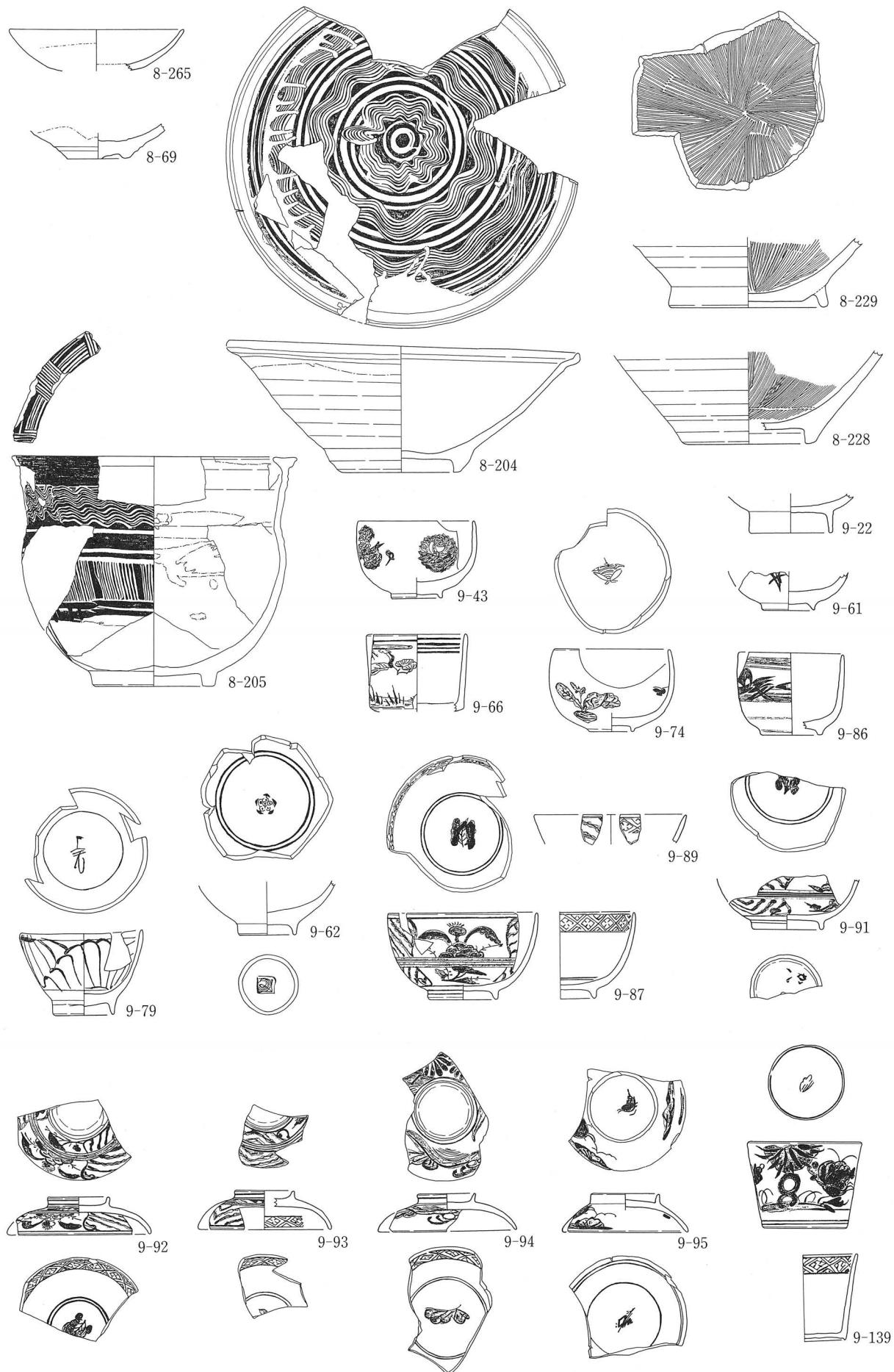
SD 5910



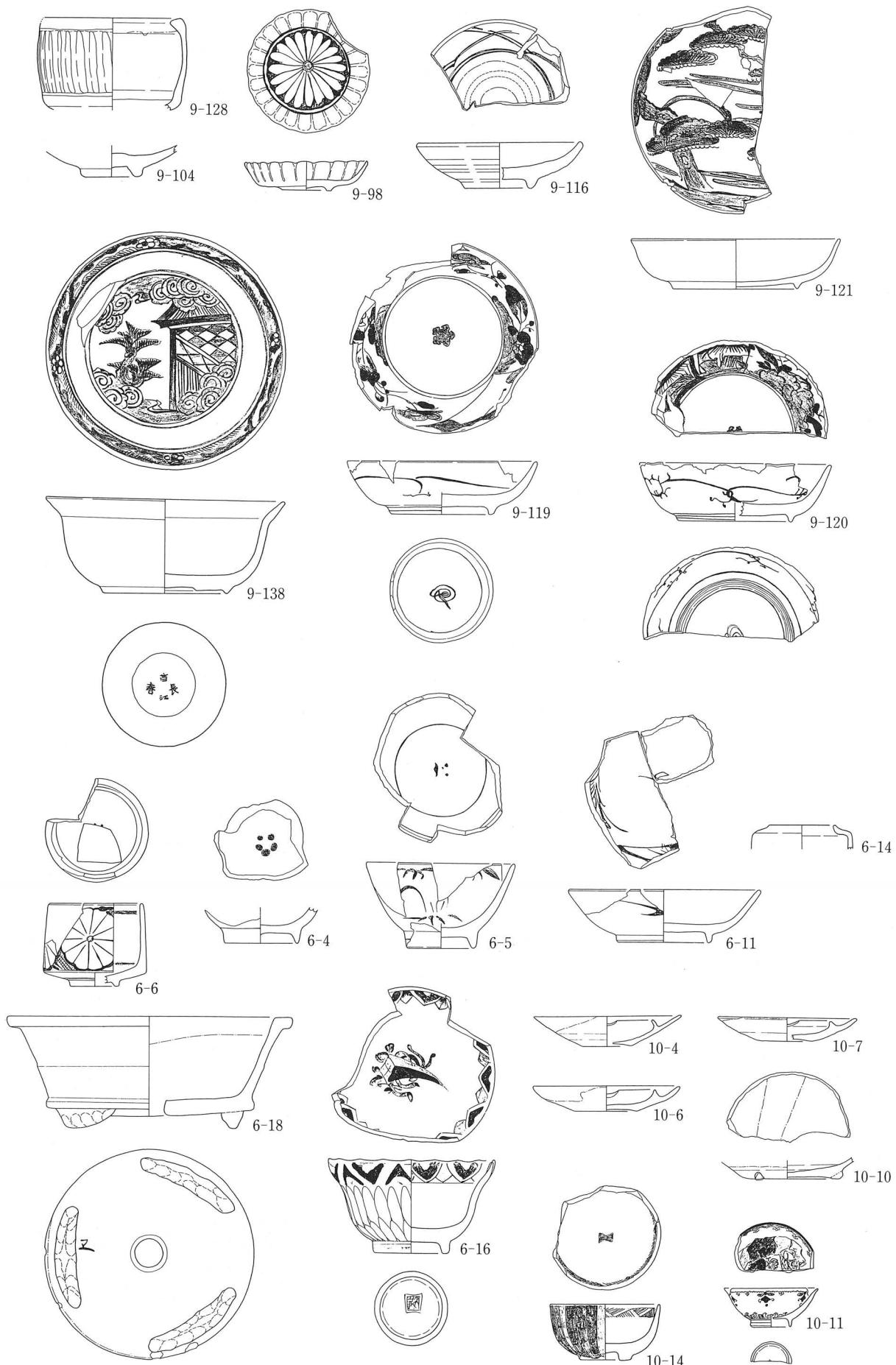
第277図 遺構出土の遺物44

SD 5002・SD 5105・SD 5910

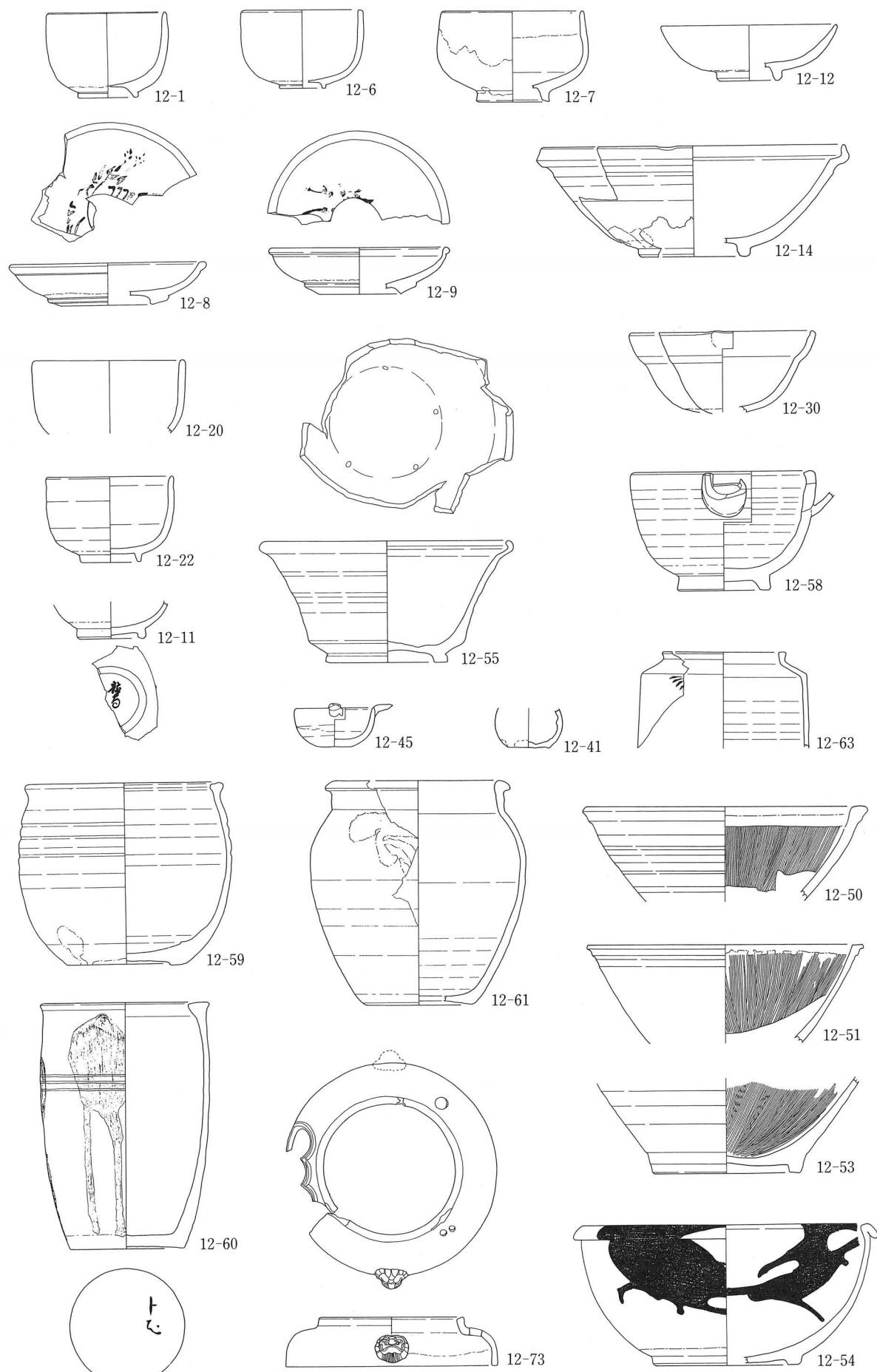
S D 5910



第278図 遺構出土の遺物45
S D 5910



第279図 遺構出土の遺物46
SD 5910



第280図 遺構出土の遺物47
S D 5910

「コ」の字状に走る溝である。伝安楽寺を含むこの付近は昭和初期まで現在福光町梅原に所在する真宗寺院以速寺の寺域で、この外側には寺を囲む堀が巡らされていたといわれる。S D5910はこの掘りに相当するものと推定される。この溝に囲まれた S E5974, S K7149は以速寺に関係するものと思われる。溝の覆土は大きく3層に分れ、上層～中層は昭和初期までの堆積層で、遺物の多くはここから出土する。最下層からは、伊万里皿(120)、明治以降の瀬戸新製皿が出土する。このことから堀は明治以降に埋まったと考えられる。土師器、須恵器、中世土師器皿R H類(209)、珠洲、瀬戸美濃大窯I期の丸皿(202)・大窯II期の丸皿(196)、中国製白磁、中国製青磁、越中瀬戸皿E 4類(95)・重し?、唐津皿1類(69)・皿(265)・甕(205)・擂鉢4類(228・229)・鉢(204)、伊万里碗(22・43・61・62・66・74・86)・碗(蓋付)(87・89・91)・広東碗(79)・皿(98・104・116・119・120・121)・鉢(138)・そば猪口(139)・蓋(92~95)・火入れ(128)、瀬戸美濃本業III期の椀(4~6)・本業III期の皿(11)・本業III期の小壺(14)・植木鉢(18)、瀬戸美濃新製の皿(12・13)、瀬戸美濃新製?の鉢(16)、九谷椀(14)・盃(11)、信楽灯明受皿(4・6・7)、信楽?土瓶?(10)、磁器碗(87・88)・鉢(101)・植木鉢(106)・蓋(97・98)・急須(100)・仏飯具(103)、陶器椀(1・6・7・20・22・28・31)・皿(8・9・12)・灯明受皿・甕(59)・壺(60・61・63)・小壺(41)・擂鉢(50・51・53)・鉢(14・54・55)・鉢?(30)・餌鉢(45)・片口(58)・不明(73)、土師質土器火鉢類(10~15)・火鉢類?(28)・七厘?, 土製品人形?(76)、石臼が出土している。

(横山和美)

C. 井 戸

817号井戸 (S E817, 第282図)

発掘区北半部のA 1地区中央建物群(中世前期)の北西隅に位置する。平面形が93×78cmの楕円形を呈し、現存する深さ214cmの素掘りの井戸である。出土遺物は、中世土師器皿、珠洲、中国製染付皿(404)、越中瀬戸擂鉢F類(178)、唐津擂鉢3類(218)、唐津擂鉢(214)、唐津京焼風椀3 b類(251)、伊万里碗(17)などがある。中国製染付皿は16世紀中葉から末葉、唐津擂鉢3類・唐津京焼風椀・伊万里碗はいずれも17世紀末葉から18世紀初頭のものである。これらから、井戸の時期は18世紀代と考えられる。

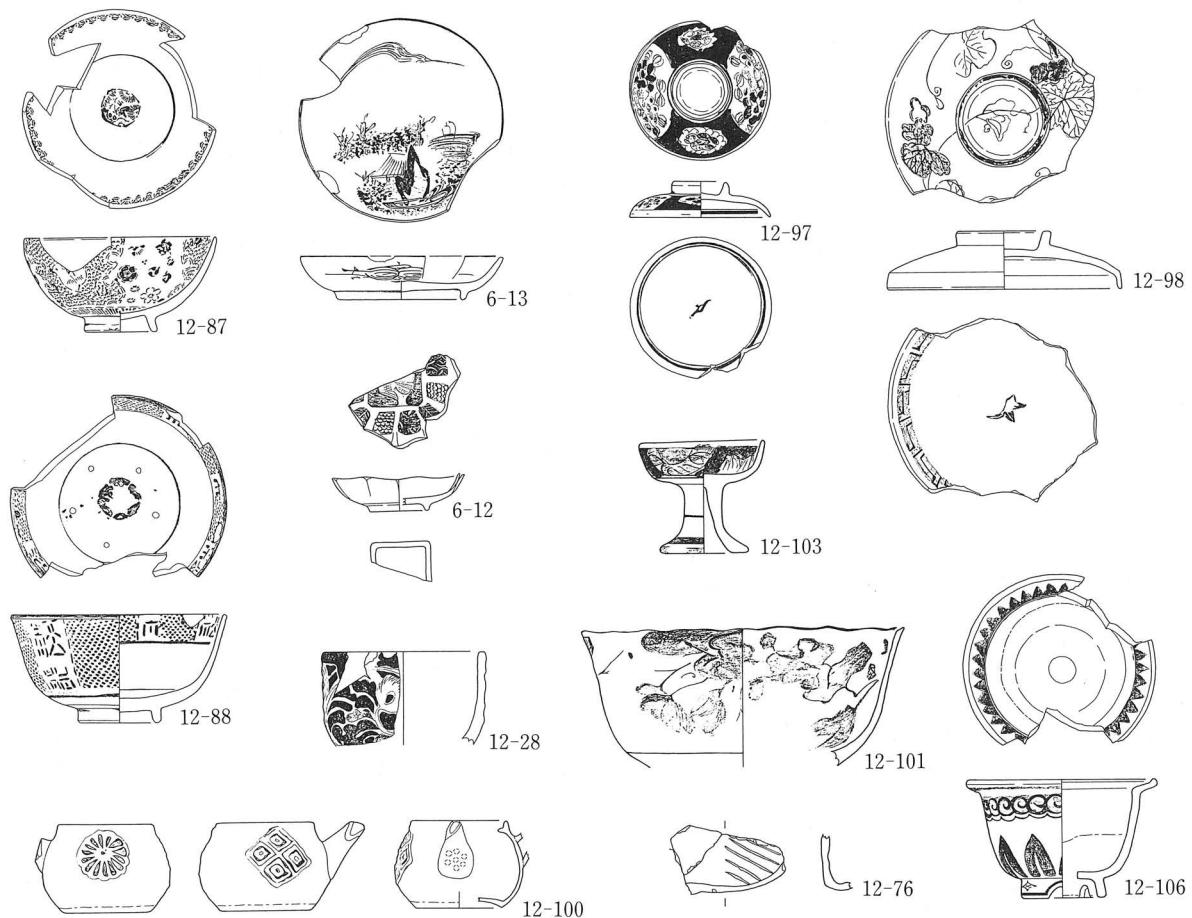
5974号井戸 (S E5974, 第281図)

発掘区中央部B 2地区南東隅に位置する。S D5910で方形に区画される「旧以速寺」の境内にある、直径130cmの円形の石組み井戸である。出土遺物は、中世土師器、瀬戸美濃、越中瀬戸の秉燭(136)、唐津、伊万里皿(112・125)、九谷色絵の盃(12)、産地不明の陶器製溲瓶(67)・蓋(39)、磁器製の染付碗(92)・摺絵皿(96)・仏飯器(104・105)、土錘(77)、漆器椀(190)・円形板(84・98・101)・組板(269)・提灯(16)・柄・石硯(2~4)・石臼・切石・湯呑・銅錢などである。伊万里の皿のように、確実に江戸時代後期～幕末にさかのぼるものもあるが、92・96のような、明治時代以降の碗・皿類も含まれており、井戸の時期は明治時代以降と考えられる。

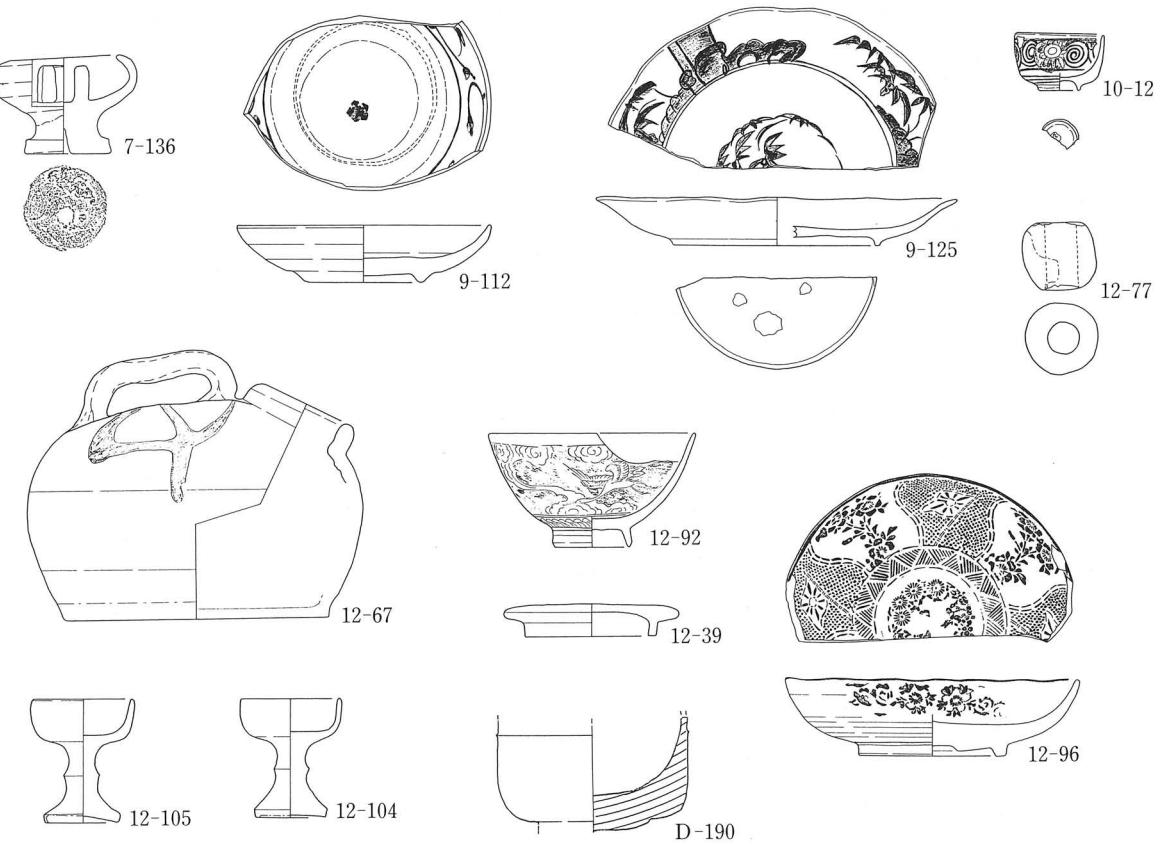
8978号井戸 (S E8978, 第282図)

発掘区やや南寄りのC N地区のほぼ中央に位置する。直径70cmの円形の素掘り井戸である。出土遺物は珠洲I期の壺(297)、越中瀬戸皿B II類(54)・皿D II類(86・87)・皿(132)・擂鉢A類(161・162)、唐津の鉄絵皿2 b類(80)・砂目積み期の皿3 a類(92)・同じく砂目積み期の椀(161)・甕(178・180・182)・片口(175)、瀬戸美濃、石臼・五輪塔(167)・打製石斧・凹石(96)などである。珠洲I期の壺は小片で、古期遺物の混入である。出土量が多く、時期の推定できる唐津では、いずれも胎土目積み期(80・178・180・182・175)から砂目積み期(92・161)までのものが含まれ、16世紀末から

S D 5910

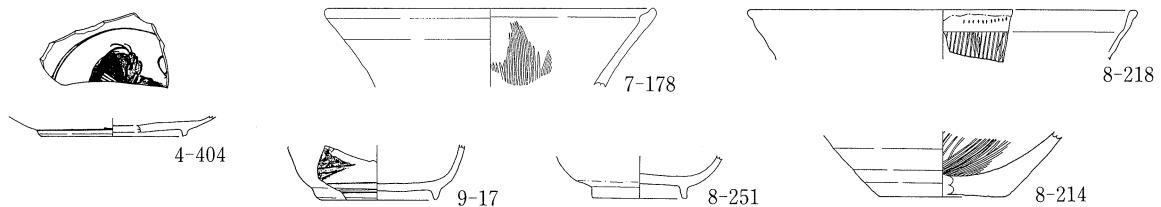


S E 5974

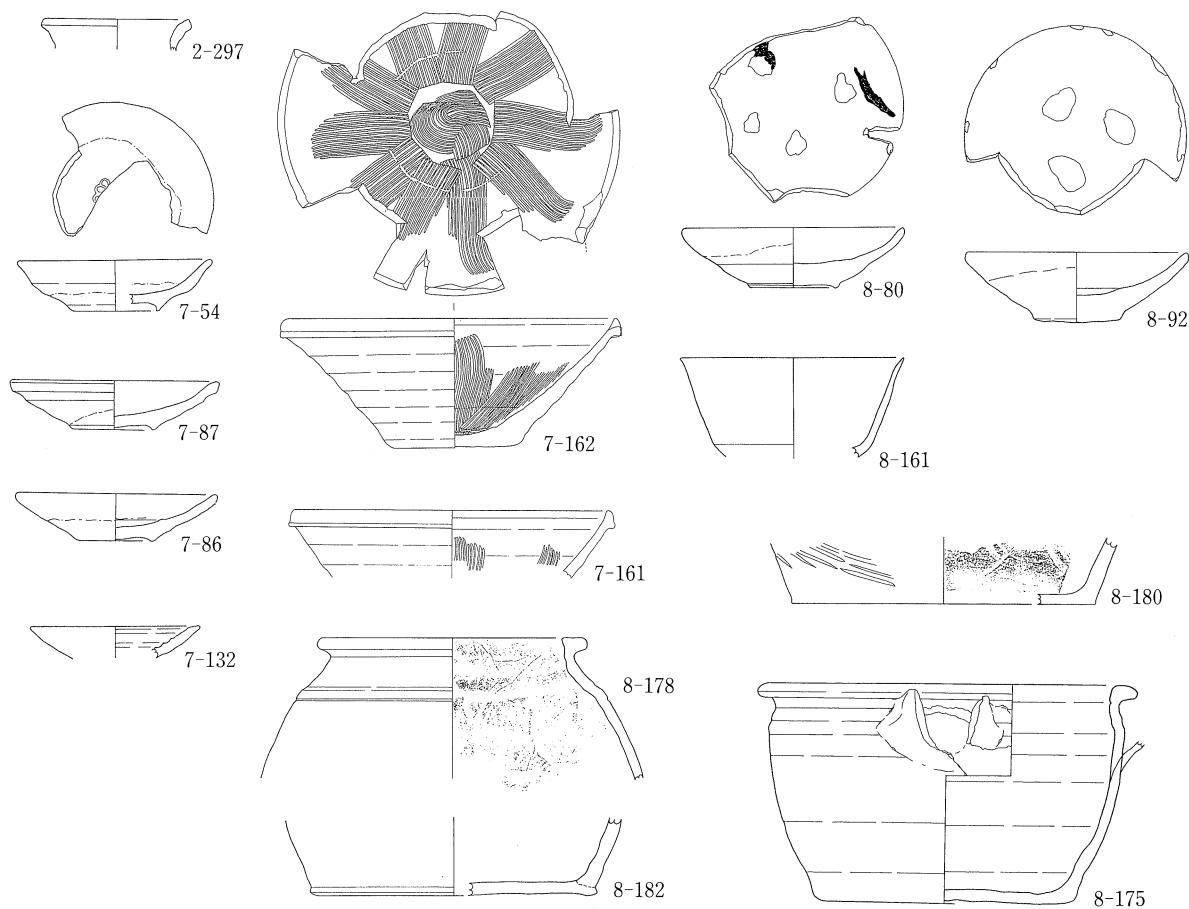


第281図 遺構出土の遺物48
SD 5910・SE 5974

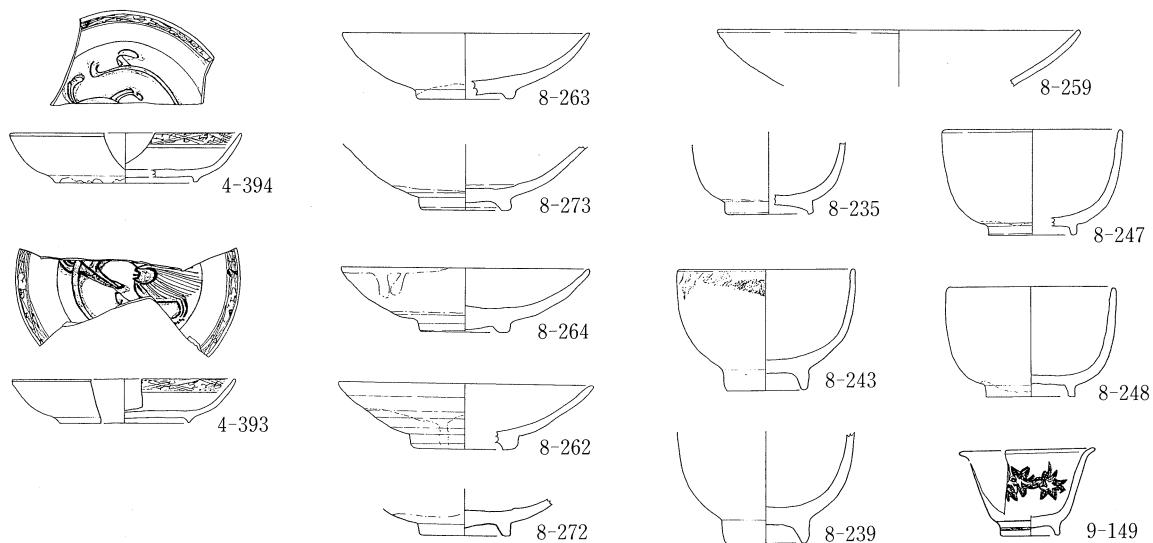
S E 817



S E 8978



S K 1351



第282図 遺構出土の遺物49

S E 817 · S E 8978 · S K 1351

17世紀前半の年代を与えられる。次に多い越中瀬戸の皿・擂鉢類も同時期に比定して差し支えないと考えられる。これらのことから、井戸の時期は17世紀中葉から後葉と考えられる。 (山本正敏)

D. 土 坑

1351号土坑 (SK1351, 第282図)

南北9mにのびる、幅135cm、深さ1mの緩くカーブした溝状の土坑である。南端に一段高くなる部分があり、別遺構の可能性がある。中世土師器、中国製染付皿(393・394)、唐津皿(259・260・263・264・272・273)・唐津京焼風椀1類(235)・椀2類(239・243)・椀3a類(247・248)、伊万里小杯(149)、陶器椀が出土している。

1404号土坑 (SK1404, 第283図)

S D1422の上面から検出された土坑で、切り合いからSK1405、SK1437、SK1438、SK1439よりも新しい。中世土師器皿NC I類(483)・皿ND II類(1114)、八尾、珠洲甕、瀬戸、中国製白磁、中国製青磁、中国製染付蓮子型椀(365)・皿(379)、越中瀬戸椀(9・28・29)、唐津皿1f類(49)・擂鉢3類(216)、唐津京焼風椀3b類(252)、伊万里碗(15)・皿(108・111)・火入れ(131)・碗(14)、陶器卸皿(33・34)、石硯・五輪塔が出土している。遺構の時期は18世紀である。

6095号土坑 (SK6095, 第283図)

中世土師器皿RD類(129)、RF類(169)、NJ類(1695)、珠洲系陶器、瀬戸美濃端反皿(173)、越中瀬戸椀(14)、皿(105)、擂鉢(157)、唐津皿(58)、小椀(124)、伊万里碗(4・8・67)、土師質土器火鉢類(16・17)、陶器椀(21)、鉢(56・57)、漆器が出土している。

6100号土坑 (SK6100, 第284図)

中世後半の浅い土坑と、一辺5mの正方形の近世土坑が重なったものであるが、遺物は一括で取り上げた。中世土師器皿、珠洲、越前甕(30)、瀬戸美濃大窯I期の端反皿(171)、中国製白磁、唐津皿3b類(94)・壺(167)、伊万里碗(75)、信楽、陶器の蓋(38)、石臼・茶臼・切り石が出土している。遺構の時期は中世後半の土坑は16世紀、近世の土坑は17世紀後半である。

8966号土坑 (SK8966, 第284図)

不整形の大型土坑である。周囲の柱穴と同時期と考えられ、建物に伴う遺構と考えられる。中世土師器、珠洲V期の甕(125)、瀬戸美濃大窯I期の天目茶椀(78)、中国製白磁、中国製青磁、越中瀬戸皿d2類(85)、唐津甕(184・185)・椀2類(150)・皿1類(60)・皿1a類(1)・皿1c類(18)・皿3a類(93)、陶器壺・椀、石臼・石鉢が出土している。遺構の時期は15~17世紀である。

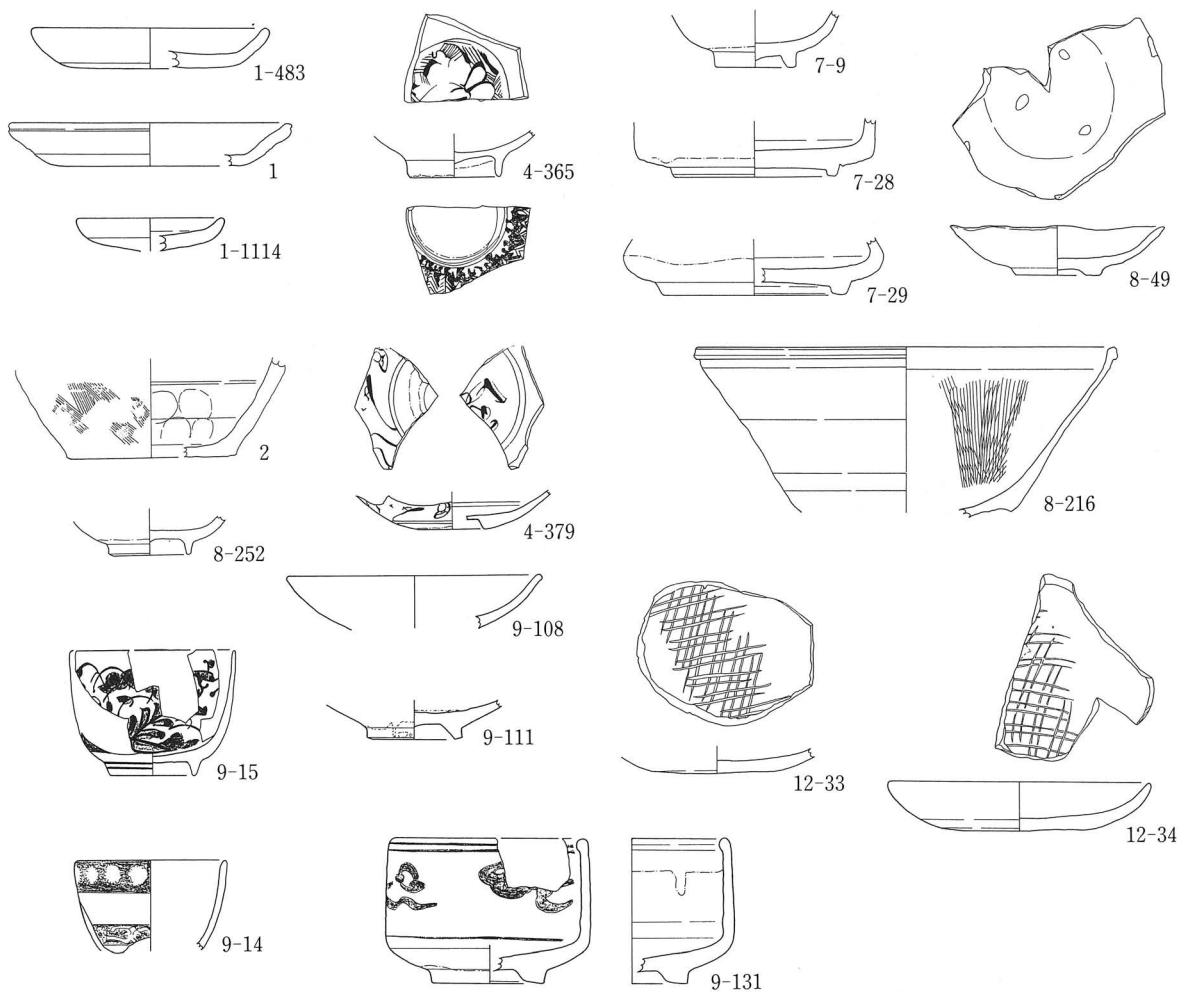
9702号土坑 (SK9702, 第284図)

南北420cm、東西302cm、深さ46cmの長方形の土坑である。床面は平坦で、覆土には薄い酸化鉄の層や炭化物の混じる層がある。中世土師器皿NJ類(1726・1727)、瀬戸美濃大窯II期の天目茶椀(126)、唐津椀1b類(136)・椀1c類(142)・椀(137)・皿1d類(37)・皿3d類(101)、近代以降の陶磁器が出土している。遺構の時期は16世紀・17世紀後半である。

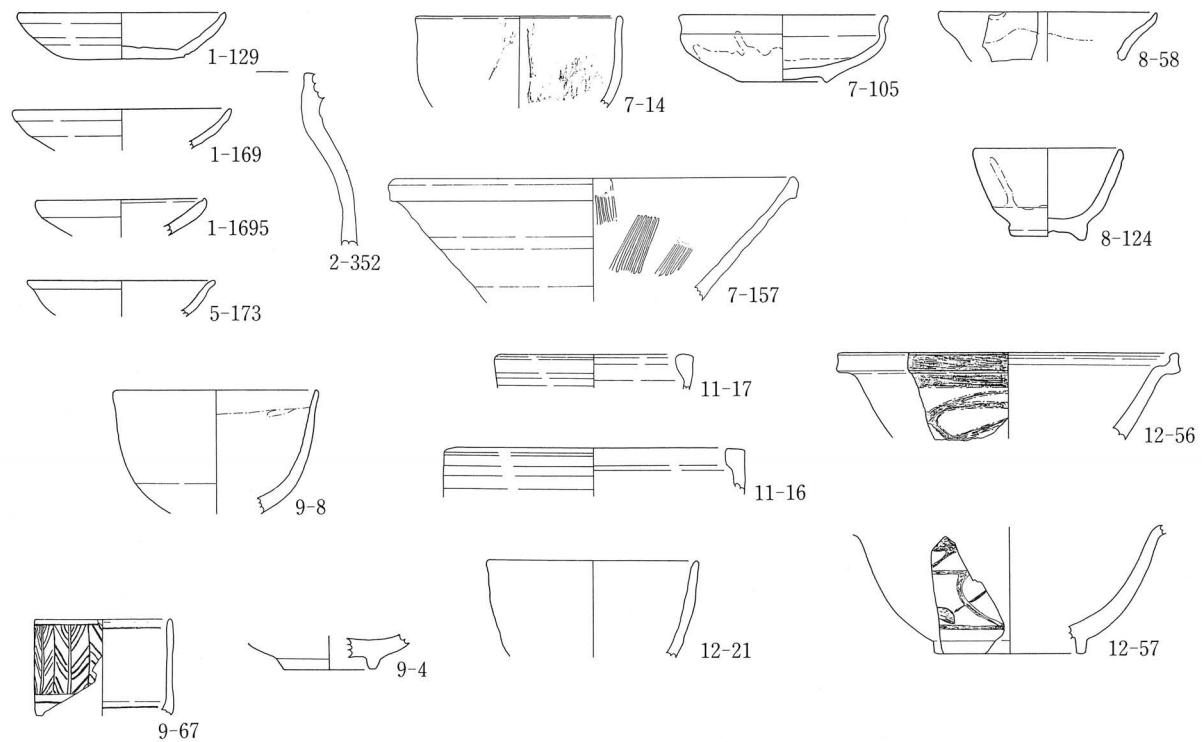
9885号土坑 (SK9885, 第284図)

東西291cm、深さ20cmの方形の土坑である。南側はSK9886に切られる。中世土師器、珠洲、越前、瀬戸美濃大窯II期の天目茶椀(128)、大窯II期のマメ皿(234)、中国製白磁、中国製青磁、越中瀬戸椀(22)・皿A1類(40)・皿C1類(67)、唐津皿1類(59)・皿1c類(22)・皿1d類(38・47)、皿2d類(86)・小椀(123)、石臼・石鉢・石製バンドコ、羽口が出土している。遺構の時期は17世紀前半である。 (越前慎子)

S K 1404

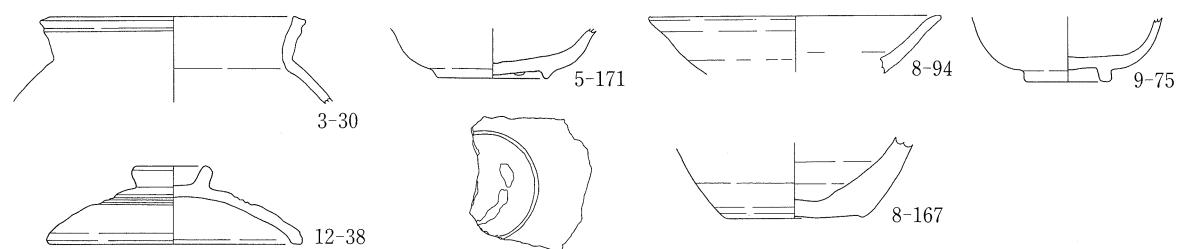


S K 6095

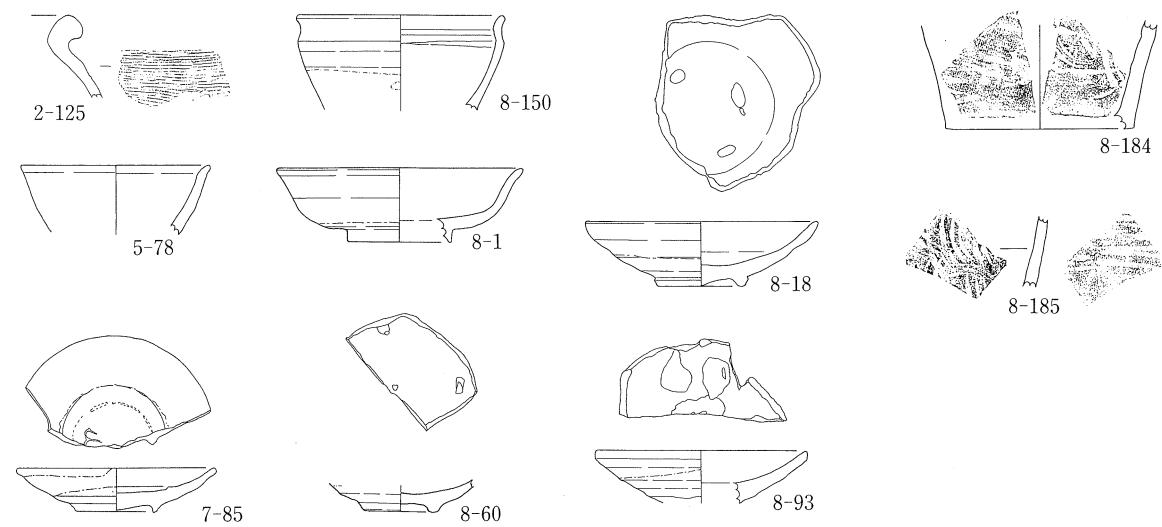


第283図 遺構出土の遺物50
SK 1404・SK 6095

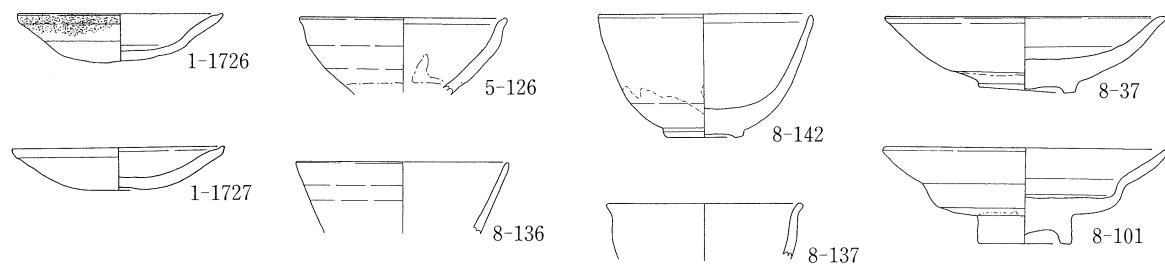
SK 6100



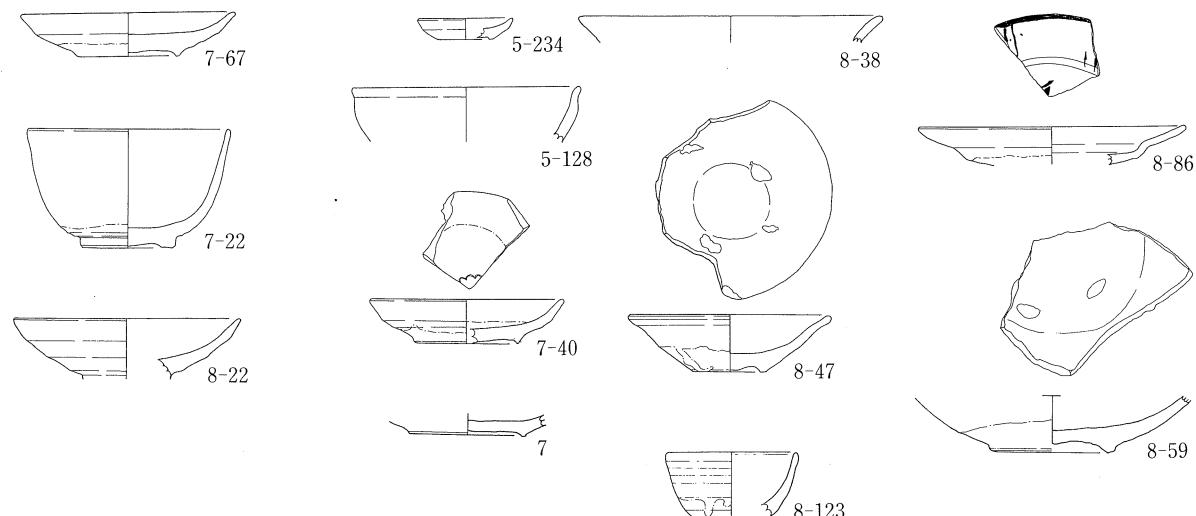
SK 8966



SK 9702



SK 9885



第284図 遺構出土の遺物51

SK 6100・SK 8966・SK 9702・SK 9885

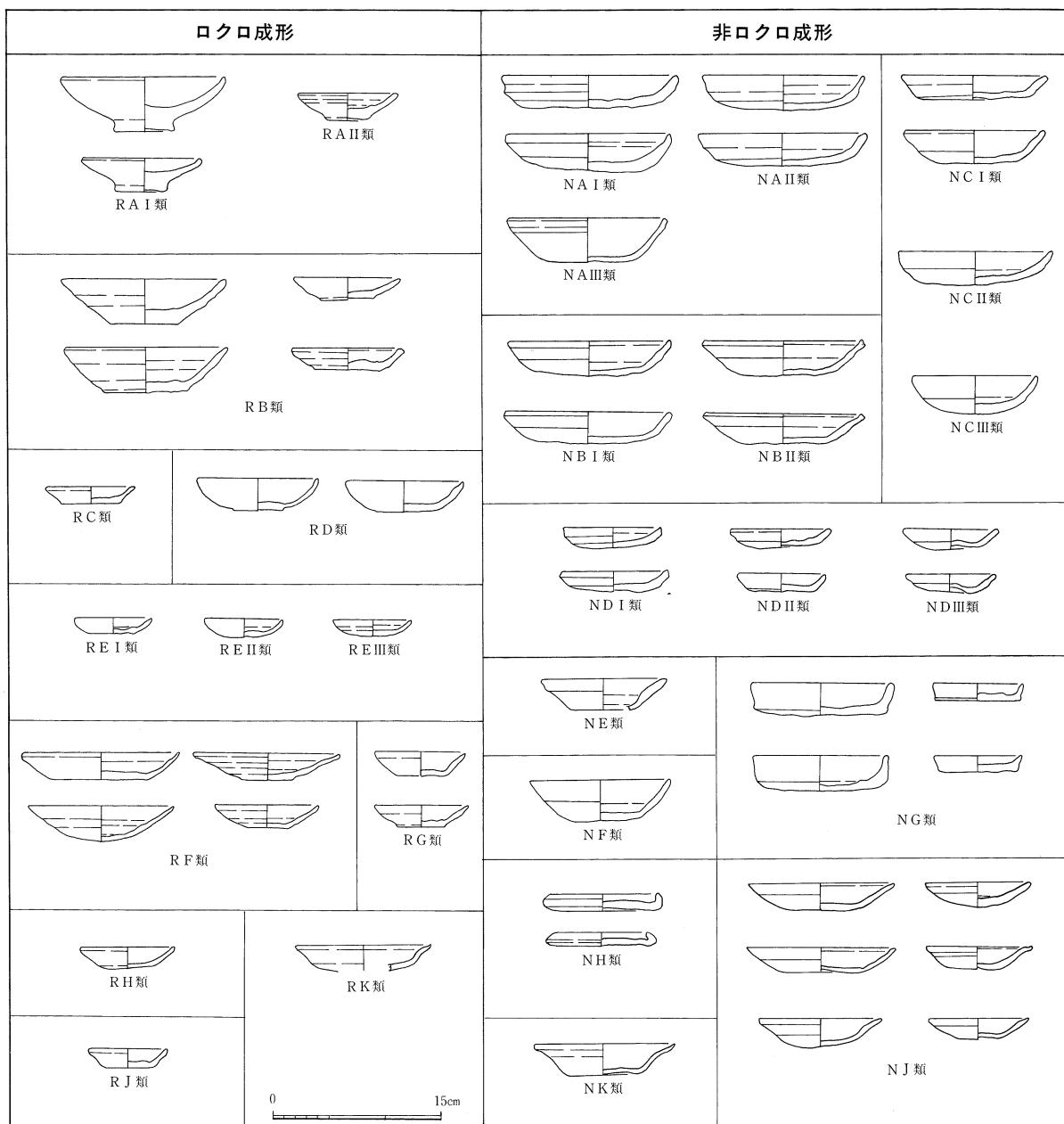
第IV章 考察

1 梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年

A. はじめに

梅原胡摩堂遺跡の中世土師器皿の形態は多様で、帰属年代も幅広い。北陸における中世土師器の編年は、多くの先学によって行われているところであり、越中においては宮田進一氏により5期15小期の大綱が示されている^{注1}。また北陸は京都系土師器皿の製作技法の影響を強く受けている地域であり、京都における土師器皿の編年研究の成果との対比も行う必要がある^{注2-6}。

梅原胡摩堂遺跡には記年銘資料がないため、これまでの編年研究の成果を参考に、共伴する陶磁器の年代や遺構の切り合い関係から編年の指標を求めた。遺構は多くの場合時期幅を持たせざるを得ないが、編年基準となるものはできるだけとりあげた。



第285図 中世土師器皿分類

B. 分類（第285図）

ロクロ成形土師器と非ロクロ成形土師器の二つの系統に分かれ、さらに製作手法及び形態によって細分される。各々の特徴は前章で述べたので、模式図のみ示す。

C. 主な標式遺構（第286図）

陶磁器・中世土師器がまとまって出土し、かつ年代幅を絞ることができる遺構を、年代の古い順に示す。

遺構の年代は、「遺構編」において出土遺物及び覆土の切り合い等から推定されており、これに今回の報告で明らかになった陶磁器の年代等を加味した。ただし陶磁器は耐久年数が長く、伝世品となる場合も多い点を考慮しなければならない。

また、共伴する中世土師器を分類しその組成を追記する。量比を求めるにあたっては、本来なら全ての遺物について計測を行うべきであるが今回は割愛した。しかし、前章で示した遺物に関して分析を行うことによって一応の傾向を示すことができると思われる。個体数は個体識別法による。土師器は多様でここで取り扱う遺構では出土していないものもあるが、それらについては次節で補足したい。

(1) 309号土坑（SK309）

I期（12世紀後半）の珠洲、1060～1160年の中国製白磁等があり、12世紀後半に位置付けられる。中世土師器皿は、半数以上がNDII類で、NAII類も一定量ある。他にRB類・NDI類が少數ある。

(2) 303号土坑（SK303）

I～II（12世紀後半～13世紀前半）期の珠洲、1220～1260年の中国製青磁、1060～1160年の中国製白磁等があり、12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。中世土師器皿はNCI類・NDII類が多く、NAI類・NAII類・NBI類・NCII類・NDI類が数点ある。

(3) 701号溝（SD701）

14世紀の遺物も少數含まれるが、12世紀後半～13世紀前半のものが主体で、14世紀のものがわずかに混入する。特にI期の珠洲、1160～1230年の中国製青磁、1060～1160年の中国製白磁等が多数共伴している。近世の遺物もあるが、上面を流れる近世溝（SD1441）の遺物が混入したものと考えられる。中世土師器皿は、NAI類・NAII類・NDI類・NDII類が多く、RAI類・RB類・NBI類・NCI類・NG類が一定量あり、NCIII類・NF類・NH類が少數ある。

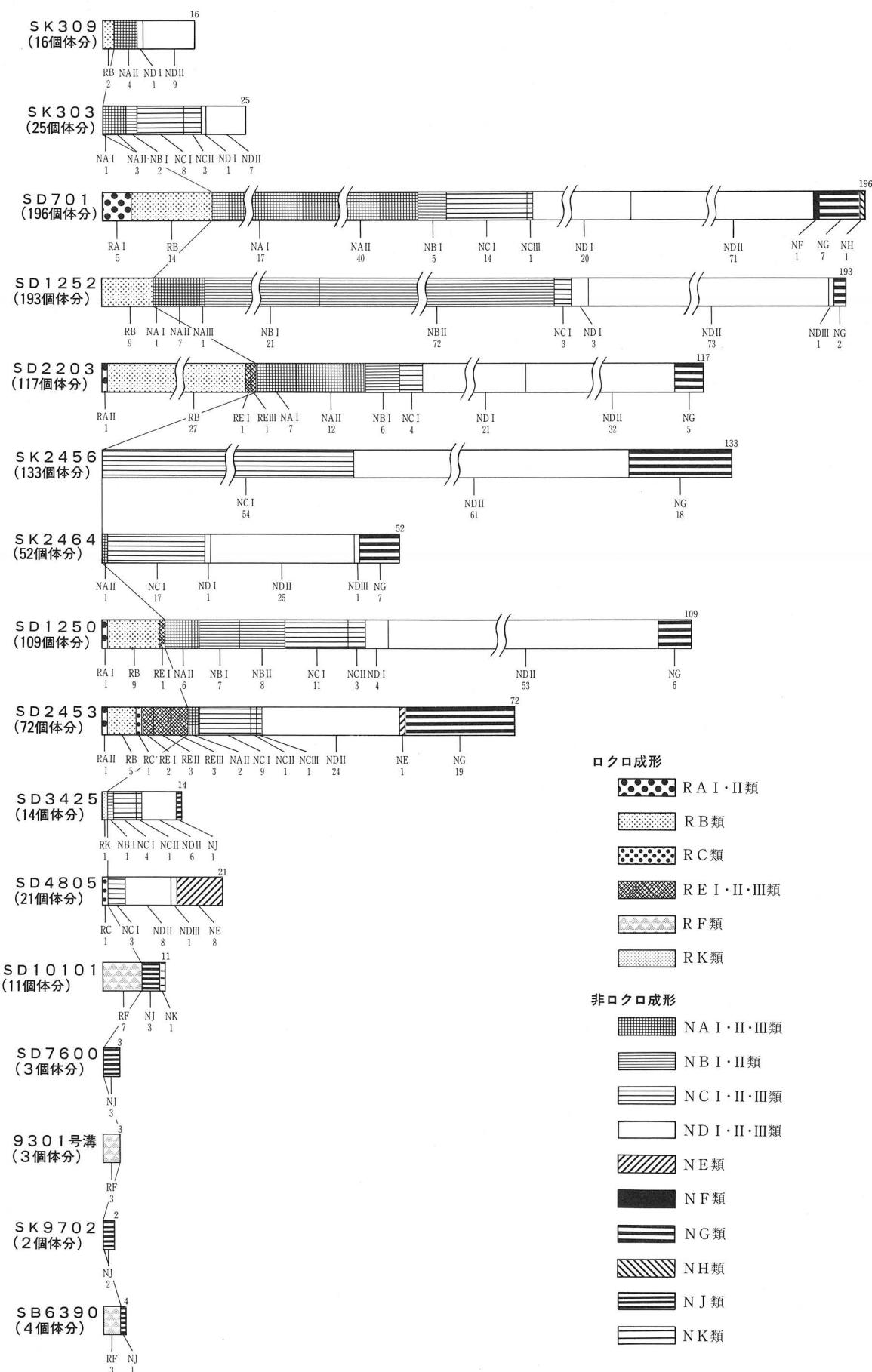
(4) 1252号溝（SD1252）

I期（12世紀後半）の珠洲、1160～1230年の中国製青磁、1060～1160年の中国製白磁等がまとまって出土し、12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。中世土師器皿は、NBI類・NBII類・NDII類が多数あり、特にNBII類は大型の皿の中では群を抜いて多い。RB類・NAII類も一定量あるが、NAI類・NAIII類・NCI類・NDI類・NDIII類・NG類は少數である。

(5) 2203号溝（SD2203）

I期の珠洲（12世紀後半）、1160～1230年の中国製青磁、1060～1230年の中国製白磁・青白磁が多く、陶磁器の年代の主体は12世紀後半～13世紀にあるといえる。他には、IV～V期の珠洲、13世紀後半～14世紀前半の越前、13世紀後半の八尾、瀬戸美濃、1250～1440年の中国製青磁が少數ある。中世土師器皿は、小型のNDI類・NDII類が半数近くを占め、大型ではRB類が最も多く、つづくNAI類・NAII類とで主体を占めている。NBI類・NCI類・NG類は一定量あるが全体に占める割合は低い。RAII類・REI類・REIII類はわずかである。

(6) 2456号土坑（SK2456）



第286図 標式遺構出土中世土師器皿

共伴遺物は1160～1230年の中国製青磁が1点のみ確認されたが年代の確定の根拠とすることは避けるべきと思われる。陶磁器からの年代確定は難しいが、中世土師器の出土状況から一時期に大量投棄あるいは埋納されたものと考えられ、ある時点での一括資料としての資料価値は高い。中世土師器皿は、N C I類・N D II類が大量にあり、N G類もまとまった量ある。

山川均氏は大和においては瓦器椀、土師器皿の一括廃棄は13世紀後葉よりみられ、14世紀中葉にかけて盛行することを指摘している^{注7}。また清水菜穂氏は鎌倉市内検出の土師器皿の「一括廃棄遺構」について、存続年代は全資料の約8割が「13世紀後半代もしくは後葉から14世紀代におさま」り、「そのうちの9割（全体の約75%）は14世紀代」に集中することを指摘している^{注8}。中世の北陸においての京都系土師器の盛行は京文化の北陸に対する強い影響力を示しており、土師器の一括廃棄も京都周辺や鎌倉等に連動して行われた可能性が高い。このことから当遺構の年代も13世紀後半～14世紀を当てておきたい。

(7) 2464号土坑（S K2464）

III～IV期（13世紀中葉～1370年代）の珠洲、1250～1330年の中国製青白磁等がある。13世紀後半～14世紀中頃に位置付けられる。中世土師器皿は、N C I類・N D II類が多く、N G類も一定量出土している。他にはN A II類・N D I類・N D III類がわずかある。

(8) 1250号溝（S D1250）

I期～IV期（12世紀後半～1370年代）の珠洲、1160～1230年の中国製青磁、1060～1230年の中国製白磁、中国製染付、八尾等が共伴する。特に中国製青磁・白磁が多く出土しており、陶磁器の年代の主体は12世紀後半～13世紀と考えられるが、覆土の切り合いからS D1252より新しいことがわかるので、遺構の年代は13世紀～14世紀に幅をもたせておきたい。中世土師器皿は、N D II類が大量にあり約半数を占める。R B類・N A II類・N B I類・N B II類・N C I類・N G類もまとまった数ある。他にはR A I類・R E I類・N C II類・N D I類が少数ある。

(9) 2453号溝（S D2453）

I～IV期（12世紀後半～1370年代）の珠洲、14世紀後半の八尾、窯窓後期I～III期（1360～1450年）の瀬戸美濃（窯窓前期の可能性があるものもある）、1160～1400年の中国製青磁、1060～1200年の中国製白磁等が共伴する。遺物の年代は12～14世紀にまたがるが、量的には13～14世紀が主体になっている。

中世土師器皿は、N D II類・N G類が多く、R B類・N C I類も一定量ある。R E類もI・II・IIIの小分類を無視すればまとまった数量あるといえる。他にはR A II類・R C類・N A II類・N C II類・N C III類・N E類・高台皿がわずかある。

(10) 3425号溝（S D3425）

珠洲はI₁～V期（12世紀中頃～1440年代）にかけてあるが、IV～V期のものが主体となっている。他には1160～1440年の中国製青磁、窯窓後期I～II期（1360～1430年）の瀬戸美濃、13世紀後半～14世紀前半の越前等が共伴する。14世紀～15世紀前半に位置付けられる。中世土師器皿は、N C I類・N D II類がまとめてあり、R K類・N B I類・N C II類・N J類が少数ある。

(11) 4805号溝（S D4805）

III～IV期（13世紀中葉～1370年代）の珠洲、窯窓前期後半（1230～1280年）の瀬戸美濃、瓦器の火鉢類等が共伴する。13世紀の遺物もあるが、瓦器は15世紀以降のものであり、他の遺構の切り合い関係から考えると遺構の年代としては15世紀に位置付けられる。中世土師器皿は、N D II類・N E類が多い。R C類・N C I類・N D III類も少数ある。

(12) 10101号溝 (S D10101)

16世紀前半の越前, III~VI期(13世紀中葉~1470年代)の珠洲, 奢窯後期末~大窯IV期(1450~1610年)の瀬戸美濃, 1330~1580年の中国製青磁, 八尾, 瓦器火鉢類, 越中瀬戸等が多数出土しており, 15~16世紀のものが主体となっている。中世土師器皿は, RF類が多く, NJ類・NK類もある。

(13) 7600号溝 (S D7600)

奢窯期~大窯III期以降(1190~1610年)の瀬戸美濃, 1330~1440年の中国製青磁, 1510~1600年の中国製染付, 1580~1720年の唐津, 越中瀬戸等がそれぞれまとまった量出土している。15~17世紀のものが主体となっている。中世土師器皿は, NJ類が少数ある。

(14) 9301号溝 (S D9301)

IV~VI期(1380~1470年代)の珠洲, 16世紀の越前, 奢窯後期末~大窯III期(1450~1590年)の瀬戸美濃, 1360~1440年の中国製青磁, 1510~1570年の中国製染付, 1580~1610年の唐津等が共伴し, 遺物の年代は15~17世紀初頭に位置付けられる。中世土師器皿は, RF類が少数ある。

(15) 9702号土坑 (S K9702)

大窯II期(1520~1555年)の瀬戸美濃, 1580~1640年の唐津, 近代以降の陶磁器が共伴する。中世土師器皿はNJ類が少数あり, 瀬戸美濃や唐津の年代から16世紀~17世紀前半に位置付けられる。

(16) 6390号土台建物 (S B6390)

16世紀後半~17世紀前半の越前, 大窯I~II期(1485~1555)の瀬戸美濃, 1510~1570年の中国製染付, 1580~1640年の唐津, 17世紀後半の越中瀬戸等が共伴する。遺物の年代は16~17世紀前半までにおさまるが, 遺構は17世紀中頃~後半と考えられる。中世土師器は, RF類・NJ類が少数ある。

D. 分類別の帰属年代

前節では標識遺構出土の中世土師器皿(以下, 土師器と略す)について述べ, 概括的な流れを追ったが, 梅原胡摩堂遺跡の遺構数は膨大で土師器も多様であるため, 標識遺構の遺物だけでは不充分な点が多い。そのため以下は前節で取り上げなかった遺構(共伴遺物等, 年代を求める根拠がないものは省く)及び他遺跡の出土例を考慮しながら, クロスチェックの意味も含めて分類別に帰属年代について考察していきたい。

(1) ロクロ成形土師器

R A類

I類はS D701にまとめた量ある。SK784・SK995・SD1250・SD1377・SD1406からも少数出土したが, SD1250で確認したのは1点のみで主体となっておらず, 他には共伴遺物から時期を特定できる遺構はない。SD701の年代は前述したが, 当遺構のRA I類は他の土師器に比べて少数派であり, 土師器の帰属年代と遺構の存続年代が若干ずれる可能性がある。

II類はSD1406・SD2203・SD2453で1点ずつ確認したが遺構の年代幅は12世紀後半~13世紀と広く, I類と同様のことがいえる。

他遺跡の例でみると, 11世紀末~12世紀初頭の小矢部市桜町遺跡(舟岡地区)及び12世紀前半の同八俵西遺跡において柱状高台土師器が出土しており^{注9}, 梅原胡摩堂遺跡のRA I類は八俵西遺跡のやや低い高台に近似する。

以上からRA I類は12世紀前半に, 後出的なRA II類は次期の12世紀中頃に比定される。

R B類

SD2203に最も多く, 同遺構の中でも比率は高い。SK309・SD701・SD1250・SD1252でも主

体とはならないが一定量ある。他に、SK913ではNBII類・NDI類・NDII類及び1060～1230年の中国製青白磁等が、SK1305ではNBI類・NDII類及び13～14世紀初頭の珠洲・越前・中国製青磁・中国製白磁が共伴する例がある。

ロクロ土師器の椀形の系譜は北陸では古代に遡るもので、隣接する石川県では田嶋明人氏によりこの形態を含めた9世紀から13世紀の土師器供膳器の編年が確立されている^{注10}。氏によれば12世紀中頃に「ロクロ成形の土師器に斉一化されていた」北陸の土師器の組成に「畿内系（平安京）の土師器が加わる」画期があるとされる。県内の11世紀以降の遺跡では、椀形土師器は前述の桜町遺跡（舟岡地区）から12世紀後半の北反戦遺跡等でみられ^{注9}、12世紀後半から非ロクロ二段撫での土師器が混在する。RB類は上記の系譜をもつ椀形土師器に含まれる。梅原胡摩堂遺跡の遺構では単品で出土した以外は非ロクロ土師器と共にしていることから、上限は12世紀中頃、また下限はSK913・SK1305の共伴遺物から13世紀初頭の段階のものと考えておきたい。

R C類

SD2453・SE4335・SD4805から1点ずつ確認したのみである。前節でSD2453は12～14世紀、SD4805は15世紀とした。SE4335はIV～V期の珠洲、漆器（15世紀以降のものである可能性が高い）を伴い遺構の年代は15世紀と推定される。少数のため年代の確定は困難であるが、共伴遺物の年代から13世紀後半から15世紀頃のいずれかの時期に位置付けられ、存続年代は短いものと思われる。

R D類

SK2216・SK2217・SK6095・SE8980等で出土している。

SK2216では土師器皿NCI類が、SK2217ではNDII類が伴う。SK6095では大窯I期（1485～1520年）の瀬戸美濃、珠洲系陶器・越中瀬戸・伊万里・唐津・土師質土器等共伴する陶磁器の年代幅は広いが15世紀末以降の年代のものばかりで、土師器は15世紀後半以降に位置付けられるRF類・NI類を伴う。SE8980ではIII期の珠洲甕、V期の同擂鉢、13世紀後半～14世紀前半の八尾甕、唐津、伊万里が共伴している。井戸の廃絶が近世であるとしても、珠洲・八尾の年代の遺物も含まれていることから、土師器の年代も同年代に遡る可能性があるといえる。県内では婦中町小倉中稻遺跡の13世紀中頃～後半の掘立柱建物から出土した土師器（A4類）に類例がみられる^{注11}。

以上からRD類の帰属年代は13世紀後半から15世紀後半の間に位置付けておきたい。他遺構には胎土が角閃石を含みざらつきがあるものがあるが、SK6095のものは水簸された緻密な胎土であり、RF類の製作技法の影響を受けていると考えられ、共伴遺物からも15世紀後半の年代が当てられる。

R E類

I～IIIの小分類は、同遺構の中で分かれることが多いので時期差を表すものではないようである。そのためここでは小分類は無視しRE類一括で年代を求めていきたい。

SD1250・SD2203・SK2228・SD2453・SE9835・SK10105等から出土している。特にSD2453に多量ある。SD1250・SD2203・SD2453では12世紀後半から14世紀の陶磁器が出土している。SK2228では2点確認されており、IV期の珠洲擂鉢、中国製白磁、古瀬戸後期（1360～1485年）の瀬戸平椀が共伴する。SE9835はIV～V期の珠洲甕、1060～1160年の中国製白磁、1330～1400年の中国製青磁が伴うが、井戸はおそらく溝ほど長い時期幅をもたないと考えられるので、珠洲の年代をもって遺構の時期に当てられる。とすればSK2228・SE9835は13世紀後半から15世紀の間に位置付けられ、SD2453他の溝出土の皿もこれらと形態差がないことから、遺構年代の接点である13世紀後半～14世紀のものと考えられよう。SK10105は土師器皿RF類が共伴する。RF類は15世紀後半からみられ、

16世紀に盛行するが、RE類の他の出土遺構が15世紀代までに収まることから、SK10105出土のものは15世紀後半に位置付けたい。この遺構出土のRE類は1点のみであるが、口縁の形態が上方に向かってつまむRF類の口縁形態に似ており、その影響を受けたものと思われる。

これらのことから、RE類の存続年代は13世紀後半から15世紀後半と考えられる。また溝出土のものは13世紀後半から14世紀に、SK2228・SE9835のものは13世紀後半から15世紀の間に、SK10105のものは15世紀後半に位置付けられる。

石川県白山町墳墓遺跡出土土師器（藤田氏分類Bタイプ）^{注12}や、新潟県六野瀬遺跡他出土の13世紀後半のロクロ糸切りの土師器^{注1}は全く同一ではないが、ロクロ使用で器高が低く、底部から口縁部への立ち上がりに丸みを帯びる点は、RD類・RE類の特徴に似ている。藤田氏は白山町墳墓遺跡の土師器を「非ロクロ土師器の形態を持つロクロ土師器」とし、鶴巻康志氏は、六野瀬遺跡他出土土師器を四柳嘉章氏の漆器編年^{注13}と対比した結果、当該期の漆器椀・小皿とほぼ相似形を呈することを指摘し、これを「漆器模倣土師器」とした。そのような観点でみるとRD類・RE類は非ロクロの皿に径高指数や形態が似ており、また最近の北陸の漆器編年^{注14}と対比させると、高台の有無は別として、体部の形態は近似しており、この形態は15世紀段階にも存続している。梅原胡摩堂遺跡には13・14世紀の漆器はないため、土師器が当地周辺で製作されたと仮定する場合、漆器直接の模倣は強調できない。しかし、当遺跡のRD類の祖形が何かという点を別の課題としても、これに近い形態が少数派であることにもかかわらず、北陸の各地で使用されていたことは興味深く思われる。

RF類

SD4605・SK4821・SD5105・SB6390・SE7193・SD7520・SK8002・SD9301・SD9310・SE9648・SE9883・SD10101等から出土している。

SD9301・SB6390・SD10101の年代については前述した。SD4605はIV期の珠洲甕、窯窓後期III段階・大窯III期以降（1430～1610年）の瀬戸美濃、1250～1580年の中国製青磁、1060～1230年の中国製青白磁、1700～1750年の唐津、越中瀬戸等を伴い、15～17世紀前半の陶磁器が多い。SK4821に伴う窯窓前期後半（1230～1280年）の瀬戸美濃四耳壺・1220～1330年の中国製青白磁（梅瓶か）は伝世品の可能性が高いが、他には16世紀の越前等が伴い、2点の土師器皿は越前と同時期と推定する。SD5105では大窯I期（1485～1520年）の瀬戸美濃、1600～1640年の唐津、越中瀬戸、土師器NCI類・NJ類が共伴し、同遺構のRF類は15世紀末以降と考えられる。SD7520は1330～1400年の中国製青磁等、伝世品も混入するが、土師器NJ類2点は同時期のものであろう。SK8002は珠洲、1700～1750年の唐津、越中瀬戸、伊万里等を伴い、土師器も17世紀以降に下る可能性がある。SD8470は1580～1610年の唐津を伴う。SD9310では珠洲、越前、信楽、窯窓後IV期（1450～1485年）の瀬戸美濃折縁深皿、大窯III期以降（1555～1610年）の瀬戸美濃天目茶椀を伴う。SE9648では大窯I期（1485～1520年）の瀬戸美濃、1460～1540年の中国製青磁等を伴う。SE9883では1580～1610年の唐津を伴う。

上記のことからRF類の初現は15世紀後半頃で、下限は不明であるが16世紀乃至17世紀まで及ぶ可能性がある。また陶磁器から年代を絞れる資料として、15世紀後半から16世紀前半にSE9648、16世紀末から17世紀初頭にSD8470・SE9883が当てられる。

RG類

SK5061・SK5087・SK9329から1点ずつ確認したのみである。SK5061ではRF類が、SK9329ではII期の珠洲甕、VI期の同擂鉢が共伴する。RF類は16世紀以降も存続するがSK5061の共伴例だけではRG類もともに存続するとは断定しがたい。

他遺跡の例では、小矢部市日の宮遺跡^{注15}、井口村井口城跡^{注16}、砺波市秋元遺跡^{注17}等に類似例がある。井口城跡ではA 2類として分類され、15世紀後半に位置付けられている。また秋元遺跡では遺跡の中心となる年代が中世段階では15世紀にあるとされる。

以上のことからRG類の年代は15世紀後半に比定される。

R H類

S D5910で1点のみ確認した。S D5910は昭和初期まで福光町梅原に所在した以速寺の、寺域を囲む堀であったと推定されるものである。中近世の遺物も多いが下層から明治の新製瀬戸が出土しており、層位によって遺物の年代を分けることは不可能である。そのためRH類が中世から近代までのどの時期に属するかは確定できないが、他に土師器の出土が希少であること（小破片でRF類に属するものが数点ある）、技法的にRF類と隔絶した新しい要素をもっていることから「中世土師器」の中で述べたが少なくとも17世紀以降のものと考えられる。また「土師器」か「土器」あるいは「陶器」かという点も今後再考したい。併せて内面の赤色顔料の成分分析を行う必要がある。

RH類に近い土師器を探すと、名古屋城三の丸における17~18世紀の近世土器の中には「内面がきわめて平滑」で「内面の体部と底部の境は不明瞭」な点等RH類の特徴に類似する点が認められるものがある^{注18}。しかしこちらは底部に糸切り痕を残しており、無釉である。底外面に糸切りを残さず平坦に整えた例は東京都千代田区永田町日枝神社境内遺跡の19世紀中葉の灯明皿にみられる^{注19}。これは断面形は似ているが鉄釉を施している点異なる。また京都市三条西殿跡では全面に赤色の釉薬が塗られた櫛目条線のある土師器皿が出土しており^{注20}、18世紀後半と推定されている。これも断面形態は似ていると思われるが、櫛目条線がある点など全く同一とはいえない。

無論これらとの差異は時期差の他に地域差も考慮しなければならず、また形態は似ていっても系譜が異なるものかもしれない。年代の確定は県内及び周辺地域の出土例の増加を待つべきと考える。

R J類

S E3706で1点のみ確認した。共伴遺物には中世土師器皿の小片（形態がわかるものはND II類）、珠洲（小片であるがロクロ目が顯著でありI~II期の擂鉢と考えられる）があるが、14~15世紀に比定されるSK3707の上面から掘り込まれていることから遺構の年代は15世紀以降に位置付けられる。またRJ類は、15世紀後半以降にみられ16世紀に盛行するRF類の水簸されたきわめて緻密な胎土とは異なり、むしろRC類・RE類・RG類といった15世紀に位置付けられる小皿の胎土に近い。これらのことからRJ類はRC類・RG類とほぼ同時期、15世紀頃のものと考えておきたい。

R K類

S D3425の下層で1点確認した。別の1点はS D2203の南に平行する15~16世紀の溝SD2205または近世のSD2207に接続すると考えられる溝から出土した（覆土の違いがはっきりしておらずどちらか不明である）。SD3425の年代から考えると15世紀前半以前になるが、器壁が薄く胎土や口縁端部の作りだしがRF類に似ておりこの特殊な形態とも考えられるので15世紀後半以降に位置付けられ、後世に混入したものと考えるべきであろう。

(2) 非ロクロ成形土師器

NA類

宮田氏は、越中に「京都系土師器の影響を強く受け」て二段撫で土師器が出現するのは12世紀中頃としており^{注1}、田嶋氏も加賀の土師器について同様の見解を示している^{注10}が、最近の調査例では、越中国府関連遺跡では12世紀半ば以前に比定される土師器が出土している^{注21}。京都の土師器の口縁部形

態は宇野氏により細分されており^{注22}、NA類は京都の土師器に比べて器壁が厚いが、手法的には宇野氏分類のC₃類あるいはC₄類に近く、それらを模倣したものである可能性がある。一方、京都では撫で消される場合が多い刷毛状撫でが、明瞭に残るものが多く、平泉等^{注23}この手法が見られる地域との関連性についても今後検討を要する。

I類は、SD701からまとまって出土しており、他はSK303、SD1252等に数点みられる。これらも遺構の年代については前述した。

II類は、法量や胎土等はI類と異ならないが、形態的にみると二段の撫でが形骸化したものと考えられる。出土遺構は、NA I類が多いSD701の他、SD1250・SD1252・SD2203からまとまった量出土し、SK303・SK309・SD2453・SK2464・SE2497・SD3402等に数点含まれる。SD1250・1252・2203と共に伴する陶磁器の年代はSD701の様相に近いが、土師器はSD1252においてはNB類の量が、またSD1250においてはNC類の量がNA類を上回る。後述するようにNB類・NC類はやや新しい時期の遺構で主体となって出土するもので、NA II類はこれらに主体が移りつつある時期の遺構に共伴する場合が多いと理解したい。また溝ほど年代幅がないと思われかつNA II類が主体となるSK309では、I期の珠洲、1060～1160年の中国製白磁が共伴する。

以上のことからI類は12世紀中頃から後半にかけて、II類はやや後出し12世紀後半から末の時期幅をもつと考えられる^{注24}。

III類は1点のみ確認した器形である。SD1252の上層から出土した。SD1252は前述のように12世紀後半から13世紀前半を中心とする遺構である。また二段撫でで内面に刷毛状撫でを施したり、胎土に角閃石を含む点は、NA類・NB類等12世紀後半から13世紀前半に多い特徴である。しかし愛知県朝日西遺跡では15世紀後半に「二段の幅狭のナデを施す。器壁が薄く、大型の皿」がある^{注25}。当遺跡の資料も二段撫でとはいえ幅狭でI・II類に比べると器壁が薄い点などは異質であり、この年代を特定することは現時点では難しいと思われる。あるいは深身の皿以外の器種であるかもしれない。

NB類

I類は、SD701・SD1252・SD2203から一定量出土しており、特にSD1252には多い。SK303・SD1250・SK1283・SK1305・SD1406等にも数点含まれる。SK303・SD701・SD1250・SD1252・SD2203の年代は前述した。SK1283はII期の珠洲が共伴するが、土師器はNC類・ND類・NG類が多くむしろこれらが主体である。SK1305は1060～1230年の中国製青白磁と、土師器RB類・ND II類が共伴する。SD1406は年代のわかる陶磁器はないが、土師器RA類・RB類・NC類・ND類が共伴する。12世紀後半に年代を絞れるSK309からは出土しておらず、ほとんどが13世紀以降の陶磁器を含む遺構から出土している。角閃石を含むものが多く、法量も12世紀後半のNA類と変わらない。13世紀以降のNC I類・NG類が共伴する場合が多く全体量が少ないことから、初現は12世紀末もしくは13世紀初頭で、13世紀前半まで存続すると考えられる。SD701の1点(295)は口縁部に二段撫での名残をもちながら端部面取りを施すもので、形態的には初現期のものと考えられる^{注26}。

II類は、SD1252から多量に出土しており、SK913・SD1250・SZ1199もある。SZ1199は、墓で、出土した土師器皿は副葬品と推測されており、大1枚、小4枚のセットになっている。SZ1199出土のものはII類の中でも胎土や色調が同じで、内面の口縁下に連続的な爪の圧痕が残る特徴があり、製作された時点でセットであった(同一個人によって製作された)と考えられる。しかしこれらの特徴はII類の枠を出るものではなく、松本建速氏の論じる個人の「くせ」によるものと理解したい^{注27}。SD1252の共伴遺物は先述した。SK913は、1060～1230年の中国製青白磁、土師器RB類・ND I類・

N D II類，高台皿が共伴し，12世紀後半～13世紀初頭の遺物が目立つ。法量的にはN A類・N B I類からの変化が少なく，胎土にも角閃石を含み，刷毛状撫でを施す点では技術的に隔絶したものとはいえないが，器壁が薄く，成形，調整の技法に新しい要素が加わる。出土遺構が限られることから存続年代は短いと考えられ，S K913等の共伴関係から13世紀初頭に位置付けておきたい。

N C類

I類は大型の種類の中では最も多く普遍的に出土しているといえる。出土遺構は多数で，そのうち年代を絞れるものは，S K303・S D701・S D1252・S K1282・S K1283・S K2218・S K2456・S K2462・S K2464・S E2468・S K2470・S K2489・S K3528・S E3971・S K4840等である。

S K303・S D701・S D1252・S K2456・S K2464の年代については前述した。S E2468ではI～II期の珠洲擂鉢，土師器R B・N D II類を伴い，13世紀前半に比定される。S K1282ではIII期の珠洲擂鉢，1220～1260年の中国製青磁碗の小片，1160～1230年の中国製白磁碗小片を，S K1283ではII期の珠洲擂鉢，1160～1230年の中国製青磁碗小片土師器N G類等を，S K2218ではII～III期の珠洲壺を，S K2470では窖窯前期後半（1230～1280）の瀬戸美濃，1160～1230年の中国製青磁を，S E3971はI期の珠洲擂鉢，1220～1260年の中国製青磁を伴い，多くは土師器N D II類・N G類が共伴する。13世紀中頃に比定される。S K2462ではIV期の珠洲甕，1250～1330年の中国製白磁等を伴い，13世紀後半～14世紀中頃に比定される。S K2489ではII～IV期の珠洲，1160～1230年の中国製青磁を伴い，13世紀中頃～14世紀中頃に比定される。S K3528はIV～V期の珠洲甕を伴い，14世紀～15世紀に比定される。S K4840は窖窯後期末（1450～1485）の瀬戸美濃，土師器N D II類を伴い15世紀に比定される。15世紀代の陶磁器が共伴する遺構からN C I類が出土する例は多くなく，当該期のものとは断定し難いが，加賀の編年では15世紀後半以降にも類例（藤田氏分類Aタイプ）^{註1}はみられることから存続の可能性はあるといえる。以上のことからN C I類は13世紀前半～15世紀後半頃まで存続し，特に13世紀中頃～14世紀に大量に使用されたものと考えられる。法量差，形態差等はあるが，上記の資料でみると年代の推移に伴う法量・形態の変化については明確な解答を得ることができなかった。

II類はS K303・S D1250・S D1406・S K2452・S D2453・S K2486・S E2497・S D3425等から出土している。S K303・S D1250・S D2453・S D3425の年代については前述した。S D1406ではN D II類，R B類が多く，少量のN B I類・N C I類・N D I類・R A I・II類を伴う。S K2452ではN A I類・N D II類が共伴する。S K2486ではIV期の珠洲甕・擂鉢，1160～1330年の中国製青磁，土師器N C I類・N D II類を伴う。S E2497では1160～1230年の中国製青白磁，土師器N A II類・N B I類・N D II類を伴う。量的に少なく共伴遺物からは中世前期の大枠で捉えるしかない。

III類はS K839・S K1310に多数あり，他にはS D701・S K1273・S K2218・S D2453・S K2462等から少数出土している。S D701・S D2453の年代は前述した。S K839は焼土や炭と共に土師器が大量に出土し，断定はできないが土師器焼成窯の可能性も残る土坑で，いずれにしても土師器は一括遺物として捉えられる。共伴遺物は珠洲小片，1060～1160年の中国製白磁碗II 4類小片がある。土師器はN C III類及びN D II類がおよそ半々の割合で構成され，N D II類も器壁が厚く，丸底に近く，胎土もN C III類に近い様相のものが多いことから同一の個人または集団によって製作された可能性が高い。S K1310も土師器ばかり大量に出土した土坑で，構成比はN D II類が最も多く，ついでN C I類，N C III類の順になる。これらの土坑は時期がわかる共伴遺物がないが，S K1273では1220～1260年の中国製青磁，S K2218ではII～III期の珠洲壺，土師器N C I類・N D II類・N G類，S K2462では，II～IV期の珠洲，1250～1330年の中国製白磁，土師器N C I類・N D II類・N G類が共伴する。量的

に少なく出土した遺構が限られるので当遺跡周辺で使用された時期幅は短いと考えられるが、上記の共伴関係からは限定は難しく、13世紀後半から14世紀の間のいずれかの時期としておきたい。

N D類

I類はS D701・S D2203から特に多く出土しており、他にはS K303・S K913・S D1250・S D1252・S K1283・S D1406等から出土している。

これらの遺構の年代については前節及び前項で述べた。また、口縁部形態、胎土、調整等がN A I類の特徴に近似し、その小皿と考えられる。12世紀中頃から後半に位置付けられよう。

II類は最も多くの遺構から出土するものである。前章で標識遺構として挙げた遺構の中では、S K303・S K309・S D701・S D1252・S D2203・S K2456・S K2464・S D1250・S D2453・S D3425・S D4805から出土している。これらと同年代に属する他の遺構でも普遍的にみられ、12世紀後半から15世紀には広く用いられていたといえる。N A II類・N B類・N C類の小皿と考えられることからも同時期の年代が当てられる。また共伴遺物が16世紀以降のものに限られる遺構では出土していない。

III類はS K1299・S K1306・S K2460・S K2489等から一定量出土しており、他にはS D1252・S K1294・S K2464・S K2466・S K2470・S D4805・S E5060等で1点ずつ確認した。

S D1252・S K2464・S K2470・S D4805の年代については前章、前項で述べた。S K1294はI期の珠洲甕、1160～1260年の中国製青磁、土師器N D II類が、S K1299は土師器N D II類が、S K1306はIII～IV期の珠洲擂鉢、1220～1260年の中国製青磁、土師器N C I・III類・N D II類・N G類が、S K2460はI・II期の珠洲擂鉢、1160～1330年の中国製白磁、土師器N C I類・N D I・II類・N G類が、S K2466はIV・V期の珠洲、土師器N C I・ND II類が、S K2489はII・IV期の珠洲、1160～1230年の中国製青磁、土師器N C I・II類が、S E5060は1360～1500年の中国製白磁を伴う。これらの共伴関係からN D III類はN D II類の年代幅である12世紀後半から15世紀の間に散在しているといえる。

N E類

S D4805から多数出土しており、他にはS D2453、S K5019にわずかみられる。S D4805、S D2453の年代は前述した。S K5019は土師器N C I類を伴う。

全く同一ではないが、体部下半を粗く指押さえし口縁の横撫で部分直下から器壁が薄くなる形態は京都の14世紀半ばから15世紀代を通してみられる土師器（鋤柄氏分類B類）^{注5}に類似点があると思われ、梅原胡摩堂遺跡の上記の共伴関係から求められる年代ともほぼ一致する。S D2453のものは14世紀後半、S D4805のものは15世紀に位置付けられよう。ただし量的に少ない資料なのでそれらが各時代の平均的な形態か否かは不明である。

N F類

S D701で1点、S D911で3点確認した。S D701の年代は前述した。S D911は、II～III期の珠洲壺、1160～1260年の中国製青磁、17世紀初頭の越前擂鉢、1690～1720年の唐津京焼風が共伴する。土師器皿はN D II類・N G類が多数あり、他にはN C I類が一定量、N B I類がわずかある。

これらの共伴関係からは時期を特定することは困難である。ただ可能性として、形態からみてR B類の模倣と考えられ、確証はないが、その場合は12世紀後半から13世紀初頭の年代が考えられる。

N G類

S D701・S D1250・S D1252・S K1282・S K1283・S D2203・S K2218・S D2453・S K2456・S K2460・S K2462・S K2464・S K2466・S K3528・S E3971・S D4602等から出土している。

S D701・S D1250・S D1252・S D2203・S D2453・S K2456・S K2460・S K2464の年代は前述

した。SK1282はIII期の珠洲擂鉢, SK1283はII期の珠洲擂鉢, SK2218はII～III期の珠洲壺, SK2462はII～IV期の珠洲甕, 1250～1330年の中国製白磁, SK2466はIV～V期の珠洲, SK3528はIV～V期の珠洲甕, SE3971はI期の珠洲擂鉢, 1220～1260年の中国製青磁, SD4602はI～V期の珠洲, 16世紀後半～末・17世紀の越前甕, 1520～1555年の瀬戸美濃, 1460～1580年の中国製磁器類を伴う。

土坑は比較的時期を限定しやすく, その中でもまとまった量出土しているのはSK2464・SK2456・SK3971で, これらはすべてNCI類, NDII類が割合的には若干多い量で共伴し, 陶磁器の年代は13世紀前半から14世紀に及ぶ。しかし, 13世紀前半以前に時期を限定できるSK303(共伴遺物は前述), SK307(I₁期の珠洲が共伴), SE2468(I・II期の珠洲が共伴), SE249(1160～1230年の中国製青磁が共伴)では土師器にNG類がみられないことから, NG類は13世紀後半以降に初現があるといえる。またV期の珠洲を伴う例も多いので15世紀前半頃まで存続する可能性も否定できないが, 確実に存在したといえるのは13世紀後半から14世紀後半にかけての時期であろう。ただし同一遺構の中でも形態等に違いがみられる反面, それが他遺構との相対的な違いには発展しないことから, 時期を追っての形態変化は不明瞭である。この点は逆に細部が異なる形態のものが同時期に存在した可能性が高いことを示すものと考えることもできる。

NH類

SD701・SK925・AS地区の包含層から1点ずつ出土した。SD701の年代は前述したがSK925は不明である。京都では11世紀中頃～14世紀初頭にみられる形態であるが, 1663・1665は胎土に角閃石を含み, 口縁部に二段撫でを応用していると思われ, NA I類と同じ12世紀中頃と考えておきたい。

NJ類

SD3425・SD4605・SD5003・SD5105・SK5142・SD6006・SE6040・SB6390・SK7448・SD9318・SD9334・SK9685・SK9758・SD10101等から出土した。

SD3425・SD4605・SD5105・SB6390・SD10101の年代については前節及び前項で述べた。ただしSD3425はRK類と同様後世の混入と考えられる。SD5003はVI期の珠洲擂鉢を伴い15世紀後半に, SD9318では大窯I期(1485～1520年)の瀬戸美濃天目茶碗を, SD9334では大窯I期の瀬戸美濃稜皿を伴い15世紀末～16世紀初頭に, SK5142は大窯III期以降(1555～1610年)の瀬戸美濃, 茶臼が共伴し16世紀後半～17世紀初頭に, SK9685では大窯I期の瀬戸美濃丸皿, 1580～1640年の唐津皿, 1590～1660年の唐津擂鉢, 越中瀬戸等を伴い15世紀末～17世紀前半に位置付けられる。SD7600は15～17世紀にわたる幅広い年代の陶磁器が共伴し, 土師器の年代も限定しがたいが, この遺構から出土したNJ類は近い位置から出土しており形態も似ているので, 一括遺物として捉えられる。さらにそれらの口縁部形態は瀬戸美濃折縁皿, 唐津溝縁皿に近似しており, これらを模倣したもの, あるいは直接模倣していないともそのような特殊な形態が流行した時期があったと考えられる。このように仮定すれば, 前者は大窯III～IV期(1555～1610年)に, 後者は17世紀前半の年代に生産されていることから, 同時期の16世紀後半～17世紀前半の年代を当てることが可能である。SD6006・SE6040・SK7448・SK9758では年代を特定できる陶磁器はないが, それぞれ複数のNJ類が出土しており, 一括遺物として捉えられる。上記の共伴関係からNJ類の初現は15世紀後半頃で, 下限は16世紀末もしくは17世紀前半まで及ぶと考えられる。

NK類

15～16世紀が主体のSD10101から出土しており, NJ類に胎土や形態が近くその特殊形とも考えられることから, 15世紀後半以降のある時期のものと考えられるが, 詳細は不明である。

E. 結　　び

以上のことから梅原胡摩堂遺跡における土師器の変遷についてまとめてみたい。

梅原胡摩堂遺跡において最も古い段階の遺構と考えられるものはⅠ期の珠洲を伴う遺構である。すなわち12世紀中頃から後半にかけての遺構であり、この段階には北陸の在地的手法として古代から受け継がれてきた椀型のロクロ土師器と、京都の手法を模した非ロクロ二段撫での土師器（N A I・II類）が共存する。また少量ではあるが、特殊な用途をもつコースター型もみられ、京都の文化の強い影響を受けていたことが推察される。ただしこれらの土師器は京都の土師器と全く同一というわけではなく、器壁が厚く、刷毛状撫でが明瞭に残るものが多い点は、平泉等の様相に似ている。

京都で二段撫でから一段撫で主体へと変遷する12世紀末から13世紀初頭にかけて、梅原胡摩堂遺跡でも一段撫での土師器がみられるようになる（N B類）。一段撫で土師器の系譜はN C類へと引き継がれ、土師器一括廃棄（埋納）という特殊な文化背景に乗じて、14世紀頃までは大量に使用され、その後15世紀後半頃までは少量ながら存続した可能性がある。N C類は13世紀前半からN B類に共存していくが、量的に安定してくるのは13世紀後半以降である。これは一段撫で土師器において13世紀中頃に法量の縮小化という画期があることを示し、鋤柄氏が京都の土師器において「法量規格の再編成が行われる」とする^{注5}13世紀後半から14世紀前半の画期と時を同じくする。

京都系土師器の法量の変遷過程については、伊野氏^{注4}や鋤柄氏^{注5}の研究があり、清水氏がこれらの成果と古文書の記録からまとめるところでは、13世紀代には「大土器・小土器」と呼称される大小2種の法量であったものが、14世紀中頃には「〇度入」の規格が普及し、以後細分化され大型の規格が加わる一方で別種の規格もしくは器種が漸次出現するとされる^{注28}。

梅原胡摩堂遺跡の非ロクロ土師器でみると、大小の2規格は12世紀から14世紀乃至15世紀の間で使用されており、大型の方はN B類からN C類へと主体が移る13世紀中頃に法量の縮小化がなされる。小皿はそれ程明確な推移はないが、古い段階に位置付けられるN D I類では口径が大きく厚いものが主体となっている。京都にはみられないN G類でも同様に2規格である。その後15世紀後半から新しい器形として加わるN J類は多様な規格となっており、法量の面でも京都の変遷過程と大方変わりないといえる。特に12世紀から13世紀前半においては規格（口径）もほとんど同じである。

13世紀後半は法量的な画期であるとともに、京都にはない形態のものが出現する画期もある。ロクロ土師器ではR D類・R E類（R C類も可能性としてある）が、非ロクロ土師器ではN G類が現れる。N G類は土師器一括廃棄土坑（SK2456）からN C I類とともに大量に出土していることや灯明皿として使用されたものもあることから、用途的にはN C I類と特に異なる点は見いだせない。またN C類は、法量的にはある程度のまとまりがあるが、前段階のN A類やN B類と異なり、色調、形態等の面で多様性に富む。全ての破片をその特徴によって分類することは困難であるが、遺構単位または別遺構でも似た特徴（特に、横撫で幅や体部下半の指押さえの加減等、成形・調整過程の微妙な違いから生じる全体の器形や器壁の薄さ等の特徴に強い類似性が見いだされる）をもつものとして括ることができるものもある。それらの違いはタイプとして捉えられるほどの大きな差異ではなく、かといって松本氏が定義する個人の「くせ」^{注27}による小異だけにとどまらないため、同時期にある一定の基準を満たす土師器皿を製作する複数の工房が存在したことに起因する可能性が高い。

ここで文献史等から遺跡周辺の歴史について考えてみたい^{注29}。

越中砺波郡の石黒莊は、後三条天皇の御願寺円宗寺の所領で、同寺に寄進されたのは1078年のことである。梅原胡摩堂遺跡周辺はこの石黒莊山田郷にあたる。これに隣接する広瀬郷は山田郷の一部で

あったともいわれ関係の深い郷であるが、宝治2年（1248）の広瀬郷の内検帳によれば所領の本体である見作田41町2段5歩のうち、19町4段が年貢負担を免除された除田であったとされ、莊官や六呂師、紙すき等の職人の人給田もこれに含まれていた。ここには土器作は見られないが、他地域ではこれを含む各種の給免田が平安時代から鎌倉時代にかけて存在しており^{注30}、当遺跡周辺の土師器も給免田制の下に生産構造が維持されたものである可能性は高く、これが13世紀後半から土師器皿の形態が多様になり、一気に出土量を増す要因とも考えられる。

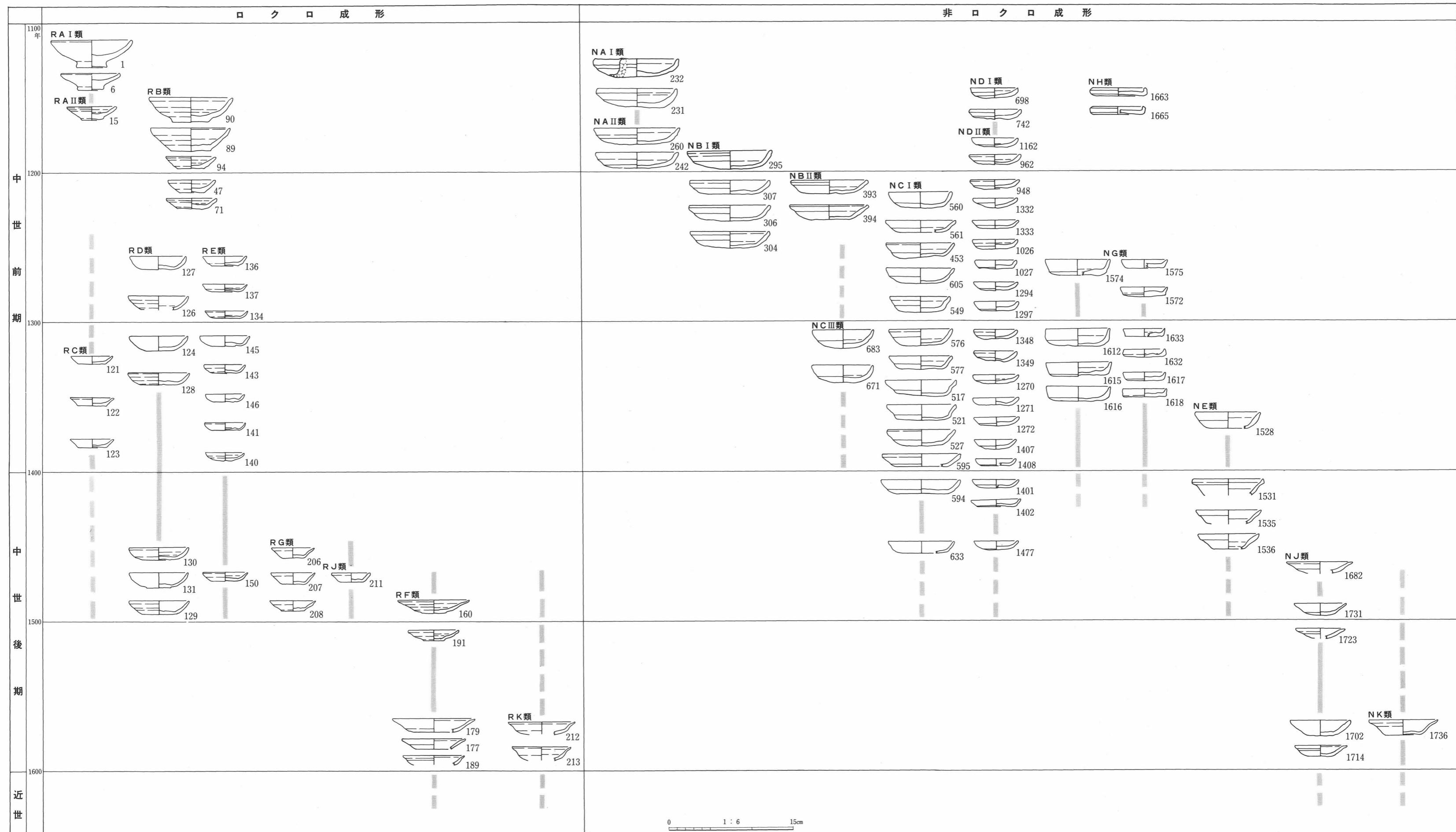
一方この頃のロクロ成形土師器は、灯明皿として使用されたものはあるが、量的にも少なく一括廃棄はされていない。またロクロを使用した当然の結果とはいえつくりが非常に丁寧で器壁が薄く端正であることから、推論であるが、非ロクロ土師器より品物としての価値が高く、「用途」あるいは使用する人間の階級など広い意味での「使われ方」が異なっていたのではないかと思われる。

15世紀以降も京都系土師器の影響を受けている。口縁部が帯状に突出する形態（N E類）や、15世紀以降の「ほへ」や「うつけ」等を使用して製作されたといわれる^{注31・32}形態に似るもの（N J類）が出現する。型等から外しやすくするためのものと思われる内面の布压痕や、前段階の横撫でと異なり器具を用いたと思われる横撫で痕は、京都の製作技法が伝播し、肘に当てて成形したり「ほへ」等に近い器具を使用した結果残ったものではないかと考えられる。また法量の面では、資料上の制約から明確な傾向は示せないが、大小の二規格だけではなく、中間的な口径のものが見られるようになり、前述した規格の細分化へと向かう変遷過程を辿っているといえる。

一方で、N J類に伴ってロクロ成形でもこれに非常に似た器形のR F類が出現する。またこれらにやや先行してRG類・RH類といった様々な形態の小皿が微量ながら存在することは、在地的なロクロ成形の技術を零細ながら保持してきた職人たちが、京都系N J類に対する強い需要の波に乗ってその模倣を行い始めたことを示すものとも考えられる。そしてこの段階には胎土が極めて精緻なものとなり、体部を薄く長く挽き出す技法が備わるという技術的な革新がみられる。これが在地で独自に発展したものであるのか、外部からの影響であるのかは、今後の調査例の増加を待って考えていくたい。

平泉や鎌倉等のロクロ成形を基本とする東国にあっては、清水氏によると「（京都系土師器が）12世紀後半を早い事例として13世紀代に多く出現する。14世紀にはいるとすべてがロクロに回帰し、京都系土師皿は消滅するが、15世紀後半ないし16世紀に再度出現」し、これらの画期と時期的に合致する全国的な大乱が京都の文化の拡散につながるとされる^{注28}。宇野氏は、鎌倉や平泉では京都系土師器が「権力の中心地において存在し、存続期間も短かった」ことに対し、「北陸では非ロクロ土師器が広く普及し、中世を通じて主流となった点において、独自の様相をもっている」とし、また京都から直接影響を受け続けるのではなく、短い期間で強い影響を受け後は独自に変遷したとする^{注33}。梅原胡摩堂遺跡の土師器皿はこれまで述べてきたように形態や法量等の変化の画期には京都と連動性があり、それらの時期に強い影響があったと考えられ、特に12世紀後半から13世紀前半及び15世紀後半から16世紀にかけての2時期は、京都の様相に最も近づく期間といえる。しかし、一方でその時期においても当遺跡の土師器が京都の土師器と細部で異なる点、例えば厚い器壁や刷毛状撫でを消さない点等は、京都直接ではなく、京都系土師器の影響を受けた他地域からの影響である可能性も検討していかなければならない。

前述したように梅原胡摩堂遺跡の周辺は鎌倉時代には円宗寺領石黒莊山田郷に属しており、文明13年（1481）に一向一揆により石黒莊は壊滅するが、その後石山本願寺領となり絶えず京都の寺社領であった。室町時代以降は管領畠山氏が守護代となり、応仁の乱後は、「大乗院寺社雜事記」によれば



第287図 梅原胡摩堂遺跡中世土師器皿編年表

SD 701 (6/242/260/295/698), SK 839 (671), SK 913 (47), SK 925 (1665), SD 1250 (134), SD 1252 (304/306/307/393/394/948/962), SK 1256 (124), SK 1282 (1572), SK 1283 (453/1026/1027/1574/1575), SK 1305 (71), SK 1310 (683), SD 2203 (15/89/90/94/136/137/212/231/232/742/1162), SK 2216 (126), SK 2217 (127), SD 2453 (121/140/141/143/145/146/1528), SK 2456 (517/521/527/1270/1271/1272/1612/1615/1616/1617/1618), SK 2462 (549/1294/1297), SK 2464 (1632/1633), SE 2468 (560/561/1332/1333), SK 2489 (576/577/1348/1349), SE 3052 (128), SD 3425 (213/594/1401/1402), SK 3528 (595/1407/1408), SE 3706 (211), SE 3971 (605), SE 4335 (122), SD 4805 (123/1531/1535/1536), SK 4840 (633/1477), SD 5002 (160), SD 5003 (1682), SK 5061 (207), SK 5087 (206), SK 5142 (1702), SK 6095 (129), SE 6321 (130), SD 7600 (1714), SK 8001 (179), SK 8981 (131), SD 8470 (177), SD 9318 (1723), SK 9329 (208), SD 9334 (1731), SE 9648 (191), SE 9883 (189), SK 10101 (1736), SK 10105 (150), 包含層(1/1663)

明応2年（1493）に細川政元のクーデターにより十代將軍足利義材が越中に下向し、越中及び近国の諸将がこれを奉じたという。義材は明応7年に越前へ進出するまでの間放生津に御座所を設け、越中御所、越中公方と称せられた。文献史上でも越中は京都とは強い結びつきがあったことが窺える。

しかし、鎌倉時代には越中は承久の乱以前から1333年の幕府崩壊まで、北条氏嫡流の名越氏が守護となっており、政治区画においては東国に所属させられていた^{注29}。一般に守護の在地からの遊離性が指摘されるところであるが、当遺跡の土師器が特に中世前期において、京都の土師器と細部で異なる要因はこれらの政治背景に少なからず影響を受けている可能性もある。

以上梅原胡摩堂遺跡の土師器皿の変遷について考察してきたが、筆者の力量不足により全体の流れを概観するにとどまった感がある。また特に中世後期から近世にかけては資料上の制約もあって詳細な分類・編年作業には積極性を欠いた。これらの点については諸先学の御叱正を仰ぎ、今後の調査研究の進展とともに再考していきたい。

（越前慎子）

- 注1 北陸中世土器研究会 1992 「中世前期の遺跡と土器・陶磁器」
- 注2 橋田洋三 1982 「出土土師器皿編年試案」『平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五条三坊十五町』財団法人古代学会
橋田洋三 1984 「土師器皿の分類と編年観」『平安京跡研究調査報告第11輯 平安京左京四条三坊十三町』財団法人古代学会
- 注3 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982 「京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報III」
- 注4 伊野近富 1987 「「かわらけ」考」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注5 鋤柄俊夫 1988 「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会
- 注6 百瀬正恒・橋本久和 1988 「中世平安京の土器様相と各地への展開」『考古学ジャーナルNo.299』ニュー・サイエンス社
- 注7 山川 均 1994 「土器をまとめてすること」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 注8 清水菜穂 1994 「「かわらけ」考(3)」『中世都市研究 第3号』中世都市研究会
- 注9 小矢部市教育委員会 1990 『北反畠遺跡一条里遺構の発掘調査概要II』
なお遺跡の年代等については同教育委員会伊藤隆三氏に御教示頂いた。
- 注10 田嶋明人 1986 「IV考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－3）9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター
- 注11 婦中町教育委員会 1994 「小倉中稻遺跡発掘調査報告書(2)」
- 注12 藤田邦雄 1989 「中世土器素描—加賀地方の土師器を中心として」『北陸の考古学II』石川考古学研究会
- 注13 四柳嘉章 1991 「中・近世漆器の編年」『西川島』穴水町教育委員会
- 注14 本書第2分冊 自然科学分析 IV漆器塗膜分析
- 注15 富山県教育委員会 1978 「富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書」
- 注16 井口村教育委員会 1990 「井口城跡発掘調査概要」
- 注17 研波市教育委員会 1990 「秋元遺跡発掘調査報告書」
- 注18 金子健一 1993 「名古屋城三の丸遺跡にみる陶磁器・土器の組成と灯火具の変遷について」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第1輯』
1994 「尾張出土の近世土師器皿について」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第2輯』
- 注19 佐々木達也 1977 「19世紀中葉の灯器」『金沢大学文学部論集 史学編 25』
- 注20 鋤柄俊夫 1994 「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』古代學研究所研究報告 第4輯
- 注21 高岡市教育委員会 1989 「越中国府関連遺跡調査概報III」
1994 「越中国府関連遺跡調査概報VI」
なお上記の遺跡からは二段撫で手法及びての字状口縁の土師器皿が出土している。これらが京都からの搬入品であるかどうかは不明であるが、京都の編年に照らせば前者は12世紀初頭に（伊野近富氏・百瀬正恒氏の御教示による）、後者は11世紀後半頃に（森隆氏のご教示による）比定される。国府周辺では11世紀末に京都系土師器が導入されていた可能性が高い。
- 注22 宇野隆夫 1981 「白河北殿北辺の土器・陶磁器」『京都大学埋蔵文化財調査報告II 白河北殿北辺の調査』
- 注23 平泉町教育委員会 1994 「岩手県平泉町文化財調査報告書第38集 柳之御所跡発掘調査報告書」
- 注24 稿了後、伊野近富氏より、京都の編年に当てはめれば、口縁部の形態からN A II類の286は12世紀第1四半期、N A I類の232は12世紀第2四半期に当たるとの御教示を頂いた。
- なお氏には京都府内膳町遺跡等の資料見学の機会を与えて頂くとともに京都系土師器について御教示頂いた。また梅原胡摩堂遺跡の土師器についても御高覽の上京都系土師器との比較から御指摘頂いた点が多々ある。
- 注25 佐藤公保 1987 「中世土師器研究ノート(2)」『愛知県埋蔵文化財センター一年報』
- 注26 伊野氏より、京都大学構内遺跡A H19区 S K 6出土土師器の様相に類似するとの御教示を得た。
京都大学埋蔵文化財研究センター「京都大学構内遺跡調査研究年報1989~1991年度」
なお295の形態は前掲注21文献の宇野氏分類C₅類に近いと思われる。
- 注27 松本建速 1994 「手づくねかわらけからみた個の解釈」『財団法人岩手県文化振興事業財団埋蔵文化財センター紀要 XIV』
- 注28 清水菜穂 1991 「「かわらけ」考(1)」『中世都市研究 第1号』中世都市研究会
- 注29 富山県 1984 「富山県史 通史編II 中世」
- 注30 横井 清 1975 「中世民衆の生活文化」東京大学出版会
- 注31 橋田洋三 1984 「付論 土師器皿(Bタイプ系)の器形、規格の変化と製作技術について」『平安京跡研究調査報告第12輯 押小路殿跡』財団法人古代学会
- 注32 島田貞彦 1931 「山城讃岐の土器」『考古学雑誌 第21卷3号』日本考古学会
- 注33 宇野隆夫 1986 「越中弓庄城跡の土師器」『大境 第10号』富山考古学会

2 中国製陶磁器の分類と編年

A. はじめに

前章で報告したように、梅原胡摩堂遺跡からは多くの中国製陶磁器が出土している。もちろん北部九州の太宰府や博多などの諸遺跡に比べれば、出土量としては比較にならないほど少ないものであるが、それでも富山県内のこれまでの中世遺跡の調査の中では、最も出土量が多くかつ種類が豊富であることは確かである。おそらく、富山県における中国製陶磁器の様相を理解する上で、代表的な資料になると考えられるので、ここでは中国製陶磁器の分類と編年について、まとめと若干の考察を行い、今後の研究に備えておきたい。

梅原胡摩堂遺跡の中国製陶磁器は、遺構内をはじめ包含層や表土層からも出土している。本報告では種々の制約のもと、すべてを資料化し分析することができなかった。資料化し得たのは遺構からの出土資料を中心に、包含層・表土層の一部のみである。図に示したものが、本遺跡の中国製陶磁器の様相を正確に表しているかどうか気になるところもあるが、出来る限り形態のバラエティーと代表的な資料を抽出した。

B. 中国製陶磁器の分類

中国製陶磁器は、白磁、青磁、青白磁、染付、褐釉壺、天目碗が出土しているが、ほとんどが磁器類で、褐釉壺、天目碗はそれぞれ1個体分が確認されているのみである。前章では大部分を占める磁器類について、産地・器形・文様等から分類を行った。白磁については碗、皿、小杯、角杯、壺類(壺・小壺・水注)、壺蓋に器種分類し、さらに碗を1~10類、皿を1~12類に細分した。青磁については、龍泉窯系と同安窯系に大分類した。前者は碗、皿、杯、小碗、盤、鉢、壺、壺蓋、香炉に器種分類し、さらに碗を1~19類、皿を1~3類に細分した。同安窯系青磁についても碗、皿、鉢に器種分類し、さらに碗を1~3類、皿を1~3類に細分した。青白磁については碗、皿、小壺、瓶類、合子に、染付は碗、皿、鉢にそれぞれ器種分類した。

以上の各類の形態的特徴については前章に述べたとおりであるが、なかでも主体を占める碗・皿類を最近の編年的研究の成果である、北部九州（太宰府）における分類^{注1}、森田勉氏による白磁の分類^{注2}、上田秀夫氏による青磁碗の分類^{注3}、小野正敏氏による染付等の分類^{注4}に対比すると第6表のようになる。破片資料が多くて、細かな分類が不可能なものもあるが、出来る限り細分し対比した。

C. 最近の編年的研究

平安時代及び鎌倉時代における中国製陶磁器の分類と編年については、太宰府での研究成果が参考になる。山本信夫氏によれば、当該期の中国製陶磁器は

1. A期（8世紀末～10世紀中頃）
2. B期（10世紀後半～11世紀中頃）
3. C期（11世紀後半～12世紀前半）
4. D期（12世紀中頃～12世紀後半）
5. E期（12世紀末～13世紀前半）
6. F期（13世紀前半～14世紀前後）
7. G期（14世紀初頭～15世紀前半？）

の7期に時期区分されるという^{注5}。

また中世後期については、14世紀～16世紀の青磁碗を分類した上田秀夫氏は編年試案として、

1. 一期 (13世紀中葉～14世紀前葉, 山本F期にはほぼ相当)

2. 二期 (14世紀前葉～中葉, 山本G期前半にはほぼ相当)

3. 三期 (14世紀中葉～15世紀中葉, 山本G期後半にはほぼ相当か?)

4. 四期 (15世紀前葉～15世紀後葉)

5. 五期 (15世紀後葉～16世紀代)

に区分している^{注6}。

さらに森田勉氏は14世紀～16世紀の白磁碗・皿類を

1. A群 (13世紀中頃～14世紀前半)

2. B群 (14世紀代)

3. C群 (15世紀前後)

4. D群 (14世紀後半～16世紀前後)

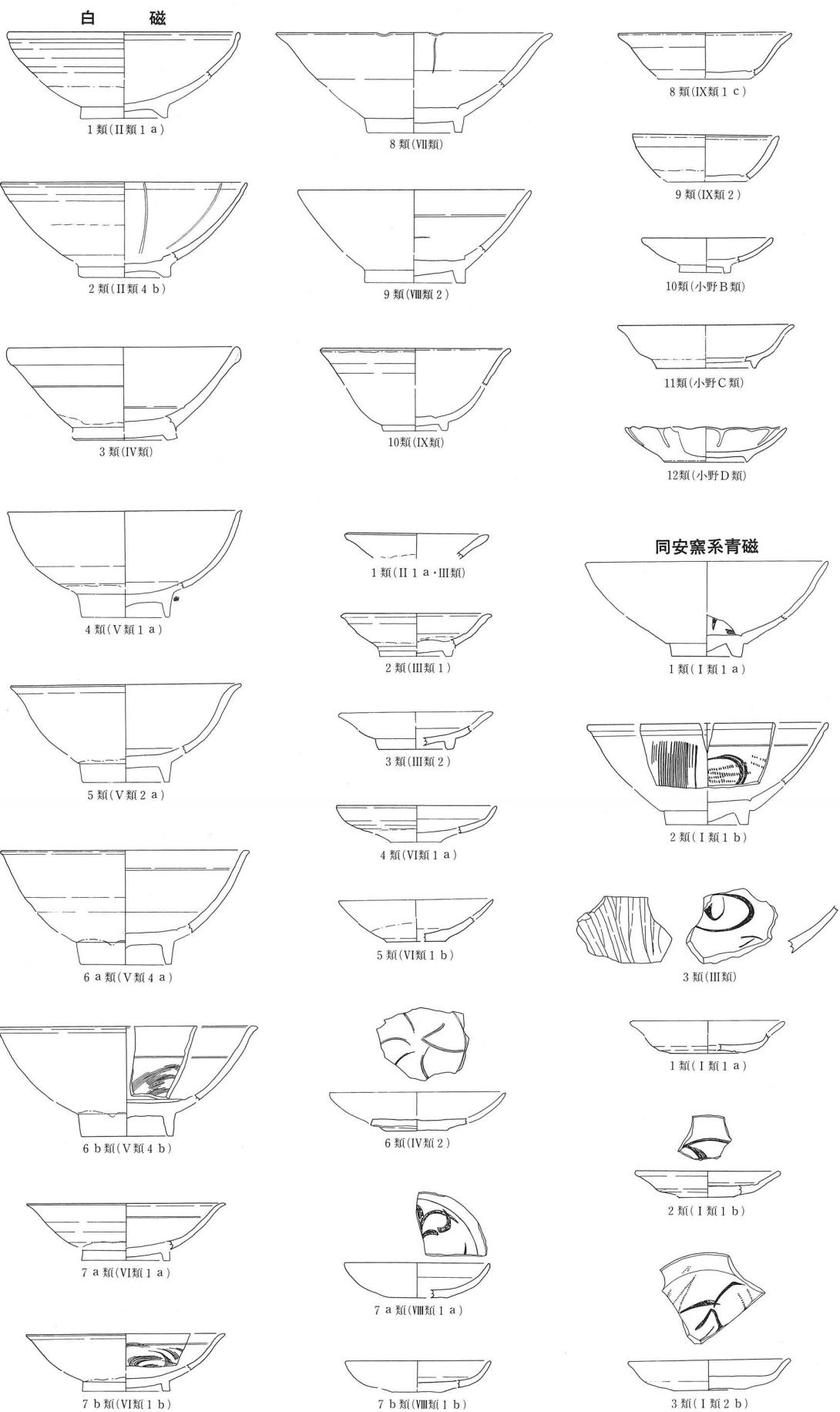
5. E群 (16世紀代)
の5群に時期区分している^{注7}。

これらの編年案や小野正敏氏の染付の編年等を基準にして、梅原胡摩堂遺跡の中国製陶磁器の時期についてみていこうことにする。なお、いうまでもないことであるが、中国製陶磁器については伝世されるものも多く、使用時期の下限は決めにくいものがある。

ここでの「時期」は中国からの輸入・流通時期及び主体的な使用時期と考えておきたい。特に太宰府編年のA～F期は、当該型式の陶磁器が次期(新期)のものを含まず、純粹なセットで抽出できる時期を

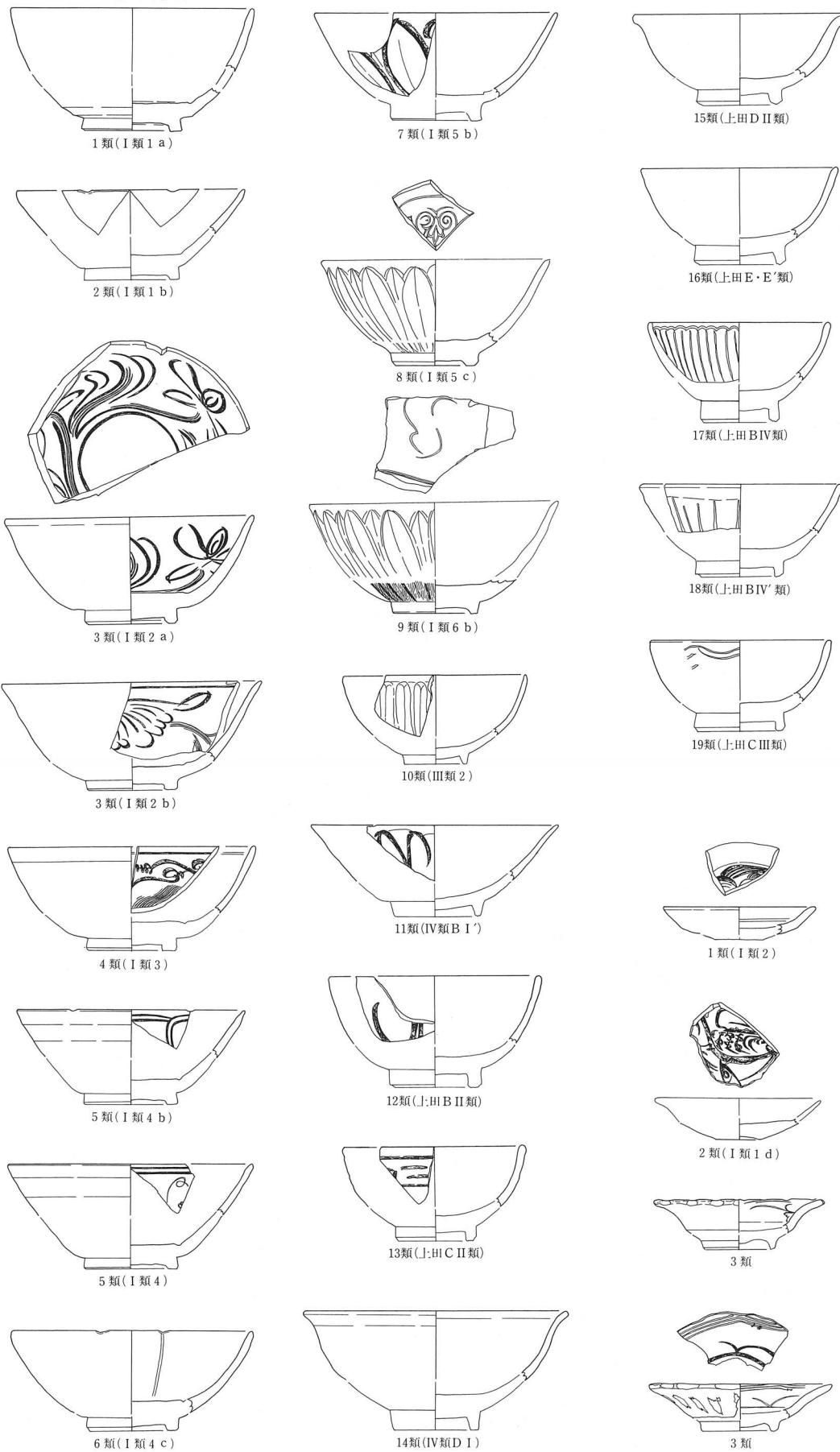
種類	器種	胡摩堂分類	太宰府分類	森田氏分類	上田氏分類	小野氏分類
白磁	碗	1類	II類 1 a			
		2類	II類 4 b			
		3類	IV類			
		4類	V類 1 a			
		5類	V類 2 a			
		6 a類	V類 4 a			
		6 b類	V類 4 b			
		7 a類	VI類 1 a			
		7 b類	VI類 1 b			
		8類	VII類			
皿	皿	9類	VIII類 2			
		10類	IX類			
		1類	II 1 a・III類			
		2類	III類 1			
		3類	III類 2			
		4類	IV類 1 a			
		5類	VI類 1 b			
		6類	VI類 2			
		7 a類	VIII類 1 a			
		7 b類	VIII類 1 b			
		8類	IX類 1 c	(A群)	A群	
		9類	IX類 2	(A群)	A群	
小杯		10類		(D群)	B群	
		11類		(E群)	C群	
角杯		12類		(E群)	D群	
				(E群)		
青磁 (龍泉窯)	碗	1類	I類 1 a			
		2類	I類 1 b ?			
		3類	I類 2 a・b			
		4類	I類 3			
		5類	I類 4			
		6類	I類 4 c			
		7類	I類 5 b		B 1類	(A群)
		8類	I類 5 c		B 1類	(A類)
		9類	I類 6 b			
		10類	III類 2		A類	(A群)
		11類	IV類		B I'類	
		12類			B II'類	(B群)
		13類			C II'類	
		14類	IV類		D I'類	
		15類			D II'類	
		16類			E・E'類	
		17類			B IV'類	(C群)
		18類			B IV'類	
		19類			C III'類	
青磁 (同安窯)	碗	1類	I類 2			
		2類	I類 1 d			
		3類				
皿	皿	1類	I類 1 a			
		2類	I類 1 b			
		3類	III類			
染付	碗	1類	I類 1 a			
		2類	I類 1 b			
		3類	I類 2 b			
皿	皿	1類				(C群 I・III)
		2類				(B群 X I ?)
		3類				
染付	碗	1類				(C群 I)
		2類				(B群 1・2)
		3類				(E群)

第6表 中国製磁器碗・皿類分類対比表



第288図 白磁・同安窯系青磁碗皿類の分類

龍泉窯系青磁



第289図 龍泉窯系青磁碗皿類の分類

示しており、どちらかといえば輸入時期の上限を示すにとどまる。当該型式の陶磁器の主体的な使用時期は、比定される時期を含んでこれより時期が降る場合が多いことを理解しておく必要がある。

D. 梅原胡摩堂遺跡の中国製陶磁器の時期区分

中国製陶磁器の分類と編年・年代観については、研究者間でも少しづつ差があり決定的なものはまだ完成をみていらないが、梅原胡摩堂遺跡の陶磁器を理解する上で、基準となる物差しを設定する必要がある。そこで上記各氏の編年的研究の成果を最大公約数的に取り入れ、梅原胡摩堂遺跡の陶磁器を以下のように7期に区分することにした。

第1期（11世紀後半～12世紀前半）

第2期（12世紀中頃～12世紀後半）

第3期（12世紀末～13世紀前半）

第4期（13世紀前半～14世紀前後）

第5期（14世紀初頭～14世紀後半）

第6期（14世紀後半～15世紀後半）

第7期（15世紀後半～16世紀代）

第8期（16世紀末～17世紀前半）

なお第5期については、青磁碗のみ前後2時期に分け、5-1期（14世紀初頭～14世紀中頃）と5-2期（14世紀中頃～14世紀後半）としておきたい。次に各期の内容を具体的にみていくことにする。

第1期（11世紀後半～12世紀前半）

梅原胡摩堂遺跡における中国製陶磁器の出現期である。太宰府編年のC期に相当する。太宰府では白磁碗II～IV・V1～3・VI・VII・VIII類、白磁皿II・IV～VII類、越州窯青磁III類などが組成要素で、白磁が卓越する時期。主体的な使用時期は12世紀後半までである。梅原胡摩堂遺跡では白磁碗1～5・7類、白磁皿1・4～6類、白磁瓶類II類、白磁小壺II類・同蓋などがこの時期に含まれる。白磁碗1・2類（太宰府II類）や、これとセットになると考えられる白磁皿4～6類（太宰府VI類）は、従来富山県内では出土例の少なかったものであるが、今回相当量出土したことは、特筆すべき成果のひとつである。

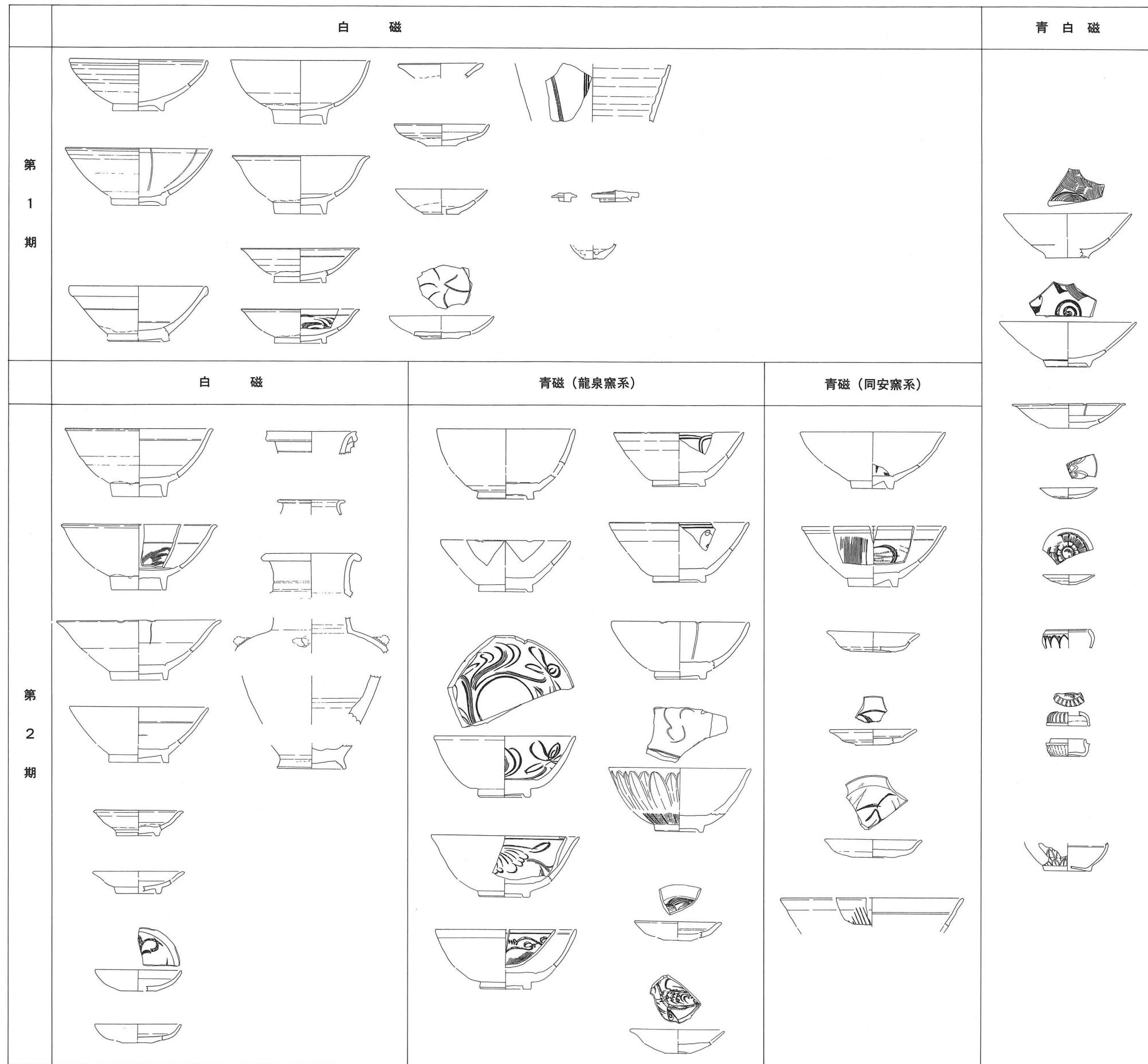
第2期（12世紀中頃～12世紀後半）

太宰府編年のD期に相当する。太宰府では白磁碗V4・VII・VIII類、白磁皿III・VIII1類、龍泉窯系青磁碗I1～4・I6類、同皿I類、同安窯系青磁碗I・III類、同皿I類などが組成要素としてあり、青磁が急激に増加する時期である。主体的な使用時期は13世紀前半頃までである。梅原胡摩堂遺跡では白磁碗6・8・9類、白磁皿2・3・7類、白磁壺・瓶類のIII類、龍泉窯系青磁碗1～6・9類、同皿1・2類、同安窯系青磁碗1・2類、同皿1～3類、同鉢などがこの時期に含まれ、種類・器種ともに豊富である。青白磁碗・皿類、蓮弁文の小壺・合子などは第1期から第2期にかけてみられるものである。

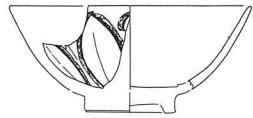
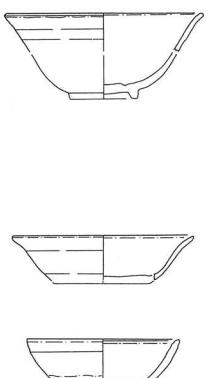
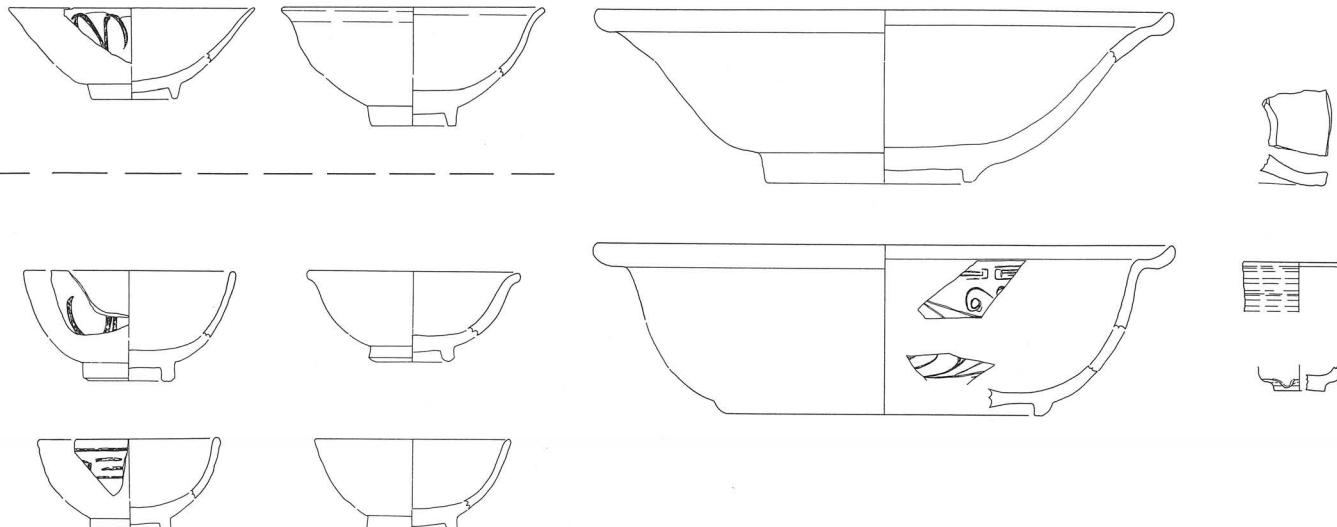
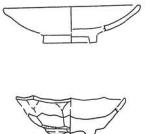
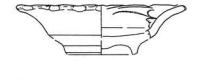
第3期（12世紀末～13世紀前半）

太宰府編年のE期に相当する。太宰府では白磁皿VIII2類、鎬蓮弁をもつ龍泉窯系青磁碗I5類が組成要素となる。後者の中でも内底面に印刻文様をもつI5C類は、やや後出的でここでは第4期に含めておいた。組成器種は少ないようであるが、主体的な使用時期は13世紀後半までで、次の第4期と重なる部分が大きい。梅原胡摩堂遺跡では龍泉窯系青磁碗7類がこの時期に含まれる。

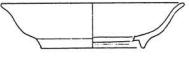
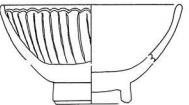
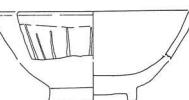
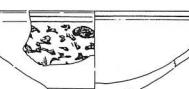
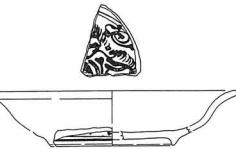
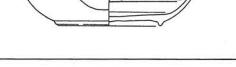
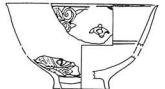
第4期（13世紀前半～14世紀前後）



第290図 中国製磁器の編年表(1)

		青磁（龍泉窯系）	青白磁
第3期			
	白磁	青磁（龍泉窯系）	
第4期			
		青磁（龍泉窯系）	
第5期			  
	白磁	青磁（龍泉窯系）	
第6期			 

第291図 中国製磁器の編年表(2)

	白 磁	青 磁	染 付
第 7 期	  	  	             
第 8 期	染 付		
	   		

第292図 中国製磁器の編年表(3)

太宰府編年のF期に相当する。太宰府ではいわゆる口ハゲの白磁碗IX類、同白磁皿IX類、龍泉窯系青磁碗I・5C類、同青磁III類などが組成要素としてある。上田秀夫氏による青磁碗編年の第一期のうちの一部（A類）や森田勉氏による白磁編年のA群にも対比できるものである。梅原胡摩堂遺跡では白磁碗10類、同皿8・9類、龍泉窯系青磁碗8・10類、同杯・小碗・壺・盤のIII類がこの時期に含まれる。青白磁のいわゆる梅瓶と推定されるものや花文型押しの合子などは第3期から第4期にかけてのものであろう。

第5期（14世紀初頭～14世紀後半）

太宰府編年のG期にはほぼ相当する。上田秀夫氏による青磁碗編年の第二期・第三期、森田勉氏による白磁編年のB群に対比でき、白磁枢府系・ビロースク系、龍泉窯系青磁碗IV類などが組成要素としてある。青磁碗編年では、B I'・C I・D I類などの第二期と、B II・C II・D II・E類などの第三期に時期細分されているが、現状では青磁碗以外の器種では区分できそうもない、一括しておいた。梅原胡摩堂遺跡ではこの時期の白磁の明確なものはなく、龍泉窯系青磁碗11・14類、同盤・大鉢・酒海壺蓋・香炉のIV類がこの時期に含まれる。また龍泉窯系青磁碗の12・13・15・16類が第5期の後半期に相当しよう。

第6期（14世紀後半～15世紀後半）

上田秀夫氏の青磁碗編年の第四期、森田勉氏の白磁C・D群にはほぼ相当する。青磁碗ではB III類、龍泉窯系青磁の稜花皿、白磁では粗製小皿や角杯などが組成要素と考えられる。梅原胡摩堂遺跡では白磁皿10類、白磁角杯、龍泉窯系青磁皿3類（稜花皿）がこの時期に含まれる。

第7期（15世紀後半～16世紀代）

上田秀夫氏の青磁碗編年の第五期、森田勉氏の白磁E群にはほぼ相当する。青磁碗では龍泉窯系のB IV・B IV'類、白磁では端反りの皿・菊皿・小杯、小野正敏氏による分類の染付碗C～E群、染付皿B・C・E群などが組成要素である。梅原胡摩堂遺跡では白磁皿11・12類、同小杯、線描きの細蓮弁文が主体的な龍泉窯系青磁碗17～19類、染付碗の一部、染付皿1～3類などがこの時期に含まれる。

第8期（16世紀末～17世紀前半）

染付の中で16世紀末以降に降るものがあり、これを第8期とした。小野正敏氏の染付碗皿F群が相当しよう。梅原胡摩堂遺跡では染付の碗1・2類の一部・碗3類・大皿・鉢などがこの時期に含まれると考えられる。染付は釉下に白化粧土を施すのが特徴のひとつである。染付以外の種類については明らかでない。

以上の時期区分を基準に梅原胡摩堂遺跡の中国製陶磁器各類を時期別・種類別に配列すると第290図～第292図のようになる。豊富な資料をもとに編年を行っている地域の時期区分を準用した部分もあるため、時期によっては組成内容に偏りがみられるところもあるが、これにより、梅原胡摩堂遺跡の中中国製陶磁器の変遷の大要を示し得るのではないかと思う。大方のご叱正を仰ぎたい。また各時期・種類ごとの組成量比の変遷や時期細分、在地土師質土器・珠洲・瀬戸美濃等の編年との対比など、今回充分な検討が出来なかった重要な課題が残されている。これらについても今後も研究を進め、実態を解明していきたいと考えている。

（山本正敏）

- 注1 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
注2 山本信夫 1988 「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として」『貿易陶磁研究』No.8
注3 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
注4 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
注5 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
注6 山本信夫 1988 前掲。
注7 上田秀夫 1982 前掲。なお一期～五期の時期名称は編者が発表編年図をもとに仮に付した名称であることをおことわりしております。
注8 森田 勉 1982 前掲。

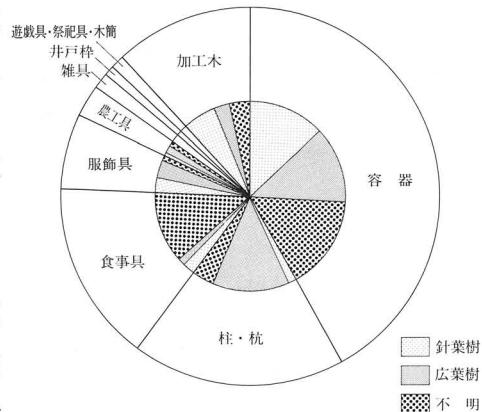
3 梅原胡摩堂遺跡出土の木製品にみる特徴

A. はじめに

当遺跡で検出した遺構のうち、中世後期の遺構から多くの木製品が出土した。木製品は土や金属を原料としてつくったものに比べ暖かい質感を与え、人間とは切っても切れない関係であったことが、この遺跡からも窺える。出土遺構と量の関係は、中世後期から近世主体のB・C地区からが目立つ。それに対し、中世前期が主体で建物総数の約2/3を検出したA地区からは極端に少ない。これは、中世前期に比べ後期以降木製品にたよる部分が大きくなかった、あるいは埋蔵環境が良好であったことなどの理由が考えられる。ここでは、前章Dで取り上げた遺物について製品ごとの樹種選材についての検討、形態・製作技法などに着眼し、他遺跡の出土例とも比較をおこなう。

B. 製品と樹種

第293図に製品別に樹種の割合を示した。製品名については前章で掲げた分類用語を用いる。曲物・漆器椀などの容器が全体の約1/3を占め、次いで柱など建築材、食事具、服飾具、農工具の順となっている。このように生活用具が多くみられることから、当遺跡が生活の場であったことが想像できる。また遺構と木製品の時期が一致すると仮定して、時代別樹種別の製品名を示した(第8表)。樹種については良好な遺物の約6割を長谷川益夫氏に識別いただいた(第二分冊参照)。遺物量、樹種数とも最も多いのは中世後期である。各時期で針葉樹はほぼ一定の樹種数しかみられないが、広葉樹は出土量に比例しただけ樹種数がみられる。各時代を通じて製品によって樹種が選定されていたことが窺える。針葉樹の中で使用頻度の高いものはスギで、農工具を除いた製品すべてにみられる。広葉樹は農工具、挽物、柱など幅広く用いられている。柱・杭についてはクリ・コナラ属が大部分を占め、中世後期の建物を構成するもののうち同定されたものはすべて広葉樹である。この時期の広葉樹材の使用頻度が下向気味となる全国的な傾向^{注1}に相反するものである。これは当遺跡周辺は広葉樹が多い植生であったことなどが推測される。

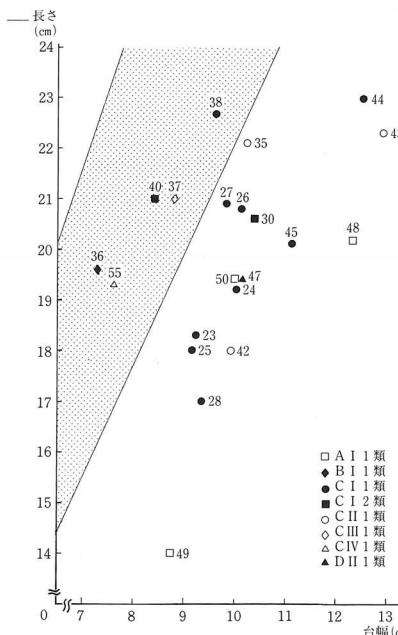


第293図 製品別樹種の割合

	樹種名	中世前期	中世後期	近世	近代
針葉樹	スギ ネズコ ヒノキ属 アヌラ属 マツ属 タケ類	下駄、(柄杓)、折敷、曲物井戸枠、加工木 (曲物)、(柄杓) 柱	下駄、柄杓、円形板、杓子形木器、箸、編竹製品、柄、木札、加工木 (下駄)、(円形板) (下駄)、円形板、(箸)、加工木 曲物、柄杓、(円形板) 下駄、円形板、手桶、杭、加工木 円形板、茶筅、加工木	下駄、曲物、柄杓、円形板、加工木 下駄、円形板	円形板 提灯、円形板
広葉樹	ブナ科 アオギリ イスノキ クルミ科 シマカナメ ホオノキ クリ トチノキ ヤマグワ アワブキ サクラ属 アオハダ カツラ カキノキ属 キリ シイノキ ニレ科 カエデ属 シイノキ コナラ属 ナラ属 センダン科 アズキナシ	漆器椀	臼、柄杓、漆器椀、鉢、加工木 杓子形木器 下駄	漆器椀、加工木 下駄 櫛 櫛 櫛 傘輪櫛 柱 瓶子脚 挽物柄杓	
葉		柄	下駄、擂粉木、(船形)、柱、加工木 漆器椀 斧の柄 横柾、斧の柄、下駄、円形板 下駄 下駄 下駄、柄杓の柄、剝物匙 下駄 柱、(加工木) 漆器椀、剝物匙、加工木 加工木 (船形)、加工木 鏡身、柱 柱 柱		漆器豆子
樹		背負子			
		漆器豆子			
		鍼身			
		挽き木			

* () は明確な樹種識別ができなかった製品名である。

第7表 木製品の時代別樹種別製品名



第294図 近世下駄との比較

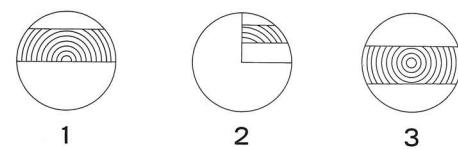
C. 主な遺物の特徴

(1) 下 駄

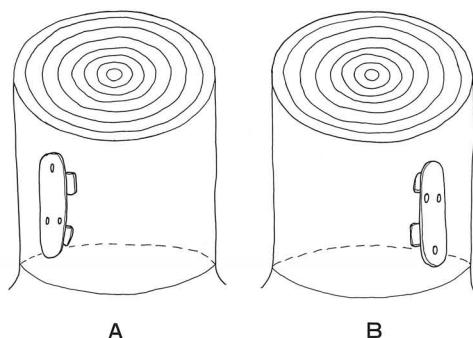
当遺跡からは、連歯下駄と露卯下駄が出土しているが、前者がほとんどである。前章では平面形、歯のつくり、前壺の位置から分類した。中世遺跡出土の下駄については、これまで岩田氏が平面形・台幅の狭広・最大幅の位置を基準に細分し、編年を行っている^{注2}。氏によると平面が長円形の連歯下駄には、台の最大幅がa. 前歯付近にあるもの、b. 後壺付近にあるもの、c. 中央にあるものがある。bは14世紀中葉のほとんどにみられ、aは近世様式であり、編年的にはb→c→aと変化していく傾向があるといわれる。当遺跡の下駄の平面形は氏の分類では長円形に相当し、最大幅の位置はほとんどがcであり、中世後期の特徴をもつと言える。ここで客観的なデータをみてみる。第294図には当遺跡出土下駄の長さと最大幅の関係を分類ごとにドットで示した(数字は挿図番号を示す)。これに

都立一橋高校内遺跡出土の近世下駄の最大幅範囲をスクリーントーンで示した^{注3}。当遺跡のものは、長さに対する幅が広範囲の値を取るのに対して、一橋高校内出土のものは狭く定型化している。これらのうち重複するものは、36~38・40・55である。これらは他に比べ、前歯と後歯が両端に寄っているのが特徴である。A I₁・C II₁・D II₁類を除き、すべてのタイプに相当するためタイプを限定した規格性はみられないといえる。これらが出土した遺構の時期は近世に相当しないものもあるが、近世的要素をもち合わせた下駄といえる。形態的には、中世から近世への過渡的な段階に位置すると考えられる。

ここで製作の面から考えてみる。樹種はスギ・マツ属などの針葉樹とシラカンバ属・ヤナギ属など複数の広葉樹を使用している。これは中近世の出土下駄における全



第295図 下駄の木取り 1



第296図 下駄の木取り 2

国的な選材傾向に類似する^{注1}。木取りについては大きく3つに分けられる。1. 原木を2分割した後、板材に分割するもの、2. 原木を4分割した後、板材に分割するもの、3. 原木を3分割するもの(有芯部分を持つ)である(第295図)。このうち1のパターンが大部分である。これらは髓に近い部分を利用しているものが目立つが、樹皮側を利用すると乾燥による収縮が生じるためと考えられる。このように分割した板材を下駄に加工する際、台表を樹皮側に取るもの(23・25・26・37・42~45)と髓側に取るもの(35・38)がある。前者の場合、台表にきれいな板目がみられることから、製作段階で考慮されたものと推測される。また下駄の上下方向と木材のそれが一致するもの(A)は25・38であり、逆になるもの(B)は23・42である(第296図)。一木からできるだけ多くの下駄をつくるため、木の大きさによって分割方法を変えていたものと考えられる。

(2) 曲 物

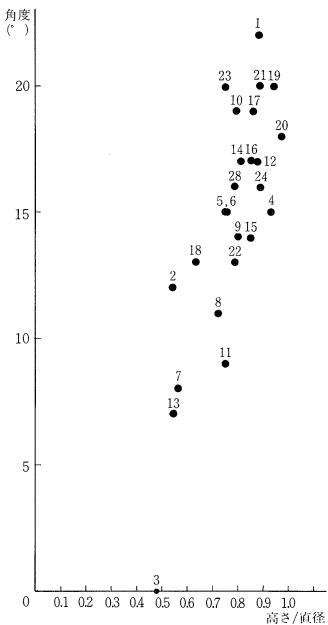
木製容器には大きく分けて剣物・挽物・曲物・指物・結物がある。これらのうち曲物は、底板と側

板を組み合わせたもので、形態や大きさにバリエーションがある。それは、製作が他に比べて単純かつ容易であったためと考えられる。絵巻物からも食膳、生業、運搬具、儀礼、神事、仏事などの場面に描かれ、生活全般にわたって使用されていたことが窺える。用途が判明するものは、例えば水と関わりをもつ柄杓・釣瓶、飲食と関わりをもつ甌・湯桶・飯櫃など呼称も様々である。中世には大木裁断用の縦挽鋸が出現し、細かい部分は斧・鉈で木の弾力性や木目を生かしながら製作されていたようである。ここでは特別に用途が限定できない一般的な曲物、水と関わりを持つ柄杓、それらの底板と考えられる円形板の形態・用途・製作技法について考えてみる。

当遺跡の曲物は、中世後期の井戸から多く出土している。これらは井戸の周辺で水桶や釣瓶として使われ、地下水などの影響で残存したものと推測される。曲物は本体となる板を一枚あるいは複数曲げて綴じ合わせ、その上縁と下縁にタガとなる板を巻き付けるものである。平面形が円形で、用途は容器あるいは井戸枠である。大きさについては、柄杓と断定できるものは直径10cm前後、用途不明の曲物は14~20cm余り、井戸枠は約58cmである。円形板の直径は5~24cmと幅広く、20cm前後のものが最も多い(第298図)。中山氏は民俗資料の統計から弁当入れが直径11~18cmであると指摘している^{注5}。当遺跡の円形板のうち1/3がこの寸法におさまるために弁当入れとしての機能も考えられる。また出土例と絵巻物を比較した研究では運搬用に使用された曲物は直径が大きく、井戸枠に転用される場合が多いといわれている^{注6}。当遺跡の井戸枠も側板下方の木釘の存在から転用と考えら、もとは運搬用であった可能性も考えられる。

用途が明確な柄杓の形態は、容積は300~650cm³の間にまばらに分布し、高さ／底径は0.78~1.0の値におさまる。また第297図・第9表に当遺跡を含む古代から中世の柄杓の高さ／底径と着柄角度の関係を示した。身が平べったいものほど着柄角度が小さくなっていることがわかる。これは時期差ではなく用途による形態変化といわれている^{注4}。

円形板には孔を有するものが出土している。孔は、直径数mm程度のものがほとんどで、なかには1cm(108)程度のものもある。それらは



第297図 古代から中世にみる柄杓の形態と柄の角度

番号	遺跡名	時代	直径(cm)	高さ/直径	柄の角度 [°]	柄先端側の孔周囲の処理	底板と側板の結合法	製作技法	報告書	
									木器集成	木器集成
1	平城京	8世紀中	14.6	0.88	22	なし	クレゾコ(木釘)	内面平行ケビキ	3505	3504
2	平城京	756年頃	23.0	0.54	12	なし	クレゾコ(木釘)	内面平行・斜めケビキ	3506	3503
3	平城京	8世紀後	12.6	0.48	0	なし	クレゾコ(木釘)	内面格子状ケビキ	3502	1987
4	平城京	8世紀後	15.6	0.93	15	なし	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
5	平城京	9世紀後	15.5	0.75	15	なし	クレゾコ(木釘)	内面平行・斜めケビキ	3502	1987
6	美奈麻比古神社前遺跡	12後~13前	17.7	0.75	15	不明	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
7	西の辻58-7区	13世紀前	13.5	0.8	14	なし	クレゾコ(木釘)	内面平行・斜めケビキ	3502	1987
8	御館遺跡A-1区	13世紀	12.8	0.72	11	不明	クレゾコ(木釘)	内面格子状ケビキ	3502	1987
9	西の辻59-2区	13世紀	16.1	0.56	8	2本の縫り皮を縫に通す	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
10	西の辻59-4区	鎌倉中期	13.0	0.87	17	1本の縫り皮を3方にまわす	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
11	草戸千軒町	室町後期	8.4	0.75	9	不明	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
12	草戸千軒町	室町後期	8.5	0.79	19	不明	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
13	大阪城三の丸	安土桃山	12.9	0.54	7	孔の両端に縫り皮を羽状に縫う	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
14	大阪城三の丸	安土桃山	13.0	0.81	17	不明	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
15	大阪城三の丸	安土桃山	13.6	0.85	14	不明	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
16	大阪城三の丸	安土桃山	9.2	0.86	17	孔の下部に縫り皮を横に縫う	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
17	大阪城三の丸	安土桃山	11.2	0.86	19	不明	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
18	大阪城三の丸	安土桃山	26.8	0.63	13	孔の下部に縫り皮を羽状に縫う	クレゾコ(木釘)	内面平行	3502	1987
19	弓の庄城跡C-6区SD1001	16世紀後	9.6	0.94	20	孔の左右を縫り皮でハの字状に縫う	クレゾコ	キメカキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査概要 1985	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
20	日の宮	中世後	9.0	0.97	18	孔の左右を縫り皮でハの字状に縫う	クレゾコ(木釘)	キメカキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
21	梅原胡摩堂		8.8	0.88	20	孔の左右を縫り皮でハの字状に縫う	クレゾコ(縫り皮)	キメカキ、外側ケビキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
22	梅原胡摩堂		10.2	0.78	13	孔の左右を縫り皮でハの字状に縫う	クレゾコ(縫り皮)	キメカキ、外側ケビキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
23	梅原胡摩堂	16世紀	9.5	0.75	20	不明	クレゾコ(木釘)	キメカキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
24	七尾城跡	16世紀	12.3	0.88	16	不明	(縫り皮)	キメカキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
25	梅原胡摩堂		9.6	0.90	—	不明	クレゾコ(木釘)	キメカキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
26	梅原胡摩堂		8.4	—	—	不明	クレゾコ(木釘)	キメカキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
27	梅原胡摩堂	15・16世紀	9.6	0.92	—	不明	クレゾコ(木釘)	キメカキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978
28	梅原胡摩堂		9.8	0.79	16	孔の左右を縫り皮でハの字状に縫う	クレゾコ(木釘)	キメカキ、外側ケビキ	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978	弓の庄城跡 第5次緊急発掘調査報告書 1978

* 神並・西の辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要II 考察記に加筆

第8表 柄杓計測値一覧

欠損部分もあるが直線や十字といった規則的な配置である。これについては南氏が孔の直径や孔の配置を民具例と比較し、規則のあるいは不規則的であっても全面に孔がみられるものは曲物製甌の底板の可能性が高いと指摘している^{注7}。しかし当遺跡のものは全面にみられないため、蓋板と考えるのが妥当であろう。

円形板には柿渋が塗られている。現在もなお曲物が製作されている静岡市井川にもみられ^{注5}、その理由は木の夏材と春材の吸水性を一様にする役割と、防腐の役割があるという。

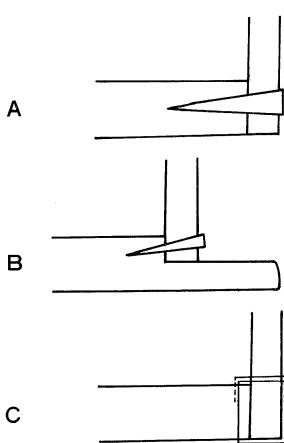
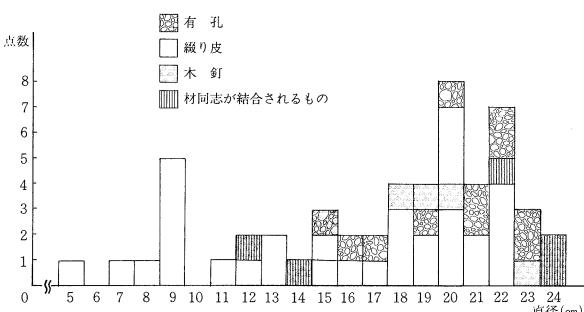
円形板に残る特徴として綴り皮や木釘がみられる。第298図から綴り皮や木釘は直径の大小にかかわらずみられ、材同士の結合に用いられる場合と、底板と側板の固定に用いられる場合が考えられる。前者の場合、補修されているか、または一枚板をとれる大木が不足したため複数の材を結合して製作されたことが考えられる。綴り皮は材間に隙間ができやすく、木釘を用いるより技術的には容易と考えられるため、中世前期を境に時代とともに綴り皮から木釘へ変遷する傾向が指摘されている^{注4}。しかし当遺跡においては、両者を用いた結合法が確認されるため、時代に伴った技術変遷とは言えない。地域性とも考えられるが、他の出土例も検討しなければならない。

柄杓における綴り皮の特筆すべき技法は、円形孔縁を補強するため「ハ」の字状に縫うことである。これは県内の出土例の多くにみられ、他の遺跡では例をみない。今後、出土例が蓄積されれば地域的な特徴といえるかもしれない。

底板と側板の固定法には第299図に示した木釘を用いるクレゾコ（A）・カキゾコ（B）の技法がみられる。クレゾコは古代からの技術であり、民俗例にもみられる。カキゾコは戦前に例はあるが、現在行われていない^{注4}。綴り皮を用いるものがあるが、残存状態が悪いことと、側板で見えないため固定方法は不明である。図にはクレゾコで推定の固定法を示した（C）。

側板の曲げ加工を容易にするため、古代からの技法として内面平行ケビキがある。当遺跡の曲物にこの技法はほとんどみとめられない。おそらくそれに代わるものとして、今日継承される「焼きダメ」という加熱急冷法、あるいは熱湯に入れる方法などで製作されたのではないだろうか。

第298図 円形板にみる特徴



第299図 底板と側板の固定方法

側板の上端には外面ケビキといって上端の割裂を緩和する技法がみられる。古代から中近世を通じ、現代まで継承されているようである。また縁の仕上げ時に綴り皮の切断を防ぐため、上下縁を挟って両角を切り落とすキメカキ技法もみられる^{注8}。これは平安時代からみられるが普遍的ではなく、近世以降本格的に普及し現在に至っているといわれる。しかしこの技法は当遺跡の他、県内の中世遺跡の出土例に多くみられる事から、この時期少なくとも富山県では普及していたものと思われる。側板のとじ方はほとんどが外とじである。

技術は長い時代にわたって継承されるため、遺物の時期を確定する要素にはなりがたいが、出土例の増加によって地域的な特色として位置づけることが可能になるかもしれない。

樹種は側板・底板とも針葉樹であるが、複数重ねられた側板は異なる樹種のものもある。柄杓の柄については広葉樹も使用している。木取りは板目、柾目、追い柾目の3パターンがみられる。木取りと樹種には規則的な関係はみられない。

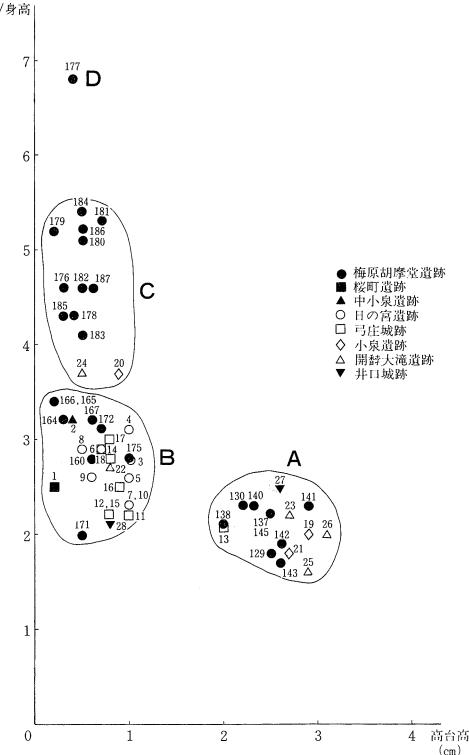
(3) 漆器 梶

漆器は梶の他、豆子などが出土している。これらのうち146, 167, 188が中世前期の遺構から出土するほかは概ね中世後期（15・16世紀）の遺構からみられる。前章では梶を形態の上から大きく3つに分類した。高台高、器高ともに高く総体的に大ぶりなA類、A類に比べ高台高が低く口径に対して器高が低いB類、杯形態のC類、皿形態のD類である。これらは遺構の時期と形態から15・16世紀にあたるものと思われる。一括遺物として扱える遺構からは、土器が共伴しないため、ここでは細かい時期区分は行わず、漆器の形態と技法的な特徴をみていきたい。口径/身高

なお塗膜分析については本書第二分冊を参照されたい。

漆器形態の客観的分析を試みるために、当遺跡を含む県内出土中世漆器の口径に対する身高の割合を第300図に示した。図中に確認できる3つのまとまりは、梶のプロポーションから分類したA・B・C類に一致する。またこれは中井氏による近世初頭の伝世三重梶の計測値をグラフ化したもの^{注9}に類似する。伝世品の場合、3つの梶が入子状になるため口径の差がほとんどなくぴったり重ねられるが、出土漆器には大きさにばらつきがみられる。しかし両者とも定型化されていたといえる。

同一遺構におけるタイプ別出土状況についてみると、建物を大きく区画すような主要溝、井戸からが多く、溝出土のものは共伴遺物も多い。同一遺構から2タイプ以下の出土がみられ、3タイプそろって出土する例はみられない。2タイプの出土例は他の遺跡にもみられる。桜町遺跡・中小泉遺跡からB類のみが出土する。小泉遺跡からはA・C類、日の宮遺



第300図 富山県内出土漆器の形態

番号	遺 跡 名	遺構番号	種 類	分類II	遺構の年代	口 径	器 高	高台高	身 高	口径/身 高	特 記 事 項
1	小矢部市桜町遺跡	S E04	漆器梶	B	13or14	130	55	2	53	2.5	内外-スキ文
2	上市町中小泉遺跡	S D04	漆器梶	B	13or14	146	50	4	46	3.2	黒
3	小矢部市日の宮遺跡C 地点24区	S A12	漆器梶	B	15~16前	140	60	10	194	2.8	黒
4	小矢部市日の宮遺跡C 地点24区	S A12	漆器梶	B	15~16前	92	40	10	172	3.1	黒
5	小矢部市日の宮遺跡C 地点24区	S A12	漆器梶	B	15~16前	148	66	10	200	2.6	内-丸に三葉、外-半円に三葉、えぐり
6	小矢部市日の宮遺跡C 地点24区	S A12	漆器梶	B	15~16前	108	42	7	175	3.1	内-半円、外-月と草文
7	小矢部市日の宮遺跡C 地点10区	S 02	漆器梶	B	15~16前	140	70	10	221	2.3	黒/赤
8	小矢部市日の宮遺跡C 地点23区	S 20	漆器梶	B	15~16前	72	30	5	175	2.9	内-花文
9	小矢部市日の宮遺跡C 地点4区	S 04	漆器梶	B	15~16前	150	64	6	218	2.6	内-黒/赤
10	小矢部市日の宮遺跡C 地点4区	S 05	漆器梶	B	15~16前	130	66	10	56	2.3	内-丸と松文、高台裏に「二」のえぐり
11	上市町弓生城跡	S D1002	漆器梶	B	16中	148	77	10	205	2.2	黒/赤
12	上市町弓庄城跡C 地点4区	S D1002	漆器梶	B	16中	136	70	8	193	2.2	外-葉文
13	上市町弓庄城跡C 地点4区	S D1002	漆器梶	A	16中	140	86	20	203	2.1	黒/赤
14	上市町弓庄城跡C 地点6区	S D1001	漆器梶	B	16後	166	64	7	201	2.9	内外-花文
15	上市町弓庄城跡C 地点6区	S D1001	漆器梶	B	16後	144	74	8	234	2.2	内-扇文、外-扇・花文
16	上市町弓庄城跡C 地点6区	S D1001	漆器梶	B	16後	150	70	9	215	2.5	黒/赤、外-葉文
17	上市町弓庄城跡C 地点6区	S D1001	漆器梶	B	16後	130	52	8	44	3.0	内-柳と水草文、外-柳文
18	上市町弓庄城跡C 地点6区	S D1001	漆器梶	B	16後	155	64	8	56	2.8	黒/赤、高台裏「一」の刻み
19	大門町小泉遺跡	S E01	漆器梶	A	16後	148	102	29	73	2.0	黒/赤、植物文
20	大門町小泉遺跡	S E01	漆器梶	C	16後	112	39	9	143	3.7	内-赤/黒
21	大門町小泉遺跡	S E02	漆器梶	A	16後	156	112	27	85	1.8	内外-植物文
22	福岡町開封大滻遺跡A地区	S K403	漆器梶	B	16後	162	67	8	59	2.7	内外面とも植物文
23	福岡町開封大滻遺跡A地区	S K403	漆器梶	A	16後	162	70	27	73	2.2	黒/赤、高台裏「上」
24	福岡町開封大滻遺跡A地区	S K403	漆器梶	C	16後	88	(29)	(5)	(24)	3.7	刷毛目残る
25	福岡町開封大滻遺跡A地区	S P241	漆器梶	A	16後	146	119	29	9	1.6	内-丸に亀甲、外-丸に亀甲・菊・扇、高台裏縁刻「時?」
26	福岡町開封大滻遺跡C地区	S E470	漆器梶	A	16後	160	112	31	81	2.0	内-植物文、外-丸に亀甲・菱形
27	井口城跡	S D02	漆器梶	A	16後	148	88	24	60	2.5	黒/赤
28	井口城跡	S K25	漆器梶	B	16後	(148)	(80)	8	(72)	(2.1)	内-松と倭文

*番号は図中の数字を示す。3ケタのものは挿図番号を示す。

第9表 富山県内出土漆器計測値一覧

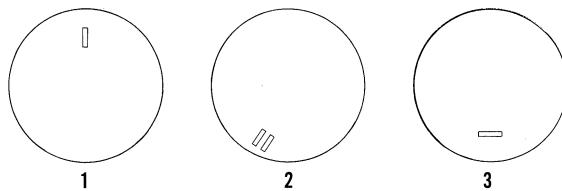
跡、弓庄城跡、井口城跡からはA・B類の2タイプがみられる^{注10}。A・B・Cの3タイプの漆器が開闢大滝遺跡でみられる。これらは建物に付随する作業場的な空間と考えられる土坑から出土している^{注11}。当遺跡の遺構における漆器の位置づけについては、切り合い関係が複雑で、遺構同士の配置関係などが不明瞭なため詳しく言及できない。D類が1点しか出土していないことは、配膳形態が定着しつつあり、椀は漆器、皿は土師器・陶磁器が主流を占めるようになっていたことが推測される。

中世の古文書には、漆器の使用状況が記されている。寺院や公家たちは大小セットになった漆器を50とか70といったまとまった単位で所有し、日常的に使用していた^{注12}。当遺跡出土椀A・B類を例にとると口径が約10~16cm、器高は約4~10cmである。人間工学的に椀の大きさを考えると、日本人の手に持ちやすい椀は4寸(12cm)どまりといわれる。日常的な椀の大きさが4寸ならば、これを超える大ぶりの椀は非日常(ハレ)の椀であったとも考えられる。とすれば、この遺跡では椀形態の9割が非日常的な椀となる。

中世における漆器生産は、平安時代には高級官僚が赤色漆のもの、下級官僚が黒色漆のもの、一般民衆は土器といったように身分によって使い分けられていた。しかし11世紀には、漆の塗装技術に渋下地という簡素で大量生産できる漆器がつくられ始め、農民上層階級にも手が届くようになる。15世紀以降は渋下地が広範囲に普及する^{注13}。この背景の中で、当遺跡の塗りは、A・B類には内外黒漆あるいは黒色漆に赤色漆で文様が描かれるもの、内面のみ赤色漆のものがある。C類の多くは内面もしくは内外面とも赤色漆塗りでいわゆる根来手のものもみられる。高台裏は黒色漆が塗られ、赤色漆で文字が書かれる。皿形態のD類は内外とも赤色漆である。中世後期には禁色であった赤色漆器が、当遺跡のような村落においても漆器の約2割を占めるほど普及していたのである。

文様については、タイプに関係なく亀甲文・長寿のシンボルである鶴丸文・将来の繁栄を意味する扇文・植物文が描き方は異なるが、手書きされている。高台裏には、製作者か所有者または用途を表すであろう文字や線刻が書かれるものもある。

また高台裏の漆が剥がれた部分に、長方形の傷がみられるものがある。それらは1. 底径の放射方向に1つ、2. 底径の放射方向に2つ、3. 底径の接線方向にみられる(第301図)。これは木工用轆



第301図 轆轤の爪の位置

轆の鉄爪痕と思われ、轆轤からはずして調整する段階で、これを除去しきれなかったものと考えられる。爪の配置については法隆寺の百万塔の塔身で研究されており^{注14}、2爪、3爪、4爪がある。4爪には4爪+中央1爪、4爪のうち1爪欠くといった変則パターンもみられる。配置は4爪のものが最もバラエティーに富んでおり、菱形・正十字・箱形・二の字形などがある。古代と中世、百万塔と漆器椀の違いはあるが、ここで当遺跡のものをみると、1にあたる175は半径の中央部に位置する。4爪なら菱形か正十字または3爪も考えられる。2にあたるものは156で、該当するパターンはみられない。3にあたるものは145と162で、前者は直径の外周寄り1/5に後者は1/4に位置する。前者は3爪、後者は4爪ならば箱形、4爪+中央1爪あるいは4爪うち1爪欠なら菱形・箱形などが考えられる。

漆器製作の流れには、山で木を伐採、作業場所まで運搬し加工を行う木地師と、そこでつくられた木地椀に漆を塗る塗師が存在したという。漆器の樹種は若干トチノキ・ケヤキがみられるが、ほとんどはブナである。ブナはやわらかく加工は容易であるが、乾燥が難しく、狂いを生ずることが多い。深山に多く、広葉樹の中でも現存量が最も多いと言われ、古くから需要に応えるだけの量が存在した

と思われる。花粉・種実遺体の分析によると、中世梅原の環境は林を切り倒した土地に形成された遺跡であることが推測される。明治時代末には、水田と針葉樹林が目立ち^{注15}、現在は水田域になっている。現在と当時の植生が大差ないとすれば漆器椀に用いられたブナは遺跡から離れた場所で入手したものと考えられる。また同じ樹種で大量の木地椀をつくるということは、製作者が必要とする樹種が生息する地に居住することであり、山中に成立した木地集団を思わせる。山地に入って用材を確保することは、中世の近畿地方以東に見られる傾向で、木地集団の成立と解釈されている。福光地方における六呂師に関する史料は、1248年の仁和寺領莊園広瀬郷預所からの注進状に「六呂師、一反半」の記載があり、六郎谷という地名も残っていることからも想像できる。

遺跡周辺と漆の関係は、文献にその記載がいくつかみられる。古代越中では漆を庸として納めていたことが『延喜式』に、中世には1202年の『葉黃記』にその初見がある。13世紀後半の『関東下知状』には広瀬郷で漆の搔き取りを巡る争いがみられる。17世紀後半には、加賀藩が医王山麓の村々に漆役を定め、栽培を奨励しており、一帯では戦後中国産の漆に取って変わられるまで生産が続けられたという。現在医王山に法林寺と祖谷に「漆谷」、田島と菱池谷に「漆原の谷」の地名が残り^{注16}、漆とのかかわりが深い地域であることを物語っている。

当遺跡の漆に関係する遺物は、漆器椀のほか、漆液容器に使用された椀や曲物が3点ほど出土する。漆継ぎされた陶磁器類も出土することから、周辺で入手した漆は漆液容器に蓄えられ、生活必需品の修復に使用されていたと考えられる。木地師や塗師といった生産集団としての活動を想定させる道具類や未製品が出土していないため、漆器椀はどこかで製作されたものが持ち込まれたと考えられる。

D. 結　　び

ここまで木製品の形態的特徴と選材についてみてきた。用途にあわせた形態づくりがなされ、選材においては、スギがあらゆる製品に用いられている。明治時代末の地図によると梅原周辺は針葉樹林がみられ、この環境が中世から続くものとすれば、遺跡の中では周辺の針葉樹を用いて生活用具を製作していた可能性も考えられる。しかし加工途中の未製品は、下駄の1点のみであること、製作に使用されたと考えられる工具類があまりみられないことから、製作といつても大々的な生産集団ではなく、自給自足的な手工業活動であったと推測される。漆器椀など挽物はほとんどブナに限定されており、木地集団によって製品化されたものが遺跡に持ち込まれたと考えられる。近世になると木材の需要が拡大したため、藩は木材の保護に努め、また五箇山や飛驒から庄川を利用した木材流通の記録が残っている^{注17}。当遺跡も近接する大井川、山田川を利用した木材もしくは製品の流通が考えられる。

木製品は遺構の年代と一致しないため詳細な編年は行わず、形態や製作技術を中心にみてきたが、これらが時代差や地域差を表すものなのかという問題提起にとどまった。技術は継承されるのが一般的である。柄杓においては綴り皮の縫い方で地域的な特徴となりうる可能性が考えられた。しかし製品の一部であり、製品名が確定できないものも多いえ、土中から発掘されるため、木質が多量の水分で飽和状態となり腐朽するなど残存状況は思わしくない。紀年銘がないため使用年代の推定も容易ではない。このような状況で、技術を時代や地域の限定要因としてとらえ、研究を進めることはなかなか困難なのが現状である。良好な状態の木製品の出土例が増加することを期待するとともに、保存処理を行うなど研究しやすい環境づくりが必要と考える。

(横山和美)

- 注1 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材からみた人間・植物関係史」『植生史研究 特別第1号』植生史研究会
- 注2 岩田 隆 1985 「中世遺跡出土の下駄」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 注3 古泉 弘 1979 「江戸の出土下駄」『物質文化32』
- 注4 市川秀之 1986 「西の辻遺跡出土の中世木器」『神並・西の辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概報II』 大阪府教育委員会
- 注5 中山正典 1993 「曲物の製作技法と形態」『食生活と民具』 雄山閣
- 注6 南 博史 1991 「曲物研究と課題」『考古学ジャーナルNo.335』 ニュー・サイエンス社
- 注7 南 博史 1992 「曲物製コシキ」『考古学ジャーナルNo.354』 ニュー・サイエンス社
- 注8 西村 歩 1994 「曲物の細部技法」『奈良大学文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 注9 中井さやか 1992 「近世漆椀について」『江戸の食文化』 吉川弘文館
- 注10 久々忠義 1986 「富山県内出土の漆器について」『大境 第10号』 富山考古学会
- 注11 三島道子 1994 「開跡大滝遺跡出土の漆器について」『埋蔵文化財年報(5)』 富山県文化振興財団
- 注12 佐藤 圭 1988 「文献資料にみえる中世の飲食器の使用と所有について」『朝倉氏遺跡資料館紀要』
- 注13 四柳嘉章 1995 「掘り出された縄文～中世の漆器」日本漆文化財会議・併催企画展解説
- 注14 法隆寺昭和資財帳編集委員会 1991 『法隆寺の至宝－昭和資財帳』小学館
- 注15 5万分の1地形図「城端」明治42年測量
- 注16 福光町 1971 『福光町史』
- 注17 富山県 1982 『富山県史 通史編III 近世上』

4 S K4483出土卒都婆の一考察

正面（一応の）の上部にはケン・カン・ラン？・□・アン？の梵字が確認される。これはケン・カン・ラン・バン・アン（西方菩提門）と考えられる。これは以下に記す、五輪塔によく配されるキャラ・ラ・バ・アの四門展開

キャラ・カ・ラ・バ・ア（東方発心門）

キャー・カー・ラー・バー・アー（南方修行門）

ケン・カン・ラン・バン・アン（西方菩提門）

キャル・カク・ラク・バク・アク（北方涅槃門）

のうちの西方菩提門である。その下にはウーンが読み取れる。さらにその下には墨書の痕跡はあるが、不明瞭である。ウーンを含めた卒都婆の中央部分には不明確だがウーン・タラーク・キリーク・アクの金剛界四仏、或いはバンを加えて金剛界五仏が記されていた可能性があるだろう。正面の下部分には墨書の痕跡はあるが読み取れない。

卒都婆は上下両端が尖らせてあり、それぞれの尖りが頭に当たっているわけで、中央部分が脚部に当たると考えてよいだろう。更に精査が必要だが、下の判読不能部分も尖った部分を頭にして書かれた可能性が強く、おそらく下からも四門展開の内のどれかが、墨書された可能性が高いであろう。

裏面は、横に裏返すのではなく、縦に裏返して表面の下端部を頭にして墨書がなされている。墨書は上半部分にア・ビ・ラまでは明瞭に、それ以下は何となくウン・ケンとかすかに読めるので、おそらくア・ビ・ラ・ウン・ケン（大日報身真言・胎蔵界大日真言）があったと考えられる。中央部分は全く墨書が消えており、下端部にわずかに墨書の痕跡がみられるが墨書内容は不明である。大日報身真言は以下の

ア・バン・ラン・カン・ケン（大日法身真言）

ア・ビ・ラ・ウン・ケン（大日報身真言・胎蔵界大日真言）

ア・ラ・ハ・シャ・ナウ（大日應身真言）

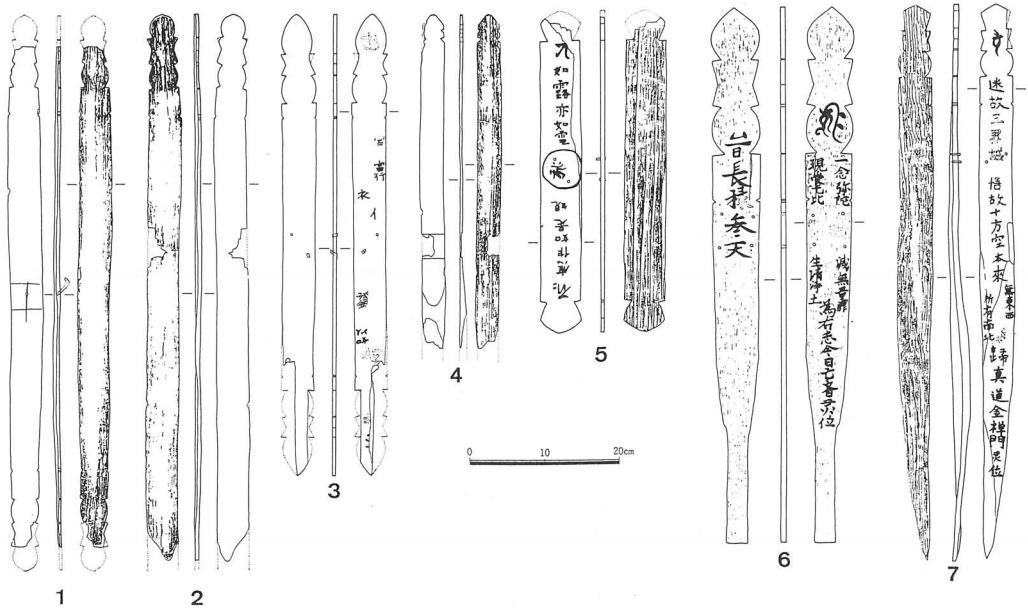
諸真言と一連の真言であり、「三身の真言」と呼ばれる。下部にはこの真言の内どれかが墨書されていた可能性があるだろう。これらの真言も五輪塔に配される事がある。有名な例では大分県臼杵市の嘉応二年（1170）銘五輪塔には四面に報身・法身・應身の各真言と胎蔵界五仏が配されている。また高野山奥の院にある圓光大師五輪塔には三身の真言と金剛界五仏が配された例がみられる。

以上をまとめると、正面は卒都婆の中央に金剛界四仏を配し両端に五輪塔の四門展開の内の二つを配し、裏面は三身の真言の内二つが配されたという事になる。この一本の卒都婆で金剛界・胎蔵界の両界を現しており、同時に五輪塔そのものと同じ意義を有している。

普通、卒都婆は頭部を山形に尖らしたものと五輪塔形に刻んだものがみられるが、いずれも下部は鋭角に尖らしており、挿し立てるものが多い。本例の場合は上下両端ともに頭部であり、挿し立てて使用したとは考えられない。この様に両端を頭部にする卒都婆は福岡市・井相田遺跡出土例（第302図-1-5）にもみられる所であるが、第302図-5の卒都婆の場合、中央にみられる梵字の向きからこの卒都婆が横位置に置かれていた事がわかる。そして中央部分に釘穴がみられ、同じ様な幅の板がクロスしていた事もわかる。そしてその他の卒都婆をみると、第302図-6-7にみられるように地面に立てられたであろう卒都婆の中央部分に横板のクロスした痕跡があり、そこに釘穴のあるものが見られる。このことはこの両者が組み合うもので丁度十字架の様な形で使用された事が想定される。しかしキリ

スト教の十字架の影響を受けたというようなものではなく、多くの呪符にみられるような、ある種の曼荼羅的な書様のもの（第303図）を細い卒都婆の上に書かんとした場合の工夫なのである。

本卒都婆も両面を合わせて金剛界・胎藏界の曼荼羅的な世界を表現したものであるが、挿し立てて用いていたのではなく、何かに添えて使用されたものと考えられる。
(藤沢典彦)



第302図 井相田C遺跡出土卒都婆



第303図 元興寺蔵『入棺作法』より

5 梅原胡摩堂遺跡における金属製品生産について

梅原胡摩堂遺跡からは約900点余の金属製品と金属関連の遺物が出土している。金属関連の遺物としては坩堝・輔の羽口・支脚・炉壁・鉄滓を主とした鉱滓などがあげられるが、ここでは順にその概要を述べ、遺構との関連について考察する。

A. 遺物の概要

1. 坩堝

坩堝が出土しているのはB地区（調査区でいえばB2・B2N地区）からであり、その多くが土坑出土である。坩堝の計測数値は第10表のとおりで、口径は5cm～6cm, 8cm前後、器高は2cm弱、3cm前後のものに分かれ、同口径でも深浅があることがわかる。胎土は粗で、内面は気泡が多く、内面全面と口縁端部外面にまで熔解物が付着し、外面は底部にかけて黒色ないし灰色に変色しているものが多い。しかしSD5312出土の2点は、内底面の中央が窪み、口縁端部外面に面取りしたもので、他の坩堝と形態が少し異なり、素焼きのままほとんど被熱もなく、未使用のまま廃棄されたと考えられるものである。

坩堝の内面に付着した熔解物については、1点だけCMA分析を行っている^{注1}。SD6282出土の坩堝の内面に付着した熔解物は、金色に輝くものが点々と残っており、分析の結果金と銀の合金であることがわかった。これ以外にも使用金属を同定できる資料として、SK5729出土の坩堝がある。内面は気泡が多く、口縁部に盛り上がるよう付着した黄褐色の熔解物は、端部外面にも僅かに付着する。その下から内底部にかけては赤褐色の付着物があり、そこに点々と緑青が付着している。これによつてこの坩堝は銅を溶解させる際に使用したものと推定できる。

挿図番号	地区	遺構	口径	器高	残存	備考
231-1	B2N	SD6282	3.6cm	1.9cm	1/3	内面と口縁部外面には熔解物が付着し、気泡が目立つ。内面には金色の付着物が点々とみられる。
231-2	B2N	SK6244	7	2.5	1/4	内面に熔解物が付着しており、気泡が目立つ。外面は黒変している。
	B2N	SD5312	6.4	3.1	1/2	未使用 内底面は一段窪む。
	B2N	SD5312	5.8	1.8	1/4	" "
	B2N	SK5729	6.0	1.8	1/4	内面と口縁端部外面には熔解物が付着し、口縁端部は黄褐色、底部までは赤褐色を呈し、気泡が目立つ。内面には緑青が点々と付着している。外面は底部にかけて黒変している。
	B2	SK6121	7.8	2.9	1/4	内面には熔解物が付着、外面は底部にかけ黒変している。
	B2	SK6335	6.0	2.1	1/4	内面には熔解物が付着し、気泡が目立つ。外面は口縁端部が黒変している。
	B2	SK6382	5.6	1.7	1/6	内面と口縁端部外面に熔解物付着、内面端部に盛り上がって付着した熔解物には気泡が多い。
	B2	SK6395	8.2	2	1/3	内面と口縁端部外面には熔解物が付着し、気泡が多い。
	B2	SK6395	-	-	-	内面と口縁端部外面には気泡が多い熔解物が付着している。
	B2	SK6653	-	-	-	内面に熔解物が付着し、気泡が目立つ。

第10表 坩堝計測値一覧

2. 輔羽口

輔羽口は遺跡全域から散在して出土している。多くは破片であり、完形もしくは完形に近いものはごく僅かである。したがって全体を実測可能なものはSD3401出土の羽口1点のみで、全長9.3cm、径8.0cm、内口径2.3cm、器厚3cmである。全長が実測可能であったSD9116出土の羽口の場合、さらに短く8.5cmであり、おそらく使用可能な限界に近い長さであると考えられる。その他の羽口の計測数値は第11表に示したとおりで、径については7cm, 8cm前後、9cm前後があり、8cm前後のものが最も多い。内孔径については、羽口の形態が輔に装着する側が送風口側より細くなっているためはっきりしたことは言えないが、輔側の先端部が残存しているものからみて、2cm前後のものと3cm以上のものがある。器厚についても内孔径と同様に、輔側が薄く、送風口側が厚い傾向にある。また均一な器

厚ではなく、内孔をはさんで厚さが異なる場合が多いため、ここでは最大の数値を計測している。それによると3cm前後のものが主体で、他に2cmのものと4.5cmものがある。鍛冶の鞴の場合は一般に器厚が2.5cm～3cmであり、溶解炉の鞴羽口の場合は、3.3cm～3.6cmとやや厚い傾向にあることから、出土した羽口の多くが鍛冶に関連したものであることが推定できる^{注2}。

羽口の胎土は荒い砂粒やスサを混ぜ込んでおり、非常に粗である。しかし分析の結果、耐火度は1,515°C～1,575°Cと高く、溶損に耐えうる成分を採用していることがわかった。鞴に装着する側の端部には熔解物が付着しており、先端から数cmは被熱して変色しているものが多い。約1/2残存しているものでの被熱の範囲をみると、鞴に装着した際の角度を推定することが可能であると考え、図上で計測した。S D3401出土の羽口の場合は約21度、S E5536出土の場合は約30.5度、S K1609出土の場合は約12度傾けて使用していたことがわかる。羽口の角度が炉内の温度調整に重要な役割を担っていることは、実験でも明らかであり^{注3}、羽口の使用された炉の構造、羽口を据えた位置について検討する材料となると考えられる。

挿図番号	地区	遺構	長さ	径	孔径	器厚	胎土	特記	備考
231-3	A 3 S	S D3401	9.3cm	8 cm	2.3cm	3 cm	粗	先端はガラス化して、熔解物が少量付着	完形
231-4	B 2	S E5536	(8.5)	(8.4)	(2.2)	3.8		先端にガラス質の熔解物が付着	送風口側欠損
231-5	B 2 N	S K6335	(9)			3.5	スサが混じる	"	両端欠損
231-6	A 1 S	S K1609	(10.8)	9.5	3.3	3.2	非常に粗	先端はガラス化して、鉄分の混じる熔解物が付着	送風口側欠損
231-7	B 3 S	S K8150	(8.8)	(8.2)	(2.3)	3.1	小石が混じる	僅かに熔解物が付着	両端欠損
	A 3 S	S K3691	(3)	(7)		1.8		先端は赤褐色で、熔解物が付着	送風口側欠損
	B	S P4886	(7)			4.5	粗、スサが混じる	外面は被熱して灰色に変色	"
	B	S P4803	(3.5)						
	B	S P4866	(3)						
	B 2	S D6231	(8.5)	(7.6)	(1.6)	3.2	粗、スサが混じる	先端に熔解物が付着している	送風口側欠損
	B 3	S K7302	(10)	(9.4)	(3.8)	3.3	"	先端にガラス質の付着物がある	"
	B 3 S		(4.5)			2.1?			両端欠損
	C S	S D9116	8.5	(8?)	(2.8)	3.2		先端に熔解物が付着し、気泡が多い	変形している
	C 1 W	S D9310	(6.1)	(6)	(2.1)	2		ほとんど被熱していない	鞴側欠損
	C 1 W	S E9427	(8.2)	(6.2)	(2.4)	2.2	スサが混じる	先端に熔解物が付着している	送風口側欠損

()は残存長及び復元による数値である。

第11表 鞘羽口計測値一覧

3. 支脚

支脚として確認された遺物ではないが、可能性のあるものが3点ある。S D3425出土のものは両端を欠損しているが、残存長8.5cm、幅6.5cm、厚さ4.2cmを測る、先細りした楕円柱である。比較的緻密な胎土で、外面は撫でて平滑である。S K3750から出土したものは両端を欠損しているが、残存長5.6cm、径3cmを測る棒状で、胎土は比較的緻密である。S K5368出土のものは一部欠損しているが、残存長7.2cm、幅6cm、厚さ3cmを測り、胎土は粗である。三方に突起があり、断面が琴柱状を呈すると考えられる。ともに被熱していないが、前者は鉱滓、後者は炉壁と共に伴していることから、支脚の可能性が高いと考える。

4. 炉壁

炉壁が出土した遺構はS K5368・S K5434・S K5579で、すべてB地区にある。最大の破片はS K5579から出土したもので、残存長16.8cm、幅13cm、厚さ5.4cmを測る。炉内側にはガラス質の熔解物が付着し、それが流れた痕跡と炉内に詰められた木炭痕もはっきりしている。炉外側は被熱していない粘土のままである。胎土は粗で、スサ・炭化物が混入する。またS K5434出土のものは厚さ3cmと薄いが、内側にはガラス化した熔解物が流れた痕跡がはっきりと見られる。S P5368出土のものは厚さ6cmと厚い。熔解物の付着部分の厚さは1.5cm～2.2cmで、被熱部分を含めると厚さは4cmになる。

5. 鉱滓

出土した鉱滓の多くは鉄滓で、それ以外の鉱滓は分析を待たなければはっきりしたことは言えない。

鉄滓には椀形滓、粒状滓、含鉄鉄滓などがあるが、主体は椀形滓である。その大きさから大型（長径約10~11cm）・中型（7~8cm）・小型（5cm前後）に分類できる。大型はSK9000・SP8905・SK8952・SE8971・SK8972・SK7151・SP9108・CS・C1W地区の包含層出土のもの。中型はSK309・SK9006・SP8950・SP8972・SP9130・SP9218・SD10446・SE9382・SK5336・SK7151・SP9171・CN・C1W地区の包含層出土のもの。小型はSD1250・SK3009・SK5083・SK8963・SK8982・SD9116・SK7151・SP8993・SP9227・CS地区・AS地区・A2地区・A3S地区の包含層出土のものである。分析の結果、これらの鉄滓は鍛錬鍛冶滓であり、鍛錬鍛冶工程の中でも最終工程に排出されたものが大部分で、なかには鍛造剝片が付着したものもある。これに対し、前半段階、中間段階で排出されたものはごく僅かである。またSD9116出土の鍛造剝片や粒状滓は、鍛錬鍛冶最終末段階である製品製作を行っていたことを示すものである。

以上のように金属関連の遺物からは、製銅に関わる作業と、製鉄・鉄製品製作に関わる鍛冶を行っていたことが推定される。

B. 出土遺構の分布

堀・炉壁以外の遺物は、梅原胡摩堂遺跡のほぼ全域から散在的に出土しているが、なかでもかなり集中して出土する地点が3箇所ある。

北から順にA3S地区

を中心とするA地区点、B2地区を中心とするB地区点、CN・CS地区を中心とするC地区として、それぞれ出土遺物にその地点の特徴が表れており、時期とともに順に述べる。

1. A 地点(第304図)

X325~X345の範囲内にあるSD3425（長辺が約45m、短辺が約32mで方形に巡り、東西に出入口とみられる箇所が1箇所ずつある）に囲まれた内部の、掘立柱建物の柱穴や竪穴状土坑から輔羽口と鉄滓・支脚が出土している。SD3425の



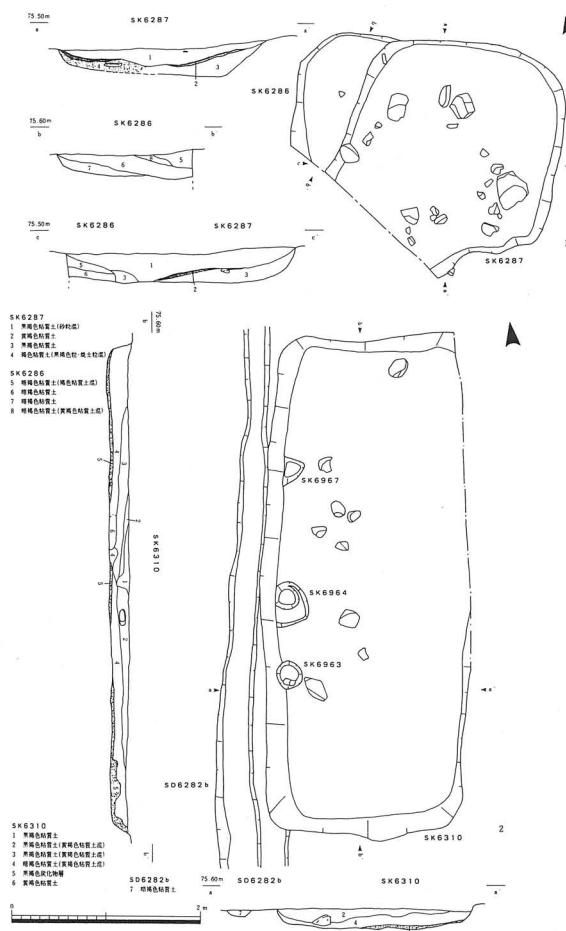
内部には掘立柱建物、豎穴状土坑、井戸などが多数検出されているが、焼土や炭化物が混入した遺構はなく、遺物も直接製鉄に関連付けることが可能な出土状態ではない。

これらの遺構の時期は共伴遺物から、14世紀～15世紀と考えられ、周囲の掘立柱建物をはじめとした他の遺構も同時期であり、付近にこれらの遺物を使用し、製鉄作業を行っていた場所があったことが推定できる。

2. B地点（第305・306・307・310図）

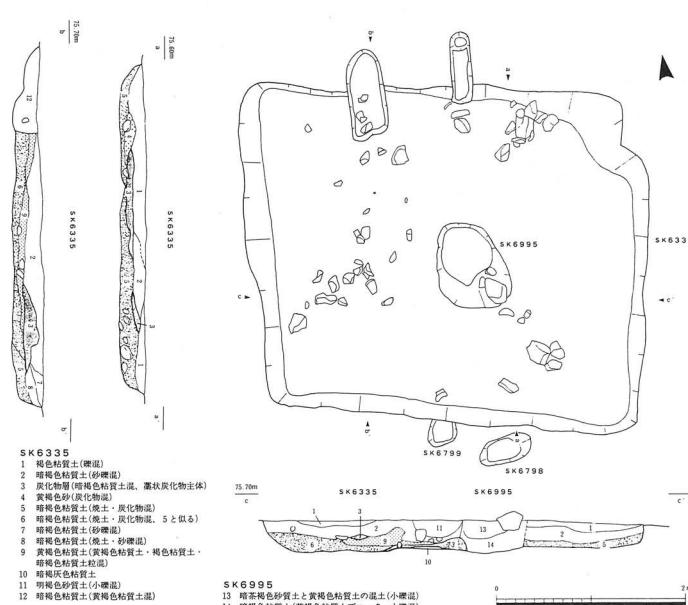
X220～X270にかけての範囲内、特にX245以南の溝・井戸・土坑を中心に、轆羽口・坩堝・炉壁・鉄滓が出土している。炉壁が出土したのは、北半にあるSK5368・SE5434・SK5579からで、その周囲半径約40m内に轆羽口・坩堝・鉄滓が出土している。轆羽口が出土した溝・井戸・土坑は、B地点内に点々とある。坩堝が出土した溝・土坑は南半中心で、北半にあるSD5321から未使用のものが2点出土した以外は、すべて使用したものである。鉄滓が出土した溝・土坑は、南半が主体である。これらの遺構の時期は、共伴遺物等から北半は15・16世紀、南半は16・17世紀が主体である。

炉壁の分析の結果からは、これらが金属溶解炉の炉壁であることがわかつており、坩堝の中には銅が付着したものが出土していることから、ここでは溶解炉をもち、銅製品の製作を行っていたことが推測できる。その作業場は、遺物が出土した遺構が比較的集中している南半にあったことが推定できる。とくにSB156に付属するSK6282から金と銀の合金が付着した坩堝が出土し、その北に埋土下層に焼土が、その上層に貼床状の堆積があるSK6286・SK6287、焼土・炭化物が堆積したSK6292があり、南西には下層に炭化物層があるSK6310がある。また南東に位置するSK6335は、下層に焼土、中層に炭化物層、その上に貼床状の埋土がある。したがって、このSB156を中心とした一画が鋳造や金工などの作業場であった可能性が高い。その時期は16世紀を中心とすると考えられる。また炉壁と坩堝は他地点での出土を確認していないことから、この地点の特徴を最も良く表していると考えられる。

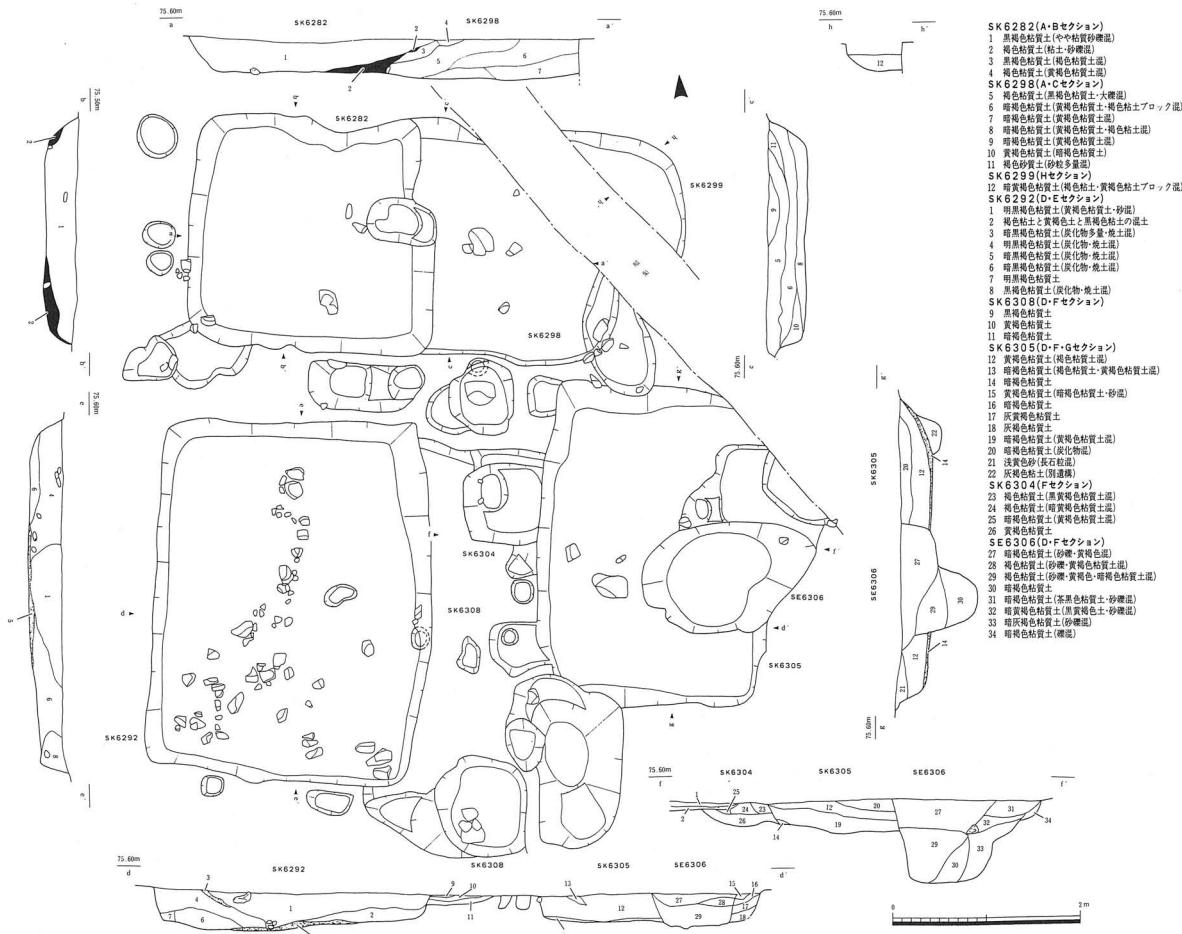


第305図 B地点製銅関連遺構

1.SK6286・SK6287 2.SK6310



第306図 B地点製銅関連遺構 SK6335

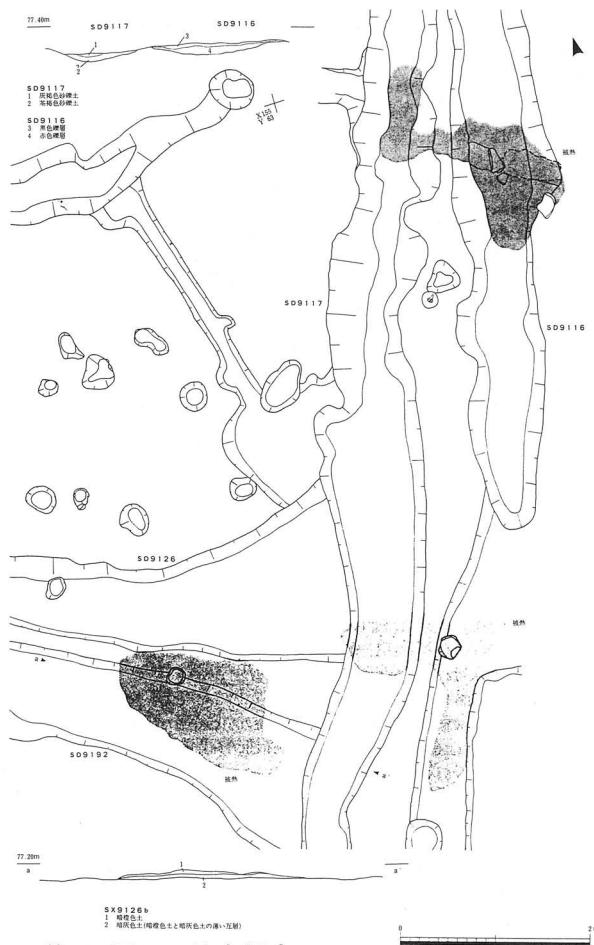


第307図 B地点製銅関連遺構
SK6282・SK6292

3. C地点 (第308・311図)

X140～X175の範囲内の溝・井戸・土坑等から、轆羽口・鉄塊・鍛治滓・鍛造剝片が出土している。轆羽口・鍛治滓は井戸から出土するものが多く、特にSE9006の上・中層からは多量の鍛治滓が出土している。鍛造剝片が出土したのはSD9116底面直上からで、他に上層から轆羽口、焼土層から粒状滓が共伴して出土している。

SD9116の西側に並行するSD9117、それと直交するSD9126・SD9192の内部には被熱して赤色化した部分を3箇所検出したが、これらは不整形に広がる酸化面である。SD9116の北側下層の酸化面は厚さ約20cm、幅約60cmの範囲でSD9117の上面にまで広がり、その下層は黒色化している。SD9126・SD9192と前者との切り合についてはやや不明瞭な点があるが、前者よりやや古いと考える。これらの溝の上層の埋土をはずすと、酸化面を2箇所確認でき、前者の溝内にある酸化面では部分的に底面の



第308図 C地点炉床

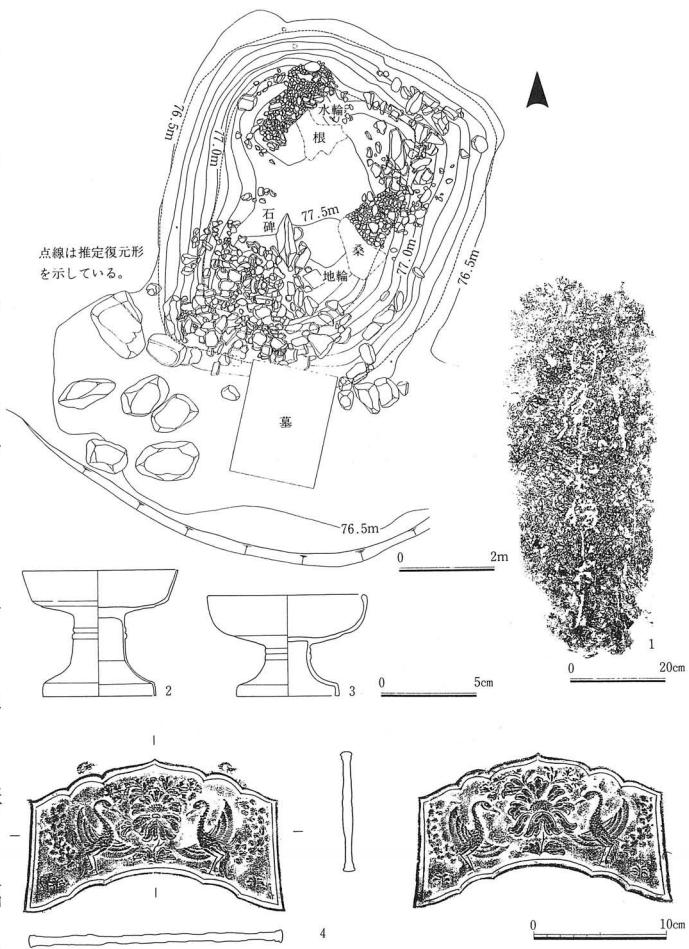
砂礫面が赤色化・黒色化しており、もう1箇所の酸化面は約12m²の範囲に広がり、上面に暗橙色土(焼土)、暗橙色土と暗灰色土(灰層)の互層の順に薄く堆積している。この互層の枚数は場所により異なり、厚さも2cm~5cmと一定ではないが、地山面直上には暗灰色土が堆積し、この層の堆積が厚いところは地山面が部分的に赤色化している。この焼土層と灰層は酸化面と還元面と考えられ、ここに鍛冶炉を築いていた可能性が高く、これらの溝は炉床の排水溝と考えられる^{注4}。しかし上部構造を推察できるような遺構・遺物は確認されなかった。また北に約20m離れたSK8960・SK8961からは多量の焼土と炭化物が出土しており、これらの遺構も鍛冶に関連していたと考えられる。

出土した鍛造剝片1片の大きさは約2mm程のもので、鍛造剝片としては細かいものであること、砂鉄を原料とした鉄塊が出土したこと、粒状滓、また周囲の遺構から出土した鉄滓の多くが小型の椀形鍛冶滓で、分析の結果から鍛錬鍛治の最終段階である、製品製作の際に排出されたものであることがわかった。したがって、SD9116・9117・9126・9192内にある炉を中心として、周囲のSK8960・8961等を含めた一画で鍛錬鍛治で鉄製品製作を行っていたことを推定する。時期については、共伴遺物等からは15世紀~17世紀と考えられるが、主体は16世紀~17世紀初めであろう。

C. 結 び

以上、梅原胡摩堂遺跡出土の金属製品製作に関連する遺物・遺構について、その特徴と分布についてみてきた。その結果、A地点では作業場は特定できなかったものの、集落の付近で鍛冶が行われていたことを、B地点では集落内で銅製品を生産・加工していたこと、C地点では鉄製品の生産を行っていたことが推定できた。遺跡内から出土する銅銭以外の銅製品はごく僅かで、鉄製品の出土点数に比較すると約1/4であり、それも飾り金具をはじめとする小さいものが多い。それに対して鉄製品については、比較的大きな製品があり、鋳造品の脚や容器の破片は僅かで、鍛造品の鋤・鎌・刀子・釘など多数が出土している。これらの製品が集落内もしくは付近で生産されていたことは推察できたが、その作業場の周囲はどのような様相であったのだろうか。

B地点の南東には、大正12年の地籍図にある^{注5}、近世から大正末まであった旧以速寺がある。旧以速寺は土塁と濠をもつ真宗寺院で、SD5910は周囲を巡る濠にあたると考える。また、そこには現在でも伝安楽寺跡といわれる塚があり(第309図)、これは中世後期のもので、南北80間余、東西100間余で、四方に土塁を持つといわれている^{注6}。発掘調査によつて確認したSD5935以東には中世後期の遺構が多く、銅製花瓶が出土している。さらに、その周辺出土と伝えられる磬と飯食器が、福光町正円寺にあり、いずれも寺院に関連するものであることから、これらの遺構・遺物が



第309図 伝安楽寺跡実測図・石碑拓影(1)及び出土遺物
(2~4: 正円寺蔵)

伝安樂寺に関連するものである可能性が高い。

その北西に製銅を行っていた作業場があるということは、ここで寺院の需要に対する製品を製造していたと考えられる。この作業場の南側にある遺構が少ないところは、道路と考えられており、道路からやや奥まった場所で、銅製品の製造・金工作業などをしていたようである。S B156の北・西側には近世の土台建物が検出されているが、中世後期の遺構が少なく、当時、鋳物師らが居住していた場所は、集落の端に近いと考えられる。

C地点の鍛錬鍛冶遺構の周辺には方形豎穴状土坑が多く、掘立柱建物や礎石建物、土台建物等の遺構は少ない。南北両側には同時期の大きな区画溝があり、鍛冶遺構はそのほぼ中間に位置している。南側の区画溝は南北に走る道S F01を境に、西側の大型区画溝S D9301・S D10101、東側のS D9305・S D10212であり、西側の区内には、屋敷地内をさらに区画する細い溝と建物があるが、東側でははっきりとした屋敷地の区画はみられない。北側は大型区画溝S D7600に囲まれ、内部には建物があるが屋敷地のはっきりした区画はわからない。

これらの遺構の南東には、南北150間、東西25~45間で、土塁を持つと伝えられる宗守城があり^{注1}、S F01は宗守城に通じる道路と考えられる。その両脇には大きな屋敷地を持った居館が建ち並び、S F01が東に屈曲する角、西・北沿いに鍛冶屋の作業場がある。ここで製作していたものは、鍬・鋤・鎌・鉈などの農具や、釘や鎚などの建築用具、刀や剣といった武具であろうか。建築用に釘や鎚がどの程度普及していたかは明らかでないが、城・居館の建築には大量に必要であったであろうし、宗守城の周囲に大きな屋敷地を持つ人々が、武器を必要とした可能性は高いと考えられる。また、農具は最も必要なものであろうから、製作・補修を行っていたのであろう。比較的交通の便が良く、かつ大きな屋敷の裏や外で、鍛冶屋が作業場を構え仕事をしており、その作業場や住居は周囲の居館のように掘立柱建物などではなく、豎穴状建物であったと考えられる。

以上、中世後期から近世にかけての、遺跡内の製銅・製鉄遺構についてみてきたが、遺物と遺構との関連については、大まかな様相からの推論によるところが多く、さらに詳細な検討が必要であると考える。これまでに確認された製鉄遺跡の多くは、丘陵地を中心として存在しているが、平地での中世の遺跡の発掘例は少ない。したがって、今後の中世の平地での製銅・製鉄遺跡の調査例の増加を待ち、梅原胡摩堂遺跡の遺構を再検討したいと考える。

(中川道子)

注1 大澤正己氏に依頼した。

注2 大澤正己氏の御教示を得た。

注3 加藤誠・天野武弘 1983 「”古代たらたらを想定した” 小たらたらの実操業」『日本製鉄史論集』

炉内温度が下がることを防止するため、羽口の角度は26度、別に炉底吹き用の羽口として約30度の角度で設置している。

注4 河瀬正利 1983 「近世たらたら製鉄史研究をめぐって」『日本製鉄史論集』 近世たらたらの調査例からは比較的簡単な構造をもつものが多い傾向がみられる。例えば、かなやざこ遺跡は18世紀初頭以前とされ、炉は底部に溝状の穴を掘り、その内部で何度も繰り返して木を燃やして基礎を作っている。

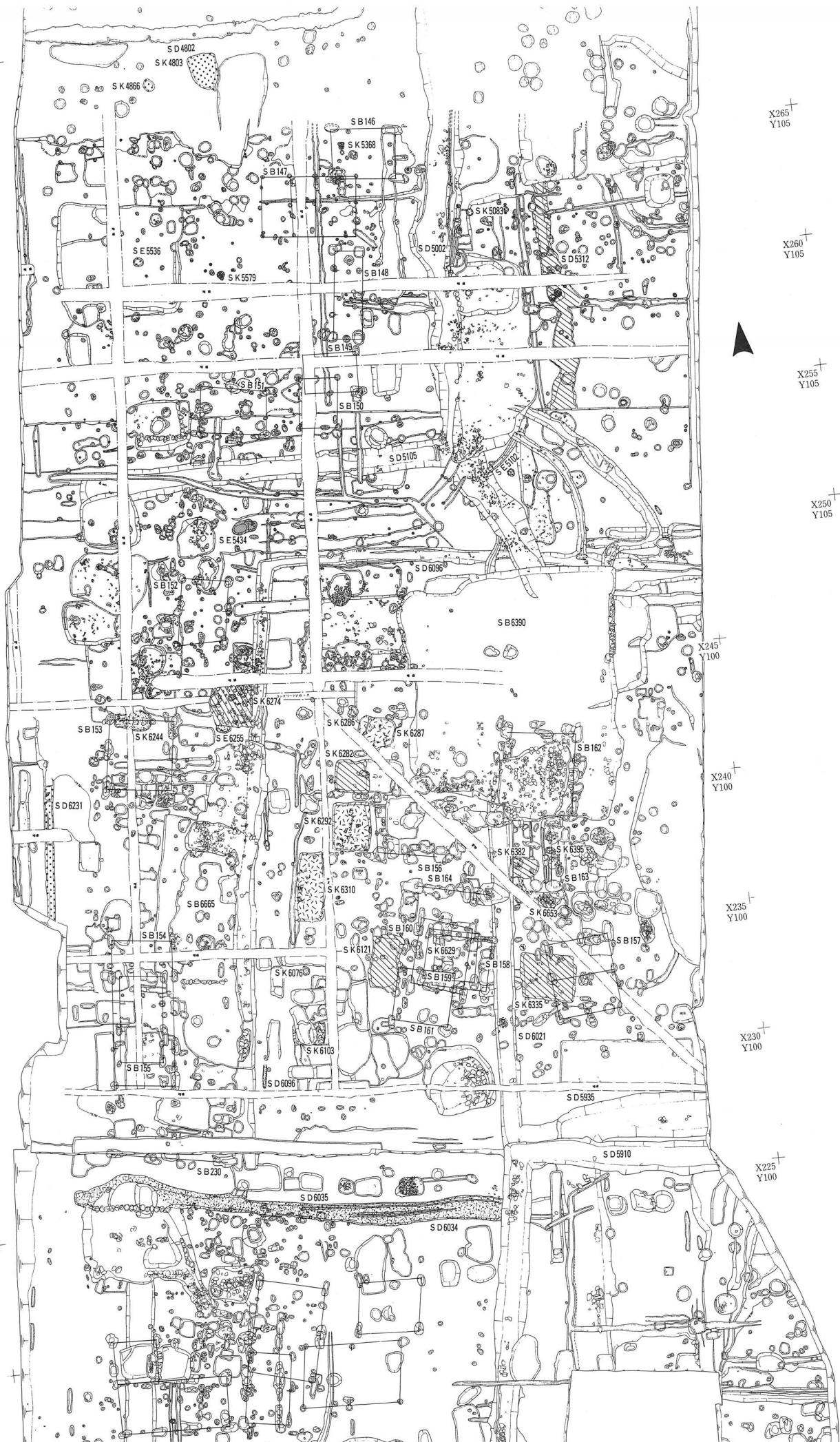
杉原清一 1985 「たらたら炉床構造の推移について—島根県内調査例から—」『たらたら研究』第27号

注5 北山田土地改良区理事会 1967 『北山田土地改良沿革史』 大正13年から始まり大正15年に終わった耕地整理事業の実施計画書を県に提出するため、大正12年に測量・作成されたと推察する。

注6 (明治29年4月1日付け書写)「教願寺由緒書」(『大野市史』第1巻 1978 所収)

福光町 1971 『福光町史』上・下巻

注7 福光町 1971 『福光町史』上・下巻 宝暦14(1764)年の『古城塚山跡寺社古跡等書上帳』による。



第310図 B地点の遺構分布 (1/400)